広域利用可能都市における
住民の図書館利用行動分析

ー　公共図書館の地域計画に関する研究　ー

河 村　芳 行

図書館情報メディア研究科

筑波大学

2010 年 10 月

広域利用可能都市における住民の図書館利用行動分析
ー　公共図書館の地域計画に関する研究　ー

論文の要旨

近年，自家用車の広範な普及と自治体の枠を超えての利用を許容する図書館が増加したことにより,従来距離に影響を受けやすく分館利用の中心であるとされてきた主婦や子供,無職高齢者層においても大規模館の魅力に惹かれて本館を主に利用する傾向がみられる。自家用車利用による距離に対する抵抗が減少し利用圏の拡大が認められる現状において，本館の他に徒歩圏ごとに複数の小規模分館を設置するという施設までの距離を基本とする階層的な図書館施設整備の考え方は，利用者のニーズの多様化やモータリゼーションの発達に伴う利用行動の変化に合わせて見直す必要がある。

本研究は，市民が複数の図書館から利用館を選択できるような状況が実現している都市部において，市民が誰とどのような交通手段でどの図書館へ行くかといった利用行動の実態を把握する調査に基づき，こうした地域にあっても階層的な構成計画が前提としている考え方が通用しなくなっているのかを検証するとともに，利用行動に即しかつ平等性と効率性の均衡のとれた，現実に整備可能な図書館施設の設置計画手法を確立する指針を見出すことを目的としている。具体的には，札幌市の郊外部および札幌市に隣接するベッドタウンを研究対象地域とし，都市部の密住地において，（1）複数の図書館から利用館を選択できるような状況下での利用館選択と大規模館選択要因の分析を行い，階層的な構成計画が前提としている考え方が通用しなくなっているかを確認する，（2）個人単位の分析のみでは大規模館選択への利用行動の変化を解明できないことから，家族単位での図書館利用行動の実態に着目し，ライフステージの進行に伴う同伴利用パターンの推移から抽出した利用者セグメントごとの利用実態を明らかにする，（3）大規模館志向の実態把握から本館の立地位置と利用行動の関係を捉えることなどにより，従来の単独利用のみならず自家用車を利用しての家族同伴利用を背景とした新たな計画論に応用し得る基礎となる計画指針を見出す，の3点である。

本論文の構成は，第１章（序論）を含め，８つの章からなっている。

第 1 章では，本研究の社会的背景，研究の目的と意義，研究の方法を述べるとともに，本研究と関連する既往の研究を整理し，図書館計画における現状と課題を明らかにした。

第 2 章においては，調査対象都市と設置図書館の概要についてまとめた。具体的には，利用者調査の対象とした北海道札幌市，石狩市，および北広島市の人口や交通環境の概要と，それぞれの市の図書館の沿革と現状についてまとめるとともに，次章以降の分析に利

用した各種利用者調査の骨格と調査方法の概要について述べた。

第 3 章では，北広島市民に図書館接触度を尋ねた「住民調査」をもとに図書館の利用者・非利用者の分析を行い，性，年齢，職業などの要因が個々人の図書館利用，非利用にどのように関係しているか，また「図書館を未だ利用していない人々」や「以前には利用していたが現在は利用しなくなってしまった人々」がどのような属性の集団であるのか,「図書館を利用できない・しない」理由は何かなどについて分析することにより利用者および非利用者の一般的な傾向を捉えた。図書館を利用しない・できない理由としては,「本は自分で買って読む」,「図書館が近くにない」,「開館時間中に利用できない」が上位 3 つの理由であり，従前から指摘されていながらも改善が進んでいない内容であることを確認した。また，図書館側の施設整備とサービス内容の改善により，再びあるいは新たに図書館利用者層に転換し得る可能性の高い潜在的利用者層が多く存在することが分かった。図書館を使わない理由の第 1 位である「本は自分で買って読む」を別とすると，図書館を未だ利用していない者では「図書館が近くにない（23.6%）」，以前には利用していたが現在は利用しなくなってしまった者では「読みたいような本が図書館にない（23.9%）」がそれぞれ第 2 位を占めている。これは図書館までの距離と図書館の蔵書規模のバランスの重要性に他ならない。すなわち，利用者の利用行動の変化に合った適正な規模と施設数による図書館配置が必要であることから，次章以降で図書館利用行動の実態についての分析を行った。

第 4 章では, 大・中・小の規模の異なる複数の図書館が存在する都市部の地域において，図書館利用者がどのような理由で利用館を選択し，利用行動をしているのかについて，自宅からの最近隣館と主利用館とを軸とした類型を基に分析し，類型ごとの特性を明らかにした。また，札幌市北区・手稲区の住民がどのような条件下で大規模館を選択利用しているかについて，遠方の大規模館あるいは最寄りの中小規模館のどちらを選択するかを選択肢に，7 種の説明変数を用いた二項ロジットモデルにより検証した。従来から利用圏に用いられてきた重力モデル（利用率は距離の 2 乗に反比例する）では，本館ですら 5km ほどでほとんど利用されなくなるとされてきたが，多数の札幌市北区・手稲区民が移動距離 10km を超える石狩市民図書館を自家用車で利用しており，疎住地に限らず都市部の密住地においても利用圏域は拡大していることがわかった。また，日常生活の移動手段として自家用車が定着したのに伴い，来館に要する平均時間は 17 分以内に過ぎないこと，近隣の分館利用者とみられていた主婦や高齢者層においても自ら運転して，あるいは同乗という来館形態をとって遠くても大規模館を利用する傾向にあること，車での行きやすさ，広い駐車場の存在というものが図書館施設計画に必須の要素となってきていること，利用者は目的による使い分けではなく貸出図書館というレベルにおいて，何よりも蔵書規模，次いで建築空間・環境の快適性，自家用車によるアクセスの利便性などを優先して，近隣中小規模館よりも遠方の大規模館を選択している状況が明らかになった。すなわち，図書館利用が個人行動から「家族と一緒に自家用車で行く」行動に変化したことが，距離に対する抵抗を大幅に減じさせ，施設までの距離と規模，サービス内容の階層的な施設構成手法

の基本が通用しない状況を生み出していることが検証できた。

第5章では，4章での二項ロジットモデルの推定結果で，自家用車が利用可能なら遠方でも大規模館を選択する傾向がみられたものの，個人単位では統計的に有意ではなかったことから，個人ではなく家族を単位としての利用行動の分析を行った。具体的には，札幌市北区のある住区ブロックに居住する全世帯の全構成員を対象とする住民調査を行い，世帯を最年少児の年齢で分類することにより，ライフステージの進行と図書館利用形態の推移，自家用車の利用可能性と利用館の選択など，家族を単位とした利用行動の実態について明らかにした。同伴利用世帯（夫婦あるいは親子）においては，遠方の大規模館を近隣の中小規模館同様に「貸出図書館」として利用しており，これらの利用者セグメントが自家用車を利用することにより施設までの距離を基本とする従来の階層的な図書館整備手法が通用しない状況を生み出していることがわかった。

第 6 章では，最近隣館が小規模館である石狩市民（類 B1），最近隣館が中規模館である札幌市民（類 B2），および最近隣館が小規模館である札幌市民（類 B3）について，どのような図書館サービスを重視し，満足（あるいは不満）を感じながら遠方の大規模館を選択しているのかを，登録者の図書館サービスに対する満足度指数と重視度指数を用いて分析した。どの類型も，大規模館選択の重要度として「本の冊数」や「図書館の雰囲気」を上位に挙げているとともに，順位は異なるが重視度 3.0 以上の項目では上位 7 位までに「本の冊数」，「図書館内の雰囲気」，「図書館員の応対」，「開館日」，「本の新しさ」，「貸出冊数の制限がない」，「館内での図書検索」といった同一項目が含まれていることがわかった。また，これらの遠方からの利用者は「図書館までの距離」や「公共交通の便」よりも「駐車場の広さ」を重視していることがわかった。

第 7 章では，前章までの大規模館志向にシフトしている利用行動実態を受けて，本館の立地位置と住民の図書館利用行動の関係について取り上げた。具体的には，図書館の本館が住民の日常動線の結節点といえる場所に設置されているか，市街地中心部とは言いがたい郊外に設置されているかということ以外の条件（市人口，市面積，竣工年，延床面積，蔵書規模など）がほぼ等しい北広島市と石狩市における図書館利用調査（登録者調査・来館者調査）から，本館の立地位置の違いが住民の図書館利用行動に及ぼす影響を考察した。利用実態からは両館の利用目的，利用頻度，利用理由，来館経路，利用圏域，交通手段に有意な差が見られたが，両館とも自家用車による来館が中心で交通の便や距離に対する抵抗感が低くなっていることから本館の立地位置の優劣を競う内容の違いとまではいえないこと，また本館立地位置の違いにかかわらず従来距離に影響を受けやすく分館利用の中心であるとされてきた主婦や無職高齢者層においても本館志向が見られ，この新たな利用者集団の出現により平日には主婦と無職者が，休日には勤務者と学生が多く利用しているという平日と休日とでの棲み分け現象が本館内で起こっていることが明らかになった。

最後に，第 8 章において本論文で明らかになった主要な事項をまとめ，自家用車による移動と家族単位での行動を背景とした施設計画論に応用し得る一般的な設置計画・配置計

画の考え方について述べた。自家用車利用が主流となった現在，（1）段階構成論的設置計画の前提としている考え方を見直し，受持ち範囲をある程度広くしても規模の大きなものを設置すること，（2）自家用車を利用した家族単位での図書館利用行動に対応した適正な施設配置計画手法を検討していく必要があること，（3）立地位置としては，距離に対する抵抗が少なく広い駐車場が確保できる郊外地に魅力ある大規模館を設置することも選択肢になり得ること，などが整理できた。これらの知見は自家用車を主体とした郊外型・地方型の生活スタイルが定着した多くの地域にも適用可能であることが期待される。

Abstract of Doctoral Thesis

Analysis of the Residents' Behavior of Library Use in the Cities with Good Access to Libraries in a Widespread Area

— A Study of Regional Planning of Public Libraries —

Presently, people have a widened sphere of activity due to the development of motorization, i.e. the use of private vehicles, which in turn has led to a de-emphasis on travel distance as a decisive factor in their daily life. Even the housewife, the child, and the senior citizen, whose lives have been directly influenced by travel distances thus using nearby library branches, are now able to use a distantly located main library, drawn by the appeal of the larger-scale facility. Library users now select facilities, no longer limited by proximity, but also on the basis of the service level. Rooted in pre-motorization lifestyle and with a priority on equal access, a hierarchical library-service locating system based on the distance to facilities has been in place. The official stance has been to support the promotion of a network of multiple library branches, each within walking distance of users' homes, in addition to the main library. However, in light of the dramatic changes in people's lifestyle and mobility, which have direct influence on their library use patterns, it is inevitable that the library location and planning fundamentals be reviewed accordingly.

The purpose of this study is to identify the essential indicators that will inform the establishment of up-to-date and sound planning policy for feasible library installation. The goal is to create and provide well-located facilities that suit the library users' behavior, while maintaining a balance between equality and efficiency. Against this background, this thesis discusses the site selection and planning process of public libraries, in terms of three indicators identified in preliminary studies.

This research identifies current library use patterns and, on the basis of this evidence, confirms that the hierarchical library planning now in place is outdated and has become ineffective due to the drastic changes in current lifestyle and mobility. Specifically, the study of use patterns of libraries in the metropolitan and densely populated suburban areas in and around Sapporo city will verify (1) that the hierarchical library planning approach is outmoded and becoming less relevant due to drastic changes in behavior and mobility brought about by motorization; show (2) that

because the factors behind shifts in the individual user behavior do not lend themselves to analysis, focusing on the family unit will better indicate the realities of library use patterns. At the same time, library utilization style according to the progress of a household's life stages for each user segment can be extracted and clarified. Finally, in this study (3) acknowledging the preference for large scale libraries and the relationship between the location of the library and the users' behavior, a new planning theory which gives currency to the present reality of the family users who jointly use the library by the car is posited.

This paper is composed of eight chapters.

In Chapter 1, the social background, purpose, and the significance of the research findings are explained. In addition, the view point of this study in comparison with previous related studies in the past is discussed.

Chapter 2 outlines the population and the transportation access in Sapporo City, Ishikari City, and Kita Hiroshima City. Furthermore, the history, the present state, and the size and the services of the each city's libraries are summarized. Secondly, an overview of various kinds of user studies detailed in the following chapters and the outline of the research methods are presented.

In Chapter 3 the library user and non-user are analyzed through the population-based study of Kita Hiroshima City, and general user profiles are identified. Concretely, this study analyzes, (1) how various factors including personal nature, age, and occupation are related to the individual's library use or non-use, (2) what the attributes are of "people who have never used a library" and "people who are not using the library now though had used it before", (3) what the grounds are for "not being able to use the library or simply not using the library". Survey data reveals that the three major reasons are "I prefer to buy books to read", "I don't live near a library", and "It is not possible to use it during operating hours." Resultantly, it was confirmed that library services have not been improved though past these issues had been identified in earlier research. Besides the strong preference for buying books to read, 23.6% of the respondents who have never used the library gave the reason that there is not a library nearby, while 23.9% of former library users indicated that "The books I want to read are not in the library". This outcome highlights the importance of the balance of the distance to the library and the scale of the collection of books in the library. That is, it has been clarified that many people can be newly converted to library users through the coexistence of convenient facilities and improved services. According to the recent changes in user behavior, it is necessary to set up and provide enough library service

points in the most desirable locations in the whole region. Further analyses of the realities of the library use action were presented in the following chapter.

Chapter 4 discusses a hierarchal library arrangement plan that has been put into place in two neighboring cities where, however, the expected library use patterns have changed. It appears that users who live in close proximity to medium-sized and small library facilities increasingly choose to travel longer distances to larger facilities rather than go to the one located in their neighborhood, resulting in the under use of the smaller libraries. The primary aim of this chapter is to examine the characteristics of users' library choice to determine how the distance between residence and library affects the style of library use. A survey was conducted on a random sampling of library users from Ishikari City and two wards of Sapporo City who select to use the large library facility in the adjacent city Ishikari over the more distant one in their own city of residence or the smaller ones located in their neighborhoods. The results comply with seven variables contained in the Binary Logit Model of library use and indicate that, since users are now accompanied by or include a licensed driver, distance is no longer the dominant factor in library choice. (1) The average time required to the library is within 17 minutes according to the private car use, though the spheres of users' activities have been even more greatly expanded. (2) Even the housewife and the senior citizen show the tendency to use a large-scale library, even if it is far, by driving the car oneself or coming by car together. (3) Recently identified is another important factor in library facility planning based on whether it is easy to reach by car and whether there is a spacious parking lot. (4) The user gives the highest priority in library selection to the scale of the book collection, the next highest priority to the amenities of architectural space and the environment, followed by the convenience of access by private car. (5) The user does not distinguish between libraries according to differences in their own purposes for use. In summary, it has become clear that the user prefers a large-scale library though it is more distant than the medium-sized or small library facilities of the neighborhoods at the level of circulating library. That is, the library user's behavior that has transformed from a solo action into a family group action by private car is evidence of the diminished distance factor. Thus it has been verified that the traditional, hierarchical library arrangement plan based on the scale, the distance to facilities, and the content of service is no longer effective.

If the private car use was possible according to the estimated results of the Binary Logit Model in Chapter 4, the tendency to select a large-scale library in spite of distance is discussed in Chapter 5. However, statistical significance was established through analysis on data collected on family unit library use patterns, while statistical

significance was not found in data of individual users. Concretely, a resident survey was conducted for all households living in specific resident block in Sapporo City. Through classifying the households by the age of the youngest child, the library utilization behavior by family units was analyzed. Results clearly indicated that the transition of the library utilization style according to the progress of a household's life stages as well as the effect of the car availability on the choice of library. Other observations are that large-sized libraries in distant places are being used as "a lending library" in the same way as nearby medium-sized and small libraries by the user segments of "married couple" and "parent and children". The conventional hierarchical library development scheme based on the travel distance, as previously stated, has become incompatible with the family users who jointly use the library traveling long distances by car.

Chapter 6 includes the analysis of desired library services and satisfaction level of the main library using the value evaluation index on the library services and the satisfaction rating index. Three user groups were identified and surveyed. They include (type B1) users who reside near a small neighborhood library in Ishikari City, (type B2) users who reside near a medium-sized library in Sapporo City, (type B3) users who reside near a small-sized library in Sapporo City. (1) Results show that all groups prefer to use a large-scale library regardless of distance. The major factor for their library choice is scale of the book collection. In terms of the large library satisfaction rating, all groups ranked the same seven factors highly though in a slightly different order. All groups rated the same factors with 3.0 of higher and correspondingly ranked the top seven items in the same order as follows: amount of books, library atmosphere, library staff service, opening of library, newness of the materials, limits on number of books one can borrow at a time, and availability of Online Public Access Catalog. It is notable that rather than distance to the library and transportation access, users put a greater value on the size of the parking lot.

Chapter 7 deals with the analysis of the relationship between the position where the main library is located and the library use behavior of the town residents. Concretely, the influence of the positioning of the main library exerted on the resident's library use behavior was considered in a library use comparison investigation in Kita Hiroshima City and Ishikari City. The population and the area of the both cities are almost equal; and the completion year, the total floor area and the size of the book collection are nearly the same. The outstanding exception is the difference in where the libraries were set up, with one located in a central location at a transportation hub used in residents' daily life and with the other one located on the outskirts of the city. Results

showed significant differences in the purpose of use, the usage frequency, the use reason, the route of coming to a library, the utility sphere, and transportation in the use of both main libraries. However, there are many people coming to both main libraries by private cars, as the weakening of public transportation availability and distance factors become apparent. However it cannot be determined which of the two libraries is positioned in a superior location, with evidence that even the housewife and the senior citizen patronize the more distant large-scale library. It was observed that though large numbers of housewives and retirees were using the main libraries on weekdays, an increasing number of working people and students were using them on their holidays.

To conclude, the main matters addressed by this thesis on efficient library planning and are summarized in Chapter 8. The concept that a new general installation plan and the site planning should be applied to the facilities plan theory keeping in mind the importance of the factors of the private car and the family unit is described. The library facilities plan proposed is as follows, against the current reality of the domination of transportation and mobility by the private car. (1) Even if the area of coverage is widened to some degree, a large-scale library must be set up, because hierarchical library arrangement planning is outdated. (2) Library planning ought to focus on the needs of family units using private cars and provide facilities and services accordingly. (3) Research results indicate that in regard to locating a large scale library, a suburban site with the capacity for a large scale parking facility would appeal to users. It is expected these findings can be applied to multiple regions where a suburban life style has been established around the use of the private car.

広域利用可能都市における住民の図書館利用行動分析
ー　公共図書館の地域計画に関する研究　ー

目　　次

論文の要旨 …… (i)

第 1 章　序論 …… 1
1.1　はじめに …… 3
1.2　研究の目的と意義 …… 4
1.3　本研究と関連する既往の研究 …… 6
　1.3.1　栗原理論（卵型モデル） …… 6
　1.3.2　植松理論（使い分け行動モデル） …… 9
　1.3.3　中井理論（二重構造モデル） …… 10
1.4　研究の方法と論文の構成 …… 13
註・参考文献 …… 15

第 2 章　調査対象都市と図書館の概要 …… 19
2.1　札幌市・石狩市・北広島市の概要 …… 21
　2.1.1　位置・地形，および人口 …… 22
　2.1.2　都市交通状況，および自家用車保有状況 …… 24
2.2　札幌市・石狩市・北広島市の図書館の沿革と現状 …… 28
　2.2.1　札幌市の図書館 …… 28
　2.2.2　石狩市の図書館 …… 33
　2.2.3　北広島市の図書館 …… 35
2.3　利用者調査の概要 …… 37
　2.3.1　調査の構成 …… 37
　2.3.2　来館者調査 …… 38
　2.3.3　登録者調査 …… 39
　2.3.4　住民調査 …… 41
註・参考文献 …… 43

第 3 章　図書館利用者・非利用者の行動分析 …… 45
3.1　調査の概要 …… 47
　3.1.1　調査の方法 …… 47

3.1.2　抽出住民の構成 …… 47
3.2　図書館利用者・非利用者像 …… 49
3.2.1　性・年齢・職業別 …… 49
3.2.2　利用・前利用・未利用別 …… 50
3.2.3　利用グループの主な利用館と利用頻度 …… 52
3.3　図書館を利用できない・しない理由 …… 53
3.3.1　前利用・未利用別 …… 54
3.3.2　性別 …… 55
3.3.3　年齢別 …… 55
3.3.4　職業別 …… 57
3.3.5　既往調査との比較 …… 59
3.4　まとめ …… 60
註・参考文献 …… 62

第 4 章　広域利用可能地域における登録者の類型別利用行動分析 …… 63
4.1　調査の概要 …… 65
4.1.1　調査地域の概要 …… 65
4.1.2　調査の対象 …… 67
4.1.3　調査の方法 …… 67
4.2　登録者の利用図書館選択 …… 67
4.2.1　最近隣館と主利用館 …… 67
4.2.2　類型別の利用者属性 …… 70
4.2.3　利用目的・頻度 …… 71
4.3　交通手段と図書館への行き方 …… 75
4.3.1　来館時に利用する交通手段と所要時間 …… 75
4.3.2　自家用車の利用可能状況 …… 76
4.3.3　利用館への行き方 …… 78
4.4　主利用館選択モデル …… 80
4.5　まとめ …… 84
註・参考文献 …… 85

第 5 章　広域利用可能地域における世帯レベルの図書館利用行動分析 …… 87
5.1　調査の概要 …… 89
5.1.1　調査対象地域 …… 89
5.1.2　調査の方法 …… 91
5.1.3　調査の内容 …… 91

5.2　世帯類型別にみた図書館利用状況 …… 93
5.2.1　世帯類型 …… 93
5.2.2　世帯単位の図書館利用 …… 93
5.2.3　親族世帯における図書館利用 …… 97
5.2.4　同伴利用のパターンとその経年推移 …… 100
5.3　利用者セグメントごとの利用実態 …… 104
5.3.1　主利用館 …… 104
5.3.2　図書館へ行く交通手段 …… 106
5.3.3　徒歩・自転車利用者の世帯内自家用車利用可能状況 …… 108
5.3.4　利用目的 …… 109
5.4　まとめ …… 110
註・参考文献 …… 111

第 6 章　広域利用可能地域における大規模館選択要因分析 …… 113
6.1　図書館サービス満足度・重視度分析 …… 115
6.1.1　2 市図書館からの CS ベンチマーク …… 115
6.1.2　2 市図書館の相対比較 …… 117
6.2　石狩市民図書館利用登録者の満足度・重視度分析 …… 119
6.2.1　石狩市民図書館の評価 …… 119
6.2.2　満足度指数・重視度指数からみる類型別大規模館選択行動 …… 122
6.3　まとめ …… 128
註・参考文献 …… 129

第 7 章　本館の立地状況の違いによる図書館利用行動分析 …… 131
7.1　調査対象館の概要 …… 133
7.2　調査の概要 …… 137
7.2.1　調査の対象 …… 137
7.2.2　調査の方法 …… 137
7.3　登録者調査から …… 138
7.3.1　利用館選択 …… 138
7.3.2　主利用館別属性 …… 140
7.4　本館来館者調査から …… 142
7.4.1　平日・休日別構成 …… 142
7.4.2　利用目的・頻度 …… 144
7.4.3　本館利用理由 …… 146
7.4.4　来館過程 …… 147

7.4.5　自宅からの距離 …… 148
7.4.6　利用交通手段と所要時間 …… 150
7.4.7　滞在時間 …… 152
7.5　まとめ …… 154
註・参考文献 …… 155

第 8 章　結論 …… 157
8.1　研究成果の要約 …… 159
8.2　札幌市の図書館地域計画試論 …… 166
8.3　今後の課題 …… 172
謝辞 …… 173

資料 …… 1
アンケート調査票
資料 1　北広島市図書館来館者調査票（本館一般用） …… 3
資料 2　石狩市民図書館来館者調査票（本館一般用） …… 11
資料 3　北広島市図書館登録者調査票（本館一般用） …… 19
資料 4　石狩市民図書館登録者調査票（札幌市北区・手稲区用） …… 27
資料 5　北広島市図書館利用登録者・非利用者調査票 …… 35
資料 6　札幌市北区・新琴似地区住民調査票 …… 39

研究業績一覧 …… 1
1　学術論文 …… 3
2　学会発表・講演等 …… 5
3　その他 …… 6
4　著書 …… 6

第１章　序論

1.1　はじめに
1.2　研究の目的と意義
1.3　本研究と関連する既往の研究
　1.3.1　栗原理論（卵型モデル）
　1.3.2　植松理論（使い分け行動モデル）
　1.3.3　中井理論（二重構造モデル）
1.4　研究の方法と論文の構成
註・参考文献

第１章　序論

1.1　はじめに

1950年施行の図書館法（昭和25年4月30日，法律第118号）では，図書館とは地方公共団体の設置する図書館（公立図書館）と日本赤十字社又は一般社団法人の設置する図書館（私立図書館）の2種とされているが，本論文では公立図書館のみを扱い，用語のなじみの点から公立図書館を公共図書館と呼ぶこととする。

公共図書館の基本的機能は，資料や情報を求めるあらゆる人々にそれを提供することにある。自治体の設置する公共図書館は，住民の支払う税金により設置され運営されているので，負担と受益の公平性の観点から住民が自治体内のどこに住んでいようとも図書館サービスが受けられるようにすべきである。日本図書館協会が1970年に刊行した『市民の図書館』[1)] では図書館法を実体化するために，当面の最重点目標として以下の3点を挙げている。（1）市民の求める図書を自由に気軽に貸し出すこと，（2）児童の読書要求にこたえ，徹底して児童にサービスすること，（3）あらゆる人々に図書を貸出し，図書館を市民の身近に置くために全域へサービス網をはりめぐらすこと，そして（3）の全域サービスについては，第5章の「図書館の組織網をきづくために」において，①全市民がどこに住むだれであろうと平等に図書館サービスを受けられるようにサービス拠点をひろげる，②市民から与えられた資金をもっとも効率よく使うためにもっとも効果的な施設配置をする，（他2項割愛）を要件としている。この2つの要件を充たすことを目的とするサービス拠点の配置計画を公共図書館の地域計画という。

公共図書館の地域計画に関しては，建築計画学分野の研究者である栗原嘉一郎らが1960年代後半から順次日本建築学会論文誌に発表した一連の研究があり[2~10)]，1977年に日本図書館協会から『公共図書館の地域計画』[11)] として刊行され、部分的な追加や改訂が加えられながらも[12~15)]，日本図書館協会刊行の『図書館ハンドブック第6版』（2005）[16)] のVII章「図書館施設」においても大きな変更のないまま記載されるなど，一般的な計画手法として今日まで支持されてきている。これは，およそ徒歩圏ごとに小規模な分館を複数設置して，貸出しを中心とする市民の日常的な利用に供し，それらを蔵書量や職員数の大きな本館が補完するという，施設までの距離と規模，サービス内容を階層的に構成する計画手法である。

小・中学校のように学区が定められ，ある地域に居住する者は特定の施設しか選択できないものを除き,利用者が複数の同種施設から利用する施設を自由に選択できる場合には，商業施設，医療施設，公共図書館を含む公的サービス施設を問わず一般に，施設から利用者の居住ないし利用前にいた地点までの距離が延びるにつれて利用者数は減少し，ついにはほぼ0に近づく。その理由は，利用者の施設選択は当該施設利用に要するコストと施設

で受けられるサービス水準とのトレードオフにより決定されるからである。例えば病気の場合，軽い疾病であれば近くのかかり付けの医院を利用し，そこでは対応できない病気には遠方でも専門医のいる高度医療施設を選択するという行動である。逆に，運営側から見れば，ローコストで運営できる小規模施設は近隣の住民の要求に応ずるだけで充分に採算がとれ，大規模施設は広い範囲から多くの利用者を集めることで投資コストを賄う。その意味で階層的な施設整備手法は合理的であるといえる。

しかし，三重県下の疎住地における中井孝幸らの図書館利用実態に関する研究[17~21]，および丁圓らの複数図書館からの選択利用行動に関する研究[22~24]では，自家用車の広範な普及と自治体の枠を超えての利用を許容する図書館が増加したことにより，遠くても大規模図書館を利用する志向が強くなり，利用圏域は広域化していると述べている。今日，疎住地に限らずとも公共交通手段が高度に整備されている一部の大都市を除いて，世帯当りの自家用車保有率並びに保有台数はともに高く，主婦や高齢者（少なくとも前期高齢者層）にあっても，移動には自家用車を使うことが一般化している。自家用車利用の日常化は，時間コストの点で利用施設への距離に対する抵抗感を減じさせ，人々は距離よりも大規模施設において得られる便益を優先して利用施設を選択する傾向が強まっていると考えられる。すなわち，従来の施設までの距離を基本とする階層的な図書館施設整備の考え方[25]は，利用者のニーズの多様化やモータリゼーションの発達に伴う利用行動の変化に合わせて見直す必要があるといえる。

1.2　研究の目的と意義

本研究は，市民が複数の図書館から利用館を選択できるような状況が実現している都市部において，市民が誰とどのような交通手段でどの図書館へ行くかといった利用行動の実態を把握する調査に基づき，規模の異なる複数の図書館が存在する地域にあっても階層的な構成計画が前提としている考え方が通用しなくなっているのかを検証するとともに，利用行動に即しかつ平等性と効率性の均衡のとれた，現実に整備可能な図書館施設の設置計画手法を確立する基礎となる計画指針を見出すことを目的とする。

具体的には，（1）複数の図書館から利用館を選択できるような状況下での利用館選択と大規模館選択要因の分析を行い，階層的な構成計画が前提としている考え方が通用しなくなっているかを確認する，（2）個人単位の分析のみでは大規模館選択への利用行動の変化を解明できないことから，家族単位での図書館利用行動の実態に着目し，ライフステージの進行に伴う同伴利用パターンの推移から抽出した利用者セグメントごとの利用実態を明らかにする，（3）大規模館志向の実態把握から本館の立地位置と利用行動の関係を捉えることなどにより，従来の単独利用のみならず自家用車を利用しての家族同伴利用を背景とした新たな計画論に応用し得る基礎となる計画指針を見出す，の3点である。

公共図書館の配置計画に関する既存研究については次節で詳述するが，主要な研究である栗原嘉一郎らの1960年代後半からの図書館施設の配置計画に関する一連の研究[2~15]，中井孝幸らの三重県下の疎住地における図書館利用実態に関する研究[17~21]，および丁圓らの複数図書館からの選択利用行動に関する研究[22~24]と対比の形で本研究の視点を明確にしておくことにする。

栗原らの研究は，1つの自治体全域に，貸出しサービスに特化した分館を効率的に配置する計画手法を提案することを目的としている。1960年代末から70年に実施した利用実態調査に基づくもので，徒歩ないし自転車での図書館利用がほとんどで，市民が複数館から利用館を選択できる状況にはない時代である。具体的には，名古屋市立図書館の分館の中から住宅地域に立地している5館において，来館者の住所ないし来館直前の所在地を地図上にプロットする方法により，分館を1つ設置した場合にどの範囲までの住民がカバーされたことになるかという利用圏域を，ある距離範囲に居住する住民数に対する来館者数の比率（来館者密度比）を用いてモデル（平均的卵型平面図）化した[6]。この利用圏域をもとに，自治体としてのサービス目標に応じた必要蔵書冊数などの施設サービスとの関係を整理し[7~8]，分館網の計画[11]，さらに中村らが広域での図書館計画[12~14]へと展開している。しかし，分館を補完する本館の利用圏域やその立地位置のあり方等については扱われていない。

中井らの研究は，疎住地（人口密度・施設密度の低い地域）における図書館の配置・規模に関する具体的な計画条件を明らかにすることを目的としており，三重県，滋賀県，岐阜県下の疎住地で1992～1997年の間に実施した来館者調査から，栗原らと同様の手法で利用圏域モデルを作成し，施設密度が低いすなわち施設間距離の遠い地域での図書館利用は，「館近傍の距離の影響を受けて図書館に引き寄せられる利用」つまり館の近くに居住し「近さ」を理由に利用する層と，「距離の影響をあまり受けない基礎的な図書館に対する需要からくる利用」つまりさまざまな理由から距離をいとわずに利用する層との2つの利用者層に分かれる二重構造となっていることを明らかにした。そしてこの二重構造はモータリゼーションの発達により距離に対する抵抗感の減少によって顕在化した後者の利用者層の出現がもたらしたものであるとしている[17]。そして，その研究は単独館利用を計画の前提とした単独館利用モデルにおいて，蔵書冊数規模に応じた利用圏域の拡大に関する研究[18]，利用圏域の二重構造における，低い来館率が遠方まで延びる「基礎的な需要による」利用者に「地域蔵書割合（周辺地域内の蔵書冊数に対する自館の蔵書冊数の割合）」が与える影響の分析[19]へと続く。しかし，それらは疎住地のみでの研究であることから，規模の異なる複数の図書館が設置されている都市部の密住地においても利用圏域の広域化がみられるかを検証する必要がある。また利用者を家族同伴（主婦と児童）と単独とに分けて来館率の距離分布などについての分析を行っているものの，家族のライフステージの進行と図書館の利用形態の推移といった家族を単位とした同伴の利用実態については扱っていない。

丁圓は広域利用という視点から複数図書館の選択形態を整理し，施設への要望から複数図書館の選択構造について論じており[22]，次いで三重県下の20図書館の来館者調査から直線距離を用いて図書館選択利用圏域を探り，大・中・小規模館を組み合わせた利用可能な圏域のモデル化によるシミュレーションを行っている[23]。しかし，距離と蔵書冊数のみを用いてのモデル化であり，各利用者層がどのような要因で施設を選択しているのかといった施設選択構造についての議論はなされていない。また，規模の異なる複数の館が設置されている大都市を研究対象とした利用館選択行動の分析ではない。

本研究では，図書館施設網がある程度の水準で整備されていること，日常生活における自家用車利用が高頻度であることをもとに選定した，大都市の郊外部および大都市に隣接するベッドタウンを研究対象地域とし，このような密住地において，（1）非利用者をも含めた図書館利用行動の実態を把握する（3章），（2）利用館選択状況から階層的な図書館施設整備手法の崩壊が認められるかを検証する（4章），（3）家族のライフステージの進行に伴う同伴利用パターンの推移を分析する（5章），（4）利用館選択における大規模館選択要因を分析する（6章），（5）大規模館志向の利用行動実態を受けて，本館の立地位置と住民の図書館利用行動の様態についての事実関係を明らかにする（7章），ことなどにより従来の単独利用のみならず自家用車を利用しての家族同伴利用を背景とした新たな計画論の基礎となる計画指針を見出すことを目的としている点に大きな特徴がある。すなわち，都市部である札幌市郊外，並びに隣接する石狩市，北広島市を対象に，自家用車の利用や家族同伴利用，複数館からの利用館選択などを論じるものである。既往研究にみられるように，人々の図書館利用行動はどのような内容（サービス・施設）の図書館がどのくらいの距離に存在するかに左右される。都市部，特に徒歩圏内に利用できる図書館がある状況の地域で，自家用車の利用可能性と利用館の選択状況，ライフステージの進行と図書館利用形態の推移，家族を単位とした利用行動の実態などを明らかにすることは，従来の計画論を見直すための出発点として意義があるものと考える。

1.3　本研究と関連する既往の研究

1.3.1　栗原理論（卵型モデル）

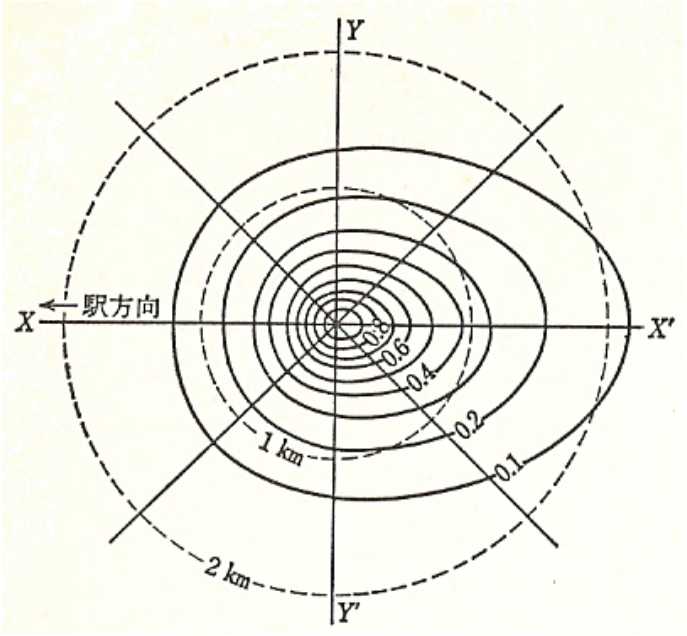
栗原嘉一郎らは，1970 年に行った名古屋市（5 館），日野市（4 館）での来館者調査をもとに，図書館群の配置計画を考えるに当たり，1 つの分館が住民をどのくらいの範囲から集めることができるのかという利用圏域のモデル化を図っている。具体的には，それぞれの図書館において一定期間中に来館した者全員の自宅ないし来館直前の所在地を地図上にプロットし，そこから来館者密度立体模型図を作成している。次に，図書館と市の中心部（駅）を結ぶ軸線（X－X’）を設定して来館者密度の断面図を作り，これを合成･平滑化

して一般化した利用圏域平面図を作成するという方法により平均的卵型平面図を示している（図 1-1）[10]。この利用圏域モデルは，住民の日常生活動線（X－X’）に対して，その途中に図書館がある場合には利用が高くなるが，生活動線と反対方向に図書館がある場合には，距離的に近くてもなかなか図書館に行かないことを表している。

図 1-1 中の 0.1，0.2，0.3 という数値は来館者密度比と呼ばれるもので，図書館のごく近傍に住んでいる人が図書館に引きつけられる度合を 1 としたときに，距離が離れていくに従ってその度合が漸減していく割合を示したものである。栗原らはこの来館者密度比という係数を用いて地域をあるレベルに保障するという分館の配置計画を提案しており，例えば 0.1 保障であれば市域のどこに住んでいても図書館のすぐ近くに住んでいる人の 10%の利便性が保障される圏域で分館を配置するというものである。

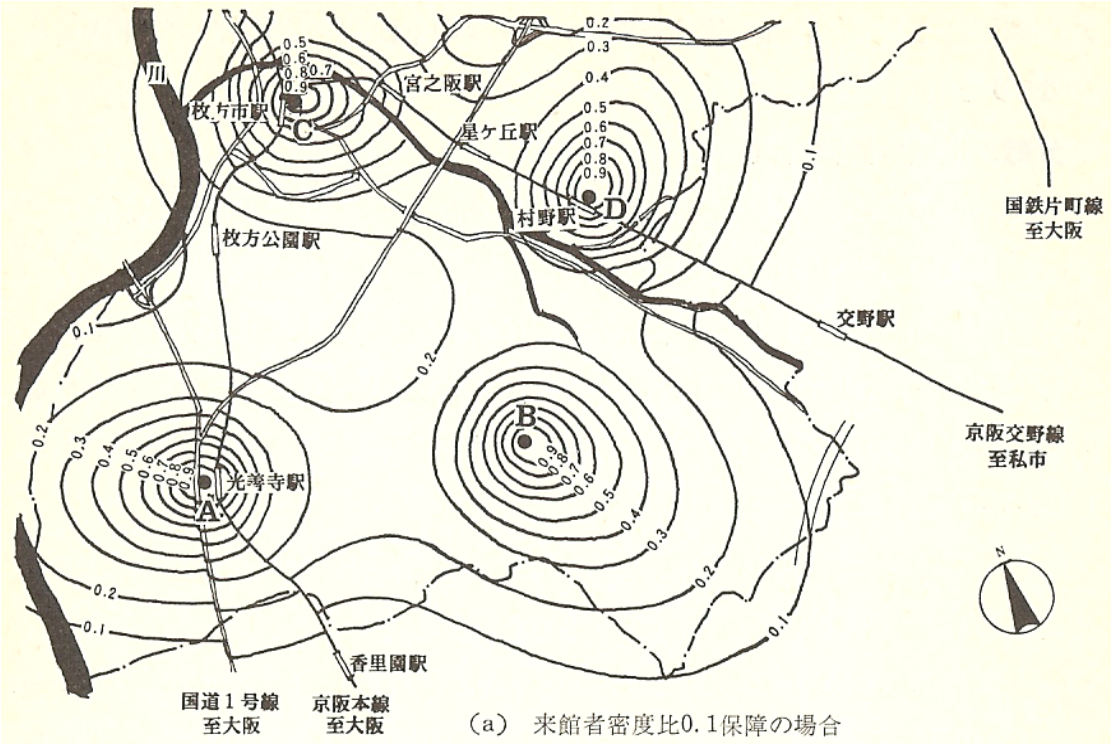
図 1-2 に栗原らが来館者密度比の概念を用いて例示した分館の設置計画図を示す。図からわかるように，来館者密度比の保障値を高くすれば必要な図書館数が増えることになる。

＜図 1-1　平均的卵型平面図＞



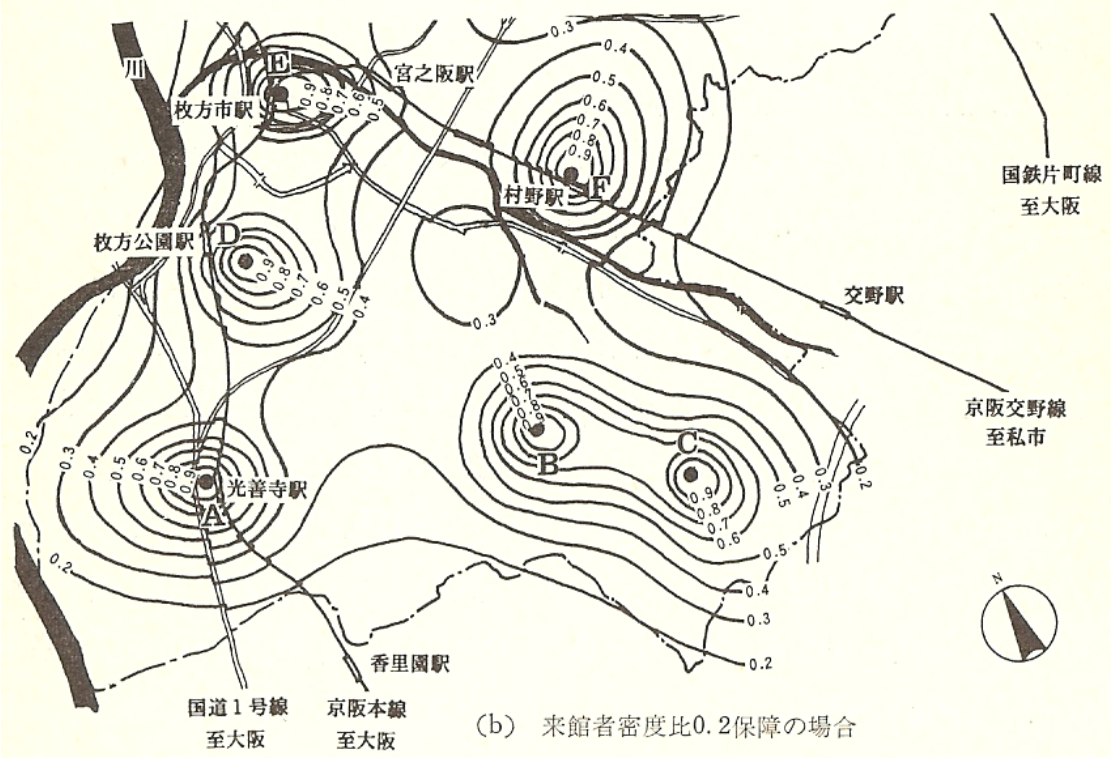
＜図 1-2　来館者密度比の概念を用いた分館の設置計画＞

（a）来館者密度比 0.1 保障の場合



（a）　来館者密度比0.1保障の場合

（b）来館者密度比 0.2 保障の場合



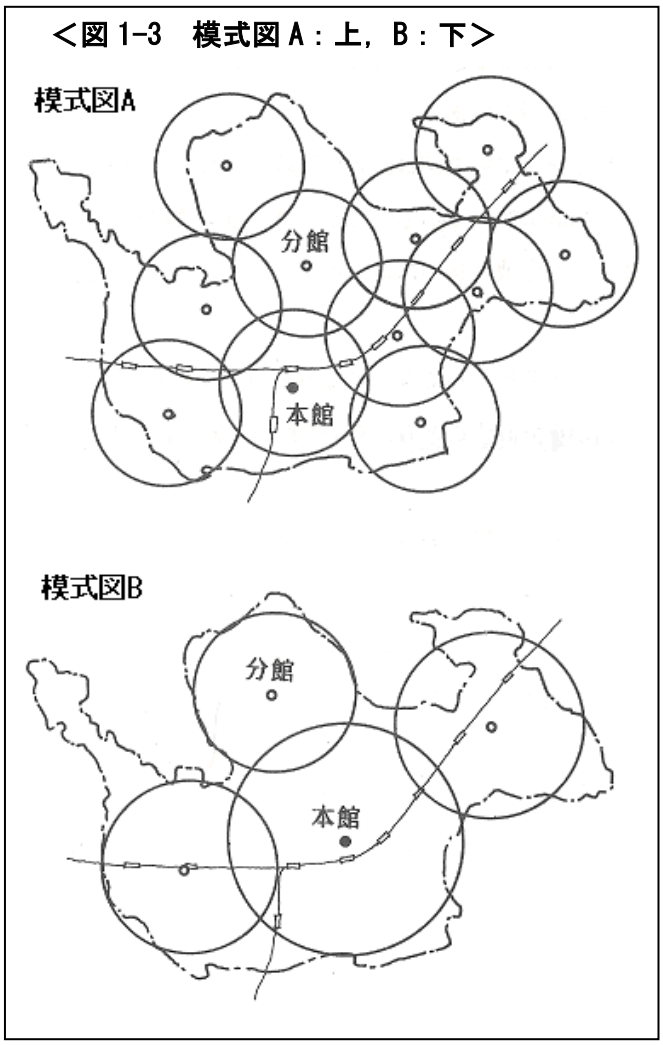
（b）　来館者密度比0.2保障の場合

1.3.2　植松理論（使い分け行動モデル）

植松貞夫らは本館 1 館と分館 12 館の複数館によりネットワーク構成された千葉県柏市において，1985 年 2 月に図書館登録者への郵送アンケート調査を実施し，その利用行動分析から本館と分館の利用圏域の広がりの違いを論じている[26]。

（1）登録者は，本館で登録しても日ごろは近くの分館を利用していたり（本館登録者の 20%余），あるいはその逆の利用行動をとる。すなわち利用館の選択がなされている(「使い分け行動」）。

（2）利用館を選択する際の判断要素として，最も大きいのは「近さ」すなわち時間距離であるが，近くの分館よりも距離の遠い本館をあえて利用している人は本館の「資料の多さ」を選択理由の第 1 要素として挙げている。



（3）多くの利用者が「近さ」を優先して利用館を選択している（アクセス重視型）一方で，近くに分館がありながらもあえて本館を利用している者（内容重視型）がかなり多いことなどにより，図書館の利用圏が複層化しているとしている。植松は調査結果から，多数の小規模分館による方式（模式図 A）は，①各館が基本的に備えるべき図書の重複が多くなるため，年間図書購入費の多くがそれに当てられてしまうこと，②各館は少人数の運営となるため，職員を専門的サービスの提供に振り向けることができにくいこと，などから数多くの図書館を設置すればするほど市立図書館全体としてのコレクションとサービスの内容は豊かなものに成長しないという矛盾を有しているとしている。そして結論として，複数の図書館を設置するに際しては，図書館の数を少なくしても，それぞれの図書館を大型ないし中型のものとして(模式図 B)，それぞれの蔵書構成やサービスの内容に特色を持たせ，住民の目的に合わせての利用館選択の幅を広げる方が，むしろシステム全体としての質は向上し，現在の図書館サービスにあきたりない潜在的利用者層を獲得することにつながるものと考えると結んでいる。

1.3.3　中井理論（二重構造モデル）

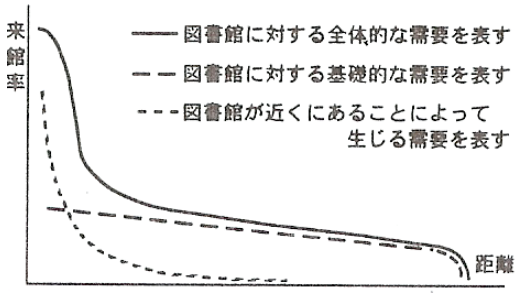
中井孝幸らは三重県 7 館（1992～1993 年），滋賀県 4 館（1994～1996 年），岐阜県 5 館（1997 年）の計 16 の図書館において実施した来館者調査から，栗原らの手法を参考に地区人口 1000 人当たりの来館者数として「来館率」を求めて利用圏域を把握し，①疎住地では自家用車での来館が多く利用圏域は広域化していること，②利用圏域の広がりには地域固有の形状を示すこと，③来館者の利用圏域が「館近傍の距離の影響を受けて引き寄せられる利用」と「距離の影響をあまり受けない基礎的な図書館に対する需要からくる利用」の 2 つの利用者層に分けられる「二重構造」になっていることを明らかにしている（図 1-4）。

そして，この二重構造はモータリゼーションの発達による距離に対する抵抗感の減少によって顕在化した遠方の利用者層がもたらしたものであると述べている[17～20]。

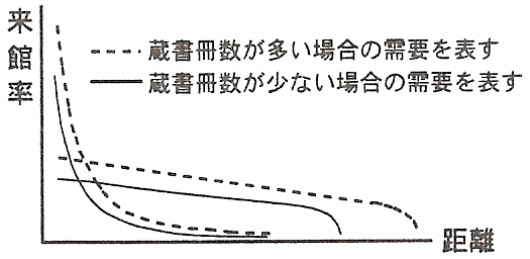
また，蔵書量が増えれば「館近傍の距離の影響を受ける利用」の来館率は若干高くなるが利用圏域の距離はあまり延びず，「図書館に対する基礎的な需要による利用」の来館率は蔵書の影響を受けて若干高くなり，距離も遠方へ延びるとしている(図 1-5)。

さらに，3km までは「距離の影響を強く受ける利用」と「距離の影響を受けない基礎的な需要による利用」が重なり合っているが，3km 以遠では周辺地域に図書館がない場合や，周辺図書

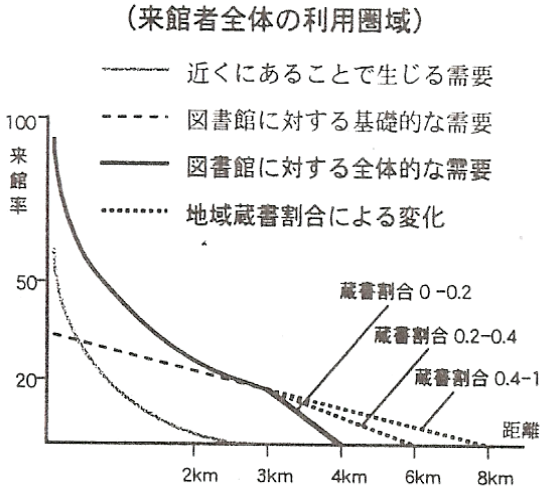
＜図 1-4　利用圏域の二重構造＞



＜図 1-5　蔵書冊数と利用圏域の二重構造との相関モデル＞



＜図 1-6　地域蔵書割合と二重構造との概念モデル図＞



館に対して自館の蔵書冊数の量が多ければ，「基礎的な需要による利用」の距離が延びるとしている(図 1-6)。

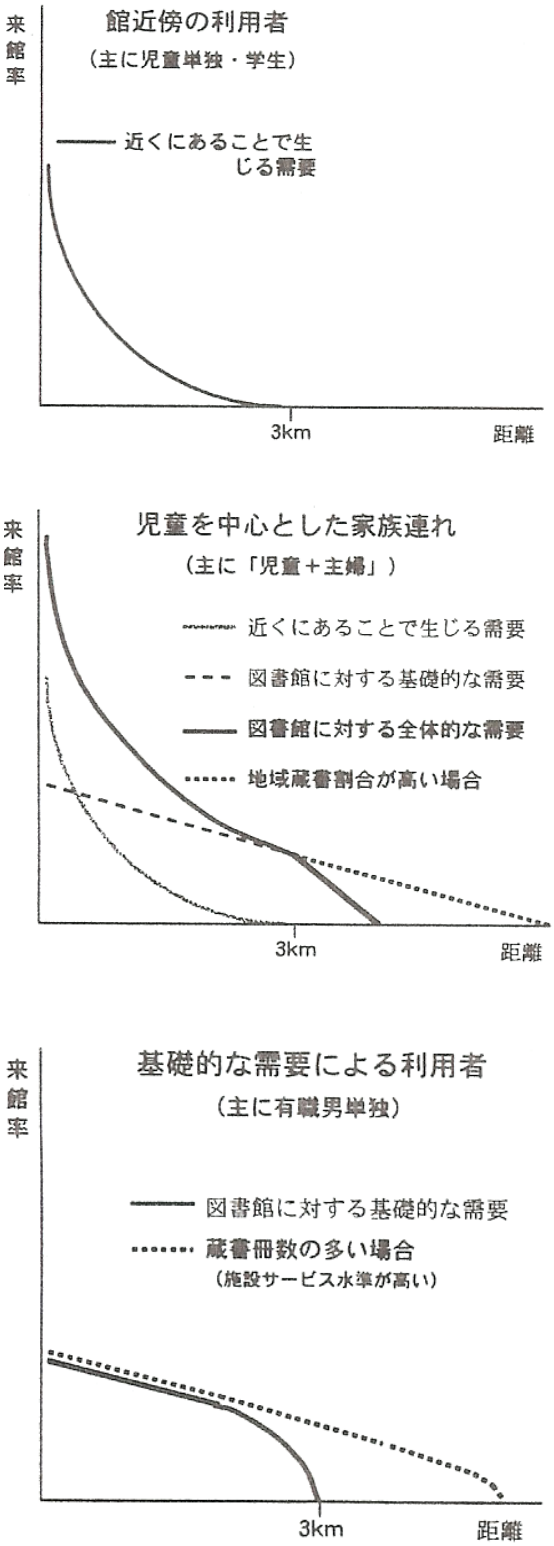
図 1-7 は各利用者層の利用圏域構造図として示されているものである。①「距離の影響を強く受ける」利用者層は，主に交通弱者である児童単独と学生であること，②児童を中心とした家族連れの利用者層は，近くにある図書館を利用し，施設サービスの魅力よりはむしろ，地縁的な近さの方が強く影響していること，③有職男単独は，館内での滞在を志向する利用者で距離や周辺地域の状況よりも新聞雑誌も含む自館の蔵書の魅力や，CD・ビデオの設備機器などの影響をダイレクトに受ける「図書館に対する基礎的な需要」による利用者層であることを明らかにしている。図書館の地域計画においては，利用圏域の二重構造から捉えると，施設の魅力を分散させるよりは，魅力を増して「基礎的な需要による利用」を誘引する方が，施設利用率は確保できると述べており，利用者の利用行動からみれば，施設サービス水準の確保が最優先されるべきであると結んでいる。

地域計画のモデルとして，表 1-1 に基づいて利用圏の広がりを設定し，広域圏内の蔵書数の合計が 27 万冊になるようにした 3 案（分散配置モデル，分散＋集中配置モデル，集中配置モデル）が示されている（図 1-8～図 1-10）。これらの分析の結論として，モータリゼーションの発達により日常生活行動圏が広域化していることを前提にすれば，平均的な水準を満たした図書館を均質に数多く配置させるより，多少疎らでも各館で独自の高度な施設サービスを提供し，日常生活圏内に利用の選択肢を数多く用意する方が，利用者の多様な要求に応えられるという考え方である[21]。

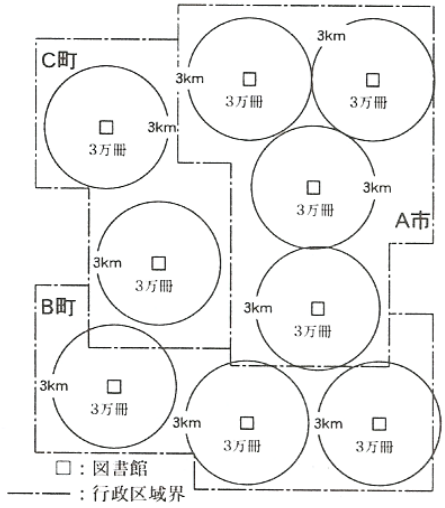
＜表 1-1　蔵書割合 0.3 の場合の蔵書冊数と来館率の距離分布との相関モデル＞

蔵書冊数	来館率の伸び	館近傍の来館率	基礎的な需要による来館率
1.5万冊	3kmまで	100人程度の来館率が現れない可能性がある	2km付近まで30～50人程度の来館率が続く
3万冊	3kmまで	100人程度の来館率	2km付近まで30～50人程度の来館率が続く
5～7万冊	4km以上	100人程度の来館率	3km付近まで30～50人程度の来館率が続く
10万冊	5km以上	100人程度の来館率	3～4km付近まで30～50人程度の来館率が続く
14万冊	6km以上	100人程度の来館率	4～5km付近まで30～50人程度の来館率が続く
15～18万冊	8km以上	100人程度の来館率	6km付近まで30人程度の来館率が続き，10人以下の低来館率が12km近くまで伸びる

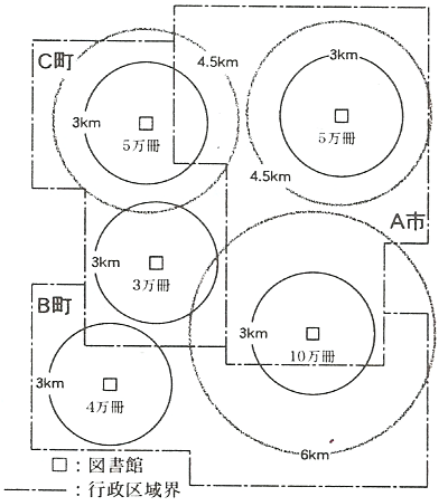
＜図 1-7　各利用者層と二重構造との概念モデル図＞



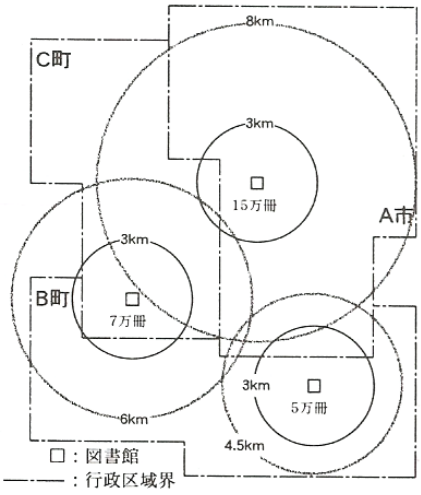
＜図 1-8　分散配置モデル＞



＜図 1-9　分散＋集中モデル＞



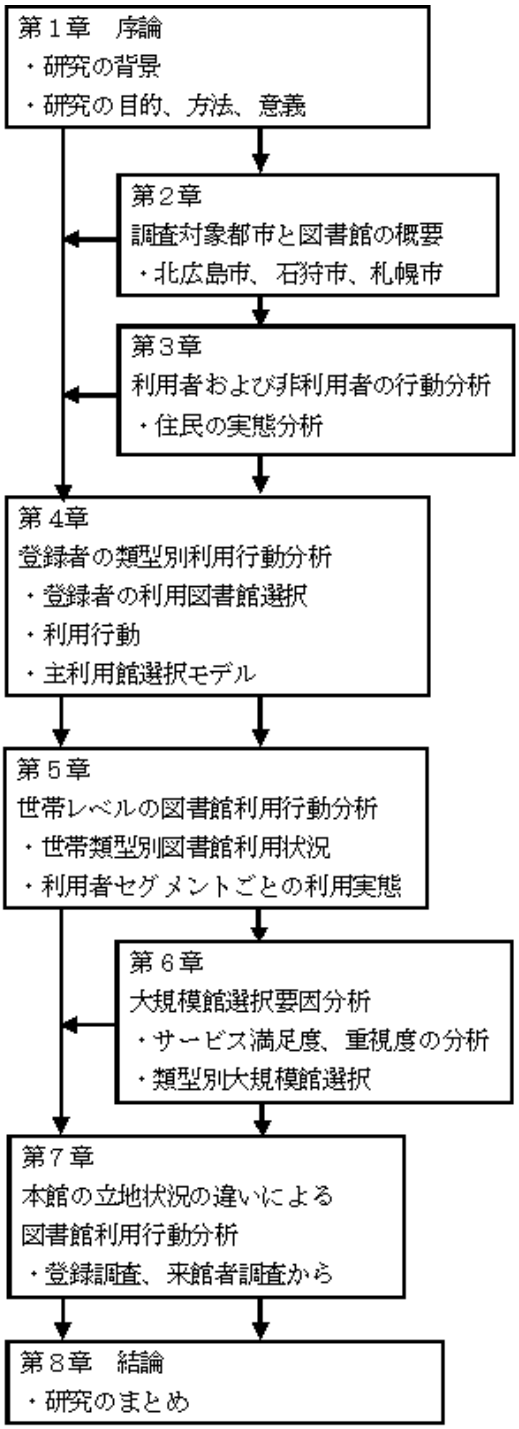
＜図 1-10　集中配置モデル＞



1.4　研究の方法と論文の構成

本論文は北海道札幌市，石狩市，北広島市の３市における各種調査（来館者調査，登録者調査，住民調査）をもとに，大都市郊外部における最近の図書館利用行動に即して分析を行う。

本論文の構成は，本章（序論）を含め，８つの章からなっている。



第２章においては，調査対象都市の地理的な構成を特に交通環境を中心に述べるとともに，各市の図書館の沿革と現状について記述する。また，次章以降の分析に利用した各種利用者調査の骨格と調査方法の概要についてまとめる。

第３章では，最初に一般的な図書館利用者像，非利用者像を捉える。図書館の利用者や非利用者の属性，行動様式の特徴などを捉えるためには，包括的な住民調査が必要である。そこで，北広島市図書館の協力を得て，市政モニターアンケート調査 [27] の一部として調査票を同封させてもらう形で住民調査を実施した。具体的には，性，年齢，職業をはじめとする種々の要因が個々人の図書館利用，非利用にどのように関係しているか，また「図書館を未だ利用していない人々」や「以前には利用していたが現在は利用しなくなってしまった人々」がどのような属性の集団であるのか,「図書館を利用できない・しない」理由は何かなどについての実態を分析し，考察している。

この章の分析から，図書館利用の有無に関しては図書館までの距離と蔵書規模のバランスが重要であることを再確認したとともに，図書館側の施設整備とサービス内容の改善により，再びあるいは新たに図書館利用者層に転換し得る可能性

の高い潜在的利用者層が多く存在することも分かった。すなわち，利用者の利用行動の変化に合った適正な規模と施設数による図書館配置が必要であることから，次章以降で図書館利用行動の実態についての分析を行っている。第 4 章と第 5 章は図書館の階層的構成論のあり方の是非について，第 6 章と第 7 章は配置計画につながる内容の考察を展開している。

第 4 章では，大・中・小の規模の異なる複数の図書館が存在し選択可能な状況下で，それぞれの利用需要はどのように生起し，差別化されているのかについて，行政区域を越えて石狩市民図書館に利用登録している札幌市北区・手稲区の住民の図書館利用行動分析を基に，都市部の密住地において図書館施設の階層的な構成手法が前提としている考え方が通用しなくなっているのかについて検証する。具体的には，規模の異なる複数の館が存在する地域において，札幌市手稲区と北区に居住する石狩市民図書館登録者を対象に実施した調査をもとに，市民がどのような理由で利用館を選択し，利用行動をしているかについて，自宅からの最近隣館と主利用館とを軸とした類型に分けて分析し，類型ごとの特性を明らかにする。また，札幌市手稲区・北区の住民がどのような条件下で石狩市民図書館を選択利用するかについて，遠方の大規模館または最寄りの中小規模館のどちらを選択するかを選択肢に，7 種の説明変数を用いた二項ロジットモデルを推定し検証する。

第5章では，札幌市北区新琴似地区のある住区ブロックに居住する全世帯に対する住民調査を実施し，世帯を最年少児の年齢で分類することにより，ライフステージの進行と図書館利用形態の推移，自家用車の利用可能性と利用館の選択など，家族を単位とした利用行動の実態について明らかにする。また，ライフステージに応じた家族単位の利用行動から抽出した「成人の単独利用」，「夫婦の同伴利用」，「親と子の同伴利用」，「子の単独利用」の4種類の利用行動別集団を利用者セグメントと捉え，各利用者セグメントの図書館利用実態を分析する。

第 6 章では，石狩市民図書館登録者調査の分析（4 章）において大規模館志向がみられたものの，二項ロジットモデルで大規模館選択の説明変数として設定できなかった項目(選択要因)を追加しての分析を行う。具体的には，石狩市民図書館本館と北広島市図書館本館で実施した登録者調査をもとに，図書館利用者がどのようなサービスを重視し，満足（あるいは不満）を感じながら大規模館を選択しているのかについて，登録者の図書館サービスに対する満足度指数と重視度指数を用いて分析する。

第7章では，前章までの大規模館志向にシフトしている利用行動実態を受けて，本館の立地位置と住民の図書館利用行動の関係性を扱う。具体的には，図書館の本館が住民の日常生活動線の結節点といえる場所に設置されているか，市街地中心部とは言いがたい郊外に設置されているかということ以外の条件（市人口，市面積，竣工年，延床面積，蔵書規模など）がほぼ等しい石狩市と北広島市における図書館利用調査（登録者調査，来館者調査）から本館の立地位置[28]の違いが住民の図書館利用行動に及ぼす影響を考察する。

最後に，第 8 章において本論文で明らかになった主要な事項をまとめ，①徒歩圏の図書

館へも自家用車による家族同伴利用が多いこと，②利用目的や利用頻度において，中小規模館と大規模館の使い分けがみられないこと,③ 交通弱者といわれる子どもと前期高齢者の利用実態からも，図書館への距離が遠くなっても利用可能性が大きく減じることはないであろうことなどから，（1）受け持ち範囲をある程度広くしても規模の大きな図書館を設置すること，（2）自家用車を利用した家族単位での図書館利用行動に対応した適正な施設配置計画手法を検討していく必要があること，（3）立地位置としては，距離に対する抵抗が少なく広い駐車場が確保できる郊外地に魅力ある大規模館を設置することも選択肢になり得ることなどを整理し，利用行動に即しかつ平等性と効率性の均衡のとれた，現実に整備可能な図書館施設の設置計画手法を確立する基礎となる 2 つの試論，大規模館と中規模館による試論（A案）と大規模館のみによる試論（B案）を示した。

註・参考文献

1）日本図書館協会編『市民の図書館』日本図書館協会, 1970, 151p.

2）栗原嘉一郎，中根賢哉「読書施設の状況と住民の読書形態：公共図書館の設置計画に関する研究・１」『日本建築学会論文報告集』第 122 号, 1966.4, p.30-36.

3）栗原嘉一郎，竹下俊夫「読書施設の状況と住民の読書形態・続：公共図書館の設置計画に関する研究・２」『日本建築学会論文報告集』第 127 号，1966.9, p.43-48.

4）栗原嘉一郎，竹下俊夫「公共図書館利用者についての分析：公共図書館の設置計画に関する研究・３」『日本建築学会論文報告集』第 130 号, 1966.12, p.27-32.

5）栗原嘉一郎「児童の読書形態と図書館利用：公共図書館の設置計画に関する研究・４」『日本建築学会論文報告集』第 189 号, 1971.11, p.103-108.

6）栗原嘉一郎，篠塚宏三，中村恭三「分館の利用圏域：公共図書館の設置計画に関する研究・５」『日本建築学会論文報告集』第 194 号, 1972.4, p.45-52.

7）栗原嘉一郎，篠塚宏三，中村恭三「分館の規模計画：公共図書館の設置計画に関する研究・６」『日本建築学会論文報告集』第 213 号, 1973.11, p.45-54.

8）栗原嘉一郎，篠塚宏三，中村恭三，高山司郎「分館群の計画と経済性：公共図書館の設置計画に関する研究・７」『日本建築学会論文報告集』第 227 号, 1975.1, p.99-106.

9）栗原嘉一郎，篠塚宏三，中村恭三，高山司郎「図書館網計画のケーススタディ：公共図書館の設置計画に関する研究・８」『日本建築学会論文報告集』第 228 号, 1975.2, p.89-99.

10）栗原嘉一郎，篠塚宏三，中村恭三著『公共図書館の地域計画』日本図書館協会, 1977, 107p.

11）栗原嘉一郎，篠塚宏三，中村恭三「広域に対する図書館網計画：公共図書館の設置計画に関する研究・９」『日本建築学会論文報告集』第332号，1983.10, p.118-127.

12）中村恭三，栗原嘉一郎「地域図書館の規模別利用圏域モデル：公共図書館の設置計画に関する研究・10」『日本建築学会計画系論文集』第 496 号, 1997.6, p.97-104.
13）中村恭三，栗原嘉一郎「地域図書館網の計画：公共図書館の設置計画に関する研究・11」『日本建築学会計画系論文集』第 506 号, 1998.4, p.53-60.
14）中村恭三，栗原嘉一郎「広域に対する図書館網の計画・新：公共図書館の設置計画に関する研究・12」『日本建築学会計画系論文集』第 512 号, 1998.10, p.123-130.
15）栗原嘉一郎，中村恭三著『地域に対する公共図書館網計画』日本図書館協会, 1999, 62p.
16）日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会編『図書館ハンドブック第6版』日本図書館協会, 2005, p.391-396.
17）中井孝幸，今井正次「地方都市における図書館の利用圏域の二重構造：疎住地の地域施設の設置計画に関する研究・1」『日本建築学会計画系論文集』第482号, 1996.4, p.75-84.
18）中井孝幸，今井正次「地方都市における施設サービス水準と図書館の利用圏域構造：疎住地の地域施設の設置計画に関する研究・2」『日本建築学会計画系論文集』第508号, 1998.6, p.75-82.
19）中井孝幸，今井正次「地域蔵書割合と利用者属性からみた図書館圏域構造：疎住地の地域施設の設置計画に関する研究・3」『日本建築学会計画系論文集』第529号, 2000.3, p.141-146.
20）中井孝幸「地方中小都市における図書館利用とモータリゼーション：利用圏域の二重構造に基づく図書館の地域計画」『現代の図書館』Vol.39, No.2, 2001, p.102-110.
21）中井孝幸「利用圏域の二重構造に基づく疎住地の図書館計画に関する研究」学位論文（三重大学工学部）, 2000.7
22）丁圓，今井正次，中井孝幸「複数図書館の選択利用の諸要件に関する研究：施設選択利用を促す地方都市における図書館計画に関する研究・1」『日本建築学会計画系論文集』第557号, 2002.7, p.173-179.
23）丁圓，今井正次「複数施設の選択利用を前提とした図書館配置計画のモデル的検討：選択利用を促す地方都市における図書館計画に関する研究・2」『日本建築学会計画系論文集』第577号, 2004.3, p.41-48.
24）丁圓「地方都市において選択利用を促す図書館計画に関する研究」学位論文（三重大学工学部）, 2003.3
25）『市民の図書館』（1970 年，日本図書館協会刊）で当面の重点目標として提起された全域サービスの考え方をもとに，およそ徒歩圏ごとに複数の分館を設置し，資料と専門職員の面で卓越した中央図書館をすべての住民が利用しやすい位置に設置するというものである。住民の日常的な利用に供する分館は，蔵書冊数や床面積が利用圏内の人口規模に相応して算出されるため，一般には小規模な図書館施設となる。ここでの階層的な構成手法の考え方とは，この小規模分館を大規模中央館が補完するという，施設までの距離と規模，サービス内容を階層的に構成する計画手法のことを指す。すなわち，通常は近くの分館を利用し，高度な利用要求が発生したときには遠くても本館を利用するという使い分けがあること，また子

どもや交通弱者は近くの図書館しか利用できないことなどを前提としている。

26）植松貞夫「複数図書館設置都市における住民の図書館利用行動：公共図書館の地域計画に関する研究」学位論文（東京大学）, 1987.12

27）北広島市では，女性と男性がともに家庭や社会のあらゆる分野に平等に参画する「男女平等参画社会」を実現するため，2002 年に「きたひろしま男女平等参画プラン」をつくり，男女平等参画社会づくりに向けて歩み始めている。それに伴い，2003 年度市政モニター事業として「男女平等参画に関する市民意識調査」を実施し，統計データを得ようとしたものである。

28）北海道で市制を施行している 35 市の図書館住所から，検索エンジン goo のエリア情報検索機能（オンライン），入手先＜http://map.goo.ne.jp./address/01/＞を使って各図書館の周辺地図を表示させ判断し，(A)役所隣接型（市役所の近くにあり，それに関連して警察署，郵便局，市民会館等の公共施設が周辺にある），(B)市街地型（ほぼ市の中心と思われる発展した場所で，周辺には学校や住宅，ショッピングセンターなどがある），(C)JR 駅前型(JR 駅から徒歩 10 分程度の位置にある)，(D)公園型（大きな公園の中，あるいはその周辺にある）の 4 つに分類した。

(A)役所隣接型(14 館)：芦別市，網走市，石狩市，登別市，小樽市，北斗市，砂川市，名寄市，室蘭市，紋別市，夕張市，歌志内市，美唄市，留萌市

(B)市街地型(12 館)：恵庭市，北見市，深川市，函館市，赤平市，三笠市，釧路市，根室市，江別市，札幌市，伊達市，富良野市

(C)JR 駅前型(4 館)：帯広市，北広島市，稚内市，士別市

(D)公園型(5 館)：旭川市，千歳市，滝川市，岩見沢市，苫小牧市

最近では，函館市（2005.11）が中心市街地の五稜郭公園横に，北広島市（1998.10），稚内市（2003.6），帯広市（2006.3）などが JR 駅前周辺に新図書館を設置するなど，市街地への公共施設の進出によって都市の活性化を図ろうとする傾向もみられるが，上記のように役所隣接型と市街地型が多く，石狩市（2000.6）のように市街地からやや離れた郊外地に設置する事例もみられる。

第 2 章　調査対象都市と図書館の概要

2.1　札幌市・石狩市・北広島市の概要
2.1.1　位置・地形，および人口
2.1.2　都市交通状況，および自家用車保有状況
2.2　札幌市・石狩市・北広島市の図書館の沿革と現状
2.2.1　札幌市の図書館
2.2.2　石狩市の図書館
2.2.3　北広島市の図書館
2.3　利用者調査の概要
2.3.1　調査の構成
2.3.2　来館者調査
2.3.3　登録者調査
2.3.4　住民調査
註・参考文献

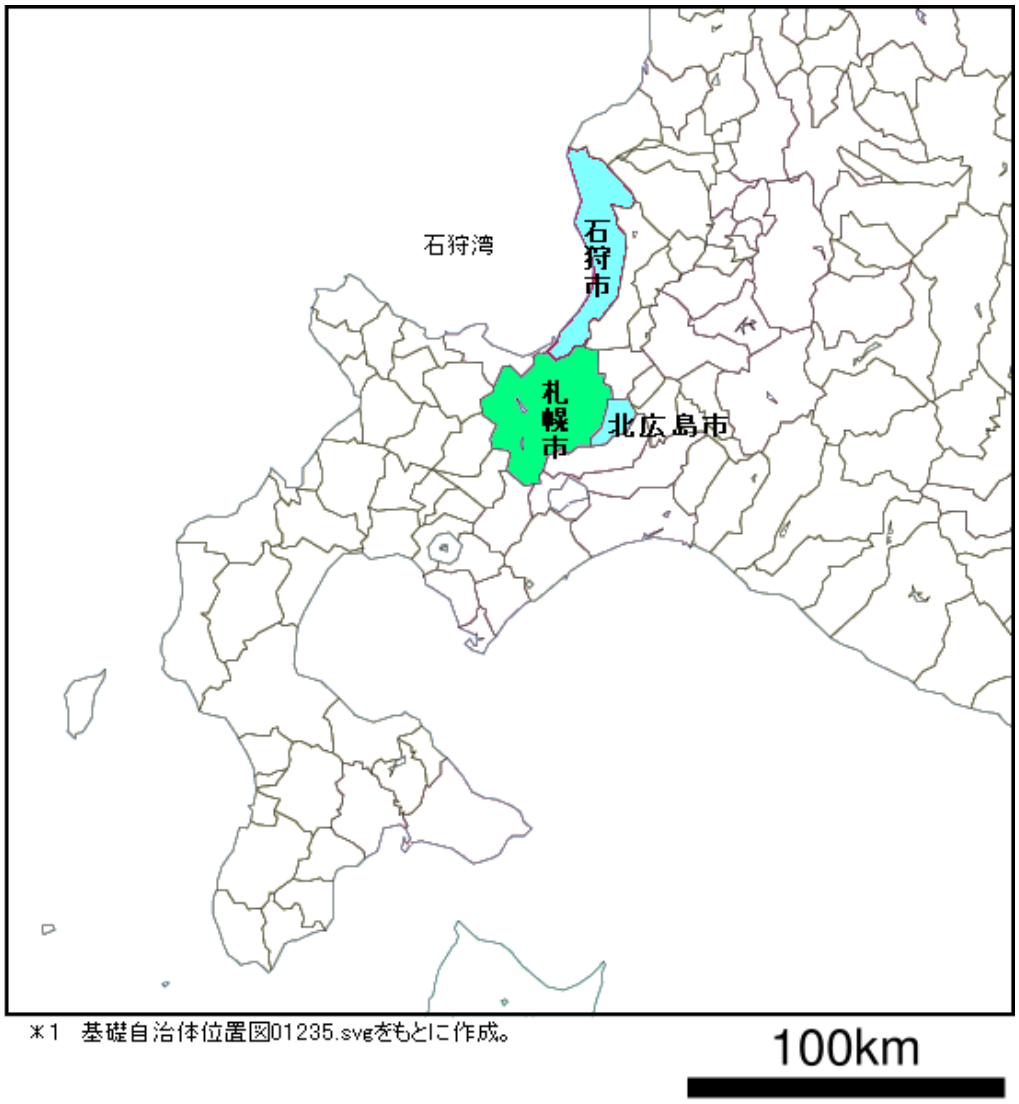
第 2 章　調査対象都市と図書館の概要

この章では，利用者調査の対象とした北海道札幌市，石狩市，および北広島市の人口や交通環境の概要と，札幌市の図書館，石狩市民図書館，北広島市図書館の沿革と現状についてまとめる。次いで，次章以降の各種利用者調査の骨格と調査方法の概要について述べる。

2.1　札幌市・石狩市・北広島市の概要

図 2-1 は，調査対象都市（札幌市，石狩市，北広島市）の位置を示したものである。以下，順に概要を述べる。

＜図 2－1　調査対象都市位置図＞



＊1　基礎自治体位置図01235.svgをもとに作成。

2.1.1　位置・地形，および人口

2.1.1.1　札幌市

札幌市は極東，東経 141 度 30 分（厚別区もみじ台南 7 丁目），極西，東経 140 度 59 分（南区定山渓・国有林），極南，北緯 42 度 46 分（南区定山渓・国有林），極北，北緯 43 度 11 分(北区篠路町拓北)に位置する日本最北の政令指定都市である。面積は 1,121.12km²，東西距離 42.30km，南北距離 45.40km で，総人口 1,881,218 人（住民基本台帳人口，2007 年 9 月 30 日），人口密度 1,680 人／km²の大都市である。大正 11 年（1922 年）8 月 1 日に市制施行以来，近隣市町村との合併・編入を重ね市域を拡大し，全国 5 番目の人口を有する北海道庁所在都市として現在に至っている。周辺には石狩市，江別市，北広島市，恵庭市，千歳市などのベッドタウンを擁して札幌都市圏を形成している。市の中心部には地下街が発達し，札幌駅前・大通周辺のショッピングエリアには近郊の都市からも人が集まる。その経済圏（道央圏）の人口は 340 万人に及んでいる。

札幌には現在 10 の行政区があり，道内の中都市並みの人口規模を有するためそれぞれの地域に 8 万冊規模の中規模図書館を設置すると共に，地域の特性を生かした個性あるまちづくりを行っている。各区の面積，世帯数と人口（2008 年 1 月 1 日現在）を表 2-1 に示し，調査対象地域となる北区・手稲区について述べる。

＜表２－１　区別の面積，人口･世帯数＞

（平成20年1月1日現在）

地域	施行年	面積(km²)	人口　*1			世帯数
			男	女	総数	
中央区	1972	46.42	94,095	116,512	210,607	114,677
北区	1972	63.48	131,393	144,421	275,814	125,490
東区	1972	57.13	122,566	132,287	254,853	116,795
白石区	1972	34.58	97,011	106,129	203,140	98,906
厚別区	1989	24.38	59,971	69,312	129,283	53,615
豊平区	1972	46.26	97,963	111,383	209,346	103,504
清田区	1997	59.79	54,465	60,312	114,777	42,379
南区	1972	657.23	70,533	79,808	150,341	65,172
西区	1972	74.93	97,598	111,374	208,972	93,584
手稲区	1989	56.92	66,018	72,731	138,749	54,219
全市		1,121.12	891,613	1,004,269	1,895,882	868,341

*1　人口･世帯数は「市民まちづくり局企画部統計課」による推計人口（平成17年10月実施の国勢調査ベース）である。

北区は札幌市の北部に位置し，札幌市の 10 区の中で 3 番目の広さ（面積 63.48 km²）を有し，東西に 14.3 km，南北に 13.7 km の広がりをもっている。人口は約 27 万 5 千人で，10 区の中で一番の規模となっている。北海道大学，藤女子大学，北海道武蔵女子短期大学のほか, あいの里地区には北海道教育大学などがあり文教地区としても発展している。

手稲区は人口の著しい増加に伴って，1989 年 11 月 6 日にそれまでの西区から分区し，現在の手稲区となった。札幌市の北西部に位置し，面積は 56.92 km²で東西に 10.8 km，南北に 9.4 km の広がりをもっており, 10 区の中で 6 番目の広さを有している。人口は 1995 年 12 月に 13 万人を突破し, 2008 年 1 月 1 日現在 138,749 人, 54,219 世帯となっている。

2.1.1.2　石狩市

石狩市は石狩支庁では唯一の海に面した自治体で西側一帯は石狩湾に接し，南側は札幌市の北側（札幌市北区，手稲区）に隣接している市である。1950 年代後半の札幌市の人口急増を背景に大規模団地として注目されるようになり，現在の花川地区が「新札幌団地」として 1964 年に造成されて以降，大規模住宅地としての開発が進められたことにより人口増加が進んだ。それに伴い，1996 年 9 月 1 日に市制を施行している。2005 年 10 月 1 日から旧厚田村と旧浜益村とを編入合併したことにより北へ縦長に延長され，面積は合併前の 117.86km²（北広島市と同規模）から 721.86km²へと拡大し，東西に 28.88 km，南北に 67.04 km と南北に長い市域を有している。総人口は 61,413 人（住民基本台帳人口，2007 年 9 月 30 日）で，人口密度 85.1 人／km²となったが，合併前の旧石狩市に人口は集中している。

2.1.1.3　北広島市

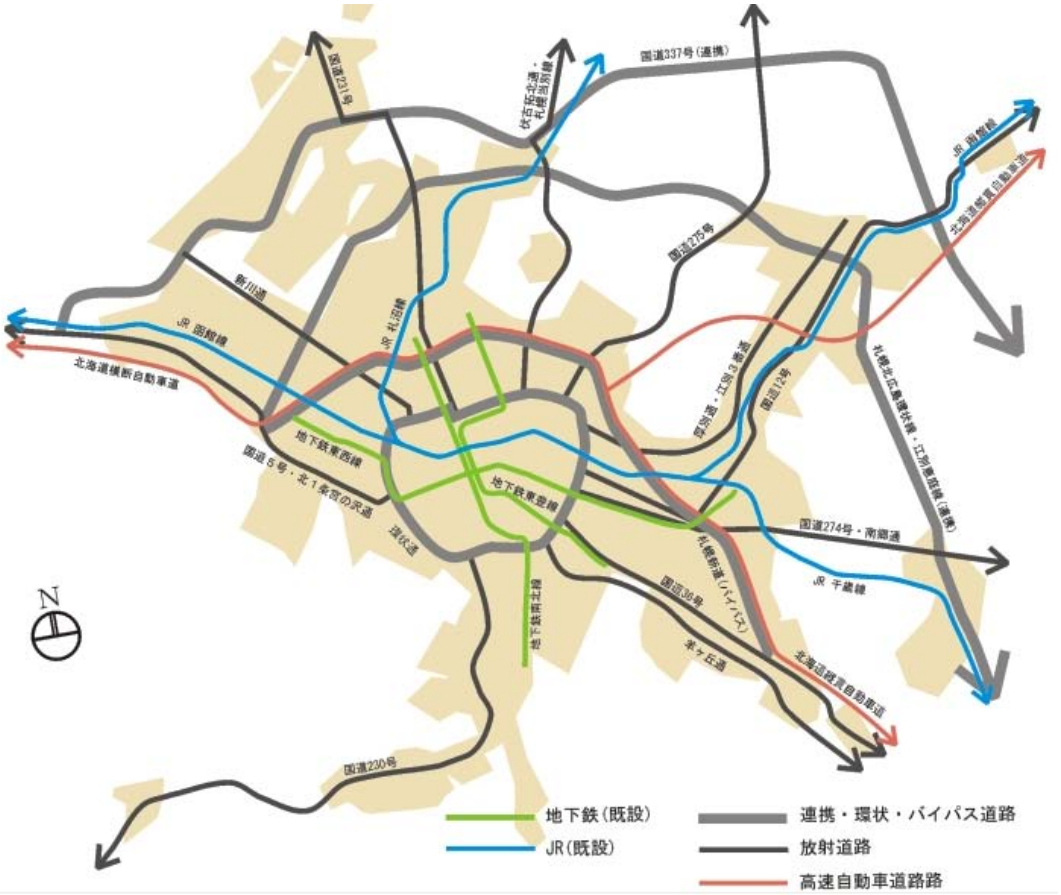
北広島市は北海道石狩支庁管内にあり，石狩平野のほぼ中央に位置する。札幌市の南東の厚別区，清田区と隣接し，面積は 118.54km²，周囲は約 52.50km で，総人口 61,166 人（住民基本台帳人口，2007 年 9 月 30 日），人口密度 516 人／km²の小都市である。農村として発展してきたが，ニュータウン（北広島団地）の開発が始まった 1970 年以降，札幌都市圏のベッドタウンとして人口が増加，石狩市同様 1996 年 9 月 1 日に市制を施行している。市街地は分散しており，東部地区（約 15,700 人），北広島団地地区（約 17,700 人），西の里地区（約 6,700 人），大曲地区（約 17,000 人），西部地区（約 4,000 人）の 5 地区からなる。東部市街地は石狩平野にあるが，札幌市に隣接する西側一帯は台地になっている。

2.1.2　都市交通状況，および自家用車保有状況

2.1.2.1　札幌市

札幌市にはJR函館線，札沼線（学園都市線），千歳線が乗り入れ，北海道の中心都市としての機能を果たしている。交通体系は地下鉄南北線，東西線，東豊線を基軸とする大量公共交通機関とバスネットワークにより構成される公共交通ネットワーク，そして2連携1環状1バイパス11放射道路を骨格とした幹線道路網により構成される道路ネットワークにより形成されている(図2-2)。かつて市街地を中心に運行していた札幌市営バスは,1990年代後半から民営バスへ路線の移管を開始して縮小を始め,2003年度で事業を廃止している。現在6社のバス（北海道中央バス，じょうてつバス，ジェイ・アール北海道バス，ばんけい観光バス，夕鉄バス，道南バス）が運行している。

＜図２－２　札幌市交通ネットワーク体系図＞



出典：札幌市総合交通計画部「さっぽろの交通」
＜http://www.city.sapporo.jp/sogokotsu/kotsutaikei/index.html＞

表 2-2 は，一世帯あたりの自家用車保有台数をまとめたものである。札幌市 0.86 台，石狩市 1.28 台，北広島市 1.21 台となっている。

表 2-3 は，札幌市の自家用車保有台数の経年変化を示したものである。1975 年には一世帯当たり自家用車台数は 0.42 台であったが，年々増加し，2000 年には 0.92 台に達している。札幌市の道路ネットワークの整備率は 92.0%に達しており（2005 年度年度末現在），自家用車利用にも支障をきたさない水準といえる。

表 2-4 は，札幌市の区別の自家用車保有台数（2007 年 3 月 31 日現在）を示したものである。札幌市中心部から離れた郊外地区では一世帯当たり自家用車台数が高くなっており（清田区 0.99，手稲区 0.99），公共交通機関の発達した大都市といえども自家用車への依存度の高さを窺わせている。

＜表2－2　自家用車保有台数＞

（単位：自動車：台，人口：人）

	札幌市	石狩市	北広島市	北海道全体	全国
普通乗用車	260,587	9,304	8,249	781,153	16,671,316
小型乗用車	401,022	15,522	15,292	1,335,086	25,284,353
軽自動車（乗用車）	132,703	7,442	6,783	600,539	15,280,951
乗用自家用自動車台数（合計）＊2	794,312	32,268	30,324	2,716,778	57,236,620
人口　*3	1,874,410	61,328	61,072	5,600,705	127,053,471
一人当たり乗用自動車台数	0.42	0.53	0.50	0.49	0.45
世帯数	920,537	25,245	25,053	2,599,764	51,713,048
一世帯当たり乗用自動車台数	0.86	1.28	1.21	1.05	1.11

*1 「資料：北海道運輸局自動車保有車両数関係統計」（平成19年度3月31日現在）より作成。
*2 乗用自家用自動車台数は、普通車＋小型車＋軽四輪車の合計を示す。
*3 人口及び世帯数は、「全国人口・世帯数表」（平成19年3月31日現在：総務省自治行政局）による。

＜表2－3　札幌市自家用車保有台数経年変化＞

（単位：自動車：台，人口：人）

	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年
普通乗用車	2,666	5,669	8,332	13,958	88,229	193,542	246,087
小型乗用車	156,150	267,833	357,710	457,697	494,849	462,244	425,832
軽自動車（乗用車）	16,399	9,680	7,503	9,211	30,944	63,177	101,147
乗用自家用自動車台数（合計）　＊	175,215	283,182	373,545	480,866	614,022	718,963	773,066
人口　*3	1,240,613	1,401,757	1,542,979	1,671,742	1,757,025	1,822,368	1,880,863
一人当たり乗用自動車台数	0.14	0.20	0.24	0.29	0.35	0.39	0.41
世帯数	419,475	508,823	566,287	646,647	718,473	781,948	837,367
一世帯当たり乗用自動車台数	0.42	0.56	0.66	0.74	0.85	0.92	0.92

*1 北海道自動車統計資料（各年3月31日現在）により作成。
*2 乗用自家用自動車台数は、普通車＋小型車＋軽四輪車の合計を示す。
*3 人口及び世帯数は、札幌市市民まちづくり局企画部統計課（各年10月1日現在）の数値である。

＜表2－4　札幌市区別自家用車保有台数＞

（単位：自動車：台，人口：人）

	中央区	北区	東区	白石区	厚別区	豊平区	清田区	南区	西区	手稲区
普通乗用車	32,995	34,846	36,409	29,517	16,374	30,244	14,349	20,433	27,937	17,482
小型乗用車	43,045	56,282	56,582	47,256	26,613	45,665	21,321	31,767	43,307	29,173
軽自動車（乗用車）	8,005	21,452	19,952	16,496	8,271	12,077	10,095	10,981	12,772	12,602
乗用自家用自動車台数（合計）＊2	84,045	112,580	112,943	93,269	51,258	87,986	45,765	63,181	84,016	59,257
人口　＊3	199,126	271,742	252,586	202,795	129,872	207,365	113,252	150,055	209,312	138,305
一人当たり乗用自動車台数	0.42	0.41	0.45	0.46	0.39	0.42	0.40	0.42	0.40	0.43
世帯数	113,167	131,319	125,875	106,758	57,428	108,917	46,150	69,990	101,038	59,895
一世帯当たり乗用自動車台数	0.74	0.86	0.90	0.87	0.89	0.81	0.99	0.90	0.83	0.99

＊1 「資料：北海道運輸局自動車保有車両数関係統計」（平成19年度3月31日現在）より作成。
表2-2より区が不明の12台を除く。
＊2 乗用自家用自動車台数は、普通車＋小型車＋軽四輪車の合計を示す。
＊3 人口及び世帯数は、「全国人口・世帯数表」（平成19年3月31日現在：総務省自治行政局）による。

2.1.2.2　石狩市

石狩市には鉄道がなく，隣接する札幌市内の主要駅（JR 新琴似駅・札幌市営地下鉄麻生駅）が最寄り駅となっている。公共交通機関は路線バスのみで，札幌駅バスターミナルから約 50 分，札幌市営地下鉄麻生駅（南北線終点）から約 30 分という交通環境である。それに伴い，道路網は国道 231 号，国道 337 号，道道 44 号（石狩手稲線）などが整備されており，自家用車を利用してのアクセスは容易である。交通手段を自家用車に依存していることの裏付けとして,一世帯当たりの自家用車保有台数が 1.28 台と 3 市の中で最も高い数値を示している（表 2-2)。石狩町当時の 1995 年に交通に関する建設調査が行われ，札幌市営地下鉄麻生駅，または東豊線栄町駅からの石狩モノレール案，JR 函館本線発寒駅からの鉄道案の 3 案が検討され，建設費および開業後の収益試算がなされたが，具体化の目途は立っていない。現在，北海道中央バスが市内全域で運転しており，札幌市内から石狩市役所，石狩湾新港，厚田・浜益地区を結ぶ定期路線バスを運行中である。

2.1.2.3　北広島市

北広島市には JR 千歳線が通っており，JR 札幌駅から快速で 16 分，千歳空港から 20 分である。道路網も比較的良く整備されており，国道 36 号線，国道 274 号線，道道江別恵庭線などの主要幹線道路，道道栗山北広島線，市道輪厚中の沢線，市道広島輪厚線などの幹線道路があり，高速交通ネットワークの基軸となる道央自動車道のインターチェンジもある。自家用車保有台数は年々増加しており，平成 19 年 3 月末現在で世帯当たり 1.21 台と札幌市 0.86 台，北海道全体 1.05 台，全国平均 1.11 台に比べて高い数値を示している（表 2-2)。一方，路線バスの運行状況は大曲地区・西部地区方面と北広島駅方面とを結ぶ便が少なく，また上記の 5 地区を連携するバス便数も少ない状況である。これに伴い，通勤・通学の際に利用する交通手段は自家用車への依存率が高くなっている（平成 12 年国勢調査：自家用車 54.7%，電車 21.3%，バス 16.4%，その他 7.6%)。

2.2　札幌市・石狩市・北広島市の図書館の沿革と現状

2.2.1　札幌市の図書館

札幌市の図書館は 1899（明治 32）年，当時の北海道教育会が附属図書館を開設したことに始まる。昭和 25 年の図書館法の施行に伴い，同年 5 月に市立札幌図書館条例を公布し，札幌市時計台内に市立札幌図書館を開館した。その後，1967（昭和 42）年に札幌市中央区北 2 条西 12 丁目に新館を開設し，時計台から移転した。

1976（昭和 51）年，「新札幌市長期総合計画」の中に各区に 1 館の図書館を設置することが盛り込まれたことにより，1979（昭和 54）年 7 月，旧白石保健所の建物を転用し，最初の地区図書館として菊水図書館（白石区）を，また同年 10 月には旧琴似高等学校校舎を利用して山の手図書館（西区）を開館した。

こうした背景の中で，中枢的な役割を担う館という意味合いの元に，1979（昭和 54）年に市立札幌図書館を札幌市中央図書館と改称し，1981（昭和 56）年には北区に新琴似図書館，1982（昭和 57）年には豊平区に西岡図書館，1983(昭和 58)年には南区に澄川図書館，1984（昭和 59）年には東区に元町図書館を開設し，上記の長期総合計画に沿った 1 区 1 図書館構想の実現に向けた取り組みを推進してきた。

その後の人口増加に伴い，白石区と西区の分区が行われたことにより 1987（昭和 62）年，厚別区に厚別図書館，手稲区に曙図書館を開設している。

また，1991（平成 3）年には，中央区南 22 条西 13 丁目（旧北海道教育大学札幌分校跡地）に埋蔵文化センターと併設の形で中央図書館を新築移転すると共に，1997（平成 9）年 3 月には菊水図書館を東札幌図書館として新築，同年 11 月には清田区の分区にあわせ清田図書館を開設し，現在 10 館体制となっている。

さらに，市域全体にわたる図書館サービス機能を補完する施設として，1974（昭和 49）年の北区民センター図書室の開設を皮切りに逐次各区の区民センター（中央区，東区，白石区，豊平区，南区，西区）内に図書室を開設し 7 室とすると共に，各区の地区センター内にも図書室を開設することとして 1989（平成元）年に藤野地区センター図書室を設置して以来，現在までに清田区を除く 9 区に 20 室を開設している。

1950（昭和 25）年に，時計台内に蔵書 1 万 3 千冊で開設された札幌市の図書館は，現在，約 70 万冊の蔵書を所蔵する中央図書館をはじめ，約 8 万冊規模の地区図書館 9 館，約 3 万冊規模の区民センター図書室 7 室と同規模の地区センター図書室 20 室，図書コーナー6 ヶ所の計 43 施設を配置し，総蔵書数約 231 万 4 千冊となっている。

蔵書約 2 千冊の図書コーナーは図書室ができるまでの暫定的施設と捉え図書館施設から除外したとしても，1 大規模館＋9 中規模館＋27 小規模館で 3 段階の段階構成論的施設配置が完成しているといえる。

なお，下記の略年表中の記号は，◎：中央図書館（本館），○：地区図書館（地区分館），▲：区民センター図書室（区役所内図書室），△：地区センター図書室（地区図書室）をそれぞれ示している。

・1899（明治 32）年　北海道教育会が附属図書館を札幌区大通西 4 丁目に開設。
・1950（昭和 25）年　札幌市時計台内に市立札幌図書館を開設。
・1957（昭和 32）年　移動図書館車「ほくと号」運行開始。（団体貸出）
・1965（昭和 40）年　移動図書館車「エルム号」増車運行開始。
・1967（昭和 42）年　時計台から札幌市北 2 条西 12 丁目に移転して，◎札幌市立図書館を新館オープン。
・1974（昭和 49）年　▲北区民センター図書室，▲西区民センター図書室，▲白石区民センター図書室開設。
・1977（昭和 52）年　▲東区民センター図書室開設。
・1978（昭和 53）年　▲豊平区民センター図書室開設。
・1979（昭和 54）年　子ども図書館「童話の家」開設。○菊水図書館開設。
「札幌市立図書館」を「札幌市中央図書館」と改称。
○山の手図書館，▲南区民センター図書室開設。
・1981（昭和 56）年　○新琴似図書館，▲中央区民センター図書室開設。
・1982（昭和 57）年　○西岡図書館開設。
6 月に中央図書館，地区図書館の貸出冊数を 4 冊に増冊。
・1983（昭和 58）年　○澄川図書館開設。コンピュータの導入始まる。
・1984（昭和 59）年　○元町図書館開設。
・1985（昭和 60）年　各区民センター図書室の貸出冊数を 4 冊に増冊。
・1987（昭和 62）年　○厚別図書館，○曙図書館開設。
・1989（平成 元）年　△藤野地区センター図書室開設。
・1990（平成 2 ）年　△ふしこ地区センター図書室開設。
・1991（平成 3 ）年　◎中央図書館を中央区南 22 条西 13 丁目に移転，新館開設。
△新発寒地区センター図書室開設。
中央図書館，地区図書館，区民センター図書室との間にコンピュータ・オンライン・システムを完成させる。
・1992（平成 4 ）年　△西野地区センター図書室開設。
・1993（平成 5 ）年　○山の手図書館改築オープン。
△厚別西地区センター図書室開設。
・1994（平成 6 ）年　△発寒地区センター図書室，△栄地区センター図書室，
△厚別南地区センター図書室開設。
・1995（平成 7 ）年　△新琴似・新川地区センター図書室開設。

・1996（平成８ ）年　△もいわ地区センター図書室，△星置地区センター図書室，△白石東地区センター図書室開設。

・1997（平成９ ）年　菊水図書館を移転改築して，○東札幌図書館をオープン。○清田図書館開設。

・1998（平成 10）年　△拓北・あいの里地区センター図書室開設。施設の充実に伴い，移動図書館・貸出文庫を廃止する。

・1999（平成 11）年　△苗穂・本町地区センター図書室開設。７月に開館時間，開館日を変更。

・2000（平成 12）年　△菊水元町地区センター図書室，△東月寒地区センター図書室開設。

・2002（平成 14）年　△北白石地区センター図書室開設。図書館電算システムを更新，12 月からホームページにて蔵書検索機能を開始する。

・2003（平成 15）年　△旭山公園通地区センター図書室開設。

・2004（平成 16）年　△太平百合が原地区センター図書室開設。

・2005（平成 17）年　札幌市図書館協議会を設置。

・2006（平成 18）年　△はちけん地区センター図書室開設。開館時間の延長，開館日の拡大を行う。貸出冊数を 4 冊から 10 冊までに増冊。8 月より中央図書館大通カウンターを地下鉄大通駅コンコースの札幌市交通案内センター内に開設。地区センター図書室に指定管理者制度導入。

表 2-5 は調査時点(2006 年 6 月)の札幌市の図書館施設を一覧にまとめたものであり，図 2-3 は札幌市の図書館施設 37 箇所の位置を示したものである。図中の番号および記号等は表 2-5 のものと対応しており，①が中央図書館（本館），②～⑩が各区の地区図書館，A～G が区民センター図書室，ア～トが地区センター図書室である。

＜表２－５　札幌市図書館設置状況（2005年度）＞

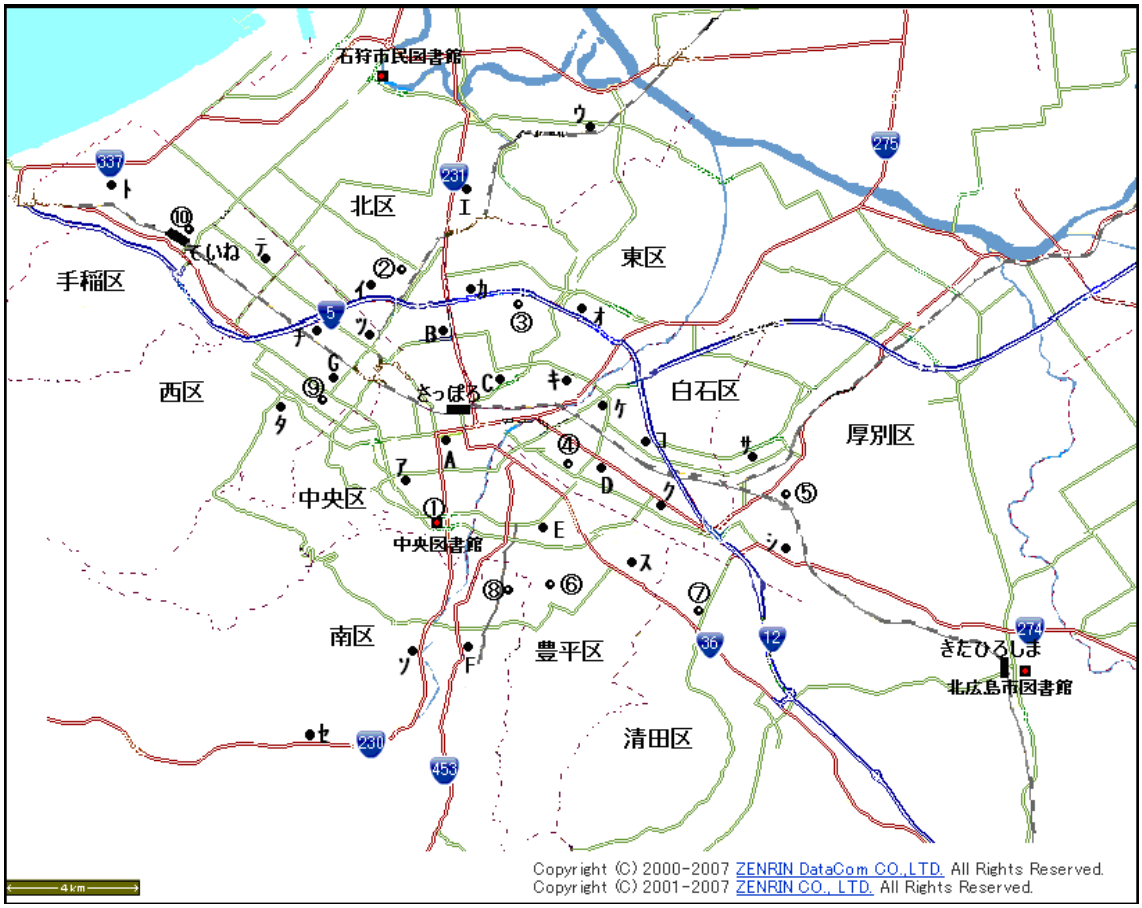
区	地区図書館名	区民センター図書室 地区センター図書室 （地区センと略記）	人口 （人）	延べ床 面積 （㎡）	蔵書冊数 （冊）	職員数 （人）	登録者数 （人）	登録率 *2 （%）	一日平 均貸出 （冊）	一日平 均入館 （人）	OPAC （台）	駐車場　*3 （台）
中央区	①中央図書館			9,049.00	666,046	67	161,286		3,096	1,528	14	82（共用）
	（本館）	⑪中央区民センター図書室		249.61	27,475	4	8,668		259		1	96（共用）
		18.旭山公園通地区セン		200.00	24,836	3	1,853		459			18（専用）
		（小計）	199,610	9,498.61	718,357	74	171,807		3,814		15	196
北区	②新琴似図書館			1,177.03	72,587	9	40,785		886	397	2	25（共用）
		⑫北区民センター図書室		212.00	28,298	4	10,214		278		1	99（共用）
		19.新琴似・新川地区セン		213.00	32,261	3	5,649		318			28（専用）
		20.拓北・あいの里地区セン		207.00	30,851	3	10,141		416			21（専用）
		21.太平百合が原地区セン		200.00	21,191	3	1,501		301			27（専用）
		（小計）	270,961	2,009.03	185,188	22	68,290	25.2	2,199		3	200
東区	③元町図書館			1,205.44	73,245	8	38,180		848	370	2	16（専用）
		⑬東区民センター図書室		240.60	30,167	4	11,414		329		1	81（共用）
		22.ふしこ地区セン		252.30	43,345	3	9,185		449			19（専用）
		23.栄地区セン		220.00	33,495	3	7,641		354			15（専用）
		24.苗穂・本町地区セン		207.20	28,187	3	5,195		259			20（専用）
		（小計）	252,829	2,125.54	208,439	21	71,615	28.3	2,239		3	151
白石区	④東札幌図書館			1,202.20	80,110	8	30,396		758	342	2	15（専用）
		⑭白石区民センター図書室		230.40	29,476	4	11,816		353		1	200（共用）
		25.白石東地区セン		215.00	30,608	3	8,315		342			18（専用）
		26.菊水元町地区セン		210.30	27,687	3	4,411		246			19（専用）
		27.北白石地区セン		199.40	26,146	3	3,116		312			27（専用）
		（小計）	200,468	2,057.30	194,027	21	58,054	29.0	2,011		3	279
厚別区	⑤厚別図書館			1,159.82	80,122	8	49,175		761	375	2	35（共用）
		28.厚別西地区セン		220.00	34,829	3	5,706		346			19（専用）
		29.厚別南地区セン		256.00	33,951	3	388		196			15（専用）
		（小計）	129,402	1,635.82	148,902	14	55,269	42.7	1,303		2	69
豊平区	⑥西岡図書館			1,514.09	73,907	8	24,583		630	280	2	22（専用）
		⑮豊平区民センター図書室		269.80	30,343	4	7,743		272		1	100（共用）
		30.東月寒地区セン		208.00	25,670	3	3,631		276			20（専用）
		（小計）	208,196	1,991.89	129,920	15	35,957	17.3	1,178		3	142
清田区	⑦清田図書館		112,627	1,298.17	80,429	8	31,844	28.3	928	402	2	139（共用）
南区	⑧澄川図書館			1,199.68	78,715	8	19,243		589	271	2	10（専用）
		⑯南区民センター図書室		314.85	35,118	4	12,933		532		1	71（共用）
		31.藤野地区セン		251.73	36,944	3	2,031		254			15（専用）
		32.もいわ地区セン		213.30	30,898	3	6,154		227			27（専用）
		（小計）	152,663	1,979.56	181,675	18	40,361	26.4	1,602		3	123
西区	⑨山の手図書館			1,188.05	85,218	8	40,077		932	407	2	22（専用）
		⑰西区民センター図書室		171.00	27,189	4	11,182		396		1	106（共用）
		33.西野地区セン		250.00	36,464	3	6,426		378			35（専用）
		34.はっさむ地区セン		222.00	28,655	3	1,681		341			11（専用）
		35.はちけん地区セン		215.67	18,764	3						20（専用）
			205,344	2,046.72	196,290	21	59,366	28.9	2,047		3	194
手稲区	⑩曙図書館			1,200.20	80,706	8	36,002		928	405	2	20（専用）
		36.新発寒地区セン		256.50	33,310	3	2,050		274			15（専用）
		37.星置地区セン		216.80	30,855	3	7,897		342			16（専用）
		（小計）	137,209	1,673.50	144,871	14	45,949	33.5	1,544		2	51
合　計　*1			1,869,309	26,316.14	2,188,098	228	638,512	34.2	18,865		39	1,544

*1　人口は、札幌市市民まちづくり局企画部統計課資料（平成17年4月1日現在）による。
その他、図書館の数値は、札幌の図書館2005（札幌市中央図書館平成17年7月1日発行）による。但し、施設付属の図書コーナーは除く。
なお、「35.はちけん地区センター図書室」は、2006年4月1日に開設されたため利用統計は不明である。

*2　各区の登録率は、それぞれの区で登録手続きをした者の率を示す。
なお、中央区においては市域全体を対象とする本館が存在するため区の登録率の表示は行っていない。

*3　駐車場台数は、区民センター図書室は各区役所と共用。

＜図２－３　札幌市の図書館施設設置位置図＞



2.2.2　石狩市の図書館

平成 12 年 6 月 3 日にオープンした石狩市民図書館は，石狩市役所・総合保険福祉センター・郵便局・小中学校などに隣接する単独施設である。

本館竣工後，花川北分館，花川南分館，八幡分館の３つの分館で運営してきたが，平成 17 年 10 月 1 日に厚田村，浜益村と市町村合併して以来，厚田分館，浜益分館を加え，現在，本館のほか５つの分館で運営している。各館の蔵書冊数は，本館 200,511 冊，花川北分館 12,493 冊，花川南分館 11,204 冊，八幡分館 6,304 冊，厚田分館 5,436 冊，浜益分館 8,217 冊（平成 19 年 3 月 31 日現在）である。

図 2-4 に調査時点（市町村合併前）の図書館施設配置図を示す。

・1987（昭和 62）年	花川北コミュニティセンター内に花川北分館オープン （延べ床面積 119.7 ㎡）
・1988（昭和 63）年	花川南コミュニティセンター内に花川南分館オープン （延べ床面積 92.3 ㎡）
・1992（平成 4 ）年	八幡コミュニティセンター内に八幡分館オープン （延べ床面積 38.0 ㎡） 市制記念事業として，図書館事業計画の作業を開始。
・1996（平成 8 ）年	9 月 1 日に市制を施行し，石狩市となる。
・1997（平成 9 ）年	石狩市図書館基本計画を策定。
・2000（平成 12）年	6 月 3 日に石狩市役所近くに石狩市民図書館本館をオープン （延べ床面積 3,826 ㎡）
・2002（平成 14）年	3 月 12 日に入館者が 50 万人を超える。
・2003（平成 15）年	10 月 28 日に入館者が 100 万人を超える。
・2005（平成 17）年	10 月 1 日，石狩市に厚田村，浜益村を合併・編入。 厚田総合センター内の旧図書室（昭和 57 年建築，45.0 ㎡）を厚田分館，浜益コミュニティセンター内の旧分館（平成元年建築，136.53 ㎡）を浜益分館として編入した。

＜図２－４　石狩市の図書館施設設置位置図＞
小樽市
道道小樽石狩線
八幡分館
国道231号
国道337号
国道231号
石狩川
道道石狩手稲線
茨戸川
市役所
石狩市民図書館
花川北分館
国道337号
（道央新道）
花川南分館
花川通
石狩南高校
藤女子大
石狩高校
緑苑台ニュータウン
札幌市
茨戸川
至札幌市
当別町
(C)ZENRIN DataCom CO.,LTD.(C)ZENRIN CO.,LTD.

2.2.3　北広島市の図書館

北広島市図書館はJR北広島駅の目前に建つ，芸術文化ホールとの複合建築型図書館である。JR駅から徒歩1分という本館の立地条件は全国的にもめずらしい。東部地区に本館竣工後，団地住民センター図書室(北広島団地地区)，大曲会館図書室（大曲地区），西の里図書室（西の里地区），農民研修センター図書室（西部地区，輪厚），および11のBMステーションで運営してきたが，2006年からは大曲図書室を分館（ふれあい学習センターの2階に約220㎡，蔵書約25,000冊）に規模拡大すると共に，農民研修センター図書室を廃止し，北広島市立西部小学校に分室（小学校の中にある約340㎡の公共スペース，蔵書約15,000冊）を設け，本館＋1分館＋3分室＋11BMで運営している。各館の蔵書冊数は，本館246,659冊，大曲分館21,693冊，団地住民センター図書室8,880冊，西の里図書室10,277冊，農民研修センター図書室13,348冊（平成19年3月31日現在）である。

図2-5に調査時点（本館＋4分室）の図書館施設配置図を示す。

・1950（昭和25）年　旧広島役場内で「広島文庫」始まる。
・1974（昭和49）年　中央公民館図書室設置。
・1975（昭和50）年　農民研修センターに図書室設置。
・1976（昭和51）年　西の里公民館に図書室設置。
・1979（昭和54）年　大曲会館に図書室設置。
・1980（昭和55）年　北広島団地住民センターに図書室設置。
・1986（昭和61）年　中央公民館図書室を拡張し，2倍の広さにする。
・1988（昭和63）年　移動図書館車「あおぞら号」の運行が始まる。
・1991（平成3 ）年　文化施設建設準備室設置。
・1996（平成8 ）年　9月1日に市制を施行し，北広島市となる。
・1998（平成10）年　10月1日に図書館・芸術文化ホール同時オープン。
・2000（平成12）年　4月に入館者が50万人を超える。
・2001（平成13）年　11月に入館者が100万人を超える。
・2002（平成14）年　児童図書学校巡回事業「平成本プロジェクト」を開始。
　中央公民館図書室閉室。
・2004（平成16）年　西の里公民館図書室を拡張し，2倍の広さにする。
・2006（平成18）年　2月12日に北広島市立西部小学校内に西部小分室をオープン
　4月9日に大曲分館をオープン。
　6月に学校図書センターを設置。
・2007（平成19）年　窓口等業務委託開始（委託先：図書館流通センター）。

＜図２－５　北広島市の図書館施設設置位置図＞

(C)ZENRIN DataCom CO.,LTD.(C)ZENRIN CO.,LTD.

2.3　利用者調査の概要

2.3.1　調査の構成

図書館の利用者調査には，主に来館者調査と登録者調査が用いられる。

来館者調査は，利用者に直接手渡し回収することから高い回収率が期待でき，利用の詳細について問うことが可能である。しかし，日を限った断面調査であることから結果に常連や図書館利用に熱心な人の意見や利用実態が反映されやすいという欠点がある。また，複数の図書館を設置している自治体においては，調査技術上の問題として市内全域を同時に，かつ包括的に調査することは難しく，また利用者数の少ない分館・分室等では多くの回収数を期待できないことから本館における調査となりがちである。

一方，登録者調査は，地域全体に亘っての調査が可能であり，低頻度利用者も含む利用者全員の平均像を得ることができる。しかし，個人情報保護のため登録者データが図書館部外者には使えないこと，登録者が多数で，かつ市域の広い範囲に分散しているために抽出によるサンプリング調査になること，そのため郵送に頼らざるを得ないが，費用がかかるわりに高い回収率をあげにくいことが欠点である。

さらに，今回の石狩市民図書館登録者調査時点では，行政機関の保有する個人情報の保護に関する法律（平成十五年五月三十日法律第五十八号）が施行されており，登録者の氏名と住所を調査のために利用するにあたって，「石狩市情報公開・個人情報保護審査会」による許可を得なければならなかった。個人情報保護法に対する解釈がやや拡大されている傾向にあり，今後この種の調査は行いにくい状況となったといえよう。

2005（平成 17）年度の図書館登録者は札幌市 39.2%（市内登録者 738,868 人÷平成 18 年度末人口 1,882,589 人×100），石狩市 33.2%（市内登録者 20,295 人÷平成 18 年度末人口 61,161 人×100），北広島市 40.4%（市内登録者 24,530 人÷平成 18 年度末人口 60,698 人×100）であり，これらの都市の値は全国的にみれば水準以上といえる[1)]。しかし，住民のおよそ 3 分の 2 は図書館登録者ではなく，図書館と無関係に生活している。一人でも多くの市民を登録者として獲得するための図書館サービスのあり方を考究するためには，非利用者をも対象として含めた包括的な調査が必要である。

図書館を利用していない人を含む市民を対象とした調査としては，住民票等をもとにしてのサンプリングによる住民調査があるが，近年は個人情報保護の観点から住民基本台帳の閲覧の制限が全国的に広がっており，学術調査を理由に請求する場合でも閲覧日や人数の制限があったり，閲覧手数料として住民 1 人の転記につき 100～200 円徴収されるなど時間や費用面で現実的には実施困難といえる。しかし，住民調査は利用者と非利用者の相違がどこにあるのか，何が図書館利用の妨げになっているのかを考究するには欠かせない調査であることから，行政当局の他の調査に図書館に関する調査項目あるいは調査票を併

せて掲載してもらうのが最良の方法である。

本研究では，以上の調査の特徴を踏まえて，2002 年から 2008 年の間に以下の 6 種類の調査を実施した。＜＞内は分析に使用した章を示す。

1）来館者調査

①北広島市図書館本館（2002 年 11 月）：資料 1 ..... ＜7 章＞

②石狩市民図書館本館（2005 年 6 月）：資料 2 ..... ＜7 章＞

2）登録者調査

①北広島市図書館（2003 年 6 月）：資料 3 ..... ＜6 章，7 章＞

②石狩市民図書館（2006 年 6 月）：資料 4 ..... ＜4 章，6 章，7 章＞

3）住民調査

①北広島市全域（2003 年 6 月）：資料 5 ..... ＜3 章＞

市政モニターアンケート調査に調査票を掲載してもらう形で実施。

②札幌市北区新琴似地区（2008 年 2 月）：資料 6 ..... ＜5 章＞

日本郵便の配達地域指定郵便を利用して，札幌市北区新琴似地区のある住区ブロックに居住する全世帯に調査票を郵送。

具体的には各章で詳細に述べているので，ここではそれぞれの調査の主な目的と調査の概要，質問項目の構成について列記する。なお，資料としてアンケート調査票を巻末に掲載した（資料 1～資料 6）。

2.3.2 来館者調査

来館者調査は，北広島市図書館本館と石狩市民図書館本館においてそれぞれ平日と休日の 2 日間に亘って実施した。

来館者調査の主な目的は，来館者の属性等の特性の把握，来館者がどのような頻度・目的で訪れ，どのサービスを利用しているか，またどの図書館施設を利用し，どの程度の時間滞在しているかをみることにある。すなわち，本研究では調査時に限った利用状況を尋ねることに主眼を置き，利用者の平日と休日での利用実態の違いを把握すると共に，本館の立地位置の異なる両館での利用実態の違いを比較することを目的としている（7 章）。

調査は，北広島市においては 2002 年 11 月 12（火曜日）と同 11 月 23 日（土曜日，祝日：勤労感謝の日），石狩市民図書館においては 2005 年 6 月 16 日（木曜日）と同 6 月 19 日（日曜日）に開館時から閉館時まで終日全来館者を対象として実施した。本館の立地位置以外の条件（市人口，市面積，図書館規模など）がほぼ等しい 2 つの自治体の図書館に

おいて，新図書館開設 5 年後の比較的利用の安定した時期に調査を実施し，利用行動を比較検証した事例はこれまでにない。

質問項目は両館ともほぼ同様であるが（巻末：資料 1，資料 2），北広島市来館者調査の結果，自家用車での利用が主流であったため，石狩市民図書館来館者調査では自家用車の利用可能状況に関する項目を追加している。質問票は小学生以下の児童用と中学生以上の一般用とを作成し用いたが，本研究で分析の対象とした一般用（13 歳以上）の質問項目を以下に列記する（ゴシック文字部分は分析に用いた質問項目である）。

（両館共通項目）

1. **性，年齢，職業**
2. **自宅住所**（市内・市外別）
3. **自宅からの本館までの主観的距離**（11 段階距離別選択肢）
4. **来館過程（直前の場所）と交通手段・所要時間**
5. **来館の具体的目的**と目的の達成度
6. 利用した施設（館内利用行動）と利用した資料数
7. 主に利用している館
8. **本館を主に利用している理由と利用頻度，および本館に対する評価**
9. 本館に充実を望む資料の種類，および分野
10. いつもは分館を利用している人に，今日本館を利用した理由および利用頻度
11. 図書館システム全体への要望

（石狩市民図書館来館者調査時追加項目）

1. 自家用車の有無（利用可能状況）
2. 来館形態（平日・休日，一人・家族・友人）

2.3.3　登録者調査

登録者調査も北広島市図書館と石狩市民図書館において実施した。

個々の登録者調査の主な目的は，来館者調査が 1 日断面調査であったのに対して，市内に設置されている複数の図書館のいずれかを利用すると意思表示している者全体の属性等の特性と利用行動実態，利用館の選択要因などについて求めることにある。

石狩市民図書館登録者調査においては，登録者全体の 41.6%（2005 年度末現在）を札幌市北区・手稲区の住民で占めていることから複数図書館設置都市における広域利用可能地域での利用館選択がどのような要因にもとづき行われているのかを明らかにすることを主目的としている（4 章）。

また，本館（大規模館）が選択される要因は何であるかを明らかにすること（6 章），本館の立地位置の異なる両市の図書館を比較検討することにより，本館の立地位置が利用館選択に影響しているかどうかを明らかにすること（7 章）などが第 2 の目的である。

調査方法は両調査とも無記名郵送アンケート方式で，北広島市 10%，石狩市 6%の抽出率で両図書館の協力のもと本館への返信を依頼している。回収率は，北広島市が 45.7%，石狩市が 34.8%である。

質問項目は両館ともほぼ同様であるが（巻末：資料 3，資料 4），石狩市民図書館登録者調査では，北広島市図書館登録者調査で交通手段の主流が自家用車であったため自家用車利用の可能状況，および同伴の有無・状況，並びに利用館選択要因を探る目的で利用館を選択する際の重要度（5 段階評価）に関する項目を追加している。

（両館共通項目）

1. **性，年齢，職業，学歴，居住区（住所）**
2. 1 ヶ月間の読書冊数とその入手方法
3. 設置図書館の名前と場所の認知
4. **自宅から最も近い図書館とその図書館までの距離**
5. **主に利用している図書館とその図書館までの距離**
6. **主に利用している図書館の選択理由**
7. **どこから図書館へ行くか**
8. **利用交通手段，所要時間，利用目的と利用頻度**
9. **主に利用している図書館に対する評価**
10. 主に利用している図書館に充実を望む資料の種類，および分野
11. 新たなサービスについての意向（選択肢：有料でも，無料なら，不要）
12. いつもは分館を利用している人が，本館利用するときの理由

（石狩市民図書館来館者調査時追加項目）

1. **自家用車の有無（利用可能状況）**
2. **来館形態（平日・休日別，一人・家族・友人別）**
3. **利用館選択理由と重要度（5 段階評価）**

2.3.4　住民調査

住民調査は市域全体に亘るものと，一部地域を限定したものとの 2 種類行っている。

全市に亘って行った北広島市住民調査（2003 年 6 月）では，図書館利用者に加え，図書館非利用者をも対象者に含めることができることから，利用者・非利用者間の相違がどこにあるのか，何が図書館利用の最大の妨げになっているのか等の要因を分析することを目的としている（3 章)。前述したように，住民基本台帳の閲覧の制限が全国的に広がっており単独では実施困難であるため，北広島市における住民調査は図書館との協力のもと，2003 年 6 月に北広島市が実施した「市政モニターアンケート調査」に図書館利用に関する調査票を掲載してもらう形で実施した。すなわち，市当局が住民基本台帳から 20 歳以上の住民を無作為抽出し，600 世帯を対象に調査票を郵送している。回収数は 205 世帯で回収率 34.2%である。調査票は同居している家族全員に回答してもらう形式にして作成したことにより 542 人の回答サンプルが得られている（巻末 : 資料 5)。内訳は，現在図書館を利用している図書館利用者 44.2%，以前は利用していたが現在は利用していない者 11.5%，図書館を未だ利用したことがない者 44.2%の割合であった。

札幌市北区住民調査（2008年2月）は日本郵便の配達地域指定郵便（タウンプラスサービス）を利用して，札幌市北区新琴似地区のある住区ブロックに居住する全世帯に調査票を郵送したものである。世帯を最年少児の年齢で分類することにより，ライフステージの進行と図書館利用形態の推移，自家用車の利用可能性と利用館の選択など，家族を単位とした利用行動の実態について明らかにすることを目的としている（5章）。具体的な調査地域は，札幌市北区北39条西6丁目，7丁目，同北38条西7丁目，8丁目，および札幌市北区新琴似6条1丁目～同17丁目までの地区であり，この範囲に在住する全世帯を対象とした。地域内の住宅2,977世帯の全数に配布し，782世帯からの回答があったので回収率は26.3%である。調査票には，15歳以上の者に家族を代表しての回答を依頼するとともに，回答者本人も含め同居家族5人までの回答も併せて依頼したため，個人としては1,950人分の回答が得られている（巻末：資料6）。

それぞれの調査の質問項目を以下に列記する。

（北広島市住民調査：巻末資料 5）

1. **性，年齢，職業，通勤・通学先，学歴**
2. **図書館利用の有無**
3. **主利用館，利用頻度（利用者のみ）**
4. **非利用理由（非利用者のみ）**

（札幌市北区新琴似住民調査：巻末資料 6）

1. **家族人数**
2. **自家用車の台数**
3. **自家用車利用可能状況（平日・休日別）**
4. パソコンの有無，インターネット接続の有無
5. 石狩市民図書館の認知
6. **性，年齢，続柄**
7. 就業状態
8. 通勤通学の交通手段
9. 週休日（勤務の休日）
10. **自家用車の運転の可否**
11. **主利用館，利用頻度，利用目的**
12. **図書館に行く曜日**
13. **交通手段**
14. **一緒に行く人（一人で，家族と，友人と）**

註・参考文献

1）日本図書館協会図書館年鑑編集委員会編『図書館年鑑 2006』（日本図書館協会，2006.7）によると，図書館設置人口当たりの全国平均登録率は 36.9%，北海道平均登録率は 34.3%となっている。

2）「北広島市の統計書：平成 17 年度版」（オンライン）入手先
＜http://www.city.kitahiroshima.hokkaido.jp/seisaku/toukei/map_access.html＞
（最終アクセス 2008 年 1 月 7 日）

3）「北広島市図書館ホームページ」（オンライン）入手先
＜http://www.lib.city.kitahiroshima.hokkaido.jp/＞（最終アクセス 2008 年 1 月 12 日）

4）「石狩市ホームページ」（オンライン）入手先
＜http://www.city.ishikari.hokkaido.jp/＞（最終アクセス 2008 年 1 月 12 日）

5）「北海道運輸局ホームページ：自動車保有車両数関係統計」（オンライン）入手先
＜http://www.hkt.mlit.go.jp/touroku/04_siryou_toukei/toukei.html＞
（最終アクセス 2008 年 1 月 12 日）

6）総務省自治行政局市町村課「住民基本台帳に基づく人口・人口動態及び世帯数（平成 18 年 3 月 31 日現在)」（オンライン）入手先
＜http://www.soumu.go.jp/c-gyousei/020918.html#sasi4-1＞
（最終アクセス 2008 年 1 月 13 日）

7）「札幌市役所公式ホームページ」（オンライン）入手先
＜http://www.city.sapporo.jp/city/＞（最終アクセス 2008 年 1 月 13 日）

8）「さっぽろ統計情報」（オンライン）入手先
＜http://www.city.sapporo.jp/toukei/jinko/jinko.html＞（最終アクセス 2008 年 1 月 13 日）

9）「さっぽろの交通：総合交通計画部のページ」（オンライン）入手先
＜http://www.city.sapporo.jp/sogokotsu/kotsutaikei/index.html＞
（最終アクセス 2008 年 1 月 14 日）

10）札幌市，市民まちづくり局総合交通計画部交通企画課「車種別保有台数経年変化」（オンライン）入手先
＜http://www.city.sapporo.jp/sogokotsu/kotsutaikei/jidousha/data/hoyudaisu.xls＞（最終アクセス 2008 年 1 月 14 日）

11）『北広島市図書館活動報告（17 年度)』北広島市図書館, 2006.4.1

12）『北広島市図書館活動報告（18 年度)』北広島市図書館, 2007.4.1

13）『2006 図書館要覧』石狩市民図書館, 2006.11.1

14）『札幌の図書館 2006』札幌市中央図書館, 2006.8.1

15）『札幌の図書館 2007』札幌市中央図書館, 2007.10.1

第 3 章　図書館利用者・非利用者の行動分析

3.1　調査の概要
3.1.1　調査の方法
3.1.2　抽出住民の構成
3.2　図書館利用者・非利用者像
3.2.1　性・年齢・職業別
3.2.2　利用・前利用・未利用別
3.2.3　利用グループの主な利用館と利用頻度
3.3　図書館を利用できない・しない理由
3.3.1　前利用・未利用別
3.3.2　性別
3.3.3　年齢別
3.3.4　職業別
3.3.5　既往調査との比較
3.4　まとめ
註・参考文献

第 3 章　図書館利用者・非利用者の行動分析

この章では，北広島市民に図書館接触度を尋ねた「住民調査」をもとに図書館の利用者および非利用者の分析を行い，一般的な図書館利用者像および非利用者像を捉える。

具体的には，性，年齢，職業などの要因が個々人の図書館利用，非利用にどのように関係しているか，また「図書館を未だ利用していない人々」や「以前には利用していたが現在は利用しなくなってしまった人々」がどのような属性の集団であるのか,「図書館を利用できない，あるいは利用しない」理由は何かなどについて分析することにより，利用者および非利用者の一般的な傾向を捉える。

3.1　調査の概要

3.1.1　調査の方法

図書館の利用者や非利用者の属性や行動様式の特徴を捉えるためには，包括的な住民調査が必要である。

そこで，本調査は北広島市図書館の協力により，北広島市が 2003 年 6 月に住民基本台帳から 20 歳以上の住民を無作為抽出し，600 世帯を対象に実施した郵送による市政モニターアンケート調査[1)]の一部として本調査票（巻末資料 5）を同封させてもらう形で実施した。回収数は 205 世帯（回収率 34.2%）であるが，同居している家族全員に回答してもらう形式にしてあるため 542 人の回答サンプルが得られている。

3.1.2　抽出住民の構成

抽出住民の属性及び，北広島市全人口データをまとめたものが表 3-1 である。調査票と住民基本台帳の年齢の刻みが低年齢層で異なるため一概には比較できないが，その他の世代では各年齢層ともほぼ同じ割合となっている。また，地区別抽出世帯数は，東部地区 136 世帯，北広島団地地区 199 世帯，西の里地区 56 世帯，大曲地区 178 世帯，西部（輪厚）地区 31 世帯となっており，地区別人口分布の割合と有意な差はない（$\chi^2=2.540$, $df=4$, $p>.05$）。

＜表３－１　抽出住民の属性及び全人口データ＞

（単位：　人）

属性		性別				職業種別															
		合計		男性	女性	農業	商工・	勤務	（内　訳）										主婦	学生	無職
	年齢		（割合）				自営業	小計	専門・技	管理職	事務職	販　売	サービス	保安職	農林漁	運輸・通	技能・建	その他			
抽出住民数	0～5	23	4.2%	12	11																23
	6～12	31	5.7%	19	12															31	
	13～15	24	4.4%	14	10															24	
	16～19	30	5.5%	15	15			2			1							1		27	1
	20～29	54	10.0%	25	29			32	7		5	5	6			1	3	5	5	15	2
	30～39	67	12.4%	24	43			39	11		8	3	5			2	2	8	24		4
	40～49	63	11.6%	32	31	1	1	37	10	5	6	3	3	2	1	1	3	3	21		3
	50～59	109	20.1%	52	57	1	6	53	11	8	17	2	6			3	4	2	37	1	11
	60～	141	26.0%	73	68		2	23	2	7		2	1	2	1	1	2	5	26		90
	合計	542	100.0%	266	276	2	9	186	41	20	37	15	21	4	2	8	14	24	113	98	134
北広島市全人口	0～9	5,348	9.0%	2,784	2,564	職業別															
	10～14	3,350	5.7%	1,697	1,653	人口		24,424	3,795	1,282	4,719	3,540	1,945	489	752	1,357	6,451	94			
	15～19	3,992	6.8%	2,018	1,974																
	20～29	7,446	12.6%	3,694	3,752			合計(人)	東部地区		広島団地地区		西の里地区		大曲地区		西部地区		ほか	北広島市外	
	30～39	7,483	12.7%	3,653	3,830	地区別人口		59,103		14,851		18,608		5,752		16,701		3,191			
	40～49	8,133	13.8%	3,905	4,228	登録者数		19,999		5,322		7,040		1,239		2,748		758	36	2,856	
	50～59	10,351	17.5%	4,909	5,442	登録率 *2		29.0(%)		35.8%		37.8%		21.5%		16.5%		23.8%		14.3%	
	60～	13,000	22.0%	6,043	6,957	*1															
	合計	59,103	100.0%	28,703	30,400	地区別抽出世帯数		600(軒)	136		199		56		178		31				

＊1　対象年齢20歳以上の全市民から600世帯を無作為抽出(回収率34.2％：205世帯542サンプル)

＊2　北広島市全人口データは住民基本台帳（平成14年10月末現在）、及び北広島市図書館活動報告（平成13年度）による。

3.2　図書館利用者・非利用者像

利用の有無が未回答の者 22 人を除いた 520 人を対象に，北広島市図書館の利用の有無を以下の４つのグループ（利用・前利用・未利用・非利用）に分けて，(1) 性・年齢・職業などの属性が個人の図書館利用の有無にいかに関係しているか，(2) 利用者は主にどこの図書館をどのくらいの頻度で利用しているか，(3) 現在は図書館を利用していない，または利用したことがない者はどのような理由によるものなのか，などについて考察する。

なお，独立性の検討をカイ 2 乗検定により行うに当たっては，期待度数が 5 未満のセルが存在する変数項目については，Fisher の直接法値を用いて検定を行った。

①現在図書館を利用している集団　（利　用：230 人）
②以前は利用していたが，今は利用していない集団　（前利用：　60 人）
③北広島市図書館を未だ利用したことがない集団　（未利用：230 人）
④未利用者に前利用者を加えた現在は利用していない集団　（非利用②＋③：290 人）

表 3-2 は，①利用，②前利用，③未利用，④非利用（前利用＋未利用）別に，性・年齢・職業等をまとめたものである。現在図書館を利用している者が 230 人（44.2%），前利用と未利用を合わせた現在は利用していない者が 290 人（55.8%）となっており，図書館登録率 29.5%[2] からみると，図書館利用者からの回答の割合が多くなっていることがわかる。これは，図書館利用者の方が非利用者よりも図書館運営に関して強い関心を示しており，積極的にアンケートの回答を返送してくれた結果の現れといえよう。

3.2.1　性・年齢・職業別

表によると，性別には有意な差（χ^2＝7.776, df=1, p<.01）があり，男性では 62.0%が「非利用（前利用＋未利用）」であるのに対し，女性では逆に 50.2%が「利用」であり，図書館利用者は女性の方が男性よりも多い。男性の利用の少ないことの理由としては，市外に職場を持つ割合が高いため平日は利用できないこと，また，男性は女性に比べて購買能力が高いことなどが考えられる。しかし，先に行った来館者調査[3] では休日に男性勤務者の来館が多いことが確認されており，閉館時間を遅くすることによる開館時間の延長といったサービス改善により利用者としての取り込みが充分見込める。

年齢階層にも有意な差があり（χ^2＝45.209, df=8, p<.01），　0～5 歳には当然「非利用」が多いが，6～19 歳までは「利用」が 60%以上の高い比率を占めている。一方，20 歳以上では 30～39 歳を除き，すべての年齢層で，「非利用」が「利用」を上回っており，年齢

が高くなるに連れて「非利用」の率が高くなっていることが読みとれる。

職業種別にも有意な差があり（χ^2＝42.014, df=5, p<.01），自由に使える時間の量を反映してか，「利用」の比率は学生が 72.2%と最も高く，次いで主婦 44.9%，無職 37.8%，勤務者 34.3%の順である。学生以外はどの職種も，「非利用」の割合の方が高い。

先の年齢と合わせると，小学生・中学生・高校生といった学生層と，ちょうど小学生ぐらいの子供を持つ 30～39 歳の主婦層とで「利用」の割合が多くなっており，来館者調査，登録者調査[4]の結果と符合している。

3.2.2　利用・前利用・未利用別

表によると，「前利用」のグループでは，男性が 56.7%，女性が 43.3%と男性の方がやや多い。年齢は 40 歳以上の各年齢層において 20%台を示しており，40 歳代以降の人々で 61.7%占めている。職種は，勤務者 33.3%，学生 25.0%，主婦 21.7%の順である。すなわち，図書館を以前に利用していたが何らかの理由で今は利用しなくなってしまっているのは，40 歳以上の男性勤務者である傾向が強いことがわかる。

来館者調査の結果では，休日では特に平日で少なかった 40 歳代の男性勤務者の利用が目立っていただけに，3.3 節で図書館離れの理由を詳しく分析する。

未だ図書館を利用したことのない「未利用」のグループでは，男性が 53.9%，女性が 46.1%と「前利用」のグループより両者の割合は拮抗しているが，やはり男性の方が高い。年齢は 50 歳代 23.9%，60 歳以上 34.3%と 50 歳代以降の高年齢層において高くなっている。職種では，勤務者 42.2%，無職 29.6%，主婦 20.0%の順である。すなわち，未だ図書館を利用したことがないのは，50 歳代の勤務者，60 歳以上の無職者である傾向が強いことがわかる。

年齢が高くなるにつれて「非利用」の割合が高くなることは従前から指摘されているところではあるが，北広島市の場合は 60 歳以上の高年齢者の図書館への来館者率，図書館利用登録率は市民全体の年齢階層別比率よりも上回っている。

未だ図書館を利用したことのない者を新規に利用者として取り込むためには，40 歳代以降の勤務者と高齢者への新たなサービスの充実と広報活動のあり方が鍵を握っているといえる。

＜表3－2　利用・前利用・未利用別＞

人数　(%)

属　性 ＼ グループ		① 利　用	② 前利用	③ 未利用	④ 非利用 (②＋③)	合　計 (①＋②＋③)
有効回答数(%)　*1		230 (44.2)	60 (11.5)	230 (44.2)	290 (55.8)	520 (100.0)
性別	男　性	97 (38.0) (42.2)	34 (13.3) (56.7)	124 (48.6) (53.9)	158 (62.0) (54.5)	255 (100.0) (49.0)
	女　性	133 (50.2) (57.8)	26 (9.8) (43.3)	106 (40.0) (46.1)	132 (49.8) (45.5)	265 (100.0) (51.0)
	合　計	230 (100.0)	60 (100.0)	230 (100.0)	290 (100.0)	520 (100.0)
年齢	0～ 5歳	6 (30.0) (2.6)	1 (5.0) (1.7)	13 (65.0) (5.7)	14 (70.0) (4.8)	20 (100.0) (3.8)
	6～12歳	27 (87.1) (11.7)	2 (6.5) (3.3)	2 (6.5) (0.9)	4 (12.9) (1.4)	31 (100.0) (6.0)
	13～15歳	15 (65.2) (6.5)	7 (30.4) (11.7)	1 (4.4) (0.4)	8 (34.8) (2.8)	23 (100.0) (4.4)
	16～19歳	18 (60.0) (7.8)	3 (10.0) (5.0)	9 (30.0) (3.9)	12 (40.0) (4.1)	30 (100.0) (5.8)
	20～29歳	23 (44.2) (10.0)	4 (7.7) (6.7)	25 (48.1) (10.9)	29 (55.8) (10.0)	52 (100.0) (10.0)
	30～39歳	34 (52.3) (14.8)	6 (9.2) (10.0)	25 (38.5) (10.9)	31 (47.7) (10.7)	65 (100.0) (12.5)
	40～49歳	28 (45.2) (12.2)	13 (21.0) (21.7)	21 (33.9) (9.1)	34 (54.8) (11.7)	62 (100.0) (11.9)
	50～59歳	36 (35.0) (15.7)	12 (11.7) (20.0)	55 (53.4) (23.9)	67 (65.1) (23.1)	103 (100.0) (19.8)
	60歳以上	43 (32.1) (18.7)	12 (9.0) (20.0)	79 (59.0) (34.3)	91 (68.0) (31.4)	134 (100.0) (25.8)
	合　計	230 (100.0)	60 (100.0)	230 (100.0)	290 (100.0)	520 (100.0)
職業	農業			2 (100.0) (0.9)	2 (100.0) (0.7)	2 (100.0) (0.4)
	商工サービス自営業	3 (33.3) (1.3)	1 (11.1) (1.7)	5 (55.6) (2.2)	6 (66.7) (2.1)	9 (100.0) (1.7)
	勤務者	61 (34.7) (26.5)	20 (11.2) (33.3)	97 (54.5) (42.2)	117 (65.7) (40.3)	178 (100.0) (34.2)
	主婦(パートを含む)	48 (44.9) (20.9)	13 (12.2) (21.7)	46 (43.0) (20.0)	59 (55.1) (20.3)	107 (100.0) (20.6)
	学生	70 (72.2) (30.4)	15 (15.5) (25.0)	12 (12.4) (5.2)	27 (27.8) (9.3)	97 (100.0) (18.7)
	無職	48 (37.8) (20.9)	11 (8.7) (18.3)	68 (53.5) (29.6)	79 (62.2) (27.2)	127 (100.0) (24.4)
	合　計	230 (100.0)	60 (100.0)	230 (100.0)	290 (100.0)	520 (100.0)

＊1　利用の有無が不明の者22名を除く。
＊2　上段数値は人数および横計の割合、下段数値は縦計の割合を示す。

3.2.3　利用グループの主な利用館と利用頻度

「利用」グループの主な利用館と利用頻度をみたものが表 3-3，表 3-4 である。この住民調査での「利用」グループのサンプル数が少ないので，それを補う目的で登録者調査（2003 年 6 月実施）のデータを参考までに合わせて示す。

本館利用者が 87.8%と圧倒的に多く，次いで分室及び最寄りの移動図書館が 12.2%となっている。利用頻度は貸出期限ごとに図書館を訪れる日常的・習慣的利用者（「１ヶ月に２～３回」）が 38.6%で最も多く，次いで何か目的が生じたときに図書館に出かけて行く目的的利用者（「年に数回」）が 35.0%，その中間的な利用頻度の（「１ヶ月に１回位」）が 15.2%で続いている。今回の住民調査における「利用」のグループは登録者であるから当然ともいえるが，主利用館（χ^2＝0.189, df=1, p>.05），利用頻度（χ^2＝8.432, df=5, p>.05）とも登録者調査の数値と有意な差はない結果が現れている。

＜表３－３　利用者の主な利用館＞

単位：人数（%）

館　種		住民調査（利用）		登録者調査 ＊1	
本　館		202 (87.8)		640 (80.6)	
分室・移動	団地住民センター図書室	1 (0.4)	28 (12.2)	29 (3.7)	98 (12.3)
	大曲会館図書室	16 (7.0)		39 (4.9)	
	西の里公民館図書室	10 (4.3)		21 (2.6)	
	農民研修センター図書室	0 (0.0)		4 (0.5)	
	最寄りの移動図書館	1 (0.4)		5 (0.6)	
北広島市外の図書館		0 (0.0)		56 (7.1)	
合　計		230 (100.0)		794 (100.0)	

＊１　2003年6月の登録者調査による登録者の主利用館の値である。

＜表３－４　利用頻度＞

単位：人数（%）

利用頻度	住民調査（利用）	登録者調査 ＊1
ほとんど毎日	2 (0.9)	7 (0.9)
週に1回程度	16 (7.2)	85 (11.0)
1ヶ月に2～3回	86 (38.6)	265 (34.3)
1ヶ月に1回位	34 (15.2)	165 (21.4)
年に数回	78 (35.0)	232 (30.1)
それ以下	7 (3.1)	18 (2.3)
合　計　　＊2	223 (100.0)	772 (100.0)

＊１　2003年6月の登録者調査による登録者の利用頻度の値である。
＊２　住民調査での利用頻度不明者7名を除く。

3.3　図書館を利用できない・しない理由

「前利用」,「未利用」グループの者に,「図書館を利用できない・しない理由」を選択肢の中から 2 つまでの回答を認めて選択してもらった。選択肢の理由は表 3-5 に挙げた 12 項目であり，A～D の 4 つに類別して以下に示す（○数字は理由の項目番号である)。

A. 分館（分室）の配置，開館時間や資料構成といった図書館側に起因する運営全般に関するもの。
＜市民の側からすると外的要因＞
①「図書館が近くにない」，③「開館時間中に利用できない」，④「読みたいような本が図書館にない」の理由３つ。

B. 図書館の広報活動の強化や，日常のイメージアップに努めることにより改善が見込めるもの。
＜広報・イメージ的要因＞
②「図書館の場所を知らない」，⑤「図書館に入りにくい」，⑥「利用手続きが面倒だと思う」，⑦「図書館は学生の勉強の場だと思う」の理由４つ。

C. 市民の側の読書観や図書館に対する意識などによるもの。
＜市民の側の内的要因＞
⑨「本は自分で買って読む」，⑩「本を読もうとは思わない」，⑪「図書館を利用する必要がない」の理由３つ。

D. A と C との中間として位置づけられるもの。
⑧「学校や職場，市外の図書館を利用している」という理由。

これらの 11 項目に⑫「その他」を加えて 12 項目とした。

3.3.1　前利用・未利用別

「前利用」,「未利用」別にみると，どちらのグループも⑨「本は自分で買って読む」が40%前後で最も多くなっており，図書館本来の機能である「本を利用する」という面では図書館を必要としていないことが分かる。

「前利用」のグループでは，④「読みたいような本が図書館にない」が 23.9%と 2 位を占めており，一度登録し利用してはみたが自分の読みたい本が無かったので利用をやめたという利用体験に基づく，蔵書構成や資料の量を不満とする市民が多い。資料の充実を図り，公共サービスとはいえども一度獲得した利用者は離さない運営努力が必要である。

「未利用」グループでは，①「図書館が近くにない」が 23.6%で 2 位，次いで③「開館時間中に利用できない」21.6%，⑪「図書館を利用する必要がない」15.6%，②「図書館の場所を知らない」11.1%の順である。この「未利用」グループでは A～C の範疇の理由を幅広く挙げているのが特徴である。C の市民の側の＜内的要因＞を変えることは難しいと思われるが，A＜外的要因＞，B＜広報・イメージ的要因＞は図書館側の努力により改善が可能な要因である。

＜表3－5　利用できない･しない理由＞

人数　(%)

グループ 理　由(2つまで)	② 前利用 *2	③ 未利用 *3	④ 非利用 (②+③)
有効回答者数(%)	46 (18.8)	199 (81.2)	245 (100.0)
1. 図書館が近くにない	7 (15.2)	47 (23.6)	54 (22.0)
2. 図書館の場所を知らない		22 (11.1)	22 (9.0)
3. 開館時間中に利用できない	8 (17.4)	43 (21.6)	51 (20.8)
4. 読みたいような本が図書館にない	11 (23.9)	12 (6.0)	23 (9.4)
5. 図書館に入りにくい	1 (2.2)	4 (2.0)	5 (2.0)
6. 利用手続きが面倒だと思う	2 (4.3)	8 (4.0)	10 (4.1)
7. 図書館は学生の勉強の場だと思う		1 (0.5)	1 (0.4)
8. 学校や職場、市外の図書館を利用している	6 (13.0)	10 (5.0)	16 (6.5)
9. 本は自分で買って読む	18 (39.1)	80 (40.2)	98 (40.0)
10. 本を読もうとは思わない	6 (13.0)	21 (10.6)	27 (11.0)
11. 図書館を利用する必要がない	4 (8.7)	31 (15.6)	35 (14.3)
12. その他	15 (32.6)	36 (18.1)	51 (20.8)

＊1　理由2つまでの選択を認めているので合計は100%を越える。
＊2 「前利用」の有効サンプル数は、理由不明の者14名を除いた46名である。
＊3 「未利用」の有効サンプル数は、理由不明の者31名を除いた199名である。

3.3.2　性別

表 3-6 は図書館を利用できない，あるいは利用しない理由を性別にみたものである。

男女とも⑨「本は自分で買って読む」が最も多く約 40%を占めている。次位は，男性では③「開館時間中に利用できない」が 27.7%，女性では①「図書館が近くにない」が 26.1%となっている。

このことは，男性勤務者は本館志向が強く，「内容重視型」の利用であるとともに平日の利用が少なかったこと，分室・移動図書館の利用者は主婦と児童が中心であり，「アクセス・慣れ重視型」の利用であったことなどの登録者調査結果と符合する。

＜表3－6　利用できない･しない理由　（性別）＞

人数　（%）

性　別 理　由（2つまで）	男　性	女　性	合　計
有効回答者数（%）	130（ 53.1）	115（ 46.9）	245（100.0）
1. 図書館が近くにない	24（ 18.5）	30（ 26.1）	54（ 22.0）
2. 図書館の場所を知らない	11（ 8.5）	11（ 9.6）	22（ 9.0）
3. 開館時間中に利用できない	36（ 27.7）	15（ 13.0）	51（ 20.8）
4. 読みたいような本が図書館にない	6（ 4.6）	17（ 14.8）	23（ 9.4）
5. 図書館に入りにくい	3（ 2.3）	2（ 1.7）	5（ 2.0）
6. 利用手続きが面倒だと思う	4（ 3.1）	6（ 5.2）	10（ 4.1）
7. 図書館は学生の勉強の場だと思う	1（ 0.8）		1（ 0.4）
8. 学校や職場、市外の図書館を利用している	13（ 10.0）	3（ 2.6）	16（ 6.5）
9. 本は自分で買って読む	53（ 40.8）	45（ 39.1）	98（ 40.0）
10. 本を読もうとは思わない	14（ 10.8）	13（ 11.3）	27（ 11.0）
11. 図書館を利用する必要がない	20（ 15.4）	15（ 13.0）	35（ 14.3）
12. その他	23（ 17.7）	28（ 24.3）	51（ 20.8）

＊1　理由2つまでの選択を求めているので合計は100%を越える。
＊2　有効サンプル数は、利用していない理由不明の者45名を除いた245名である。

3.3.3　年齢別

表 3-7 は図書館を利用できない，あるいは利用しない理由を年齢別にみたものである。

13～19 歳は①「図書館が近くにない」52.9%，③「開館時間中に利用できない」35.3%，⑧「学校や職場，市外の図書館を利用している」23.5%の順である。移動手段として自家用車を利用できない未成年者層にとっては，図書館までの距離が遠いことが最大の利用阻害要因であり，日常生活時間との兼ね合いからも学校の図書館を利用していることが窺われる。一方，20 歳以上になると，⑨「本は自分で買って読む」が一番の非利用理由となる。中でも，30～39 歳で 46.2%，50～59 歳で 49.2%，60 歳以上で 48.6%と高い割合を示し

ており，購買力の高い年齢層であることがわかる。次いで，20～49 歳までの年齢層で①「図書館が近くにない」，30～59 歳までの年齢層で③「開館時間中に利用できない」などといった市民の側からすると物理的な外的要因が 20%台の高い割合を示している。また，50 歳以上の年齢層では⑩「図書館を利用する必要がない」とする者が約 20%存在しており，図書館に無関心な層であることを窺わせている。3.2.2 節で前述したように，年齢が高くなるにつれて「非利用」の割合が高くなることは従前から指摘されているところではあるが，北広島市の場合，50 歳代以上の高年齢層の図書館利用登録率，来館者率は市民全体の年齢階層別比率を上回っていた。今回の住民調査でも 50 歳以上の場合，「利用」グループの数は少ないが，ほとんどの者が高頻度利用者であり，常連である。これらのことから，高年齢者の場合は他の世代よりも図書館を比較的活発に利用する者と，まったく利用しない者とにはっきり分極化していることがわかる。

＜表3－7　利用できない･しない理由 （年齢別）＞

人数 （%）

年 齢 理 由（2つまで）	0～12歳	13～19歳	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳～	合 計
有効回答者数（%）	10(4.1)	17(6.9)	28(11.4)	26(10.6)	31(12.7)	59(24.1)	74(30.2)	245(100.0)
1. 図書館が近くにない	1(10.0)	9(52.9)	8(28.6)	6(23.1)	8(25.8)	9(15.3)	13(17.6)	54 (22.0)
2. 図書館の場所を知らない	2(20.0)		4(14.3)	4(15.4)	2(6.5)	6(10.2)	4(5.4)	22 (9.0)
3. 開館時間中に利用できない		6(35.3)	4(14.3)	6(23.1)	10(32.3)	13(22.0)	12(16.2)	51 (20.8)
4. 読みたいような本が図書館にない		3(17.6)	3(10.7)	2(7.7)	3(9.7)	3(5.1)	9(12.2)	23 (9.4)
5. 図書館に入りにくい		1(5.9)	1(3.6)		2(6.5)	1(1.7)		5 (2.0)
6. 利用手続きが面倒だと思う		1(5.9)	1(3.6)		2(6.5)	4(6.8)	2(2.7)	10 (4.1)
7. 図書館は学生の勉強の場だと思う					1(3.2)			1 (0.4)
8. 学校や職場、市外の図書館を利用している	1(10.0)	4(23.5)	3(10.7)	1(3.8)	2(6.5)	3(5.1)	2(2.7)	16 (6.5)
9. 本は自分で買って読む	1(10.0)		10(35.7)	12(46.2)	10(32.3)	29(49.2)	36(48.6)	98 (40.0)
10. 本を読もうとは思わない		3(17.6)	5(17.9)	3(11.5)	5(16.1)	4(6.8)	7(9.5)	27 (11.0)
11. 図書館を利用する必要がない	1(10.0)		2(7.1)	2(7.7)	2(6.5)	13(22.0)	15(20.3)	35 (14.3)
12. その他	6(60.0)	3(17.6)	2(7.1)	4(15.4)	9(29.0)	9(15.3)	18(24.3)	51 (20.8)

＊1　理由2つまでの選択を求めているので合計は100%を越える。
＊2　有効サンプル数は、利用していない理由不明の者45名を除いた245名である。

3.3.4　職業別

表 3-8 は図書館を利用できない，あるいは利用しない理由を職業別にみたものである。

勤務者は⑨「本は自分で買って読む」38.8%，③「開館時間中に利用できない」33.0%，主婦は⑨「本は自分で買って読む」56.9%，①「図書館が近くにない」25.5%，学生は①「図書館が近くにない」50.0%，⑧「学校の図書館を利用している」27.3%，③「開館時間中に利用できない」27.3%，無職は⑨「本は自分で買って読む」39.3%，⑪「図書館を利用する必要がない」24.6%，①「図書館が近くにない」19.7%のようになっている。

＜表3－8　利用できない･しない理由　（職業別）＞

人数　（%）

職　業 理　由（2つまで）	農業	商工	勤務 （小計）	勤　務（内訳） 専門･技術	管理職	事務	販売	ｻｰﾋﾞｽ	保安職	農林漁業	運輸･通信	技能･建設	その他	主婦	学生	無職	合　計
有効回答者数	2	6	103	19	15	13	13	9	2	2	8	6	16	51	22	61	245
（%）	(0.8)	(2.4)	(42.0)	(7.8)	(6.1)	(5.3)	(5.3)	(3.7)	(0.8)	(0.8)	(3.3)	(2.4)	(6.5)	(20.8)	(9.0)	(24.9)	(100.0)
1.　図書館が近くにない	1		17	3	1	2	2	3			2	1	3	13	11	12	54
	(50.0)		(16.5)	(15.8)	(6.7)	(15.4)	(15.4)	(33.3)			(25.0)	(16.7)	(18.8)	(25.5)	(50.0)	(19.7)	(22.0)
2.　図書館の場所を知らない			12	3	1		2	1			1	1	3	4	1	5	22
			(11.7)	(15.8)	(6.7)		(15.4)	(11.1)			(12.5)	(16.7)	(18.8)	(7.8)	(4.5)	(8.2)	(9.0)
3.　開館時間中に利用できない	1	1	34	4	7	3	5	4	1	1	1	2	6	5	6	4	51
	(50.0)	(16.7)	(33.0)	(21.1)	(46.7)	(23.1)	(38.5)	(44.4)	(50.0)	(50.0)	(12.5)	(33.3)	(37.5)	(9.8)	(27.3)	(6.6)	(20.8)
4.　読みたいような本が図書館にない			6	2		1		1					2	9	3	5	23
			(5.8)	(10.5)		(7.7)		(11.1)					(12.5)	(17.6)	(13.6)	(8.2)	(9.4)
5.　図書館に入りにくい			2		1					1				2	1		5
			(1.9)		(6.7)					(50.0)				(3.9)	(4.5)		(2.0)
6.　利用手続きが面倒だと思う		1	4			1	1						2	3	1	1	10
		(16.7)	(3.9)			(7.7)	(7.7)						(12.5)	(5.9)	(4.5)	(1.6)	(4.1)
7.　図書館は学生の勉強の場だと思う			1			1											1
			(1.0)			(7.7)											(0.4)
8.　学校や職場、市外の図書館を利用している			8	4		2							2	1	6	1	16
			(7.8)	(21.2)		(15.4)							(12.5)	(2.0)	(27.3)	(1.6)	(6.5)
9.　本は自分で買って読む	1	3	40	8	6	5	5	1	2	1	4	2	6	29	1	24	98
	(50.0)	(50.0)	(38.8)	(42.1)	(40.0)	(38.5)	(38.5)	(11.1)	(100.0)	(50.0)	(50.0)	(33.3)	(37.5)	(56.9)	(4.5)	(39.3)	(40.0)
10. 本を読もうとは思わない	1	1	14			3	1	4		1	2	1	2	2	2	7	27
	(50.0)	(16.7)	(13.6)			(23.1)	(7.7)	(44.4)		(50.0)	(25.0)	(16.7)	(12.5)	(3.9)	(9.1)	(11.5)	(11.0)
11. 図書館を利用する必要がない		1	12	4	2	1	1	1			2		1	6	1	15	35
		(16.7)	(11.7)	(21.1)	(13.3)	(7.7)	(7.7)	(11.1)			(25.0)		(6.3)	(11.8)	(4.5)	(24.6)	(14.3)
12. その他		2	15	3	5	2	1		1			2	1	10	4	20	51
		(33.3)	(14.6)	(15.8)	(33.3)	(15.4)	(7.7)		(50.0)			(33.3)	(6.3)	(19.6)	(18.2)	(32.8)	(20.8)

＊1　理由2つまでの選択を求めているので合計は100%を越える。
＊2　有効サンプル数は、利用していない理由不明の者45名を除いた245名である。

3.3.5　既往調査との比較

国内での同種調査としては内閣府政府広報室よる「読書・公共図書館に関する調査」[5]があり，1979 年 9 月，1989 年 6 月に実施されている。両者ともその調査の中で「この 1 年間に公共図書館を利用しなかった」と回答した者に，利用しなかった理由を 3 つまでの選択を認めている。また，今回調査同様に，利用しなかった理由を 2 つまでの選択を認めている 1986 年 6 月の千葉県柏市における柏市住民調査[6]の結果を合わせてまとめたものが表 3-9 である。今回調査の理由項目と一致していないものは空欄とし，理由が同一のもののみの数値（百分率）を記載した。

北広島市民は内閣府の全国調査に比べて，⑩「本を読もうと思わない」や⑪「図書館を利用する必要がない」という本を読まないとみなせる理由を挙げている者が少なく，⑨「本は自分で買って読む」が 40.0%占めており，全体として市民の読書意欲は旺盛であるといえる。①～⑦までの理由で図書館を利用しかねているような市民は，図書館を利用したくなる，あるいは利用できる環境が整えば，再びないし新しく図書館利用者層に転換し得る可能性が高い潜在的図書館利用者層である。しかし，①「図書館が近くにない」，③「開館時間中に利用できない」等の理由はいずれの調査においても同様に高い数値を示したままであり，簡単なようでいて効率性（費用）の面から長い間なかなか改善が進んでいない要素であることがみてとれる。本館に加え適正な規模の分館の配置，蔵書内容の再検討や広報活動の強化，さらにはインターネットの開放やコンピュータ講習会，映画上映会やコンサートのような図書利用以外でも図書館が地域のコミュニティ施設として利用されるような企画の実施など，新たな図書館側の努力があれば不読者層をも惹きつけることが可能であると思われる。

＜表３－９　図書館を利用しない理由（既往調査との比較）＞

単位：（%）

調査名 理　由　*2	内閣府調査 1979年9月	内閣府調査 1989年6月	柏市調査 1986年6月	北広島市調査 2003年6月
有効回答者数	2,095人	1,931人	1,190人	245人
1.　図書館が近くにない	27.7	37.1	20.1	22.0
3.　開館時間中に利用できない	15.5	22.4	21.9	20.8
4.　読みたいような本が図書館にない	6.7	7.0	8.0	9.4
2.　図書館の場所を知らない		6.6	5.8	9.0
5.　図書館に入りにくい			0.6	2.0
6.　利用手続きが面倒だと思う			3.2	4.1
7.　図書館は学生の勉強の場だと思う			0.7	0.4
8.　学校や職場、市外の図書館を利用している	4.3	3.7	12.4	6.5
9.　本は自分で買って読む	11.8	25.0	25.2	40.0
10. 本を読もうとは思わない	22.6	18.1	3.3	11.0
11. 図書館を利用する必要がない	16.9		10.4	14.3
12. その他	5.2	11.6		20.8

＊１　今回調査の理由に該当しなかったものは、割合の数値が空欄になっている。
＊２　内閣府調査は理由3つまで、柏市及び北広島市調査は理由2つまでの選択を認めているので合計は100%を越える。

3.4　まとめ

本章では，図書館の非利用者を含む市民を対象として実施した北広島市住民調査の結果をもとに，「利用者」並びに，「図書館を未だ利用していない人々（未利用）」や「以前には利用していたが現在は利用しなくなってしまった人々（前利用）」がどのような属性の集団であるのか，また利用者については主な利用館と利用頻度の状況を，非利用者については「図書館を利用できない・しない」理由は何かを分析，考察した。

本章で明らかになった利用者および非利用者の一般的な傾向をまとめると以下のように要約される。

1）男性では 62.0%が「非利用（前利用＋未利用）」であるのに対し，女性では逆に 50.2%が「利用」であり，図書館利用者は女性の方が男性よりも多い。
2）20 歳以上では 30 歳代を除き，すべての年齢層で「非利用」が「利用」を上回っており，年齢が高くなるに連れて「非利用」の率が高くなっている。
3）図書館を以前に利用していたが何らかの理由で今は利用しなくなってしまっている属性は 40 歳以上の男性勤務者であり，未だ図書館を利用したことがない属性は 50 歳代の勤務者，および 60 歳以上の無職者である傾向が強い。
4）「非利用（前利用＋未利用）」における理由は，「本は自分で買って読む」が 40.0%で最も多く，次いで「図書館が近くにない」22.0%，「開館時間中に利用できない」20.8%となっており，この 3 つの理由で上位を占めている。
5）「前利用」グループでは，「読みたいような本が図書館にない」が 23.9%と第 2 位を占めており，一度登録し利用してはみたが自分の読みたい本が無かったので利用をやめたという利用体験に基づく，蔵書構成や資料の量を不満とする市民が多い。一方，「未利用」グループでは，「図書館が近くにない」が 23.6%で第 2 位，次いで「開館時間中に利用できない」21.6%，「図書館を利用する必要がない」15.6%，「図書館の場所を知らない」11.1%の順で非利用理由は幅広い。
6）「非利用」グループでは，男女とも「本は自分で買って読む」が最も多く約 40%を占めている。次位は，男性では「開館時間中に利用できない」が 27.7%，女性では「図書館が近くにない」が 26.1%と，次位の利用しない理由に差がみられる。
7）50 歳以上の場合，「利用」グループの数は少ないが，ほとんどの者が高頻度利用者であり，常連である。高年齢者の場合は，他の世代よりも図書館を比較的活発に利用する者と，まったく利用しない者に分極化している。
8）北広島市民は内閣府の全国調査に比べて，「本を読もうと思わない」や「図書館を利用する必要がない」という本を読まないとみなせる理由を挙げている人が少なく，「本は自分で買って読む」が 40.0%も占めており，全体として市民の読書意欲は旺盛であるといえる。

以上，非利用理由の上位を占めた「図書館が近くにない」,「開館時間中に利用できない」などの項目は，従前から指摘されていながらも改善が進んでいない内容であることが確認できた。また，図書館側の施設整備とサービス内容の改善により，再びあるいは新たに図書館利用者層に転換し得る可能性の高い潜在的利用者層が多く存在することも分かった。

図書館を使わない理由の第 1 位である「本は自分で買って読む」を別にすると，図書館を未だ利用していない者では「図書館が近くにない（23.6%）」，以前には利用していたが現在は利用しなくなってしまった者では「読みたいような本が図書館にない（23.9%）」がそれぞれ第 2 位を占めており，これは図書館までの距離と図書館の蔵書規模のバランスの重要性に他ならない。すなわち，利用者の利用行動の変化に合った適正な規模と施設数による図書館配置が必要であることから，次章以降で図書館利用行動の実態について分析を行うこととする。なお，非利用者の中で「図書館が近くにない」という理由を挙げている者が 22.0%存在していることについては，第 5 章で家族同伴利用と絡めて，改めて検討する。

註・参考文献

1）北広島市では，女性と男性がともに家庭や社会のあらゆる分野に平等に参画する「男女平等参画社会」を実現するため，2002 年に「きたひろしま男女平等参画プラン」をつくり，男女平等参画社会づくりに向けて歩み始めている。それに伴い，2003 年度市政モニター事業として「男女平等参画に関する市民意識調査」を実施し，統計データを得ようとしたものである。

2）2003 年 6 月に同時に実施した登録者調査時の登録率は 29.5%（図書館登録者 17,143 人÷北広島市全人口 58,038 人×100＝図書館登録率 29.5%）である。これは，調査時点で使用した登録者リストとして，2001 年 10 月に利用登録の更新処理を行い，２年以上利用していない休眠利用者を除いた最新版の登録者リストを用いているためである。

3）「都市型公共図書館における来館者の図書館利用行動：北広島市図書館来館者調査を事例として」『北海道武蔵女子短期大学紀要』2003.3, 第 35 号, p.19-56

北広島市図書館本館において，2002 年 11 月 12 日（火曜日）と同 23 日（土曜日，祝日：勤労感謝の日）の２日間に亘って，開館時から閉館時まで終日来館者を対象にアンケート方式で来館者調査を行った。平日と休日での利用の差異を明らかにすることを目的としたものである。

4）「都市型公共図書館における登録者の類型別図書館利用行動：北広島市図書館登録者調査を事例として」『第 51 回日本図書館情報学会研究大会発表要綱』2003.10, p.41-44

2003 年 6 月に，13 歳以上の北広島市図書館利用登録者の中から約 10%無作為抽出し，調査票による郵送アンケート方式で登録者調査を実施した。図書館利用登録者を最近隣館と主利用館を軸として分類し，それぞれの利用実態を把握することを目的としたものである。

5）内閣府政府広報室による世論調査の一つで，国民の読書についての意識，公共図書館の利用及び問題点などに対する意識を調査し，今後の施策の参考とすることを目的としたものである。1979 年 9 月調査における調査項目は，①日常生活の知識や情報の入手源，②読書，③図書館の利用状況，④公共図書館の利用状況である。1989 年 6 月調査における調査項目は，①日常の知識や情報の入手源，②読書に対する意識，③公共図書館に対する意識である。調査対象及び方法は，両者ともア）母集団: 全国 15 歳以上の者，イ）標本数: 3,000 人，ウ）抽出方法: 層化２段無作為抽出法，である。

6）図書館非利用者の属性や行動様式の特徴をとらえるためには，図書館利用者と非利用者とを含めた包括的な調査が必要である。そこで，植松貞夫（筑波大教授）らが千葉県柏市で昭和 61（1986）年 6 月に実施した生徒調査の際に調査対象とした各小学校 5 年生の家族全員を対象者として，アンケート調査方式により回答を得たものである。この調査は小学校 5 年生の家族だけを対象としていることから，対象者の年齢に偏りがあり，50 歳代と 10 歳代後半から 20 歳代の層が含まれることが少なく，分析の母集団が市民全体の構成をそのまま反映したものとはなっていない点に注意を要する。

第 4 章　広域利用可能地域における登録者の類型別利用行動分析

4.1　調査の概要
4.1.1　調査地域の概要
4.1.2　調査の対象
4.1.3　調査の方法
4.2　登録者の利用図書館選択
4.2.1　最近隣館と主利用館
4.2.2　類型別の利用者属性
4.2.3　利用目的・頻度
4.3　交通手段と図書館への行き方
4.3.1　来館時に利用する交通手段と所要時間
4.3.2　自家用車の利用可能状況
4.3.3　利用館への行き方
4.4　主利用館選択モデル
4.5　まとめ
註・参考文献

第 4 章　広域利用可能地域における登録者の類型別利用行動分析

前章では，図書館までの距離と蔵書規模が市民の意識上は図書館利用の有無に大きく影響していることを示した。これを受けての階層的な図書館施設整備手法では，日常的に利用する本などの借出しには近くの分館を，調べものや職員への専門的な質問，比較的めずらしい本を探すなどの際には遠くても本館を利用すること，従って，利用頻度は分館が高く，本館は低いことを前提としている。しかし中井らの研究により，疎住地においては自家用車の普及により距離に対する抵抗が少なくなり，遠方でも大規模館を利用する傾向が強まっていることが明らかにされている。

この章では，石狩市民図書館に利用登録している市民の利用館選択や利用行動を捉えることにより，大・中・小の規模の異なる複数の図書館が存在し選択可能な状況下で，それぞれの利用需要はどのように生起し，差別化されているかを考察し，図書館施設の階層的な構成手法が前提としている考え方が通用しなくなっているかについて検証する。また，大規模館の選択と関連の強い変数は何であるかを，7種の説明変数を用いた二項ロジットモデルにより推定する。

4.1　調査の概要

4.1.1　調査地域の概要

札幌市では 10 区から成る面積 1,121.12 km²の市域に，中央区の中央図書館（蔵書約 70 万冊）と，中央区を除く 9 区に設けられている地区図書館（蔵書約 8 万冊），および区民センター図書室 7 館と地区センター図書室 20 館（ともに蔵書約 3 万冊）による 3 段階の図書館ネットワークが整備されている[1)]。

石狩市と隣接する札幌市の北側郊外部に位置する北区と手稲区においては，両区に地区図書館が 1 館ずつ，北区に区民センター図書室が 1 館，地区センター図書室が 3 館，手稲区に地区センター図書室が 2 館設置されているうえに，札幌市中央図書館よりも近距離に市外在住者にも利用を許す約 18 万冊規模の蔵書をもつ石狩市民図書館本館が存在している。両区のほとんどの住民は 2 km 以内に地区センター図書室か区民センター図書室, 7 km 圏内に地区図書館が存在し，隣接市の石狩市民図書館本館までの距離は 2.5～10 km で，複数の異なるタイプの図書館から利用館を選択できる状況にある（図 4-1）[2)]。

北区と手稲区は札幌市の中でも，公共交通よりも自家用車による移動が便利な郊外部に位置し，石狩市民図書館の方が札幌市中央図書館より近いこと，石狩市が市外在住者にも制約なく利用登録を認めていることから，広い駐車場を備えた石狩市民図書館に利用登録している市民が多い。2006 年 6 月 22 日時点における石狩市民図書館の登録者数は 34,906

人であるが，市内在住者は 18,426 人（52.8%）にとどまり，市外在住者の 78.4%にあたる 12,927 人を北区と手稲区の住民が占めている。

すなわち，両区の住民は広い生活圏を自家用車で移動するライフスタイルを持ち，0～2 km離れた3万冊規模の区民センター図書室または地区センター図書室，0～7 km圏内の8万冊規模の地区図書館，2.5～10 km程度にある18万冊規模の石狩市民図書館本館という規模の異なる複数の図書館から利用館を選択している。

なお，石狩市には2000年竣工の本館のほか，旧石狩市に3分館（蔵書約6千～1万冊），旧2村に2分館（蔵書約5千冊と約8千冊）がある[3)]。

＜図４－１　札幌市北区・手稲区の図書館分布状況＞

Copyright (C) 2000-2007 ZENRIN DataCom CO.,LTD. All Rights Reserved.
Copyright (C) 2001-2007 ZENRIN CO., LTD. All Rights Reserved.

4.1.2　調査の対象

調査では，札幌市両区の住民の施設選択にかかわる利用状況と，比較軸として市内施設の選択に限定される石狩市民の利用状況とを捉えるために，調査対象者は札幌市北区と手稲区に在住する登録者（北区10,399人，手稲区2,528人）と，石狩市在住の登録者18,426人を合わせた31,353人（登録者全体の89.8%）から抽出率6%で無作為抽出した1,881人とした[4)]。

4.1.3　調査の方法

調査は，調査票（巻末資料4）を2006年6月24日に発送し7月5日までに石狩市民図書館本館への返信を依頼する無記名郵送アンケート方式で実施した[5)]。発送したうち146通（石狩市90，北区41，手稲区15）が転居先不明等で戻り，実際に配送されたのは1,735通であった。これに対して最終回収数は604通で，回収率は34.8%である。

石狩市民図書館では，利用登録の際収集する個人情報は「貸出者への督促管理」に限り利用すると規定しており，開館当初から住所，氏名，電話番号以外の情報は収集していない[6)]。従って，母集団である登録者全体における性別，年齢，職業構成等は不明であることから，本調査の回答者が登録者全体を偏りなく代表しているかは確認できない。性別は男性206人（34.1%），女性398人（65.9%）とこの種の調査で一般的にみられるようにやや女性に偏っている。地区別回収率は石狩市32.0%，札幌市北区30.8%，手稲区37.7%とほぼ同率で地区別には偏りがない。

4.2　登録者の利用図書館選択

4.2.1　最近隣館と主利用館

4.1.1 の調査地域の概要において記したように，北区・手稲区の住民は複数の異なるタイプの図書館から利用する館を選択できる環境にある。両区の調査対象者は石狩市民図書館で利用登録しているが，中には調査時点で区内の中小規模館を主に利用しながら必要に応じて石狩市民図書館本館を利用する人がいる。また，石狩市民にも近距離に小規模館がありそれを主に利用している人がいる。

回答者が自宅から最も近いと回答した図書館（以下，最近隣館と呼ぶ）と，主に利用していると回答した図書館（以下，主利用館と呼ぶ）[7)]との関係を，最近隣館，主利用館のいずれかの回答がなかった33人を除く571人について，各館の蔵書冊数，延べ床面積，駐

車場の台数，職員数等を付記してまとめたものが表4-1である。以後の分析・考察に用いる目的から，表4-1より主利用館が石狩市民図書館本館でも最近隣館でもない21人と，石狩市および札幌市北区・手稲区の図書館でもない2人を除く548人を有効回答者として，7類型に整理したものを表4-2に示す。なお，本節以降，石狩市民図書館本館を大規模館，札幌市地区分館を中規模館，札幌市区民センター図書室および同地区センター図書室並びに石狩市の分館をまとめて小規模館と呼称する[8)]。

利用者は，最近隣館を主利用館とするグループAの4類型と，遠方の大規模館を主利用館とするグループBの3類型とに大きく分けられる。うち，主に分析対象とする北区・手稲区民187人は，そもそも石狩市民図書館の利用登録者であるから当然ともいえるが，区内の中小規模館ではなく大規模館を主利用館としている者が124人で，最近隣の中小規模館を主利用館としている者63人のほぼ2倍の人数である。

以下では，距離面で札幌市北区・手稲区の最近隣館利用者（類A2，類A3）と遠方の大規模館利用者（類B2，類B3）の相違を，規模面で小規模館利用者（類A1，類A3）と大規模館利用者（類B1，類B3），中規模館利用者（類A2）と大規模館利用者（類B2）との相違を比較しつつ，その特徴を述べる。なお，類型間の独立性をカイ2乗検定により行うにあたっては，期待度数が5未満のセルが存在する変数項目については，前章同様Fisherの直接法値を用いて検定を行った。

＜表4－1　最近隣館と主利用館＞

主利用館	石狩市	石狩市小規模館					札幌市中規模館		札幌市小規模館						札幌市	その他
	本館	花川南	花川北	八幡	厚田	浜益	新琴似	曙	北区民	新新川	拓北	太平	新発寒	星置	本館	
蔵書冊数（冊）	186,585	10,969	11,890	6,217	5,107	7,833	72,215	80,832	28,704	32,948	32,602	22,991	32,689	30,932	686,665	
延べ床面積（㎡）	3,826.0	92.3	119.7	38.0	45.0	136.5	1,177.0	1,200.2	212.0	213.0	207.0	200.0	256.5	216.8	9,048.7	
駐車場（台）	108(専)	52(専)	26(専)	51(専)	25(専)	100(専)	25(共)	20(専)	99(共)	28(専)	21(専)	27(専)	15(専)	16(専)	82(共)	
最近隣館　職員数（司書）	17(12)	2(2)	2(2)	2(2)	2(0)	2(0)	10(4)	10(3)	4(2)	3(2)	3(3)	3(1)	3(1)	3(1)	67(28)	
1石狩市民図書館（本館）	119						1								2	
2花川南分館	91	31	2				1									
3花川北分館	74	1	22													1
4八幡分館	15			6												
5厚田分館					1											
6浜益分館	1					1										
7新琴似図書館	40	1					13				1					
8曙図書館	20							18					1		1	
9北区民センター図書室															1	
10新琴似・新川地区センター	12									3						
11拓北・あいの里地区センター	28										20	1				1
12太平・百合が原地区センター	17						3					6				
13新発寒地区センター図書室	1							1					1		1	
14星置地区センター図書室	6							1						2		
15上記以外の図書館	1															1
合　計	425 (74.4)	65 (11.4)					38 (6.7)		35 (6.1)						5 (0.9)	3 (0.5)

＊1　最近隣館、主利用館のいずれかが不明の者33人を除く、571人が対象。
＊2　蔵書冊数2006年3月末現在、職員数は2006年5月1日現員数を示す。

＜表4－2 類型別概要＞

類　型		在住地	最近隣館	主利用館	人数(%)	累積比率(%)
グループA	類A0	石狩市	大規模館	大規模館	119 (21.7)	21.7
	類A1	石狩市	小規模館	小規模館	61 (11.1)	22.6
	類A2	札幌市	中規模館	中規模館	31 (　5.7)	
	類A3	札幌市	小規模館	小規模館	32 (　5.8)	
グループB	類B1	石狩市	小規模館	大規模館	181 (33.0)	55.7
	類B2	札幌市	中規模館	大規模館	60 (10.9)	
	類B3	札幌市	小規模館	大規模館	64 (11.7)	

＊1 表1から主利用館が石狩市民図書館本館でも最近隣館でもない21人と、石狩市および札幌市北区・手稲区の図書館でもない2人を除く548人が対象。
＊2 札幌市民で最近隣館が本館である者、および類A3で石狩市の小規模分館を主利用館とする者はいない。

4.2.2 類型別の利用者属性

表4-3から類A0を除き，類型別に性別，年齢階層別，職業別構成をまとめたものが表4-3である。

性別では，各類型間に男女差はなく(χ^2＝9.965, df=5, p>.05），主利用館の選択が性別により左右されているとはいえない。

年齢別では，北区・手稲区民においては近くの中規模館を利用している類A2と遠方の大規模館を利用している類B2の間（χ^2＝6.502, df=5, p>.05），近くの小規模館を利用している類A3と遠方の大規模館を利用している類B3の間（χ^2＝3.268, df=5, p>.05）には有意な差はない。また，石狩市民においても近くの小規模館を利用している類A1と，大規模館を利用している類B1の間には有意な差はなく(χ^2＝6.716,df=5, p>.05），主利用館の選択が年齢により左右されているとはいえない。

職業別では，北区・手稲区民の中規模館利用者類A2と大規模館利用者類B2の間（χ^2＝7.226, df=5, p>.05），小規模館利用者類A3と大規模館利用者類B3の間（χ^2＝4.728, df=5, p>.05）には差はない。また，石狩市民の小規模館利用者類A1と大規模館利用者類B1の間にも差はなく(χ^2＝8.912, df=5, p>.05），主利用館選択が職業により左右されているとはいえない。

以上から,近くの中小規模館,遠方の大規模館のどちらを利用するかの利用館選択には,性，年齢，職業による影響があるとはいえない。

＜表4－3　性別･年齢･職業＞

単位：　人（%）

属性 ＼ 類型		グループA			グループB		
		類A1	類A2	類A3	類B1	類B2	類B3
性別	男　性	13 (21.3)	14 (45.2)	8 (25.0)	55 (30.4)	25 (41.7)	17 (26.6)
	女　性	48 (78.7)	17 (54.8)	24 (75.0)	126 (69.6)	35 (58.3)	47 (73.4)
年齢	20歳未満	8 (13.1)	4 (12.9)	6 (18.8)	26 (14.4)	6 (10.0)	12 (18.8)
	20～29歳	2 (3.3)	4 (12.9)	3 (9.4)	15 (8.3)	8 (13.3)	5 (7.8)
	30～39歳	8 (13.1)	4 (12.9)	9 (28.1)	27 (14.9)	18 (30.0)	11 (17.2)
	40～49歳	7 (11.5)	4 (12.9)	6 (18.8)	36 (19.9)	11 (18.3)	19 (29.7)
	50～59歳	15 (24.6)	7 (22.6)	4 (12.5)	37 (20.4)	11 (18.3)	12 (18.8)
	60歳以上	21 (34.4)	8 (25.8)	4 (12.5)	40 (22.1)	6 (10.0)	5 (7.8)
職業	自営業	1 (1.6)			7 (3.9)	2 (3.3)	5 (7.8)
	勤務者	10 (16.4)	10 (32.3)	8 (25.0)	52 (28.7)	27 (45.0)	16 (25.0)
	主　婦	28 (45.9)	7 (22.6)	14 (43.8)	62 (34.3)	18 (30.0)	24 (37.5)
	学　生	3 (4.9)	3 (9.7)	6 (18.8)	20 (11.0)	5 (8.3)	10 (15.6)
	無　職	14 (23.0)	9 (29.0)	3 (9.4)	26 (14.4)	7 (11.7)	3 (4.7)
	その他	5 (8.2)	2 (6.5)	1 (3.1)	14 (7.7)	1 (1.7)	6 (9.4)
合　計		61 (100.0)	31 (100.0)	32 (100.0)	181 (100.0)	60 (100.0)	64 (100.0)

＊1　表2から類A0（119人）を除いた429人が対象。

4.2.3　利用目的・頻度

主利用館を利用する目的を7つの選択肢の中から順位をつけて2つ選んでもらった結果を類型別にまとめたものが表4-4であり，利用頻度の回答結果が表4-5である。

4.2.3.1　利用目的

図書館利用の主目的（第1順位）は，どの類型においても「資料の借出し」が最も多い。北区・手稲区民の中規模館利用者類A2と大規模館利用者類B2の間では主目的の分布に差はない（χ^2＝6.765, df=4, p>.05）。同様に，小規模館利用者類A3と大規模館利用者類B3の間（χ^2＝5.047, df=4, p>.05），石狩市民の小規模館利用者類A1と大規模館利用者類B1の間（χ^2＝0.859,df=5, p>.05）にも主目的の分布に差はない。また，副次目的（第2順位）での分布にも類A2と類B2の間（χ^2＝3.590, df=5, p>.05），類A3と類B3の間（χ^2＝5.170, df=5, p>.05），類A1と類B1の間（χ^2＝6.400, df=6, p>.05）に差はない。

本結果から，大・中・小規模館の中から主利用館を選択するに際しては，利用目的は影響を与えないことがわかった。このことは，遠方の大規模館を主利用館とするグループBでは，「日常的な借出し利用には近くの分館，調べものには遠くても本館」という伝統的な階層的図書館整備手法の前提としている考え方が通用しないことを意味している。しかし，近隣の中小規模館を主利用館とするグループAについては，本調査結果からは判断できない。

4.2.3.2　利用頻度

グループAでは右列（最近隣館）が主利用館，グループBでは左列（大規模館）が主利用館である。

主利用館の列をみると，「月に2ー3回」がどの類型においても最も多く，前項の館の規模によらず借出しを主目的として利用している傾向からも，距離や図書館規模に関係なくほぼ貸出期限（2週間）ごとに図書館に行く利用者が多いことがわかる。特に，北区・手稲区民の類B2，類B3では他の類型よりもこの頻度で利用している者の割合が高い。しかし，近隣の中小規模館を主利用館としているグループAと遠方の大規模館を主利用館としているグループBの間には利用頻度に差はない（$\chi^2=6.775, df=5, p>.05$）。このことから，図書館への距離が利用頻度に影響しているとはいえないことが明らかになった。

また，使い分けという観点では，グループA，グループBの双方で過半数の人が「年に数回」ないし「それ以下」の頻度でもう一方の館（グループAでは遠方の大規模館，グループBでは最近隣の中小規模館）を利用していることが示された。

＜表4－4　利用目的＞

単位：　人（%）

類　型	グループA						グループB					
	類A1		類A2		類A3		類B1		類B2		類B3	
利用目的	1位	2位	1位	2位	1位	2位	1位	2位	1位	2位	1位	2位
本・雑誌・視聴覚資料を借りるため	51 (85.0)	5 (10.4)	23 (74.2)	2 (7.4)	30 (93.8)	1 (3.8)	153 (85.0)	16 (9.7)	50 (83.3)	8 (14.8)	55 (85.9)	5 (8.2)
館内での読書や視聴覚資料を利用するため	2 (3.3)	12 (25.0)	1 (3.2)	11 (40.7)	1 (3.1)	10 (38.5)	4 (2.2)	44 (26.7)	2 (3.3)	17 (31.5)		14 (23.0)
図書館の資料で調べ物をするため	2 (3.3)	18 (37.5)	6 (19.4)	5 (18.5)	1 (3.1)	7 (26.9)	8 (4.4)	49 (29.7)	3 (5.0)	11 (20.4)	4 (6.3)	18 (29.5)
勉強や仕事の作業場所として使うため	3 (5.0)		1 (3.2)	3 (11.1)			7 (3.9)	13 (7.9)	1 (1.7)	5 (9.3)	2 (3.1)	6 (9.8)
図書館のイベント（行事）に参加するため		3 (6.3)		1 (3.7)				4 (2.4)				1 (1.6)
家族や友人に付き添って	2 (3.3)	9 (18.8)		5 (18.5)		8 (30.8)	7 (3.9)	37 (22.4)	4 (6.7)	13 (24.1)	3 (4.7)	17 (27.9)
その他		1 (2.1)					1 (0.6)	2 (1.2)				
合　計	60 (100.0)	48 (100.0)	31 (100.0)	27 (100.0)	32 (100.0)	26 (100.0)	180 (100.0)	165 (100.0)	60 (100.0)	54 (100.0)	64 (100.0)	61 (100.0)

＊1　利用目的が不明の者を除く。

＜表4－5　利用頻度＞

単位：人（%）

類　型	グループA						グループB					
	類A1		類A2		類A3		類B1		類B2		類B3	
利用頻度	石狩本館	◎石狩分館	石狩本館	◎札幌地区図	石狩本館	◎札幌区民セ	◎石狩本館	石狩分館	◎石狩本館	札幌地区図	◎石狩本館	札幌区民セ
ほとんど毎日							3 (1.7)	1 (0.6)			1 (1.6)	
週に1回程度		10 (16.4)	1 (3.2)	4 (13.3)		4 (13.8)	25 (14.0)	4 (2.5)	4 (6.8)		2 (3.1)	
1ヶ月に2～3回	6 (12.5)	22 (36.1)	2 (6.5)	10 (33.3)	5 (16.1)	12 (41.4)	59 (33.0)	16 (10.2)	31 (52.5)	1 (2.0)	28 (43.8)	4 (7.1)
1ヶ月に1回程度	15 (31.3)	12 (19.7)	5 (16.1)	8 (26.7)	6 (19.4)	7 (24.1)	27 (15.1)	18 (11.5)	11 (18.6)	7 (14.3)	15 (23.4)	7 (12.5)
年に数回	18 (37.5)	15 (24.6)	19 (61.3)	8 (26.7)	17 (54.8)	6 (20.7)	51 (28.5)	59 (37.6)	13 (22.0)	16 (32.7)	18 (28.1)	21 (37.5)
それ以下	7 (14.6)	2 (3.3)	4 (12.9)		3 (9.7)		14 (7.8)	43 (27.4)		20 (40.8)		13 (23.2)
一度も行ったことがない	2 (4.2)							16 (10.2)		5 (10.2)		11 (19.6)
合　計	48 (100.0)	61 (100.0)	31 (100.0)	30 (100.0)	31 (100.0)	29 (100.0)	179 (100.0)	157 (100.0)	59 (100.0)	49 (100.0)	64 (100.0)	56 (100.0)

＊1　館種の◎は主利用館を示す。
＊2　利用頻度不明者を除く。

4.3　交通手段と図書館への行き方

ここでは，札幌市北区・手稲区の利用者が遠方の大規模館あるいは最寄りの中小規模館をどのように選択利用しているかを明らかにするために，類A2，類A3（グループA）および類B2，類B3（グループB）を分析の対象とする。

4.3.1　来館時に利用する交通手段と所要時間

大規模館と最近隣館への主な交通手段と平均所要時間をまとめたものが表4-6である。複数の交通手段を組み合わせて使う人には最も長い時間を要するもの1つと，全体の所要時間を回答してもらった。表ではグループAは右列，グループBは左列が主利用館である。

最近隣館を主利用館とするグループAに属する北区・手稲区民のうち，小規模館を利用している類A3では自転車と徒歩とで6割を超えているものの残りの者は自家用車利用であり，中規模館利用の類A2では自家用車利用が5割を超えている。5分や7分程度であっても車で来館するというのが自家用車普及率の高い地域における一般的な利用行動となっているといえよう。その意味で小規模館といえども専用で20台程度の駐車場を備える札幌市の整備方針は合理的と考えられる。また，これらの人が時折大規模館を訪れる際にも自家用車利用であり20分以内に到着できていること，大規模館を選択している北区・手稲区民の類B2，類B3ともほとんど全員が自家用車利用であり平均移動時間17分程度で到着していることから，当該地域における平均的な走行速度から判断して，大規模館の利用圏域は道路距離およそ12kmまで拡大していることが窺える。

＜表4－6　交通手段と平均所要時間＞

類　型	グループA						グループB					
	類A1		類A2		類A3		類B1		類B2		類B3	
交通手段	石狩 本館	◎石狩 分館	石狩 本館	◎札幌 地区図	石狩 本館	◎札幌 区民セ	◎石狩 本館	石狩 分館	◎石狩 本館	札幌 地区図	◎石狩 本館	札幌 区民セ
徒歩	3 (6.7) 22.5	23 (37.7) 9.3		7 (24.1) 15.0		6 (20.7) 11.2	6 (3.3) 21.7	23 (16.2) 7.3		2 (4.9) 10.0	1 (1.6) －	6 (14.6) 8.6
自転車	7 (15.6) 17.6	18 (29.5) 7.5	3 (10.0) 35.0	6 (20.7) 13.0	1 (3.2) 40.0	12 (41.4) 7.3	37 (20.6) 18.1	50 (35.2) 7.9	1 (1.7) 30.0	5 (12.2) 15.8	2 (3.2) 17.5	9 (22.0) 8.1
自家用車	31 (68.9) 11.7	18 (29.5) 5.8	27 (90.0) 19.4	16 (55.2) 6.8	29 (93.5) 18.4	11 (37.9) 5.1	128 (71.1) 10.8	67 (47.2) 5.6	59 (98.3) 16.6	34 (82.9) 8.0	60 (95.2) 16.4	25 (61.0) 8.1
路線バス	4 (8.9) 30.0	2 (3.3) 10.0			1 (3.2) 120.0		8 (4.4) 18.1	1 (0.7) 5.0				
その他							1 (0.6) 10.0	1 (0.7) 3.0				1 (2.4) 3.0
合　計 全平均	45 (100.0) 14.8	61 (100.0) 7.7	30 (100.0) 20.9	29 (100.0) 10.0	31 (100.0) 22.5	29 (100.0) 7.3	180 (100.0) 13.0	142 (100.0) 6.7	60 (100.0) 16.9	41 (100.0) 8.9	63 (100.0) 16.4	41 (100.0) 8.0

＊1　館種の◎は主利用館を示す。
＊2　交通手段、所要時間のいずれかが不明の者を除く。
＊3　上段数値：当該交通手段利用者数（人）、中段数値：利用者比率（%）、下段数値：平均所要時間（分）

4.3.2　自家用車の利用可能状況

移動手段の主流が自家用車であったことから，類型別に自家用車の利用可能状況をみたものが表4-7である。

自分専用ではないが何らかの形で自家用車を利用できる者[9] を加えると，平日または休日に自家用車を自由に使える者は回答者全体で66.9%を占め，対象地域のモビリティの高さを示している。類型別には中規模館利用者の類A2で64.5%（20人），小規模館利用者の類A3で59.5%（19人），大規模館利用者の類B2，類B3ではそれぞれ81.7%（49人），73.4%（47人）とグループA（類A2+類A3）の自家用車利用可能者の比率がやや低く，グループB(類B2+類B3)との間に有意差が生じている(χ^2＝5.009,df=1, p<.05）。自家用車の利用可能性と主利用館の選択は関連があるといえる。

自家用車を利用できない者（自家用車がない，自家用車はあるが自由に使えない，運転ができない）がどのような交通手段を利用しているかをみたものが表4-8であり，自家用車を利用できない遠方利用者が自家用車で図書館へ行く際の同伴形態をみたものが表4-9である。

自家用車を利用できない者の交通手段は，近隣の中小規模館を利用しているグループAでは徒歩と自転車が中心で，類A2では8割（徒歩40.0%，自転車40.0%），類A3では全員

（徒歩36.4%，自転車63.6%）がそうである。これに対して遠方の大規模館を利用しているグループBでは，自家用車を利用できない者もほとんどが自家用車に同乗して図書館を利用しており（類B2：90.9%，類B3：82.4%），そのほぼ全員が家族と一緒に図書館に行くと回答している。

＜表4－7　自家用車の利用可能状況＞

単位：人（%）

利用可能状況 ＼ 類型		グループA 類A1	グループA 類A2	グループA 類A3	グループB 類B1	グループB 類B2	グループB 類B3	累積
自分専用の自家用車がある		22 (36.1)	15 (48.4)	7 (21.9)	86 (47.5)	32 (55.3)	35 (54.7)	287 (66.9)
専用でない	平日も休日も自由に使える	5 (8.2)	1 (3.2)	2 (6.3)	4 (2.2)	5 (8.3)	4 (6.3)	
	平日には自由に使える	2 (3.3)	3 (9.7)	7 (21.9)	15 (8.3)	6 (10.0)	4 (6.3)	
	休日には自由に使える	4 (6.6)	1 (3.2)	3 (9.4)	14 (7.7)	6 (10.0)	4 (6.3)	
	自由に使えない	4 (6.6)	1 (3.2)	2 (6.3)	9 (5.0)	3 (5.0)	3 (4.7)	142 (33.1)
自家用車はない		4 (6.6)	1 (3.2)		7 (3.9)	1 (1.7)	2 (3.1)	
車の運転はできない		20 (32.8)	9 (29.0)	11 (34.4)	46 (25.4)	7 (11.7)	12 (18.8)	
合　計		61 (100.0)	31 (100.0)	32 (100.0)	181 (100.0)	60 (100.0)	64 (100.0)	429 (100.0)

＜表4－8　自家用車を利用できない者の移動交通手段＞

単位：人（%）

交通手段 ＼ 類型	グループA 類A1	グループA 類A2	グループA 類A3	グループB 類B1	グループB 類B2	グループB 類B3
徒歩	15 (53.6)	4 (40.0)	4 (36.4)	2 (3.3)		1 (5.9)
自転車	11 (39.3)	4 (40.0)	7 (63.6)	29 (47.5)	1 (9.1)	2 (11.8)
自家用車		2 (20.0)		22 (36.1)	10 (90.9)	14 (82.4)
路線バス	2 (7.1)			7 (11.5)		
その他				1 (1.6)		
合　計	28 (100.0)	10 (100.0)	11 (100.0)	61 (100.0)	11 (100.0)	17 (100.0)

＊1　自家用車の利用可能状況、及び移動交通手段のいずれかが不明の者を除く。

＜表4－9　自家用車を利用できない
遠方利用者が自家用車で行く同伴形態＞

単位：人（%）

類　型 図書館への行き方	グループB		
	類B1	類B2	類B3
平日に家族と	3 (17.6)	4 (40.0)	2 (16.7)
休日に家族と	12 (70.6)	6 (60.0)	10 (83.3)
平日に友人と	2 (11.8)		
休日に友人と			
合　計	17 (100.0)	10 (100.0)	12 (100.0)

＊1　表4-8の自家用車利用者のうち、図書館への行き方が不明の者を除く。

4.3.3　利用館への行き方

現在の図書館では，一般に休日に家族連れで図書館を訪れる利用者が多いことは日常の利用観察などからも見受けられる。また，前項で「自家用車はない」や「運転ができない」などの者でも遠方の大規模館に自家用車で行っていることから，利用に際しての図書館への行き方を尋ねた結果をまとめたものが表4-10である。

まず，（a）「友人と」は例外的で「一人で」と「家族と」のいずれかであり，平日には「一人で」が，休日には「家族と」が多数であること，（b）近くの中小規模館利用者は「平日に一人で」訪れ，遠くの大規模館利用者は「休日に家族と」訪れていることが明瞭に表れている。

近くの中小規模館利用者であるグループAでは，類A2と類A3の比率はほとんど同じであり，中規模館，小規模館での行き方に差はない（平日：χ^2=1.125, df=2, p>.05, 休日：χ^2=1.194, df=2, p>.05）。また，当然ではあるが大規模館利用者であるグループBに属する北区・手稲区民の類B2と類B3との間にも行き方に差はみられない（平日：χ^2=1.906, df=2, p>.05, 休日：χ^2=0.034, df=1, p>.05）。しかし，グループA（類A2+類A3）とグループB（類B2+類B3）との間には利用館への行き方に差がある(平日：χ^2＝6.566, df=2, p<.05，休日：χ^2＝9.966, df=2, p<.01）。

そこで，グループA（類2A+類A3），グループB（類B2+類B3）の来館形態と交通手段との関係をみたものが表4-11である。近くの中小規模館利用者は平日に一人で自家用車，自転車，徒歩など様々な交通手段により図書館に行っているが，休日には家族同伴での自家用車利用が増えること，遠くの大規模館利用者はほとんど全員（96.7%）が自家用車利

用であり，そのうち約半数（43.9%）が休日に家族と一緒に自家用車を使って図書館へ行っていることがわかる。

＜表4－10　利用館への行き方＞

単位：人（%）

行き方 ＼ 類型		グループA			グループB		
		類A1	類A2	類A3	類B1	類B2	類B3
平日	一人で行く	37 (60.7)	12 (41.4)	14 (50.0)	66 (36.7)	14 (23.3)	17 (26.6)
	家族と行く	14 (23.0)	3 (10.3)	3 (10.7)	28 (15.6)	15 (25.0)	11 (17.2)
	友人と行く	3 (4.9)	1 (3.4)		7 (3.9)		1 (1.6)
休日	一人で行く	3 (4.9)	5 (17.2)	2 (7.1)	23 (12.8)	4 (6.7)	4 (6.3)
	家族と行く	4 (6.6)	7 (24.1)	8 (28.6)	53 (29.4)	27 (45.0)	31 (48.4)
	友人と行く		1 (3.4)	1 (3.6)	3 (1.7)		
合　計		61(100.0)	29(100.0)	28(100.0)	180(100.0)	60(100.0)	64(100.0)

＊1　図書館への行き方が不明の者を除く。

＜表4－11　利用館への行き方と交通手段（札幌市民のみ）＞

行き方 ＼ 交通手段		グループA （類A2＋類A3）			グループB （類B2＋類B3）		
		徒歩	自転車	自家用車	徒歩	自転車	自家用車
平日	一人で	7 (12.5)	8 (14.3)	10 (17.9)			31 (25.2)
	家族と	1 (1.8)	2 (3.6)	3 (5.4)			26 (21.1)
	友人と			1 (1.8)			1 (0.8)
休日	一人で		4 (7.1)	3 (5.4)		1 (0.8)	7 (5.7)
	家族と	3 (5.4)	3 (5.4)	9 (16.1)	1 (0.8)	2 (1.6)	54 (43.9)
	友人と	1 (1.8)	1 (1.8)				
合　計		12 (21.4)	18 (32.1)	26 (46.4)	1 (0.8)	3 (2.4)	119 (96.7)

＊1　Aグループ（類A2＋類A3）123人とBグループ（類B2＋類B3）56人を合算した179人が対象。
＊2　上段数値：当該交通手段利用者数（人）、下段数値：各グループの総和の利用者比率（%）

4.4　主利用館選択モデル

4.2節，4.3節の分析では，遠方の大規模館と最近隣の中小規模館の選択には，性・年齢・職業等の社会経済属性,図書館の利用目的,利用頻度による差異が生じないことを示した。交通手段の面では，中小規模館の選択者は自転車と徒歩を主な交通手段とし，大規模館選択者はほぼ全員が自家用車を利用していることと，大規模館選択者の自家用車利用可能性が有意に高いことを示した。また，北海道は車社会であるといっても，実際には運転免許を持たない人も少なからずおり，こうした人々が家族同伴という利用形態によって遠方の大規模館を利用していることも明らかになった。

本節では札幌市在住者の類A2，類A3（グループA）および類B2，類B3（グループB）を分析の対象とし，大部分の人が自家用車を移動手段とする広域型の生活圏においては，遠方の大規模館が最寄りの中小規模館よりも利用されやすくなることのモデル化を行い，前節までで示された複合的な状況の中で，大規模館の選択と関連の強い変数は何であるかを，二項ロジットモデルを用いて推定する。ロジットモデルは，確率のオッズ比の対数（ロジット）が線形関数で表現される統計モデルを指すが，本節では確率効用理論のもとでこの線形関数が選択肢間の効用差とみなし得るという計量経済学の立場で結果の解釈を行う。すなわち，北区・手稲区における大規模館と中小規模館の選択を，効用にもとづく合理的な選択問題と位置づけ，効用関数における各変数の符号や有意性を検証する。

ロジットモデルの選択肢は，主利用館が大規模館か最近隣館かの二択とした。説明変数を検討するにあたって，4.2節，4.3節の結果を踏まえて，登録者調査からは図書館の利用目的，家族と一緒に図書館へ行くかの来館形態，自由に使える自家用車の有無，回答者の職業，自宅から近いことの評価，自宅から図書館までの時間距離，最近隣館が小規模館か中規模館かなどをモデルの説明変数（表4-12）とし，欠損値を含む回答者を除外した134人を対象にモデルを推定した。

ロジットモデルの推定にはNLOGIT 3.0（Econometric Software, Inc.）を使用した。最尤法による推定で，定数項のみの縮小モデルの対数尤度は-91.06，完全モデルの対数尤度は-71.66であり，尤度比検定量は38.79（自由度7）となるので，全ての説明変数の係数が0であるとする帰無仮説は棄却される。モデルの適合性に関しては，McFaddenのρ^2は0.213であり良好といえる。また,選択確率0.5を閾値として正答率を計算すると76.1%となる（表4-13）。このことからも，モデルによる予測が実際の選択結果とおおむね適合していると考えて良いであろう。

各係数の推定結果を表4-14に示す。登録者の図書館利用特性を示す変数として，来館形態の「家族同伴」は正の符号で有意であり，大規模館の利用と家族一緒に図書館へ行くという行動とは関連があることを示している。一方，「付き添い」目的で利用していることは，係数が正の符号ではあるが有意ではなく，大規模館の選択と関係があるとまではいえ

ない。また，「自宅から近いことの評価」は負の符号で有意であり，当然のことではあるが図書館が自宅から近いことを高く評価する人ほど最近隣館を選択する傾向がある。

自家用車の利用可能性に関する「自家用車」は正の係数が推定されたものの有意ではない。また「主婦」は負の係数が推定され，主婦層が最近隣館を選ぶ傾向があることを示唆するが有意ではない。すなわち，運転免許を持ち，なんらかの形で自由になる自家用車があることや，主婦であることは，大規模館を利用する選択に影響しているとまではいえない。

図書館の特性にかかる変数である「時間距離」は負の係数ではあるが有意ではない。大規模館との時間距離の差が大きくなるほど最近隣館を選択する傾向があるとまではいえない。また，最近隣館の規模における「小規模館」も正の符号ではあるが有意ではなく，最近隣館が小規模館か中規模館かで大規模館の選択確率が変わるとまではいえない。一方，定数項は正の符号で有意である。これは最近隣館の規模や，登録者の特性などとは無関係に，全般的に大規模館を選択する傾向があることを示している。

以上を総括すると，①家族と一緒に図書館に行くという利用行動と大規模館の利用には有意な関連があり，前節までに示した家族一緒に自家用車を使って遠方の大規模館から本を借り出す図書館利用パターンを，個人ベースの図書館選択モデルとしても確認することができた。一方，単に運転できる，自家用車を持っている等の個人単位のモビリティを示した説明変数は十分な説明力を持たず，世帯のモビリティを明らかにするといったような世帯単位での利用行動モデルの必要性が示唆される。しかし，今回の調査票では家族内の運転者の有無を明示的に問うておらず，その種の変数の有効性や世帯単位の利用行動モデルの得失の検証は今後の課題としたい。②正の定数項が有意であったことから，回答者には大規模館に対する無条件の傾斜が存在するといえる。他方，小規模館か中規模館かによって最近隣館と大規模館の選択が有意に変わるとはいえず，大規模館と比べた蔵書の魅力の点で3万冊か8万冊かの規模差は本質的でないことを示している。③従来，施設選択モデルにおいて支配的な要因とみなされてきた距離変数として本章で採用した時間距離は有意ではなかった。これは，移動に要する時間という定義上，図書館への移動手段という要因を含んでいること，その結果として大多数の自家用車利用者に関して最近隣館と大規模館との距離差があまり生じないことが原因と思われる。「自宅から近いことの評価」や「家族同伴」が有意であったことを踏まえると，図書館利用において，距離による選択からライフスタイルによる選択に比重が移りつつあることが示唆される。この世帯を単位とした，ライフスタイルの推移に応じた図書館利用行動については，次章で詳しく取り上げることにする。

＜表4-12　説明変数＞

変数		定義
目的変数		1=問 8において，主利用館が大規模館（石狩市民図書館本館）の者 0=問 8において，主利用館が最近隣館（中小規模館）の者
説明変数	利用目的（付き添い）	1=問 9において，主目的または副次目的が家族の付き添いの者 0=問 9において，それ以外の目的の者
	来館形態(家族同伴)	1=問12において，平日または休日に家族と利用する者 0=問12において，平日または休日に，一人または友人と利用する者
	自家用車の利用可能性（自家用車）	1=問 5において，自分専用または何らかの形で自家用車を自由に使える者 0=問 5において，自家用車を自由に使えない，自家用車はない，車の運転はできない者
	回答者の職業（主婦）	1=問 2において，専業主婦（夫）の者 0=問 2において，それ以外の職業の者
	自宅から近いことの評価	問13における自宅から近いことの点数　（1～5点）
	自宅から図書館までの時間距離	問11における大規模館（石狩市民図書館本館）への所要時間－最近隣館（中小規模館）への所要時間（分）
	最近隣館の規模（小規模館）	1=問 7において，最近隣館が小規模館（区民センター図書室または地区センター図書室）の者 0=問 7において，最近隣館が中規模館（地区図書館）の者

＜表4-13　モデルの予測結果＞

（単位：人）

		予測（モデル）		合　計
		大規模館	最近隣館	
観測	大規模館	66	12	78
	最近隣館	20	36	56
合　計		86	48	134

＜表4-14　パラメータの推定結果＞

	係数	標準誤差	*p*値
定数項	2.6528	1.0812	0.0141
利用目的（付き添い）	0.8349	0.5126	0.1034
来館形態（家族同伴）	1.1197	0.4194	0.0076
自家用車の利用可能性（自家用車）	0.6532	0.4881	0.1808
回答者の職業（主婦）	−0.6915	0.4864	0.1551
自宅から近いことの評価	−0.7760	0.2273	0.0006
自宅から図書館までの時間距離	−0.0503	0.0267	0.0595
最近隣館の規模（小規模館）	0.4383	0.4204	0.2971
	n=134 (n_0=56/n_1=78) $LogL_0$=−91.06 LogL=−71.66 LR=38.79～$\chi^2(7)$ McFadden=0.2130 Percent Correct Prediction 76.11%		

4.5 まとめ

本章では，大・中・小の規模の異なる複数の図書館が存在する地域において，図書館利用者がどのような理由で利用館を選択し，利用行動をしているかについて，自宅からの最近隣館と主利用館とを軸とした類型をもとに分析し，類型ごとの特性を明らかにした。また，札幌市北区・手稲区の住民がどのような条件下で大規模館を選択利用しているかについて，遠方の大規模館あるいは最寄りの中小規模館のどちらを選択するかを選択肢に，7種の説明変数を用いた二項ロジットモデルにより検証した。要点をまとめると以下のようである。

1）最近隣の中小規模館，遠方の大規模館のどちらを利用するかの利用館選択には，性，年齢，職業による影響はない。
2）どの類型でも主利用館を利用する主目的は「資料の借出し」であり，利用目的は大・中・小の規模の異なる図書館から主利用館を選択する要因ではない。すなわち，遠方の大規模館を主利用館とする利用者集団（グループ B）には，「日常的な借出し利用には近くの分館，調べものには遠くても本館」という伝統的な階層的図書館整備手法の前提としている「使い分け」の考え方はあてはまらないことがわかった。
3）最近隣の中小規模館を主利用館としているグループAと遠方の大規模館を主利用館としているグループBの間には利用頻度に差はなく（$\chi^2=6.775, df=5, p>.05$），図書館までの距離，および図書館の規模は利用頻度に影響しているとはいえない。
4）最近隣の小規模館を利用している類 A3 では自転車と徒歩とで 6 割を超えているものの残りの者は自家用車利用であり，最近隣の中規模館利用の類 A2 では自家用車利用が 5 割を超えている。5 分や 7 分程度であっても車で来館するというのが自家用車普及率の高い地域における一般的な利用行動となっているといえる。
5）最近隣の中小規模館利用者が時折大規模館を訪れる際にも自家用車利用であり20分以内に到着できているとともに，大規模館を選択している北区・手稲区民の類B2，類B3ともほとんど全員が自家用車利用であり平均移動時間17分程度で到着している。このことから，当該地域における平均的な走行速度から判断して，大規模館の利用圏域は都市部の密住地においても道路距離およそ12kmまで拡大していることが窺える。
6）自家用車の利用可能性に関しては，遠方の大規模館利用者（類B2＋類B3）と最近隣の中小規模館利用者（類A2＋類A3）との間に有意な差があり（$\chi^2=5.009, df=1, p<.05$），前者は後者よりも自家用車の利用可能性が高い。すなわち，自家用車の利用可能性と主利用館の選択には関連があるといえる。
7）自家用車を利用できない者が遠方の大規模館を利用する際には，ほとんどが自家用車に同乗して移動しており（類 B2：90.9%，類 B3：82.4%），そのほぼ全員が家族と一緒に図書館に行く行動をとっている。すなわち，従来階層的施設構成の根拠の一つであ

った高齢者や幼児・児童などいわゆる交通弱者であっても，家族の車に同乗することにより遠くの大規模館を利用できる状況を生み出しているといえる。

8）最近隣の中小規模館利用者は平日に一人で自家用車，自転車，徒歩など様々な交通手段により図書館に行っているが，休日には家族同伴での自家用車利用が増える。一方，遠くの大規模館利用者はほとんど全員（96.7%）が自家用車利用であり，そのうち約半数(43.9%)が休日に家族と一緒に自家用車を使って図書館へ行っていることがわかる。

9）選択肢を主利用館が遠方の大規模館か最近隣館かの二択とした二項ロジットモデルによる推定結果からは，①登録者の図書館利用特性を示す変数としての「家族同伴」は正の符号で有意であり，遠方の大規模館利用と家族一緒に図書館へ行くという行動とは関連がある，②一方，「自宅から近いことの評価」は負の符号で有意であり，図書館が自宅から近いことを高く評価する人ほど最近隣館を選択する傾向がある，③また，定数項は正の符号で有意であり，最近隣館の規模や登録者の特性などとは無関係に，全般的に遠方でも大規模館を選択する傾向があることがわかった。

註・参考文献

1）札幌市は中央館，地区図書館，区民センター図書室，地区センター図書室の他，6ヶ所の図書コーナー（市役所本庁，3区役所，出張所や地区会館など）を設置しているが，図書コーナー（蔵書約2千冊）は区民センター図書室や地区センター図書室が開設されるまでの暫定的施設の扱いであるため図書館施設からは除外して扱った。なお，札幌市のすべての図書館施設は，通勤・通学者を除く市外在住者には利用登録を認めていない。

2）goo「地図の表示：goo地図」（オンライン），
入手先＜http://map.goo.ne.jp/map.php?MAP=E141.19.18.32N43.10.11.66&ZM=5＞
（最終アクセス2007年10月29日）をもとに作成。

3）2005年10月1日の市町村合併後に石狩市の分館として組み入れられた旧2村の厚田分館と浜益分館は，石狩市民図書館本館から北へそれぞれ43.8㎞，63.1㎞離れているため，図4-2には表示されていない。

4）行政機関の保有する個人情報の保護に関する法律（平成十五年五月三十日法律第五十八号）に基づき，登録者の氏名と住所を本調査のために利用するにあたって，「石狩市情報公開・個人情報保護審査会」（平成18年5月26日開催）による許可を得た。また，筆者らへの個人情報提供を避けるため，調査対象者の抽出・宛名ラベルの作成・発送は石狩市民図書館が行った。

5）調査票は石狩市在住者用と札幌市在住者用（北区・手稲区）の2種類を用いたが，札幌市

在住者用のみを資料4として本文末に掲載した。石狩市在住者用との相違点は, 問10, 問11, 問12においてc, ｄ，eの館種を追加していることである。

6）調査対象者の年齢が不明であるため幼児や児童に調査票を送った場合があるが，そのような場合には本人に代わって保護者が児童の利用行動等を回答してくれるよう付記して依頼した。

7）ここでいう最近隣館とは，回答者の自宅から最も近い図書館をさすが，ユークリッド距離や最短道路距離による客観的判別ではなく回答者の主観的判断による。主観的判断を採用した理由は，回答者の住所を郵便番号の精度でしか特定できないことと，目的地までの距離が遠くとも日常生活動線上にある場合には心理的に遠く感じないことの２つである。また，同じ理由から図書館までの距離尺度には回答者が認知している時間距離を用いることにした。

8）札幌市中央図書館と石狩市民図書館本館はともに自治体内図書館システムを統括する館長と管理機能を備えた図書館であることからこれを区別せず，また札幌市の地区図書館と区民センター図書室，石狩市民図書館分館は，いずれも図書館システムを構成する分館として位置づけられていることからこれらを区別せずに扱った。

9）ここでいう「何らかの形で自家用車を利用できる者」とは，自分で車を運転可能な者の自家用車所有状況を意味しており，自分専用の自家用車がありいつでも使用できる者に，自分専用ではないが平日にも休日にも自由に使える，平日には自由使える，あるいは休日には自由に使える者を加えた自家用車利用可能状況をさす。

第 5 章　広域利用可能地域における世帯レベルの図書館利用行動分析

5.1　調査の概要
　5.1.1　調査対象地域
　5.1.2　調査の方法
　5.1.3　調査の内容
5.2　世帯類型別にみた図書館利用状況
　5.2.1　世帯類型
　5.2.2　世帯単位の図書館利用
　5.2.3　親族世帯における図書館利用
　5.2.4　同伴利用のパターンとその経年推移
5.3　利用者セグメントごとの利用実態
　5.3.1　主利用館
　5.3.2　図書館へ行く交通手段
　5.3.3　徒歩・自転車利用者の世帯内自家用車利用可能状況
　5.3.4　利用目的
5.4　まとめ
註・参考文献

第 5 章　広域利用可能地域における世帯レベルの図書館利用行動分析

この章では札幌市北区新琴似地区において，ある住区ブロックに居住する全世帯の全構成員を対象とする住民調査（巻末資料 6）を行い，世帯を最年少児の年齢で類型分類することにより，ライフステージの進行と図書館利用形態の推移，自家用車の利用可能性と利用館の選択など，家族を単位とした利用行動の実態について明らかにする。

5.1　調査の概要

5.1.1　調査対象地域

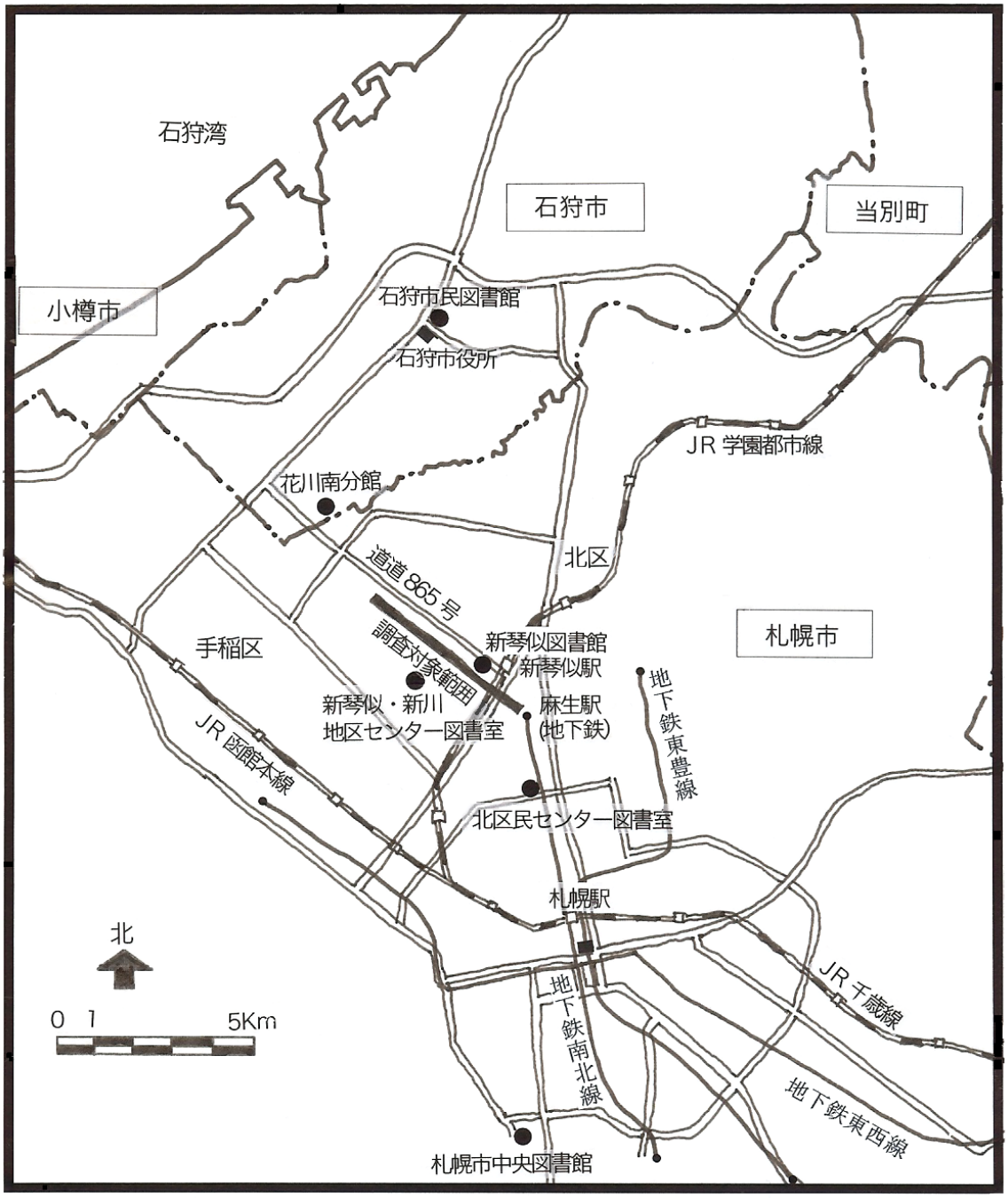
図5-1に調査対象範囲と図書館施設分布状況（図中の黒丸）を示した。

本章では，（1）第4章の石狩市民図書館登録者調査で焦点を当てて分析考察した，札幌市北区の住民でありながら隣接する石狩市民図書館の利用登録者をも対象者に含むこと，（2）中規模図書館，小規模図書館が徒歩や自転車移動によって選択利用可能な地域であること，（3）札幌市の本館である札幌市中央図書館を主な利用館とすることも充分に可能であると考えられる地域であることなどを条件に，調査対象範囲を札幌市北区新琴似地区の，石狩市と札幌市北区麻生方面とを結ぶ幹線道路（道道865号）に沿って南西へ１丁画ブロック入った帯状の住宅地（図中の黒く塗り潰した長方形部分）とした。具体的には札幌市北区北39条西6丁目，7丁目，同北38条西7丁目，8丁目，および札幌市北区新琴似6条1丁目～同17丁目の地区であり，この範囲に在住する全世帯を対象とした。なお，幹線道路沿いとしなかったのは，商業施設など非住宅が多く存在するためである。

調査対象地域から札幌駅や中心部へのアクセスは札幌市営地下鉄南北線麻生駅やJR学園都市線新琴似駅が起点となり，道道865号線が地下鉄麻生駅方面に向かって主要な生活動線を形成している。

図に示すように，調査対象地域近傍には札幌市の地区図書館である新琴似図書館，区民センター図書室である北区民センター図書室，地区センター図書室である新琴似・新川地区センター図書室，および石狩市の花川南分館のいずれかが3km以内に存在する。また，最大でも11km以内に，広い駐車場を備え2000年開館の石狩市民図書館があり，この館で利用登録している市民も多い[1)]。さらに，同じく15km以内に札幌市中央図書館が存在する。このように，調査対象範囲の市民は複数の異なるタイプの図書館から利用館を選択できる状況にある。

＜図５－１　調査対象範囲と図書館施設分布状況＞



5.1.2　調査の方法

市内の特定地域の全世帯を対象とすることから，日本郵便の配達地域指定郵便を利用して，調査票を2008年2月20日に調査地域の全世帯に郵送し，同3月10日までに回答を投函するように依頼した[2)]。地域内の住宅2,977世帯の全数に配布し，782世帯からの回答があったので回収率は26.3%である。調査票には15歳以上の者に家族を代表しての回答を依頼するとともに，回答者本人を含め同居家族5人までの回答も併せて依頼したため，個人としては1,950人分の回答が得られた。

条丁目ごとの配布数，回収数と各図書館施設までの距離を表5-1に示す。居住地から各図書館施設までの距離計測には，goo地図ルート検索を利用したが，条丁目の中心地点からの精度でしか道路距離を算出できないため条丁目の中心番地を出発地点として目的地までの最短経路による道路距離を示した。新琴似6条12丁目，14丁目，15丁目の合計130世帯は新琴似・新川地区センター図書室が，新琴似6条17丁目の50世帯は石狩市の花川南分館が，それ以外の地区の579世帯はいずれも新琴似図書館が自宅から最も近い図書館である。

本章においても，回答者の自宅から最も近い図書館を最近隣館，主に利用している図書館を主利用館と呼称し，札幌市中央図書館と石狩市民図書館を大規模館，新琴似図書館を中規模館，北区民センター図書室および新琴似・新川地区センター図書室，並びに石狩市花川南分館をまとめて小規模館として扱う。

5.1.3　調査の内容

調査内容は社会経済状況，移動手段，図書館利用行動など多岐に亘るが，世帯単位での利用状況，移動交通手段を把握することを目的として家族の人数，自家用車の有無，自家用車の利用可能状況等に関する項目を設けた（巻末資料6）。

世帯の構成員が連れ立って図書館を利用する同伴利用が大きな割合を占めることは第4章で明らかであり，同伴利用の有無は子どもの成長に伴い変化していくことが予想できたので，世帯単位で家族同伴利用のパターンや「ライフステージの進行に伴う利用行動の変化」を捉える目的から，回答者からみた家族構成員すべての続柄，および一緒に行く人を問うとともに，利用実態を分析するために主利用館，図書館への利用交通手段，利用目的などについて個人単位での回答を求めた。

＜表５－１　地区別回収数と各図書館施設までの距離＞

（単位：km）

配布地域	番地（括弧内は中心番地）	世帯			個人	大規模館		中規模館	小規模館		
		配布数（軒）	回収数（軒）	回収率（%）	回収数（人）	札幌市中央図書館	石狩市民図書館	新琴似図書館	北区民図書館	新琴似・新川地区センター	花川南分館
1.札幌市北区北39条西6丁目	1～2(①)	84	15	17.9	31	11.2	9.8	1.1	2.2	2.6	6.0
2.札幌市北区北39条西7丁目	1～3(②)	104	28	26.9	44	11.1	9.7	1.0	2.2	2.5	5.9
3.札幌市北区北38条西7丁目	－	166	32	19.3	59	11.0	10.0	1.3	2.1	2.3	6.2
4.札幌市北区北38条西8丁目	1～2(①)	195	44	22.6	91	10.9	9.9	1.2	2.5	2.2	6.1
5.札幌市北区新琴似6条1丁目	1～6(⑤)	385	77	20.0	146	10.9	9.8	1.0	2.3	2.4	5.9
6.札幌市北区新琴似6条2丁目	1～8(⑧)	108	32	29.6	86	11.2	10.9	0.5	2.9	1.9	5.5
7.札幌市北区新琴似6条3丁目	1～5(③)	41	14	34.1	41	11.3	11.0	0.5	3.0	1.9	5.5
8.札幌市北区新琴似6条4丁目	1～3(①)	62	19	30.6	53	11.6	10.8	0.3	3.2	1.8	5.3
9.札幌市北区新琴似6条5丁目	1～7(①)	128	32	25.0	86	11.5	10.7	0.5	3.2	1.4	5.3
10.札幌市北区新琴似6条6丁目	1～7(⑥)	187	51	27.3	128	11.7	10.4	0.6	4.1	1.5	5.0
11.札幌市北区新琴似6条7丁目	1～7(③)	123	29	23.6	75	11.9	10.6	1.0	3.9	1.3	5.1
12.札幌市北区新琴似6条8丁目	1～8(⑦)	134	34	25.4	90	12.1	10.1	0.9	4.1	1.4	4.7
13.札幌市北区新琴似6条9丁目	1～6(②)	125	41	32.8	109	12.2	10.1	1.1	4.4	1.8	4.7
14.札幌市北区新琴似6条10丁目	1～5(③)	86	22	25.6	59	12.5	9.8	1.2	4.5	1.4	4.4
15.札幌市北区新琴似6条11丁目	1～9(⑦)	163	37	22.7	105	12.6	9.9	1.4	4.4	1.5	4.4
16.札幌市北区新琴似6条12丁目	1～4(①)	133	39	29.3	110	12.8	9.6	1.8	4.8	1.7	4.2
17.札幌市北区新琴似6条13丁目	1～6(④)	152	42	27.6	110	13.2	9.1	2.0	4.7	2.2	3.7
18.札幌市北区新琴似6条14丁目	1～8(①)	151	48	31.8	125	13.7	9.1	2.2	5.4	2.1	3.7
19.札幌市北区新琴似6条15丁目	1～7(③)	150	43	28.7	126	13.5	8.7	2.7	7.2	2.5	3.3
20.札幌市北区新琴似6条16丁目	1～7(⑦)	152	30	19.7	80	14.1	8.7	2.6	7.1	2.8	3.2
21.札幌市北区新琴似6条17丁目	1～7(④)	148	50	33.8	148	14.5	8.2	3.0	6.1	3.9	2.7
99.不明			23		48						
合　計		2,977	782	26.3	1,950						

＊1　網掛け箇所は最近隣館までの距離を示す。

5.2　世帯類型別にみた図書館利用状況

5.2.1　世帯類型

家族の分類には，国勢調査の3分類すなわち親族世帯，非親族世帯，単独世帯を用いる。親族世帯には核家族世帯（夫婦，夫婦と未婚の子，片親と未婚の子）とそれに夫婦の親が同居する三世代世帯とが含まれる。世帯単位での図書館利用の実態を捉える本章の目的から，成員中で最も若い子ども（最年少児）の年齢をもとに，親族世帯を「夫婦または夫婦とその親のみ：類1」，「6歳以下の子どもがいる：類2」，「小学生（7歳から12歳の子ども）がいる：類3」，「中学・高校生（13歳から18歳の子ども）がいる：類4」，「19歳以上の子どもがいる：類5」に分類した。

なお，回答のあった782世帯のうち，住所不明の23世帯，成員の1人以上に回答がなかった61世帯，並びに非親族世帯23世帯を除く675世帯の1,691人を集計対象とした。その内訳は，単独世帯が162（24.0%），親族世帯513（76.0%）であり，類1が193世帯（親族世帯全体の37.6%），類2が74世帯（同14.4%），類3が61世帯（同11.9%），類4が48世帯（同9.4%），類5が137世帯（同26.7%）である。

また，グループ間の独立性をカイ2乗検定により検定するに際して，期待度数が5未満のセルが存在する変数項目についてはこれまで同様Fisherの直接法値を用いた。

5.2.2　世帯単位の図書館利用

「過去1年間に1度でも図書館を利用したことがある」者を利用者とし，世帯分類ごとに，利用者数，構成員の複数が利用している「複数利用」，1人のみ利用している「1人利用」，誰も利用していない「非利用」の状況とそれぞれの世帯数期待値を示したものが表5-2である。ここでいう「複数利用」とは，世帯内に複数の図書館利用者がいることを意味し「親と親」，「親と子」，「子と子」などの組み合わせ全てを複数利用とした。また，「1人利用」とは世帯内に図書館利用者が1人だけいることをいい「親1人」，「子1人」などをまとめて1人利用とした。

類型ごとの回答者総数と利用者数をもとに，世帯規模ごとに1人も利用者がいない確率，1人だけ利用者がいる確率，2人以上利用者がいる確率を計算できる[3)]。これに表5-3に示した類型別・世帯人数別の世帯数をそれぞれ乗じて世帯規模について合計することで類型ごとの複数利用世帯数，1人利用世帯数，非利用世帯数の期待値を算出した。

表5-2によると，全回答者の個人別の利用率（回答者のうち図書館を利用したことがある者の割合）は50.9%（利用者数合計860人÷回答者総数合計1,691人×100）で，類3（61.4%），単独世帯（57.4%），類2（55.3%）の順に高い。全675世帯のうち利用者のいる世帯は計

462世帯（68.4%）であるが，類型別には類4が83.3%と最も高く，単独世帯は57.4%と最も低い。また，複数利用率は類3（73.8%），類2（66.2%），類4（56.3%）の順に高い。実世帯数と期待値を比べると，いずれの類型においても期待値よりも非利用世帯数が多く，1人利用世帯数が少ない。このことは，家族の誰かが図書館を利用していると他の構成員も図書館を利用することが多く，家族の複数が利用する世帯と，誰も利用しない世帯とに分かれる傾向にあることを示している。類4は1人利用世帯数が期待値に近い分布であり，家族の影響を受けず同じ確率で図書館利用の有無を決めるという期待値計算の前提に近い状態であること，すなわち他の類型より家族がばらばらに利用しているといえる。

類型別に親の性別・年齢階層別の利用率を示したものが表5-4である。表では親の年齢層の近さから類2と類3，類4と類5をひと括りにした。まず，類型別に親の年齢階層別構成をみると，類1は子どもが誕生する前の若い世帯，子どものいない世帯，子どもが親元から離れた世帯から構成されていること，類2から類5までの親は最年少児の年齢層をほぼ反映した年齢層構成であることが読み取れる。

性別では，同じ年齢層でも小学生以下の子どものいる（類2＋類3）母親は，子どもがいない（類1）女性や，子どもの年齢がより高い（類4＋類5）母親よりも利用率が高く，逆に類2＋類3の父親は他類型の男性より利用率が低い。また，単独世帯は男女とも比較的利用率が高い。

このように，図書館の利用は個人レベルの要因だけではなく，家族がいるか，子どもが何歳程度かなどの家族構成が影響しているといえる。そこで，次節以降では図書館を一緒に利用しているか，どのような続柄で同伴利用が発生しやすいかなどの分析を行う。

＜表５－２　世帯類型＞

世帯の内訳 ＼ 世帯内利用状況		利用者数	回答者総数	複数利用世帯数	1人利用世帯数	非利用世帯数	世帯数計（内三世代）	世帯数期待値		
								複数利用	1人利用	非利用
1.親族世帯										
類1	夫婦、または夫婦とその親のみ	194	407	68	57	68	193(17)	48.6	94.0	50.4
類2	6歳以下の子どもがいる	161	291	49	6	19	74(5)	53.9	16.3	3.8
類3	小学生（7～12歳の子ども）がいる	137	223	45	4	12	61(3)	44.8	13.2	2.7
類4	中学・高校生（13～18歳の子ども）がいる	84	176	27	13	8	48(12)	27.7	15.2	5.2
類5	19歳以上の子どもがいる	191	432	58	42	37	137(13)	59.0	54.0	24.1
2.単独世帯		93	162	―	93	69	162	―	93.0	69.0
合　計		860	1,691	247	215	213	675(50)	234.0	285.7	155.2

＊1　類1の三世代世帯は「夫婦と親から成る世帯」を指す。

＜表５－３　類型別・世帯人数別世帯数＞

単位：　世帯

世帯人数 類型	2人	3人	4人	5人	合計
類1	176	13	4	―	193
類2	―	26	28	20	74
類3	9	17	26	9	61
類4	3	19	17	9	48
類5	26	71	35	5	137
合　計	215	146	110	43	514

＜表５－４　親の性別・年齢階層別利用率＞

類型	年齢階層	男性		女性	
		利用率	人数	利用率	人数
類1	20～30歳代	45.5%	22	55.2%	29
	40～50歳代	33.3%	45	54.4%	57
	60歳代以上	56.6%	122	46.0%	100
類2＋類3	20～30歳代	33.8%	68	68.1%	94
	40～50歳代	24.5%	49	64.1%	39
	60歳代以上	100.0%	1	―	0
類4＋類5	20～30歳代	―	0	25.0%	4
	40～50歳代	30.9%	81	51.7%	118
	60歳代以上	46.3%	54	42.0%	50
単独世帯	20～30歳代	61.8%	34	45.0%	40
	40～50歳代	50.0%	16	67.7%	31
	60歳代以上	56.3%	16	62.5%	16
合　計		42.9%	508	54.3%	578

＊1　性別、年齢、利用の有無のいずれかが不明の者を除く。
＊2　世帯内における子ども、および祖父母を除く。

5.2.3　親族世帯における図書館利用

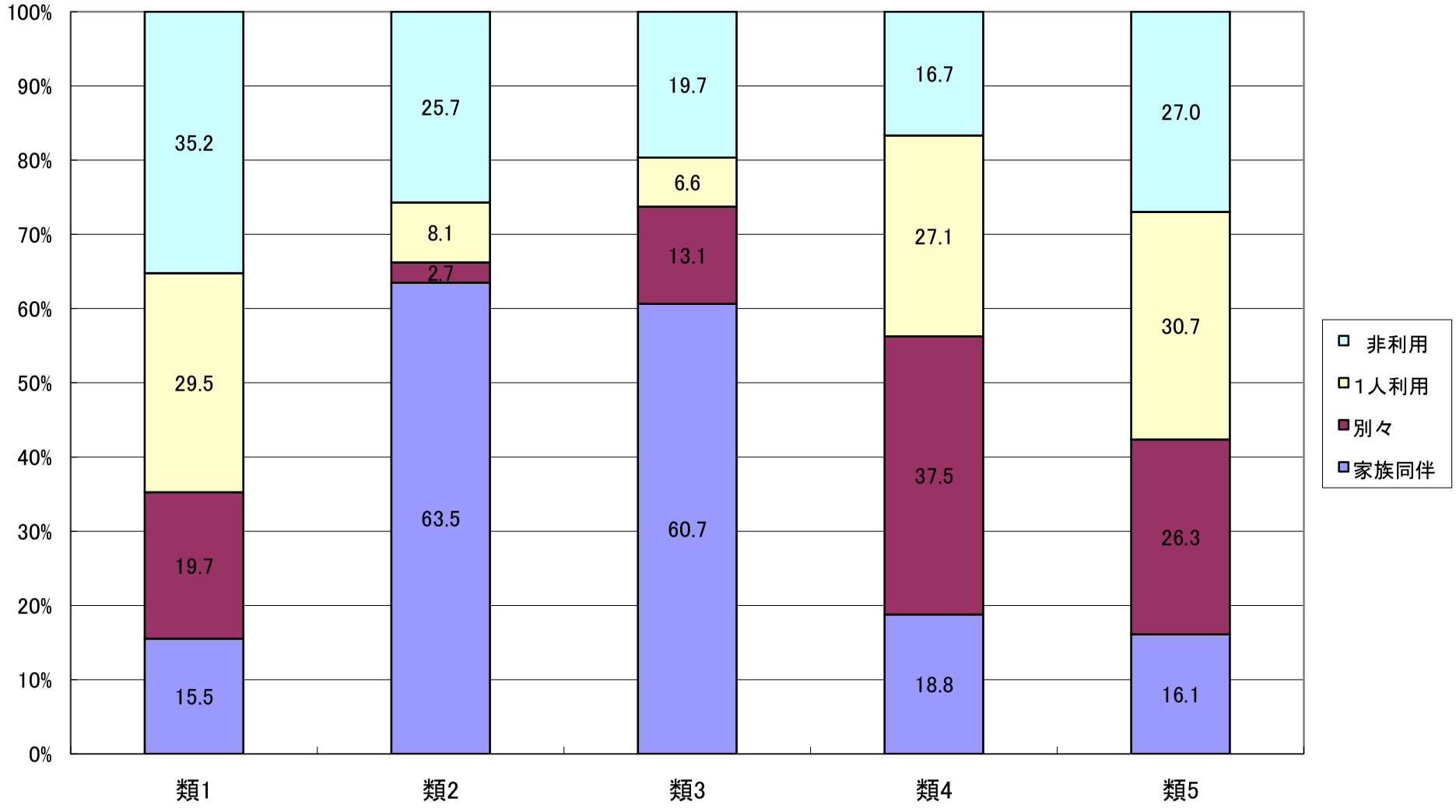
図5-2では類型別の複数利用，1人利用，非利用の世帯構成比を図示した。複数利用については，家族で連れ立って利用している（以下，家族同伴と称する）か，別行動かの内訳も示した。家族同伴利用は類1，類4，類5では15.5～18.8%の世帯にとどまっているが，最年少児が小学生以下の類2と類3では60%強を占め，最年少児が中学・高校生の類4では家族同伴利用は減少し，別々に行く利用が37.5%，1人利用が27.1%に増加する。

表5-5は親族世帯513世帯の1,527人について類型別・続柄別に図書館利用状況をまとめたものである。夫婦，または夫婦とその親のいる世帯（類1）においては，夫と妻の利用傾向は同様で，15%強が夫婦同伴で，35%前後が単独で図書館を利用し，50%前後の人は利用していない。最年少児が就学年齢未満の世帯（類2）と小学生の世帯（類3）においては，母親は家族同伴が過半数を占め，非利用は他の類型に比べて15%以上低く，同伴以外の利用比率も低い。父親は70%程度が非利用者であることが特徴で，利用する者は家族同伴が多い。類2と類3の子どもの利用率は各々62.9%と73.6%であるが，両親のどちらかあるいは両方が図書館を利用する世帯92世帯に限ると173人中146人（84.4%）の子が利用者である。両親のいずれも図書館を利用しない43世帯では子ども70人中20人（28.6%）だけが図書館を利用しており，両親のどちらかあるいは両方が図書館を利用する世帯と両親のいずれも利用しない世帯とでは子どもの利用・非利用に有意な差がある（χ^2=71.739, df=1, p<.01）。これは子どもだけでは図書館利用が発生しにくいことを示唆している。

子どもが中学・高校生の世帯（類4）では，子の家族同伴利用は類3の50.0%から11.4%に減少し，同伴以外の利用が23.6%から50.6%に増加している。それに伴い母親の家族同伴利用も減少し，同伴以外と非利用の比率が類1や類5と同等に戻ることがみてとれる。

最年少児が19歳以上の類5では，子の非利用率は50%を超え家族同伴は例外的となる。父で29.1%，母で32.6%，子の40.8%が家族同伴以外の利用をしているが，母親の非利用率が高くなる一方で父親に図書館利用への回帰がみられることが特筆できる。

＜図５－２　親族世帯における類型別・利用行動別世帯構成比＞



＜表5－5　親族世帯における類型別・続柄別図書館利用＞

単位：人（%）

続柄 類型	父（夫）				母（妻）				子				祖父母				その他				家族同伴利用者数	同伴以外利用者数	非利用者数	合計人数	全世帯数（513世帯）
	家族同伴	同伴以外	非利用	小計	家族同伴	同伴以外	非利用	小計	家族同伴	同伴以外	非利用	小計	家族同伴	同伴以外	非利用	小計	家族同伴	同伴以外	非利用	小計					
類1	30 (15.5)	68 (35.2)	95 (49.2)	193 (100.0)	30 (15.5)	65 (33.7)	98 (50.8)	193 (100.0)	—	—	—	—	—	1 (4.8)	20 (95.2)	21 (100.0)	—	—	—	—	60 (14.7)	134 (32.9)	213 (52.3)	407 (100.0)	193
類2	15 (21.4)	7 (10.0)	48 (68.6)	70 (100.0)	42 (57.5)	5 (6.9)	26 (35.6)	73 (100.0)	74 (52.9)	14 (10.0)	52 (37.1)	140 (100.0)	—	2 (40.0)	3 (60.0)	5 (100.0)	—	2 (66.7)	1 (33.3)	3 (100.0)	131 (45.0)	30 (10.3)	130 (44.7)	291 (100.0)	74
類3	12 (22.6)	4 (7.6)	37 (69.8)	53 (100.0)	32 (54.2)	8 (13.6)	19 (32.2)	59 (100.0)	53 (50.0)	25 (23.6)	28 (26.4)	106 (100.0)	2 (50.0)	— —	2 (50.0)	4 (100.0)	—	1 (100.0)	—	1 (100.0)	99 (44.4)	38 (17.0)	86 (38.6)	223 (100.0)	61
類4	5 (15.2)	2 (6.1)	26 (78.8)	33 (100.0)	9 (19.2)	14 (29.8)	24 (51.1)	47 (100.0)	9 (11.4)	40 (50.6)	30 (38.0)	79 (100.0)	—	3 (20.0)	12 (80.0)	15 (100.0)	—	2 (100.0)	—	2 (100.0)	23 (13.1)	61 (34.7)	92 (52.3)	176 (100.0)	48
類5	12 (11.7)	30 (29.1)	61 (59.2)	103 (100.0)	20 (15.2)	43 (32.6)	69 (52.3)	132 (100.0)	11 (6.2)	73 (40.8)	95 (53.1)	179 (100.0)	—	1 (6.7)	14 (93.3)	15 (100.0)	—	1 (100.0)	—	1 (100.0)	43 (10.0)	148 (34.4)	239 (55.6)	430 (100.0)	137

＊1 続柄、および利用の有無が不明の者を除く。
＊2「家族同伴」は家族と一緒に図書館を利用すること、「同伴以外」は1人で利用するか家族以外と一緒に利用することを指す。

5.2.4　同伴利用のパターンとその経年推移

家族同伴利用の組み合わせパターンを類型別にみたものが表5-6である。小学生以下の子どもがいる類2と類3では，どちらも「母と子」が60%以上であり，「両親と子」の比率も約21%と同等である。類4になっても家族同伴利用では「母と子」「両親と子」が多く，母親が家族同伴利用のキーパーソンといえる。一方，「父と子」は稀であり，さらに祖父母を含んだ同伴利用はその他のうち1例（祖父母と子の利用）に過ぎず，高齢者が孫と利用したり，三世代で図書館を利用したりする行動は無視できるほど少ないといえる。

＜表5－6　複数利用世帯における家族同伴利用の組み合わせパターン＞

単位：世帯（%）

パターン 類型	家族同伴					世帯数 （145世帯）
	夫婦（父と母）	両親と子	母と子	父と子	その他	
類1	30 (100.0)	－	－	－	－	30 (100.0)
類2	3 (6.4)	10 (21.3)	29 (61.7)	2 (4.3)	3 (6.4)	47 (100.0)
類3	1 (2.7)	8 (21.6)	23 (62.2)	3 (8.1)	2 (5.4)	37 (100.0)
類4	1 (11.1)	4 (44.4)	4 (44.4)	－	－	9 (100.0)
類5	10 (45.5)	1 (4.6)	9 (40.9)	1 (4.6)	1 (4.6)	22 (100.0)

＊1「その他」の内訳は、「子と子利用」5世帯、「祖父母と子利用」類3での1世帯である。

表5-7は親族世帯における世帯内利用状況を類型別にまとめたものである。この表のデータをもとに家族のライフステージの進行に伴い，属性別の利用・非利用，同伴利用の比率とその組み合わせがどのように変化するかを図示したものが図5-3である。図では各類型における特徴的なパターンである「夫婦」，「親と子」，「親子別々」，「親単独」，「子単独」，「非利用」の6つのカテゴリの構成比を示し，類型間で起こるカテゴリの推移を示した。また，当然のことながら同一世帯のライフステージの進行を追っているわけではないので，図5-3の矢印（10%以上は太線）で示した類型間の推移は模式的・類推的なものである。なお，5.2.2節の親の年齢階層別構成の箇所で記したように，類1は若い夫婦，中年の夫婦，高齢の夫婦から構成されているので，世帯の成長に伴う利用形態の推移を論ずる本節においては，夫の年齢によって類1A（20～30歳代），類1B（40～50歳代），類1C（60歳以上）に細分する。

＜表５－７　親族世帯における類型別世帯内利用状況表＞

		類1A：若い夫婦(20～30歳代)＜28世帯＞												類1B：中年の夫婦(40～50歳代)＜62世帯＞												類1C：高齢の夫婦(60歳代以上)＜103世帯＞													利用世帯数		非利用世帯数	全世帯数
		夫婦			夫婦別に			片側のみ			非利用			夫婦			夫婦別に			片側のみ			非利用			夫婦				夫婦別に		片側のみ			非利用							
類1	世帯数	5			3			11			9			8			12			16			26			18				22		30			33				125		68	193
		夫利用	妻利用	非利用	夫利用	妻利用	非利用	夫利用	妻利用	非利用	夫	妻	祖父母	夫利用	妻利用	非利用	夫利用	妻利用		夫利用	妻利用	非利用	夫	妻	祖父母	夫利用	妻利用	祖父母	非利用	夫利用	妻利用	その他	夫利用	妻利用	非利用	夫	妻	祖父母		利用者数	非利用者	非利用者数	総人数
	人数	5	5	0	3	3	0	4	7	11	9	9	1	8	8	3	12	12		4	12	17	26	26	9	18	18	1	3	21	21	2	23	7	32	33	33	1		194	66	147	407

		家族同伴＜47世帯＞															複数が別々に利用＜2世帯＞															1人利用＜6世帯＞									利用世帯数		非利用世帯数	全世帯数
		夫婦			両親+子			母と子			父と子			その他			夫婦			両親＋子			母と子			父と子			子のみ			夫のみ			妻のみ			子のみ					
類2	世帯数	3			10			29			2			3			0			0			0			1			1			0			3			3			55		19	74
		子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子の利用	子の非利	子の非利用	
	子の人数	0	0	4	20	0	0	45	3(4)	8	3	0	0	6	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	(2)	0	0	0	0	0	0	6	0	3	4	88	26	26	

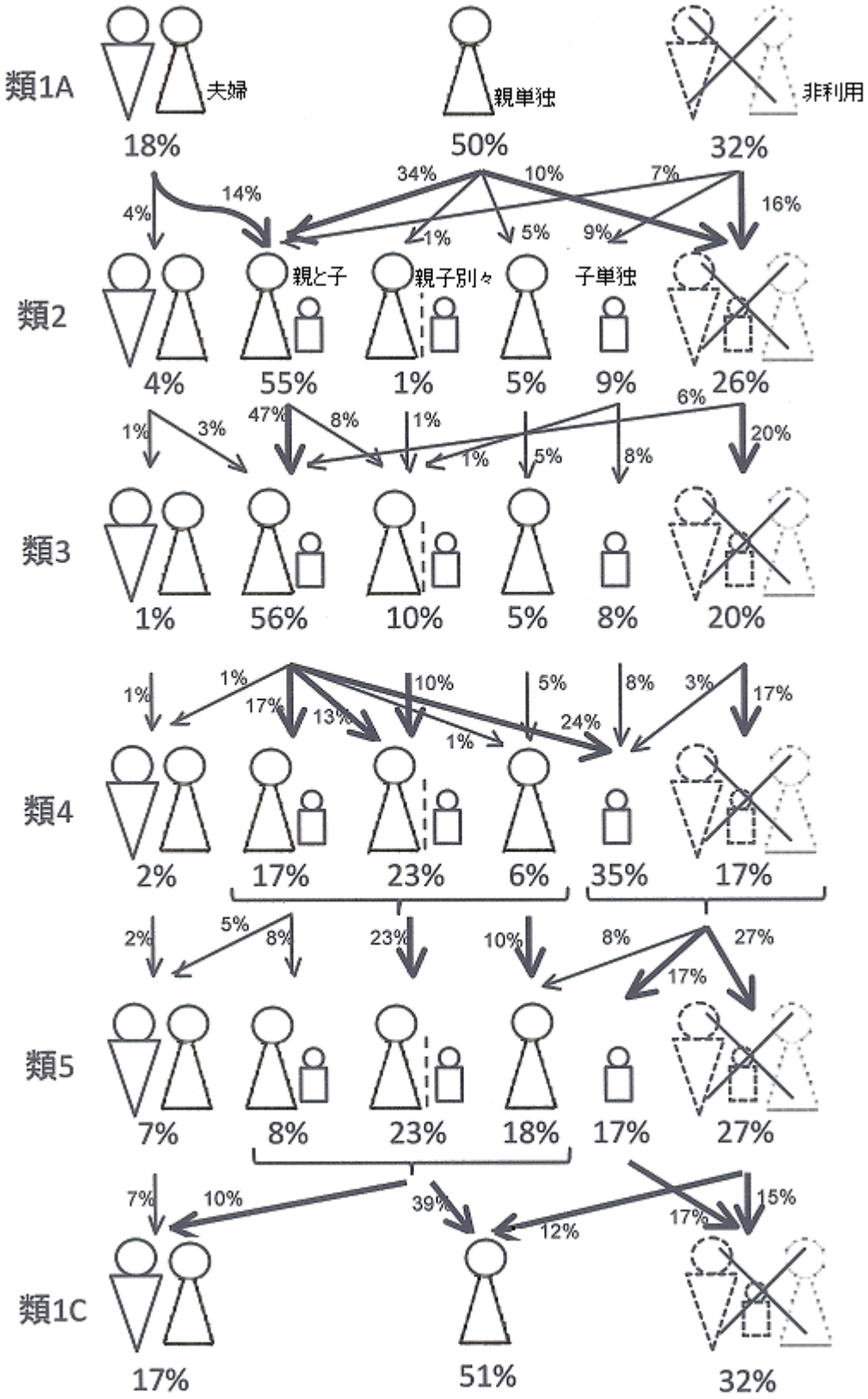
		家族同伴＜37世帯＞															複数が別々に利用＜8世帯＞															1人利用＜4世帯＞									利用世帯数		非利用世帯数	全世帯数
		夫婦			両親+子			母と子			父と子			その他			夫婦			両親＋子			母と子			父と子			子のみ			夫のみ			妻のみ			子のみ					
類3	世帯数	1			8			23			3			2			0			2			3			1			2			1			2			1			49		12	61
		子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子の利用	子の非利	子の非利用	
	子の人数	0	3	0	11	(2)	1	33	(5)	1	6	0	0	1	(2)	0	0	0	0	0	1(3)	0	0	2(2)	1	0	2	0	0	4	0	0	0	1	0	0	3	0	1	0	78	7	18	

		家族同伴＜9世帯＞															複数が別々に利用＜18世帯＞															1人利用＜13世帯＞									利用世帯数		非利用世帯数	全世帯数
		夫婦			両親+子			母と子			父と子			その他			夫婦			両親＋子			母と子			父と子			子のみ			夫のみ			妻のみ			子のみ					
類4	世帯数	1			4			4			0			0			0			1			10			0			7			0			3			10			40		8	48
		子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子の利用	子の非利	子の非利用	
	子の人数	0	1	0	5	0	0	4	(1)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	(1)	1	0	7(5)	2	0	0	0	0	10(5)	2	0	0	0	0	0	5	0	8(2)	10	49	20	10	

		家族同伴＜22世帯＞															複数が別々に利用＜36世帯＞															1人利用＜42世帯＞									利用世帯数		非利用世帯数	全世帯数
		夫婦			両親+子			母と子			父と子			その他			夫婦			両親＋子			母と子			父と子			子のみ			夫のみ			妻のみ			子のみ					
類5	世帯数	10			1			9			1			1			2			15			12			5			2			8			14			20			100		37	137
		子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子同伴	子単独	子非利用	子の利用	子の非利	子の非利用	
	子の人数	0	6	6	1	0	0	9	1	2	1	0	1	0	1(1)	0	0	0	3	0	19	1	0	12(2)	2	0	6	2	0	4	0	0	0	10	0	1	16	0	19(1)	6	84	49	46	

＊１　子単独の()内は友人との同伴利用を外数で示す。
＊２　その他は「子と子」の利用と「祖父母2名と子1名」(類3で1件)である。
＊３　子(同伴)は家族との同伴利用に限る。
＊４　本文中の図においては、「母と子」利用の絵には「父と子」利用を、「母と子」別々利用の絵には「夫婦」、「両親と子」、「母と子」、「父と子」の別々利用、および「夫のみ」、「妻のみ」の１人利用を、また、「子のみ」の絵には家族同伴利用の「その他」、複数が別々に利用、および１人利用の「子のみ」を統合している。

＜図５－３　親族世帯における図書館利用パターンの経年推移＞



若い夫婦世帯である類1Aでは，18%の世帯が夫婦同伴で利用し，32%の世帯は夫婦とも利用していない。残る50%の世帯の内訳は夫婦が別々に図書館を利用する（11%）と妻のみ（25%）または夫のみ（14%）の単独利用である。

子どもが生まれてから学齢期前までの類2では，全世帯の55%で「親と子」の同伴利用が起こる。父親の利用が減少することから，類1Aから類2への推移では，類1Aで夫のみ利用していた世帯の10%分が非利用に転じる一方で，それらを含む「非利用」の世帯のうち7%分の世帯で子どもを図書館に連れて行くために母親が図書館利用者に転じたとみることができる。

これが類3に進行すると，「非利用」世帯からさらに6%の母親が利用者に転換して「親と子」の同伴利用となる一方で，「親子別々」が1%から10%に増加する。類2と同様に，小学生の間も子どもを連れて行くために非利用の母親が図書館利用に転じる一方で，子だけの単独利用や友人との利用による親と別れた利用が年長児から始まると考えられる。

最年少児が小学生である類3から中学・高校生である類4への進行において最も大きな変化を示している。すなわち「親と子」が56%から17%へと減少するが，それは親が利用を止め「子だけの利用」に24%（内，母親分は19%）が，「親子別々」に13%が移行することに起因している。

最年少の子が19歳以上の類5に進行すると，「親単独」が6%から18%，「非利用」が17%から27%へと増加し，「子単独」が35%から17%へと減少する。この間の変化は子世代の利用減少と，父親の図書館利用の復活または新規利用の開始に特徴づけられる。

これら類2から類5と並行する形で，子どものいない夫婦世帯である類1Bが存在する（図5-3では省略）が，「夫婦」同伴利用が13%，「親単独」が45%，「非利用」が42%であり，最も図書館を利用しない世帯類型といえる。

類5において子どもが親元を離れたり，類1Bの夫婦の加齢が進むと類1Cに移行する。類5からの移行としてみると，子の利用が無くなる分「非利用」が増加するが，親の世代の利用水準は維持され，さらに類4から類5への変化にみられた男性の利用率の回復が続いている。

以上の結果から，家族のライフステージの進行と図書館利用・非利用の変化や，同伴利用パターンの推移について以下のことが明らかになった。（1）子どものいない若い夫婦は18%の世帯が夫婦で同伴して，11%の世帯が夫婦別々に，25%の世帯で妻のみが，14%の世帯で夫のみが利用し，32%の世帯が夫婦とも利用していない，（2）子どもの誕生から小学生時代までは56%の世帯で家族同伴利用がみられ，主に母親が子どもを連れて一緒に利用している，（3）親が図書館を利用する世帯では利用しない世帯に比べて顕著に子どもの図書館利用が多い，（4）親の図書館利用が子の利用につながったケースと，子のために親が図書館利用を始めたケースが想定できるが，後者は13%程度と考えられる，（5）最年少児が中学生に成長すると，子どもが親と別行動で利用するようになり，図書館利用における親離れが進行する，（6）子どもとの同伴利用の解消に伴い約19%の母親は利用を停止し

てしまう，（7）最年少児が19歳以上になると子の利用が減り始め，非利用世帯が増加に転じる。その一方で父親の図書館利用の復帰が起こる，（8）子どもが独立すると非利用世帯はさらに増加するが，夫の利用復帰傾向は継続する，（9）高齢者が子世代・孫世代と一緒に図書館を利用する例はほとんどない，などのことがわかった。

5.3　利用者セグメントごとの利用実態

前節のライフステージに応じた家族単位の利用行動から，図書館利用は「成人の単独利用」，「夫婦の同伴利用」，「親と子の同伴利用」，「子の単独利用（子ども同士の利用を含む）」の4種類に大別できる。以下では，この利用行動の集団を利用者セグメントと呼称し，それぞれの特徴を捉える。具体的には，単独世帯（93世帯）を集計に加えるとともに，一般に高齢者は交通弱者と考えられることから，「高齢者（65歳以上）の利用」を「成人の単独利用」と「夫婦の同伴利用」から切り離して，合計5つの利用者セグメントについて分析を行うこととする。なお，「高齢者の利用」（108世帯148人）の内訳は，単独利用が大半を占め（115人），その他は「夫婦の同伴利用」12人，「子との同伴利用」18人，「友人その他との利用」3人である。

5.3.1　主利用館

表 5-8 は利用者セグメントごとに主に利用している図書館を大・中・小の規模別にまとめたものである。集計の単位は，単独利用の場合は個人を 1 組，同伴利用の場合は世帯内で図書館利用を共にする集団（夫婦同伴，親と子の同伴）ごとに 1 組と数えた。すべての利用者セグメントで中規模館が最も多く選択され全体の 81.5%を占め，小規模館選択は大規模館よりも少ない。これは，今回の調査で調査票回収世帯の 76.3%（759 世帯中 579 世帯）にとって 8 万冊規模の中規模館が最近隣館であること，小規模館が最近隣館の世帯にも中規模館は 1.8～3.0km と徒歩や自転車で利用可能な圏内であることが最大の要因といえる。これと比較すると 3 万冊以下の小規模館は魅力に乏しく，遠方の大規模館が次の選択肢となり 10.4%の組が利用している。

利用者セグメントを「成人の単独＋夫婦同伴＋親子同伴」利用グループ A と「子の単独＋高齢者」利用グループ B に分けて比較すると，両グループ間には大規模館を利用するか，中小規模館を利用するかに有意な差があり（χ^2=14.119, df=1, p<.01），グループ A には大規模館選択志向が認められる。

＜表５－８　利用者セグメント別主利用館＞

単位：　組（％）

主利用館 利用者セグメント		大規模館	中規模館	小規模館	合　計
A	成人の単独利用	45 (13.1)	273 (79.4)	26 (　7.6)	344 (100.0)
	夫婦の同伴利用	3 (13.0)	17 (73.9)	3 (13.0)	23 (100.0)
	親と子の同伴利用	13 (14.3)	70 (76.9)	8 (　8.8)	91 (100.0)
B	子の単独利用	1 (　1.7)	52 (88.1)	6 (10.2)	59 (100.0)
	高齢者の利用	6 (　4.4)	122 (88.4)	10 (　7.3)	138 (100.0)
合　計		68 (10.4)	534 (81.5)	53 (　8.1)	655 (100.0)

＊1 主利用館が「その他」、および不明の者を除く428世帯において、655組の利用行動について集計した。
＊2 「組」とは、世帯内で行動を共にする集団単位を示し、単独利用では「人」、同伴利用では「世帯」単位の集計である。

5.3.2　図書館へ行く交通手段

表5-9（次頁）は利用者セグメント別に主な利用交通手段を大規模館利用世帯と中小規模館利用世帯に分けてまとめたものである。移動距離が異なるので当然だが，大規模館利用者と中小規模館利用者との間では利用する交通手段について有意な差があり（χ^2=78.875, df=2, p<.01），大規模館利用者の82.1%が自家用車を利用し，中小規模館利用者の61.4%は徒歩か自転車利用である。概ね3km以内にある中小規模館を利用する場合でも自家用車を利用する組が32.0%存在していることに着目し，中小規模館利用者について利用者セグメント（移動手段が限定される子の単独利用は除く）間の独立性の検定を行ったところ有意差が確認された（χ^2=36.104, df=6, p<.01）。

すなわち，「夫婦の同伴利用」と「親と子の同伴利用」は利用に際し自家用車を用いる者が過半数を超えているのに対し，「成人の単独利用」と「高齢者の利用」は徒歩や自転車で利用する者が70%弱であり，家族の同伴利用と自家用車の使用が強く関連していることを示唆している。

5.2.4節では，類2から類3を経て類4に移行する際に親子同伴利用から子の単独利用に転換することを示した。表5-10によると，子の図書館利用の大半を占める中小規模館利用では年齢が上がるにつれて親子同伴利用から単独利用への転換が急激に進み親子同伴利用はほとんどなくなってしまうが，大規模館利用では子どもの年齢が上がっても親子同伴利用は減少せず，また大規模館利用全体も増加することがみてとれる。これは，（1）自家用車を使って家族一緒に近隣の中規模館を利用していた小学生が中学・高校生になると徒歩や自転車で同じ中規模館を単独あるいは友人と利用するようになる，（2）家族一緒に大規模館を利用していた場合は，中学・高校生になっても単独利用への転換が起きにくいことを意味している。徒歩や自転車で利用できる中規模館は大規模館を利用している中学・高校生にとってはあまり魅力がなく，親との同伴利用が続くとともに，家族一緒の中小規模館利用から家族一緒の大規模館利用への転換が一部で起きることを示唆している。

＜表5－10　類型別・主利用館別の親子同伴利用と子単独利用＞

単位：組（%）

	大規模館		中小規模館		合　計
	親子同伴	子単独	親子同伴	子単独	
類2	4（ 7.3）	ー	37（ 67.3）	14（ 25.5）	55（100.0）
類3	4（ 7.7）	ー	30（ 57.7）	18（ 34.6）	52（100.0）
類4	5（ 16.1）	1（ 3.2）	3（ 9.7）	22（ 71.0）	31（100.0）

＊1 主利用館が「その他」、および不明の世帯を除く。

＜表５－９　利用者セグメント別・主利用館別の図書館へ行く交通手段＞

単位：　組（％）

主利用館 交通手段 利用者セグメント		大規模館				中小規模館			
		自家用車	公共交通	徒歩・自転車	合　計	自家用車	公共交通	徒歩・自転車	合　計
A	成人の単独利用	38 (86.4)	4 (9.1)	2 (4.6)	44 (100.0)	84 (30.3)	10 (3.6)	183 (66.1)	277 (100.0)
	夫婦の同伴利用	2 (66.7)	1 (33.3)	―	3 (100.0)	11 (55.0)	1 (5.0)	8 (40.0)	20 (100.0)
	親と子の同伴利用	13 (100.0)	―	―	13 (100.0)	43 (58.9)	4 (5.5)	26 (35.6)	73 (100.0)
B	子の単独利用	―	1 (100.0)	―	1 (100.0)	4 (7.3)	8 (14.6)	43 (78.2)	55 (100.0)
	高齢者の利用	2 (33.3)	3 (50.0)	1 (16.7)	6 (100.0)	33 (27.1)	13 (10.7)	76 (62.3)	122 (100.0)
合　計		55 (82.1)	9 (13.4)	3 (4.5)	67 (100.0)	175 (32.0)	36 (6.6)	336 (61.4)	547 (100.0)

＊1 主利用館、および交通手段が不明の者を除く。
＊2 子の単独利用における「自家用車」は図書館利用者でない家族が自家用車で送迎している場合である。

5.3.3　徒歩・自転車利用者の世帯内自家用車利用可能状況

表 5-11 は，中小規模館利用の 61.4%を占める徒歩・自転車利用者 336 組のうち，自家用車の利用可能性等が不明の 8 組を除く 328 組について，世帯として自家用車を使えるか否かを利用者セグメントごとにまとめたものである。特に高齢者のモビリティの低さに留意して，「高齢者の利用」セグメントを前期高齢者（65 歳以上 75 歳未満）と後期高齢者（75 歳以上）に分割して集計した。

中小規模館を徒歩か自転車で利用していても，全体では 61.0%で自家用車での図書館利用が可能である。特に「親と子の同伴利用」，「子の単独利用」，「前期高齢者の利用」セグメントにおいては自家用車を使える割合が高く，自家用車がないから近隣の図書館を利用している訳ではないことがわかる。一方，「成人の単独利用」，「夫婦の同伴利用」，「後期高齢者の利用」において 43.7%～57.1%が自家用車の使えない世帯に属しており，これらのセグメントの徒歩利用者らには移動手段の制約が存在すると考えるべきであろう。

＜表５－１１　利用者セグメント別の世帯内自家用車利用可能状況＞

単位：組（%）

利用可能状況 利用者セグメント		自家用車を使える	自家用車は使えない	合　計
A	成人の単独利用	103 (56.3)	80 (43.7)	183 (100.0)
	夫婦の同伴利用	4 (50.0)	4 (50.0)	8 (100.0)
	親と子の同伴利用	21 (80.8)	5 (19.2)	26 (100.0)
B	子の単独利用	39 (92.9)	4 (9.5)	42 (100.0)
	前期高齢者の利用	31 (77.5)	9 (22.5)	40 (100.0)
	後期高齢者の利用	12 (42.9)	16 (57.1)	28 (100.0)
合　計		210 (61.0)	118 (39.0)	328 (100.0)

＊1 中小規模館利用者で徒歩・自転車を交通手段とする336組から自家用車の利用可能性が不明の世帯を除く。
＊2 前期高齢者と後期高齢者が同居している世帯は、後期高齢者世帯に分類した。
＊3「子の単独利用」での「自家用車を使える」は、運転免許保有の子と運転はできないが世帯としては利用可能である場合との合計である。

5.3.4　利用目的

表5-12は主利用館を利用する目的を6つの選択肢の中から1つ選んでもらった結果（「その他」を除く）を利用者セグメント別に大規模館利用者と中小規模館利用者に分けてまとめたものである。なお，利用目的は個人レベルで論ずべき内容であることから個人単位の集計を行った。

大規模館利用者と中小規模館利用者との間では利用目的に有意な差があるとはいえず（χ^2=3.741, df=4, p>.05），「資料の借出し」が大規模館54.7%，中小規模館60.3%で最も多く，以下「館内での調べ物」，「館内での読書」と続いている。すなわち，全ての利用者セグメントで利用目的において大規模館，中小規模館の「使い分け」は認められない。

「親と子の同伴利用」セグメントだけに着目すると，「付き添い」目的での利用が中小規模館では多く，大規模館で少ないことは注目に値する。このことは，大規模館では付き添い層を利用者として取り込むことに成功しているが，中小規模館ではそうならないこと，このような付き添い目的の親は「子の単独利用」の発生とともに図書館の非利用者に戻る層であるとも推測できる。

＜表5－12　利用者セグメント別・主利用館別の利用目的＞

単位：人（%）

主利用館		大規模館						中小規模館					
利用目的 利用者セグメント		資料の借出し	館内で読書	館内で調べ物	作業場所	付き添い	合計	資料の借出し	館内で読書	館内で調べ物	作業場所	付き添い	合計
A	成人の単独利用	20 (47.6)	6 (14.3)	12 (28.6)	4 (9.5)	－	42 (100.0)	184 (61.7)	41 (13.8)	51 (17.1)	21 (7.1)	1 (0.3)	298 (100.0)
	夫婦の同伴利用	2 (50.0)	2 (50.0)	－	－	－	4 (100.0)	18 (64.3)	3 (10.7)	5 (17.9)	－	2 (7.1)	28 (100.0)
	親と子の同伴利用	22 (66.7)	3 (9.1)	4 (12.1)	1 (3.0)	3 (9.1)	33 (100.0)	133 (65.8)	14 (6.9)	15 (7.4)	1 (0.5)	39 (19.3)	202 (100.0)
B	子の単独利用	－	－	－	1 (100.0)	－	1 (100.0)	28 (49.1)	5 (8.8)	8 (14.0)	16 (28.1)	－	57 (100.0)
	高齢者の利用	3 (50.0)	－	3 (50.0)	－	－	6 (100.0)	66 (52.4)	24 (19.1)	32 (25.4)	1 (0.8)	3 (2.4)	126 (100.0)
合　計		47 (54.7)	11 (12.8)	19 (22.1)	6 (7.0)	3 (3.5)	86 (100.0)	429 (60.3)	87 (12.2)	111 (15.6)	39 (5.5)	45 (6.3)	711 (100.0)

＊1 主利用館、および主目的が「その他」あるいは不明の者を除く。

5.4 まとめ

本章では，規模の異なる複数の図書館が存在する地域において，子どもの年齢を基軸とした世帯類型をもとにライフステージに応じた世帯単位の図書館利用行動の様態を明らかにし，抽出した利用者セグメントについて図書館の利用実態を分析した。要点をまとめると以下のようである。

1）家族の誰かが図書館を利用していると他の構成員も図書館を利用することが多く，家族の複数が利用する世帯と，誰も利用しない世帯とに分かれる傾向にある。すなわち，図書館の利用は個人レベルの要因だけではなく，家族がいるか，子どもが何歳程度かなどの家族構成が影響しているといえる。

2）幼児期・学齢期における図書館利用の発生は，家族の図書館利用の有無と強く関連している。家族が図書館を利用する世帯では就学前後の児童がほぼ例外なく図書館を利用しているのに対して，家族が利用していない世帯では小学校に入学したころから 3 割程度の児童が利用を始めるに過ぎない。実際の利用も親との同伴で行われ，遠方の大規模館の利用時はすべて，近隣の中小規模館の利用時でも 58.9%は自家用車で移動している。

3）親子の同伴利用は主として近隣の中規模館に対して行われるが，子どもが中学生になった段階で解消され，子どもは同じ中規模館を単独で，または友人と利用するようになる。これに対して，大規模館を同伴利用している親子の数は，子どもが中学生になっても減らない。いずれ子どもが代替の交通手段を確保すると同伴が解消されると思われる。大規模館の同伴利用が継続されることから，中規模館を単独で利用するより親と同伴でも大規模館の魅力の方が大きいものと考えられる。

4）どの世代においても一貫して半数程度の女性が図書館を利用しており，これらの層が自分の図書館利用に子どもを伴うことで，子どもの利用を誘発していると考えられる。一方，13%程度の女性は子どもを図書館に連れていくことを契機に自身も利用を開始し，子どもが単独で図書館を利用すると利用しなくなる「付き添い」利用層である。父親が同伴利用に関与することは 20%程度と多くないが，その場合でも夫婦と子どもの同伴がほとんどであり，母親が親子同伴利用のキーパーソンといえる。

5）すべての利用者セグメントで中規模館が最も多く選択され全体の 81.5%を占め，小規模館選択は大規模館よりも少ない。すなわち，8 万冊なら近くの中規模館に行くが，3 万冊以下の小規模館は魅力に乏しく，遠方の大規模館が次の選択肢となり 10.4%の組が利用している。

6）高齢者はたとえ同居していても子や孫と一緒に図書館を利用することは少ない。多くは単独で，一部は夫婦で図書館を利用するが，中小規模館を徒歩・自転車で利用している者でさえも，前期高齢者においては自家用車利用可能率（77.5%）が高く，必ずしも交通弱者とはいえない。後期高齢者の自家用車利用可能率は 48.0%で，図書館利用にあた

って交通手段が限られた層として注意を払う必要がある。

7）全体として中小規模館と大規模館の利用目的には有意差が見られず，利用目的において階層構成論が期待する「使い分け」は認められない。

註・参考文献

1）石狩市民図書館編「石狩市の図書館 2008」によると，平成 19 年度の住居地域別利用者数（登録者のうち平成 17 年度以降に 1 回以上貸出サービスを利用した人数）は石狩市 17,578 人，札幌市 14,651 人，その他地域が 973 人で，札幌市民が 44.1%を占める。

2）2005年12月に札幌市北区で実施した予備的調査の回収率が13.0%であったため，回収率を上げることと，回答者の正確な住所を把握するため謝礼（図書カード500円）を用意し，記名で返信してもらった。

3）例えば類2であれば，3人世帯で1人だけ利用者がいる確率は，

$$ {}_3C_1 \times \left(\frac{161}{291}\right)^1 \times \left(1-\frac{161}{291}\right)^2 = 0.33 $$

4人世帯で1人だけ利用者がいる確率は，

$$ {}_4C_1 \times \left(\frac{161}{291}\right)^1 \times \left(1-\frac{161}{291}\right)^3 = 0.20 $$

5人世帯で1人だけ利用者がいる確率は，

$$ {}_5C_1 \times \left(\frac{161}{291}\right)^1 \times \left(1-\frac{161}{291}\right)^4 = 0.11 $$

である。

第 6 章　広域利用可能地域における大規模館選択要因分析

6.1　図書館サービス満足度・重視度分析
6.1.1　2 市図書館からの CS ベンチマーク
6.1.2　2 市図書館の相対比較
6.2　石狩市民図書館利用登録者の満足度・重視度分析
6.2.1　石狩市民図書館の評価
6.2.2　満足度指数・重視度指数からみる類型別大規模館選択行動
6.3　まとめ
註・参考文献

第 6 章　広域利用可能地域における大規模館選択要因分析

前章までに，図書館利用の行動パターンが「家族と一緒に自家用車で行く」という行動に変化したことにより，同伴利用世帯（夫婦あるいは親子）においては，自宅の近くに中小規模館が存在しても，遠方の大規模館を利用する傾向があることを明らかにした。この章では，利用者が大規模館のどのようなサービスを重視し，満足（あるいは不満）を感じながら選択利用しているのかについて，北広島市図書館登録者調査（巻末資料 3)，および石狩市民図書館登録者調査（巻末資料 4）をもとに，大規模館選択の要因分析を行う。

6.1　図書館サービス満足度・重視度分析

NRI 野村総合研究所社会コンサルティング二部による地方自治体の行政サービス CS（住民満足度）のベンチマーク（基準値）獲得のための調査[1)] を参考として評価を行う。

今回の登録者調査においては，満足度の評価は 4 段階評価で実施していることから，「満足」4 点，「どちらかと言えば満足」3 点，「どちらかと言えば不満足」2 点，「不満足」1 点として扱った。重要度の評価は 5 段階評価で実施しており，「非常に重要である」5 点，「重要である」4 点，「やや重要である」3 点，「ほとんど重要でない」2 点，「全く重要でない」1 点が割り当てられるが，満足度と比較するために実点数に 5 分の 4 を乗じて最高点が 4 点となるようそれぞれの評価指数を算出した。

今回調査の配点は，NRI（野村総合研究所）による配点（「大いに満足」4 点，「満足」3 点，「不満」2 点，「極めて不満」1 点）より一段低い評価での配点ともいえようが，NRI の回答選択肢における「大いに」，および「極めて」という表現にはかなり主観が入る要素があり，満足度の尺度としては本調査で用いた段階付けの方が明確であろうと考える。

6.1.1　2 市図書館からの CS ベンチマーク

図書館サービスの CS ベンチマーク（基準点）を見出すために，立地位置の異なる北広島市図書館と石狩市民図書館における登録者調査からそれぞれの館で実施しているサービス項目をもとに図書館サービス CS（Customer Satisfaction：顧客満足度）を分析する。北広島市図書館については，表 6-1 中の 17 項目，石狩市民図書館については表 6-2 中の 26 項目について分析した。平均満足度指数は北広島市図書館 3.10 点，石狩市民図書館 3.13 点であるから，両館の満足度指数の平均値から判断して図書館サービス CS ベンチマーク（基準点）は 3.12 点が境となるものと思われる。この図書館サービス CS ベンチマークは，今回調査した 2 市の図書館からの数値にすぎないが，今後多くの自治体の図書館において

満足度調査を行うことにより，平均的な図書館サービス CS ベンチマークが得られるものと考える。

＜表6-1　図書館CSベンチマーク得点表：満足度（北広島市図書館）＞

（満足×4点／どちらかと言えば満足×3点／どちらかと言えば不満足×2点／不満足×1点）

満足度 項　目	満　足	どちらかと言えば満足	どちらかと言えば不満足	不満足	合　計	わからないと回答した実数	評価者実　数 *1	評価指数
1. 本や雑誌の量や種類	748	912	328	76	2,064	32	731	2.82
2. 本や雑誌の新しさ	652	1,002	308	52	2,014	48	703	2.86
3. 本や雑誌の内容	608	1,050	264	30	1,952	66	666	2.93
4. 本や雑誌の並べ方	928	1,098	142	18	2,186	57	687	3.18
5. コンピュータ閲覧目録	760	642	100	27	1,529	228	481	3.18
6. 館内案内表示（サイン）	824	945	118	13	1,900	133	593	3.20
7. 情報化（IT)への対応	344	525	132	34	1,035	355	361	2.87
8. イベント（お話会等）	308	435	64	21	828	428	275	3.01
9. 図書館までの距離	1,460	702	156	47	2,365	27	724	3.27
10. 図書館までの交通の便	1,448	648	142	41	2,279	46	690	3.30
11. 駐車場のスペース	788	579	280	68	1,715	131	598	2.87
12. 図書館の施設設備	1,152	852	150	24	2,178	64	671	3.25
13. 図書館内の雰囲気	1,648	834	56	14	2,552	19	770	3.31
14. 図書館員の応対	1,728	810	46	12	2,596	22	737	3.52
15. 図書館が開く時間	1,116	792	230	45	2,183	44	703	3.11
16. 図書館が閉る時間	988	801	240	68	2,097	43	702	2.99
17. 開館日（曜日も含む）	972	921	216	44	2,153	33	702	3.07
18. 図書館サービス全体（総合評価）	840	1,290	146	13	2,289	26	726	3.15

＊1　全回答者803人中、「わからない」と回答した者、及び無回答者を除く。

＜表6-2　図書館CSベンチマーク得点表：満足度（石狩市民図書館）＞

（満足×4点／どちらかと言えば満足×3点／どちらかと言えば不満足×2点／不満足×1点）

満足度 項　目	満　足	どちらかと言えば満足	どちらかと言えば不満足	不満足	合　計	わからないと回答した実数	評価者実　数 *1	評価指数
1. 本の冊数	748	786	158	22	1,714	22	550	3.12
2. 本の新しさ	596	861	158	24	1,639	28	539	3.04
3. 本の並べ方	676	858	126	19	1,679	29	537	3.13
4. 雑誌の種類	476	705	158	20	1,359	110	453	3.00
5. 雑誌の並べ方	520	753	88	8	1,369	118	433	3.16
6. 視聴覚資料の種類	228	432	144	33	837	247	306	2.74
7. 視聴覚資料の並べ方	256	534	92	7	889	257	295	3.01
8. 図書館までの距離	608	663	226	64	1,561	15	550	2.84
9. 図書館までの交通の便	480	534	214	64	1,292	84	469	2.75
10. 駐車場の広さ	952	654	120	18	1,744	28	534	3.27
11. 図書館内の雰囲気	1,304	633	32	3	1,972	8	556	3.55
12. 様々な種類や雰囲気の閲覧座席	932	774	54	4	1,764	41	522	3.38
13. 子供用コーナー	596	552	50	4	1,202	196	362	3.32
14. グループ活動室	288	474	28	4	794	302	248	3.20
15. 軽食・喫茶コーナー	336	603	146	28	1,113	169	386	2.88
16. 館内案内サイン	444	846	98	9	1,397	102	451	3.10
17. 利用者検索機（コンピュータ目録）	588	681	124	18	1,411	101	454	3.11
18. 館内でのインターネット利用	236	429	62	10	737	306	243	3.03
19. 自宅パソコンからの図書予約	336	414	38	7	795	296	248	3.21
20. 図書自動貸出機	1,032	564	36	5	1,637	88	469	3.49
21. 貸出冊数の制限がない	1,432	399	30	11	1,872	40	517	3.62
22. イベント（各種講座やお話会等）	256	435	54	5	750	307	241	3.11
23. 図書館員の応対	1,004	795	32	5	1,836	25	537	3.42
24. 図書館が開く時間	688	741	130	29	1,588	45	513	3.10
25. 図書館が閉まる時間	548	720	178	51	1,497	43	517	2.90
26. 開館日（曜日も含む）	596	810	150	31	1,587	33	525	3.02
27. 図書館サービス全体（総合評価）	788	1,020	36	0	1,844	11	555	3.32

＊1　全回答者604人中、「わからない」と回答した者、及び無回答者を除く。

6.1.2　2 市図書館の相対比較

表 6-3 は，両館のサービス項目の満足度指数を降順に並べたものである。両館の満足度を相対比較すると，「図書館内の雰囲気」（北広島：3.31，石狩：3.55），「図書館員の応対」（北広島：3.52，石狩：3.42），「図書館の施設設備」（北広島：3.25），「様々な種類や雰囲気の閲覧室」（石狩：3.38）などの項目は両館とも共通して総合評価よりも上位にランクされており，大きな相違はない。

一方，図書館の立地位置に影響されると考えられる項目に関しては，両館の評価に相違が現れており，「図書館までの交通の便」（北広島：3.30，石狩：2.75）や「図書館までの距離」（北広島：3.27，石狩：2.84）などの満足度指数が JR 駅前立地の北広島市図書館では高く，郊外立地の石狩市民図書館では低くなっている。逆に，「駐車場のスペース」に関しての満足度指数は北広島市図書館では低く，石狩市民図書館では高い（北広島：2.86，石狩：3.27）。

前章までで述べたように，広域型の生活圏においては移動交通手段が自家用車利用中心となっていることから，郊外型図書館においてはもとより，都市中心部の図書館においても充分な駐車場の確保が必要であるといえる。

＜表6-3　図書館CSベンチマーク得点表：満足度降順＞

（北広島市図書館）

項　目 ＼ 満足度	評価指数
14.　図書館員の応対	3.52
13.　図書館内の雰囲気	3.31
10.　図書館までの交通の便	3.30
9.　図書館までの距離	3.27
12.　図書館の施設設備	3.25
6.　館内案内表示（サイン）	3.20
4.　本や雑誌の並べ方	3.18
5.　コンピュータ閲覧目録	3.18
18.　図書館サービス全体（総合評価）	3.15
15.　図書館が開く時間	3.11
17.　開館日（曜日も含む）	3.07
8.　イベント（お話会等）	3.01
16.　図書館が閉る時間	2.99
3.　本や雑誌の内容	2.93
7.　情報化（IT）への対応	2.87
11.　駐車場のスペース	2.87
2.　本や雑誌の新しさ	2.86
1.　本や雑誌の量や種類	2.82

（石狩市民図書館）

項　目 ＼ 満足度	評価指数
21.　貸出冊数の制限がない	3.62
11.　図書館内の雰囲気	3.55
20.　図書自動貸出機	3.49
23.　図書館員の応対	3.42
12.　様々な種類や雰囲気の閲覧座席	3.38
13.　子供用コーナー	3.32
27.　図書館サービス全体（総合評価）	3.32
10.　駐車場の広さ	3.27
19.　自宅パソコンからの図書予約	3.21
14.　グループ活動室	3.20
5.　雑誌の並べ方	3.16
3.　本の並べ方	3.13
1.　本の冊数	3.12
17.　利用者検索機（コンピュータ目録）	3.11
22.　イベント（各種講座やお話会等）	3.11
16.　館内案内サイン	3.10
24.　図書館が開く時間	3.10
2.　本の新しさ	3.04
18.　館内でのインターネット利用	3.03
26.　開館日（曜日も含む）	3.02
7.　視聴覚資料の並べ方	3.01
4.　雑誌の種類	3.00
25.　図書館が閉まる時間	2.90
15.　軽食・喫茶コーナー	2.88
8.　図書館までの距離	2.84
9.　図書館までの交通の便	2.75
6.　視聴覚資料の種類	2.74

6.2　石狩市民図書館利用登録者の満足度・重視度分析

6.2.1　石狩市民図書館の評価

表 6-4 は石狩市民図書館のサービス項目に対する重要度指数（4 点満点に調整）を算出したものである。サービス別にどのような項目が重視され，何が不満かをみるために表 6-2 の満足度指数と表 6-4 の重要度指数を用いて，満足度の高い順に図示したものを図 6-1 に示す。なお，満足度に関しては評価対象サービス項目を 25 項目設けているが，ここでは重要度の項目と一致する 22 項目についての分析を行うことにする。

満足度指数 3.12 点を境に評価すると，全体的な満足度は高い。満足度の高い項目は，「貸出冊数の制限がない」（3.62），「図書館内の雰囲気」（3.55），「図書自動貸出機」（3.49），「図書館員の応対」（3.42）が上位を占めている。特に，重視度が高い「図書館内の雰囲気」（3.38）と「図書館員の応対」（3.32）についても満足度の方が高く良好といえる。しかし，重視度の最も高い「本の冊数」（3.48）では，満足度は 3.12 にとどまっており，蔵書 18 万冊レベルでは利用者の期待に応え切れていない状況であるといえる。

満足度の低い項目は「視聴覚資料の種類」（2.74），「公共交通の便」（2.75），「図書館までの距離」（2.84），「軽食・喫茶コーナー」（2.88），「図書館が閉まる時間」（2.90）の順である。

満足度と重視度の差（満足度－重視度）が大きい項目は，「本の冊数」（-0.36），「図書館までの距離」（-0.28），「本の新しさ」（-0.27），「開館日」（-0.24）である。「図書館までの距離」以外の項目は今後の図書館側の運営のあり方により改善可能であり，得点差の大きい項目から優先的に順次改善に取り組むべきであるといえる。逆に，「グループ活動室」（+1.17），「イベント」（+1.09）は重視度が低い割には満足度が高い。

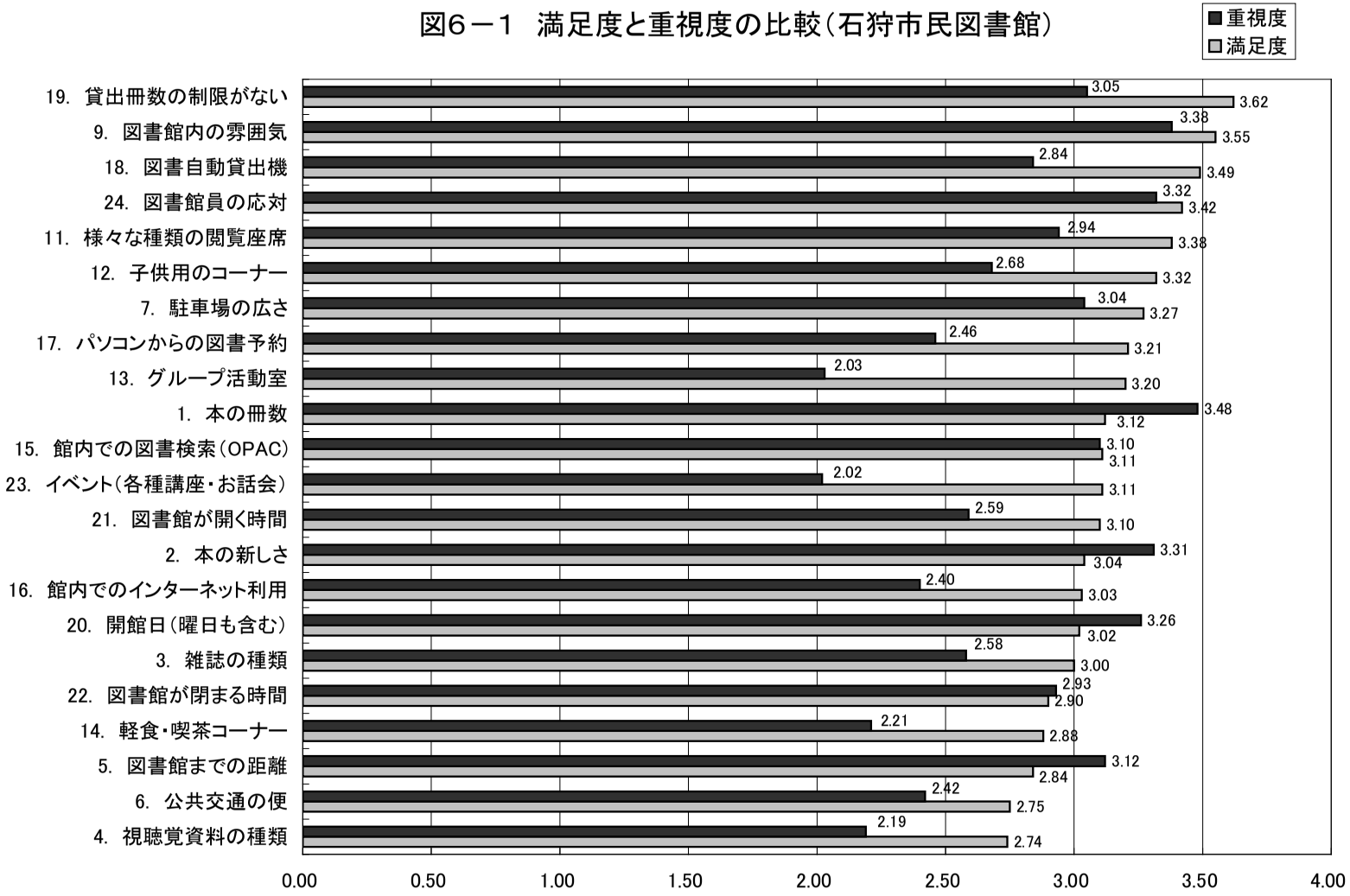
一方，「図書館までの距離」に関して重視度が 3.12 点と高かった割には，図書館までの距離を補う手段としての項目である「公共交通の便」の重視度は 2.42 点と低く，「駐車場の広さ」の重視度が 3.04 点と高い。これは，図書館までの距離は近いに越したことはないが，自家用車移動が中心であることから広い駐車場が整備されていれば，公共交通の便にはさほどこだわらないという評価の現われと解釈できよう。

＜表6－4　図書館CSベンチマーク得点表：重要度（石狩市民図書館）＞

項　目 ＼ 重要度（評価者実数）	全く重要でない ×1点	ほとんど重要でない ×2点	やや重要である ×3点	重要である ×4点	非常に重要である ×5点	評価点合計（点）	評価者実数合計 *1（人）	評価指数 *2 ×4/5
1本の数が多い	3	8	63	217	292	2,536	583	3.48
2新しい本が多い	4	25	103	197	247	2,386	576	3.31
3雑誌の種類が多い	45	136	155	119	119	1,853	574	2.58
4ビデオやCDが充実している	90	177	145	92	60	1,547	564	2.19
5自宅から近い	10	36	152	197	195	2,301	590	3.12
6公共交通の便が良い	101	120	111	125	106	1,704	563	2.42
7駐車場が広い	23	38	141	207	169	2,195	578	3.04
8建物が新しい	58	162	171	121	63	1,694	575	2.36
9図書館内の雰囲気が良い	3	15	88	220	254	2,447	580	3.38
10子供や老人でも安心して利用できる建物である	14	26	132	207	199	2,285	578	3.16
11様々な種類や雰囲気の閲覧座席がある	9	60	166	215	125	2,112	575	2.94
12子供用のコーナーが充実している	36	95	176	160	102	1,904	569	2.68
13グループ活動室がある	87	216	162	72	27	1,428	564	2.03
14軽食・喫茶コーナーがある	66	181	194	78	51	1,577	570	2.21
15館内で図書検索（OPAC）ができる	10	36	151	193	180	2,207	570	3.10
16館内でインターネットが利用できる	69	142	161	104	88	1,692	564	2.40
17自宅のパソコンや携帯電話から図書予約できる	45	145	177	120	79	1,741	566	2.46
18図書自動貸出機を使って自分で借出せる	18	84	169	165	134	2,023	570	2.84
19貸出冊数の制限がない	12	68	134	155	201	2,175	570	3.05
20開館日が多い	4	26	119	195	227	2,328	571	3.26
21開館する時間が早い	26	132	183	136	92	1,843	569	2.59
22閉館する時間が遅い	15	86	130	176	157	2,066	564	2.93
23イベント（各種講座やお話会等）が多い	65	234	191	63	16	1,438	569	2.02
24図書館員の応対が良い	3	17	108	214	237	2,402	579	3.32
25図書館員にいろいろ相談しやすい	6	33	147	199	189	2,254	574	3.14

＊１　全回答者604人中、無回答の者を除く。
＊２　重要度は5段階評価で行っているが、実点数に5分の4を乗じて最高点が4点となるよう評価指数を調整算出した。

図6－1　満足度と重視度の比較（石狩市民図書館）



6.2.2　満足度指数・重視度指数からみる類型別大規模館選択行動

第 4 章で用いた類型に基づき，大規模館を主利用館として選択している類 B1，類 B2，類 B3，類 A0 の 4 類型について分析する。

表 6-5 は，重視度指数 3.0 点以上ある項目を類型別にまとめたものである。どの類型も「本の冊数」や「図書館内の雰囲気」が上位にきている。近隣に中小規模館がありながらも遠方の大規模館を利用している類 B1，類 B2，類 B3 においては，上位 7 位までに同一項目が含まれており．重視している項目がほぼ一致していることがわかる。また，「図書館までの距離」よりも「駐車場の広さ」を重視しているのが特徴である。

＜表6－5　重視度指数の上位項目＞

類型	在住地	最近隣館	主利用館	重視度指数（3.0以上）										
				1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位	11位
類B1	石狩市	小規模館	大規模館	本冊数	雰囲気	応対	本新鮮	開館日	無制限	OPAC	自貸機	駐車場	距離	閉時間
類B2	札幌市	中規模館	大規模館	本冊数	本新鮮	雰囲気	無制限	開館日	応対	OPAC	駐車場	自貸機	座席	
類B3	札幌市	小規模館	大規模館	本冊数	雰囲気	応対	開館日	本新鮮	無制限	OPAC	駐車場	閉時間	距離	
類A0	石狩市	大規模館	大規模館	雰囲気	本冊数	応対	距離	本新鮮	開館日	OPAC	座席			

＊1　雰囲気：「図書館内の雰囲気」、本冊数：「本の冊数」、応対：「図書館員の応対」、距離：「図書館までの距離」、本新鮮：「本の新しさ」、開館日：「開館日（曜日も含む）」、OPAC：「館内での図書検索」、座席：「様々な種類の閲覧座席」、無制限：「貸出冊数の制限がない」、駐車場：「駐車場の広さ」、自貸機：「図書自動貸出機」、閉時間：「図書館が閉まる時間」を意味する。

図 6-2～図 6-5 は，利用館に対する満足度指数と利用館選択の重視度指数を相対的に図示したものである。

選択理由には利用館を選択する際に重要とすることが反映されるが，そこには現在利用している図書館に対する潜在的な要望が含まれている可能性が高いと考えられる。重視度指数，満足度指数ともに高く，「やや重要である」に割り当てた点数の 3 点，図書館サービス CS ベンチマーク（基準点）の 3.12 点を上回る項目を類型ごとに示す。

最近隣館は 1 万冊規模の小規模館であるが大規模館（石狩市民図書館本館）を主利用館としている石狩市民（類 B1）では，「本の冊数」（重視度 3.56，満足度 3.13），「図書館内の雰囲気」（重視度 3.41，満足度 3.51），「図書館員の応対」（重視度 3.36，満足度 3.40），「貸出冊数の制限がない」（重視度 3.14，満足度 3.64），「図書自動貸出機」（重視度 3.05，満足度 3.56），「駐車場の広さ」（重視度 3.04，満足度 3.19）の 6 項目が該当し，これらのサービス項目を重視し，かつ満足して大規模館を選択利用していることがわかる。特に，「貸出冊数の制限がない（+0.50）」と「図書自動貸出機（+0.51）」は満足指数が重視度指数を大幅に上回っている。逆に，重視度が高いにもかかわらず満足度が低い項目は，「本の

冊数」（-0.43）である（図 6-2）。

最近隣館は 8 万冊規模の中規模館であるが遠方の大規模館を主利用館としている札幌市民（類 B2）では，「本の冊数」（重視度 3.60，満足度 3.30），「本の新しさ」（重視度 3.56，満足度 3.32），「図書館内の雰囲気」（重視度 3.51，満足度 3.66），「貸出冊数の制限がない」（重視度 3.41，満足度 3.79），「開館日が多い」（重視度 3.40，満足度 3.21），「図書館員の応対」（重視度 3.35，満足度 3.57），「館内での図書検索」（重視度 3.23，満足度 3.27），「駐車場の広さ」（重視度 3.21，満足度 3.47），「図書自動貸出機」（重視度 3.08，満足度 3.62），「様々な種類の閲覧座席」（重視度 3.03，満足度 3.48）の 10 項目が該当し，これらの幅広いサービス項目を重視し，かつ満足して大規模館を選択利用していることがわかる。特に，「貸出冊数の制限がない」[2)] に関しては，満足度指数が重視度指数を上回っており（+0.38），図書館サービスとして重要とされた項目の中で最も満足度を強く感じている選択要因となっていると考えられる。逆に，重視度が高いにもかかわらず満足度が低い項目は，「本の冊数」（-0.30），「本の新しさ」（-0.24），「開館日」（-0.19）である。（図 6-3）。

最近隣館は 3 万冊規模の小規模館であるが遠方の大規模館を主利用館としている札幌市民（類 B3）では，「本の冊数」（重視度 3.70，満足度 3.15），「図書館内の雰囲気」（重視度 3.53，満足度 3.63），「図書館員の応対」（重視度 3.40，満足度 3.51），「貸出冊数の制限がない」（重視度 3.20，満足度 3.80），「駐車場の広さ」（重視度 3.20，満足度 3.22）の 5 項目が該当し，これらのサービス項目を重視し，かつ満足して大規模館を選択利用していることがわかる。特に，「貸出冊数の制限がない（+0.60）」は満足指数が重視度指数を大幅に上回っている。逆に，重視度が高いにもかかわらず満足度が低い項目は，「本の冊数」（-0.55）である（図 6-4）。

これらの 3 類型は大規模館選択の重要度として第一に「本の冊数」，そして「館内の雰囲気」といった施設設備を重視しており，「貸出冊数の制限がない」ことに満足して，「図書館までの距離」をさほど重視せずに，遠方でも大規模館を利用していることがわかる。

最近隣館も主利用館も大規模館である石狩市民（類 A0）は，図書館利用において最も恵まれた環境にあり，「図書館内の雰囲気」（重視度 3.40，満足度 3.59），「本の冊数」（重視度 3.35，満足度 3.13），「図書館員の応対」（重視度 3.31，満足度 3.47），「図書館までの距離」（重視度 3.26，満足度 3.50），「開館日が多い」（重視度 3.21，満足度 3.13），「館内での図書検索」（重視度 3.11，満足度 3.17），「様々な種類の閲覧座席」（重視度 3.02，満足度 3.38）などの大規模館のもつ蔵書規模の大きさや充実した施設設備等の内容面の魅力に加え，図書館までの近さというアクセス面の利便性を重視し，かつ満足して大規模館を選択利用していることがわかる（図 6-5）。

しかし，「本の冊数」に関しては重視度が高いにもかかわらず 4 類型で共通して満足度が低くなっている。

図6－2　重視度指数と満足度指数の比較(類B1)

在住地：石狩市　　最近隣館：小規模館　　主利用館：大規模館

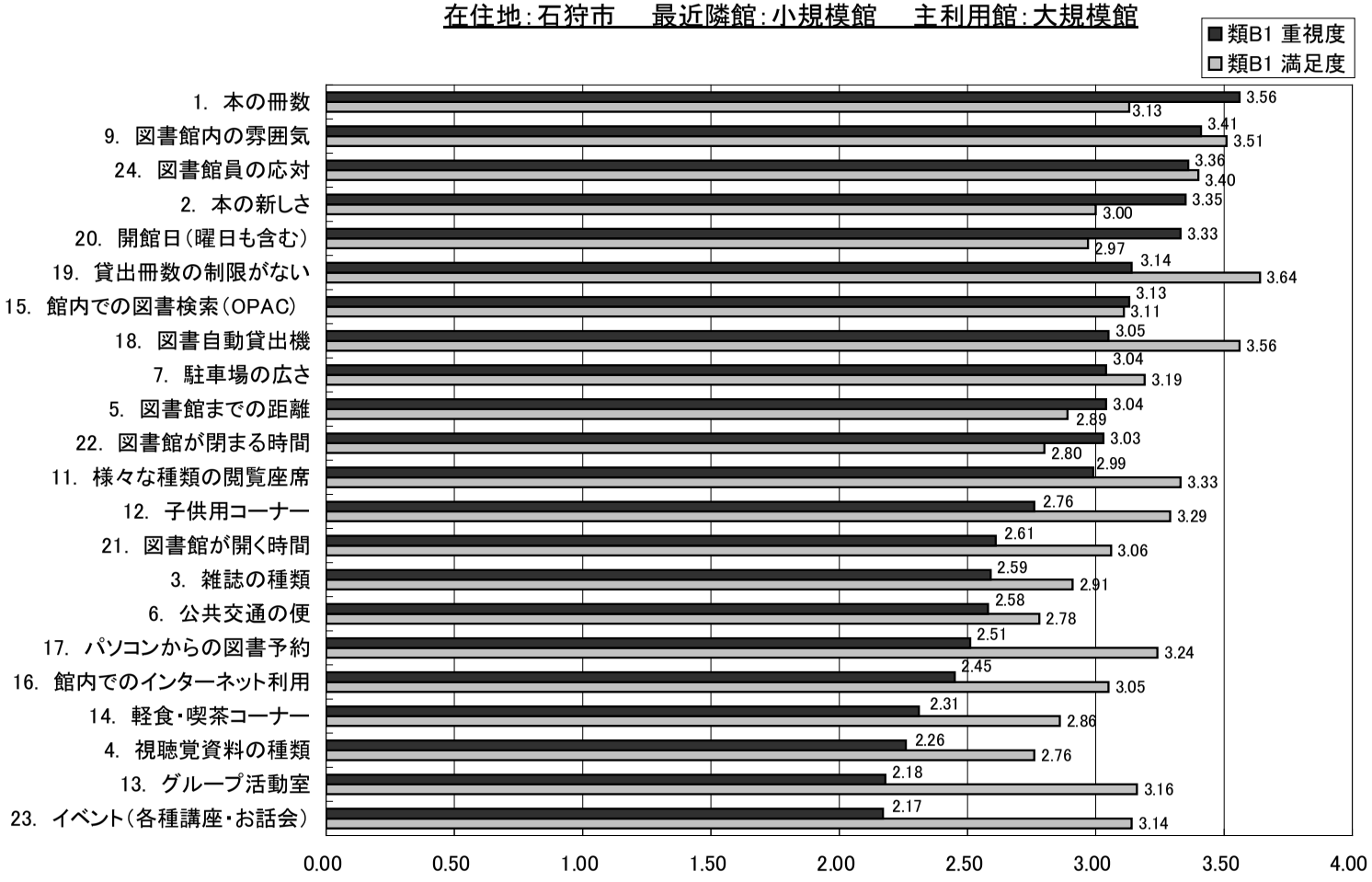


図6－3　重視度指数と満足度指数の比較（類B2）

在住地：札幌市　　最近隣館：中規模館　　主利用館：大規模館

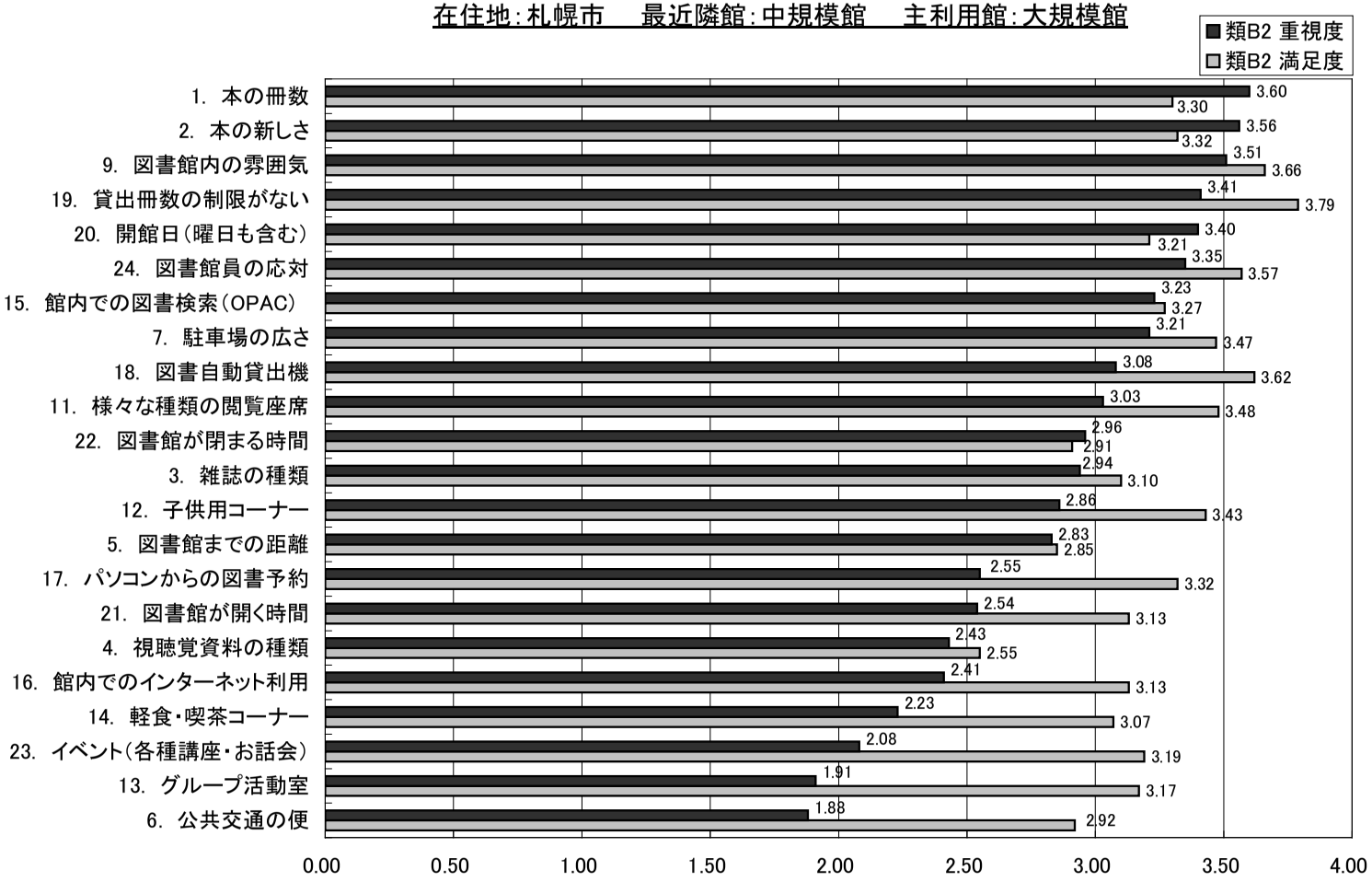


図6－4　重視度指数と満足度指数の比較（類B3）

在住地：札幌市　　最近隣館：小規模館　　主利用館：大規模館

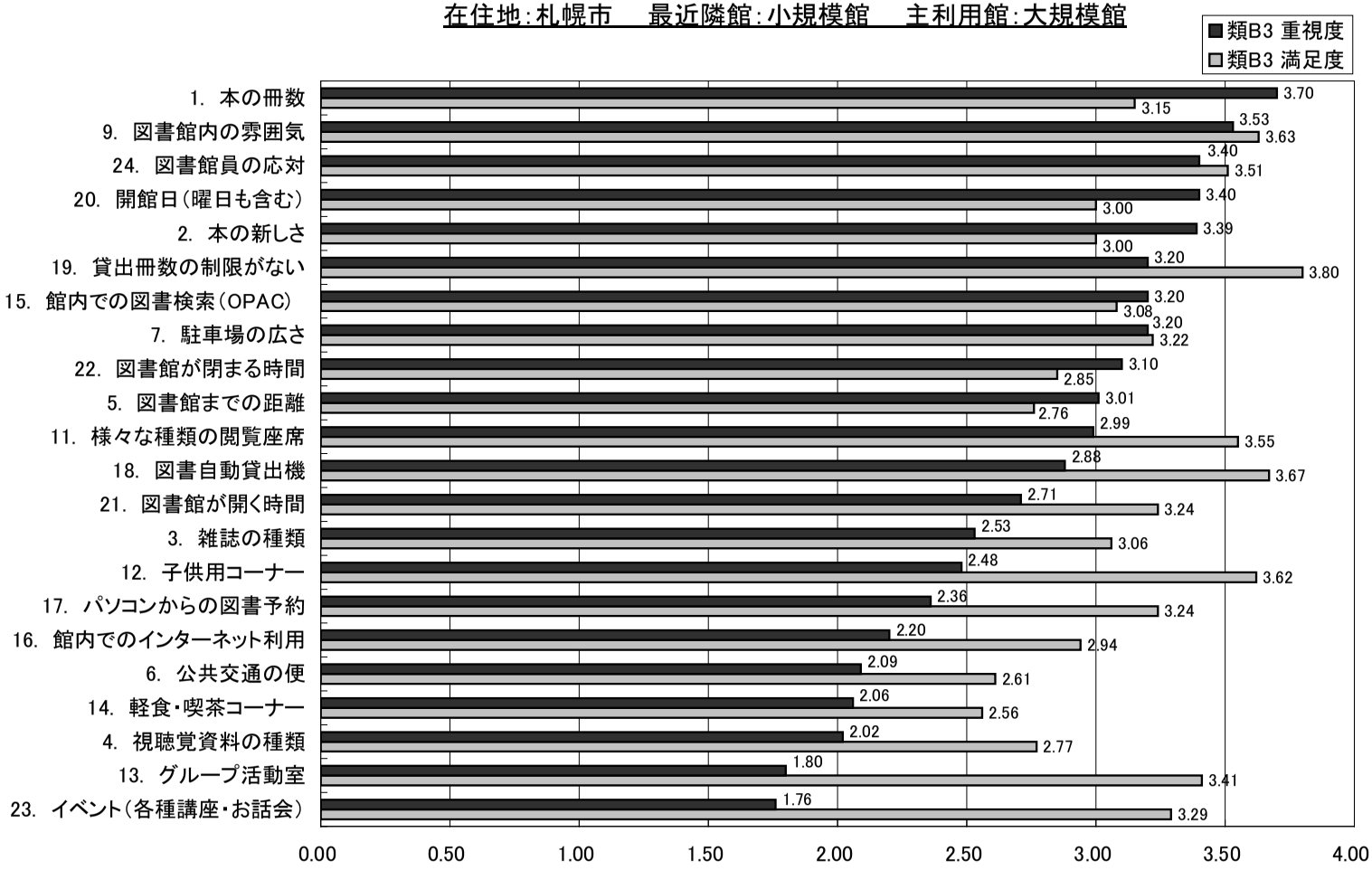
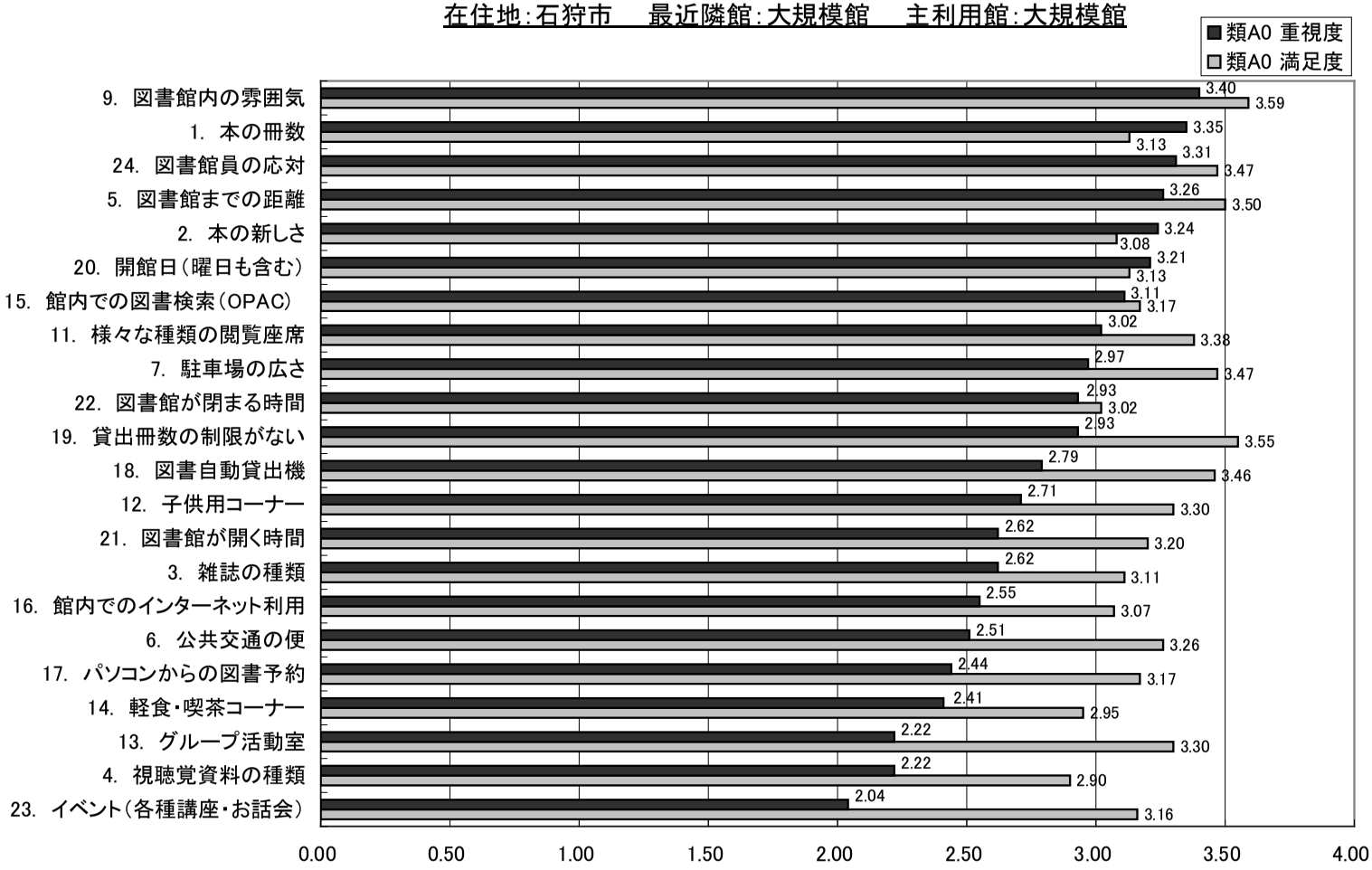


図6－5　重視度指数と満足度指数の比較（類A0）

在住地：石狩市　　最近隣館：大規模館　　主利用館：大規模館



6.3 まとめ

本章では，第 4 章で類型化した 7 類型のうち大規模館利用者の 4 類型（類 A0，類 B1，類 B2，類 B3）をもとに，二項ロジットモデルで大規模館選択の説明変数として設定できなかった項目も含めて満足度と重視度の観点から比較分析した。要点をまとめると以下のようである。

1）重視度指数は，どの類型も「本の冊数」や「図書館内の雰囲気」が上位にきている。近隣に中小規模館がありながらも遠方の大規模館を利用している類 B1，類 B2，類 B3 においては，上位 7 位までに同一項目が含まれており．重視している項目がほぼ一致している。また，「図書館までの距離」よりも「駐車場の広さ」を重視しているのが特徴である。

2）北広島市図書館と石狩市民図書館の本館に共通して満足度が総合評価よりも上位にランクされている項目は，「図書館内の雰囲気」，「図書館員の応対」，「図書館の施設設備」である。

3）「図書館までの交通の便」や「図書館までの距離」の満足度指数は JR 駅前立地の北広島市図書館では高く，郊外立地の石狩市民図書館では低い。逆に，「駐車場のスペース」に関しての満足度指数は，北広島市図書館では低く，石狩市民図書館では高い。

4）石狩市民図書館において満足度と重視度の差（満足度－重視度）が大きい項目は，「本の冊数」(-0.36)，「図書館までの距離」(-0.28)，「本の新しさ」(-0.27)，「開館日」(-0.24) である。逆に，「グループ活動室」（+1.17），「イベント」（+1.09）は重視度が低い割には満足度が高い。また，「図書館までの距離」に関して重視度が 3.12 点と高かった割には，図書館までの距離を補う手段としての項目である「公共交通の便」の重視度は 2.42 点と低く，「駐車場の広さ」の重視度が 3.04 点と高い。

5）最近隣館が中規模館である札幌市民（類 B2），および最近隣館が小規模館である石狩市民（類 B1），札幌市民（類 B3）は，大規模館選択の重要度として第一に「本の冊数」，そして「館内の雰囲気」といった施設設備を重視しており，「貸出冊数の制限がない」ことに満足して，「図書館までの距離」をさほど重視せずに，遠方でも大規模館を利用している。

6）類 B1，類 B2，類 B3 の 3 類型に共通して「貸出冊数の制限がない」という項目で満足度指数が重視度指数を上回っており，図書館サービスとして重要とされた項目の中で最も満足度を強く感じている選択要因となっていると考えられる。

7）最近隣館も主利用館も大規模館である石狩市民（類 A0）は，図書館利用において最も恵まれた環境にあり，「図書館内の雰囲気」（重視度 3.40，満足度 3.59），「本の冊数」（重視度 3.35，満足度 3.13）といった大規模館のもつ蔵書規模の大きさや充実した施設設備等の内容面の魅力に加え，「図書館までの距離」（重視度 3.26，満足度 3.50）と

いうアクセス面の利便性を重視し，かつ満足して大規模館を選択利用している。しかし，「本の冊数」に関しては重視度が高い割には 4 類型で共通して満足度が低い。

註・参考文献

1）谷口俊治「有効性が確認された行政サービスＣＳ（住民満足度）ベンチマーク」（オンライン），
入手先＜http://www.nri.co.jp/opinion/region/2002/pdf/ck20020202.pdf＞
（最終アクセス 2007 年 11 月 24 日）
　この調査は，基本的には CS（Customer Satisfaction：顧客満足度）を指標の基準とし，図書館においては来館者にそのサービスについて 12 項目の質問をし，その満足度を点数（大いに満足を 4 点，満足を 3 点，不満を 2 点，大いに不満を 1 点）に置き換え，総得点を対象者数で除した数値を評価指数としている。健康診断，専門相談サービス，図書館，公園，窓口サービス，行政情報の提供・公開，公民館，スポーツ施設など，その他調査分野は多岐に亘るが，どの分野も同じ数値で比較することができ，汎用性を持った図書館評価として重要な指標となるものと考えられる。

2）札幌市では，2006 年 4 月から開館日・開館時間の拡大，貸出冊数の増大を図っており，以前は 4 冊までが貸出上限であった図書が 10 冊まで借りられるように改善されている。調査実施時点での資料借出しの上限は，一人図書 10 冊，視聴覚資料 2 点までである。

3）第 50 回日本図書館情報学会研究大会シンポジウム記録「新たな局面を迎えた図書館評価：行政評価からパフォーマンス指標 JIS 化まで」『日本図書館情報学会誌』，Vol.49, No.1, 2003.3

4）永田治樹「図書館のマーケッティング」『情報の科学と技術』，第 49 巻, 2 号, 1999, p .62-68.

5）永田治樹「大学図書館におけるサービス経営：顧客満足のマーケッティング」『大学図書館研究』，No.50, 1996.10, p.73-81.

第７章　本館の立地状況の違いによる図書館利用行動分析

7.1　調査対象館の概要
7.2　調査概要
　7.2.1　調査の対象
　7.2.2　調査の方法
7.3　登録者調査から
　7.3.1　利用館選択
　7.3.2　主利用館別属性
7.4　本館来館者調査から
　7.4.1　平日・休日別構成
　7.4.2　利用目的・頻度
　7.4.3　本館利用理由
　7.4.4　来館過程
　7.4.5　自宅からの距離
　7.4.6　利用交通手段と所要時間
　7.4.7　滞在時間
7.5　まとめ
註・参考文献

第 7 章　本館の立地状況の違いによる図書館利用行動分析

前章までに，市民の図書館利用行動の変化により，従来の階層的な図書館計画手法の考え方が通用しない状況を生み出していることを明らかにした。

本館の設置位置としては，本館は全住民を利用対象とする施設であるから住民の生活圏の中心で公共交通の結節点など分かり易く,行きやすい場所に設置することが原則である。そうした位置としては駅前や中核的商店街近傍などが例示として挙げられるが，住民に高い比率で自家用車が普及している都市においては，拠点的な場所にこだわらず広い駐車場が確保できる郊外地に設置することも選択肢になり得るであろう。

この章では，本館の立地位置と住民の図書館利用行動の関係について取り上げ，計画論を立てる上での事実関係を明らかにする。具体的には，図書館の本館が住民の日常動線の結節点といえる場所に設置されているか，市街地中心部とは言いがたい郊外に設置されているかということ以外の条件（市人口，市面積，竣工年，延床面積，蔵書規模など）がほぼ等しい 2 つの自治体（北広島市と石狩市）における図書館利用者調査（来館者調査：巻末資料 1・資料 2，登録者調査：巻末資料 3・資料 4）から，本館の立地位置の違いが住民の図書館利用行動に及ぼす影響を考察する。

7.1　調査対象館の概要

調査対象は北海道の北広島市と石狩市の図書館本館である。図 7-1 に北広島市と石狩市の位置関係[1)] を，図 7-2 に札幌市周辺拡大図を示す。

北広島市と石狩市は，札幌市の東南と北とに接する人口 6 万人規模のベッドタウンである。市域面積はほぼ同等で，長い接点で札幌市に隣接し，札幌市内に通ずる主要道路が市域の基本骨格を成し，札幌市に近い地域で新興住宅地が開発され，際立った人口集中はないなどの点で共通している。ベッドタウン化の進行による新住民の増加を背景に 1996 年に同時に市制を施行した両市は，住民の年齢階層別構成も似通っている。両市は 1998 年 10 月（北広島市）と 2000 年 6 月（石狩市）に図書館本館を新築，開館させた。延べ床面積はともに 4,000 ㎡内外であり，約 18 万冊の蔵書と多様な閲覧スペースを備え，運営とサービス方針にも大きな差はない。

両館の相違点は本館の立地位置と施設形態にあり，北広島市の図書館本館が JR 北広島駅前という公共交通利用者にとっては日常生活行動の中心地点に建設され，背後に計画的に開発された住宅地を擁する好条件の位置に設置されているのに対し，鉄道がなく住民の誰もが中核と認識しているような拠点のない石狩市の図書館本館は市役所の近くではあるものの，札幌市沿いの新興住宅地のより北側に単独の敷地を得て設置されている。駐車場規模は 108 台で，いわば郊外地立地に近い。また，単独施設である石狩市図書館に対し北

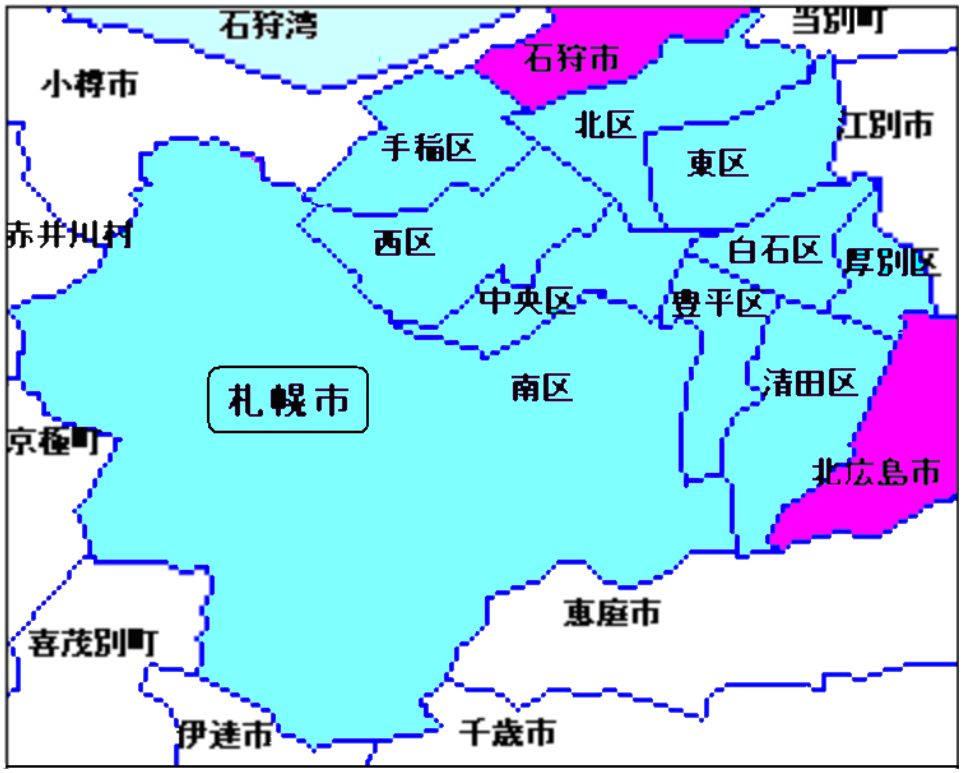
広島市図書館は複合施設であるが，複合相手は集会施設であり図書館は 1，2 階を占めているため単独施設に近く，施設形態の差が図書館利用行動に大きな影響を与えるとは考えられない。

来館者調査時点での両図書館の状況を表 7-1 に示した[2)]。両館とも近隣市町村住民の貸出利用登録を認めており，登録率は北広島市図書館 29.5%（登録者の内訳は市内 85.7%，市外 14.3%），石狩市民図書館 34.7%（市内 61.1%，市外 38.9%）となっている。

また，両市とも分散型人口配置を補うため複数の小規模分館（室）によるネットワークを展開しており，調査時点においては，北広島市図書館は本館の他 4 つの図書室と 11 の移動図書館（BM）ステーションで，石狩市民図書館は本館の他 3 分館（登録者調査時点では本館＋5 分館）で運営していた[3)]。北広島市調査からはやや時間が経っていること，石狩市調査後に市町村合併が行われたことなどにより両市のネットワーク運営に調査時点から若干の変更がみられるが，本館の立地位置の違いによる基本的な利用行動を捉えるという本章の目的には影響がないものと考える。

＜図７－１　札幌市周辺図＞

＜図７－２　札幌市周辺拡大図＞



＜表7－1　調査対象館の概要＞

	北広島市図書館	石狩市民図書館
市制施行日	1996（平成 8）年 9月 1日	1996（平成 8）年 9月 1日
竣工年月日	1998（平成10）年10月 1日	2000（平成12）年 6月 3日
登録者調査	2003（平成15）年 6月	2006（平成18）年 6月
来館者調査日	2002（平成14）年11月12日（火）／23日（祝）	2005（平成17）年6月16日（木）／19日（日）
来館者数	火曜：463人（中学上438人、小学下25人） 祝日：504人（中学上466人、小学下38人）	木曜：496人（中学上464人、小学下32人） 日曜：709人（中学上605人、小学下104人）
市人口	58,038人（2002年10月）	56,370人（2005年5月）
市面積	118．54K㎡	117．86K㎡
立地状況	JR駅前型	役所隣接型
複合形態	芸術文化ホールとの複合施設	単独施設
近隣市町村	札幌市（厚別区、清田区） 江別市、恵庭市、南幌町、長沼町	札幌市（手稲区、北区） 小樽市、当別町、厚田村
延床面積	4,124㎡	3,826㎡
ネットワーク網	本館＋4分室＋11BMステーション （分室：団地住民、大曲、西の里、農民研）	本館＋3分館 （分館：花川北、花川南、八幡）
職員（うち司書）	29名（うち司書23名）	21名（うち司書18名）
蔵書冊数	186,431冊（平成14年3月31日現在）	175,738冊（平成16年3月31日現在）
貸出登録	市外者可	市外者可
開館日・開館時間	火・水・木10:00～20:00、 金・土・日・祝10:00～18:00、月曜休館	火・金10:00～18:00、水・木10:00～20:00 土・日・祝10:00～17:00、月曜休館
貸出冊数（期間）	20冊（2週間まで）	無制限（2週間まで）
登録率	29.5%（市内85.7%、市外14.3%）	34.7%（市内61.1%、市外38.9%）
駐車場	83台（うち身障者用6台）、文化ホールと共用	108台（うち身障者用2台）
交通機関	JR札幌駅から快速で16分 千歳空港から快速で20分	路線バスのみ、札幌駅から約50分 地下鉄麻生駅から約30分
運営方針	①市民に親しまれる運営 ②専門書よりも一般書を収集 ③市民の要望によりBDSなし ④自習室、社会人専用ルームあり ⑤インターネットの開放なし	①郷土史研究の拠点に ②北海道史たどる地域研究資料収集 ③自動貸出機能付きBDS（3台） ④自習禁止し読書優先 ⑤インターネット（委託：15分100円）

7.2　調査の概要

7.2.1　調査の対象

登録者調査（巻末資料 3・資料 4）は，北広島市図書館（2003 年実施）においては，13 歳以上の 17,633 人（登録者全体の 88.2%：市内 15,078 人，市外 2,555 人）の中から無作為に 10%抽出した 1,881 人を対象として行った。石狩市民図書館（2006 年実施）においては，第 4 章で述べたように，市外在住利用者を札幌市在住の利用者（12,927 人）に絞り，石狩市在住の利用者 18,426 人と合わせた 31,353 人（登録者全体の 89.8%）から無作為に 6%抽出した 1,881 人を対象として行った[4)]。

来館者調査（巻末資料 1・資料 2）は，それぞれ 2002 年と 2005 年に，両館とも平日と休日の 2 日間に亘り，開館時から閉館時まで終日全来館者を対象に行った。

7.2.2　調査の方法

登録者調査は両市とも調査票による無記名郵送アンケート方式で，返信用封筒にて本館への返信を依頼した。両市とも人口の流出入が激しい傾向にあり，転居先不明，住所不詳等で多数の調査票（北広島 125 通，石狩 146 通）が戻ってきており，有効回収数は北広島 803 通，石狩 604 通で，回収率は北広島 45.7%，石狩 34.8%である。

来館者調査は北広島市図書館においては 2002 年 11 月 12 日（火曜日）と同 11 月 23 日（土曜日，祝日：勤労感謝の日），石狩市民図書館においては 2005 年 6 月 16 日（木曜日）と同 6 月 19 日（日曜日）に実施した。両館とも本館で平日と休日の 2 日間に亘り，開館時から閉館時まで終日全来館者を対象に行った。平日の調査日は両館とも夜間開館を実施している日を選定している。調査は無記名アンケート方式により行っており，利用者が入館するときに入館時刻を記入した質問票を手渡し，それを退館時に回収して退館時刻を記入するという方法により入退館時刻と在館時間を測定した。調査日の天候はいずれも晴れである。

なお，本章では以後，日曜・祝日を休日に用語を統一するとともに，登録者調査との関連から中学生以上（13 歳以上）の利用者についての分析を行うこととする[5)]。また，両市図書館における利用行動の独立性の検討をカイ 2 乗検定により行うに当たっては，期待度数が 5 未満のセルが存在する変数項目については，これまで同様 Fisher の直接法値を用いて検定を行った。

7.3　登録者調査から

7.3.1　利用館選択

表 7-2 は，立地位置による違いをより明確にするために市外在住者を除いた市内在住登録者のみの最近隣館と主利用館との関係[6)] をまとめたものである。

表からは，両市とも分館（室）を利用している者はほぼ例外なく最近隣の分館(室)を利用しているものの,前章までで述べてきたように市民の本館志向がきわめて顕著である(北広島 86.3%，石狩 82.4%）ことが確認できる。

表 7-3 は，最近隣館と主利用館の関係により本館・分館(室)の 2 つにまとめ，類型に分けて示したものである。少数者を除くと，登録者は最近隣館が本館・分館（室）のいずれであれ本館を主利用館としている利用者（類 A1，類 A2）と，自宅から最近隣の分館（室）や移動図書館ステーションを主に利用している利用者（類 B1）との 3 類型に大別できる。

最近隣館が本館である利用者（類 A1＋類型外の少数）と分館（室）である利用者（類 A2＋類 B1）の割合は両市で有意な差がある（χ^2＝39.825, df=1, p<.01)。北広島市図書館は JR 駅前に設置され背後の住宅団地や新興住宅地住民の通勤・通学動線上にあるため，本館を最近隣館とする登録者の比率が 53.4%を占めるのに対し，住宅地から離れた場所に設置されている石狩市民図書館でのそれは 33.0%で，立地位置の違いが反映されている。

近くの分館（室）を利用している類 B1 と，近くに分館(室)がありながらも本館を利用している類 A2 との割合には両市で有意な差はなく(χ^2＝0.402, df=1, p>.05)，最近隣館が分館（室）である利用者が分館（室）を主に利用するか，本館を主に利用するかの選択に本館の立地位置は影響していないといえる。

＜表7－2　市内在住者の最近隣館と主利用館＞

単位：人

	主利用館 最近隣館	北広島市 本館	分　室 住セン	大曲	西の里	農民研	移動図	合　計 *1
北広島市図書館	本館	371	2				1	374
	団地住民センター	152	27		1			180
	大曲会館図書室	36		35			2	73
	西の里公民館図書室	22			20			42
	農民研修センター図書室	7				4		11
	最寄りの移動図書館	22		3			2	27
	合　計	610	29	38	21	4	5	707

	主利用館 最近隣館	石狩市 本館	分　館 花川南	花川北	八幡	厚田	浜益	合　計 *2
石狩市民図書館	石狩市民図書館（本館）	119						119
	花川南分館	91	31	2				124
	花川北分館	74	1	22				97
	八幡分館	15			6			21
	厚田分館					1		1
	浜益分館	1					1	2
	合　計　*3	300	32	24	6	1	1	364

＊１　市外在住者84名、及び最近隣館、主利用館のいずれかが不明の者12名を除く707名が対象。
＊２　市外在住者207名、及び最近隣館、主利用館のいずれかが不明の者33名を除く364名が対象。
＊３　2005年10月1日の厚田村・浜益村との市町村合併後、旧村の分館を加え5分館で運営している。

＜表7－3　最近隣館と主利用館による類型＞

単位：人（%）

主利用館 最近隣館	本　館	分館・分室	合　計
本　館	類A1 371 (52.9) 119 (33.0)	3 (　0.4) 0 (　0.0)	374 (53.4) 119 (33.0)
分館・分室	類A2 239 (34.1) 181 (50.1)	類B1 88 (12.6) 61 (16.9)	327 (46.6) 242 (67.0)
合　計	610 (87.0) 300 (83.1)	91 (13.0) 61 (16.9)	701 (100.0) 361 (100.0)

＊１　上段数値：北広島市図書館、　下段数値：石狩市民図書館
＊２　北広島市の場合は、移動図書館を分館・分室に含めて集計した。
＊３　類B1は最近隣館を利用していない者（北広島6名、石狩3名）を除く。

7.3.2　主利用館別属性

登録者の属性を主利用館別にまとめ，年齢及び職業構成をみたものが表 7-4 である。

7.3.2.1　年齢

本館利用者（類 A1＋類 A2）は，年齢階層の割合順位に相違があるものの上位３位までを 40 歳代以上で占めているのが特徴で，20 歳代（北広島 14.6%，石狩 10.5%）で構成比に違いがみられるが有意な差とはいえない（χ^2＝6.899, df=5, p>.05）。

分館（室）利用者の類 B1 は，60 歳以上の高齢者が最も多い割合（北広島 32.2%，石狩 36.8%）を示してしているのが特徴で，次いで 50 歳代（北広島 21.8%，石狩 26.3%），30 歳代（北広島 19.5%，石狩 14.0%)が２割前後占めており，有意差のない年齢構成をしている（χ^2＝1.682, df=5, p>.05）。

7.3.2.2　職業

本館利用者（類 A1＋類 A2）は，両市とも勤務者（北広島 35.8%，石狩 33.3%）と主婦（北広島 32.5%，石狩 30.9%）が多く，次いで学生，無職者，自営・家族従業者の順となっており，有意な差はない（χ^2＝6.042, df=4, p>.05）。

類 B1 は, 北広島市では主婦 47.7%, 勤務 27.9%, 無職者 15.1%, 石狩市では主婦 50.0%, 無職者 23.2%，勤務者 17.9%となっており，両市とも主婦の割合が圧倒的に高いのが特徴で，有意差のない職業構成をしている（χ^2＝2.820, df=4, p>.05）。

7.3.1 節の利用館選択では，立地位置の違いによって本館を主利用館としている利用者（類 A1，類 A2）の割合が異なることを示したが，その差は利用者の年齢・職業構成に有意な差が生じるような影響を及ぼしていないと捉えることができよう。

表 7-5 は，多数を占める本館利用者（類 A1＋類 A2）の年齢と職業との関係をみたものである。表から，両市とも全体としては勤務者と主婦が本館利用の中心を成しており（北広島：勤務 35.8%，主婦 32.5%，石狩：勤務 33.3%，主婦 30.9%），40 歳代，50 歳代，及び 20 歳代の勤務者と 30 歳代以上の主婦が多いことがわかる。年齢・職業構成別に総和の割合をみると，特に 10 歳代の学生（北広島 11.0%，石狩 14.8%），60 歳以上の無職高齢者（北広島 12.5%，石狩 13.1%），及び 30 歳代～40 歳代の主婦が多くなっている（主婦の中では北広島は 40 歳代が 9.0%，石狩は 50 歳代が 8.9%で最も多い)。これは，従来から本館利用の中心とされていた勤務者層に加え，10 歳代の小・中・高校生といった学生層，30 歳代～40 歳代の主婦層，及び 60 歳以上の無職高齢者層などが幅広く本館利用者へ移行してきていることを現しているといえる。

＜表7－4　主利用館別利用者属性＞

単位：人（%）

属性	主利用館（類型）	北広島市図書館 本館（類A1＋類A2）	北広島市図書館 分館（類B1）	石狩市民図書館 本館（類A1＋類A2）	石狩市民図書館 分館（類B1）
年齢	10～19	68 (89.5) (11.1)	8 (10.5) (9.2)	43 (91.5) (14.5)	4 (8.5) (7.0)
	20～29	89 (94.7) (14.6)	5 (5.3) (5.7)	31 (93.9) (10.5)	2 (6.1) (3.5)
	30～39	84 (83.2) (13.8)	17 (16.8) (19.5)	43 (84.3) (14.5)	8 (15.7) (14.0)
	40～49	119 (92.2) (19.5)	10 (7.8) (11.5)	47 (87.0) (15.9)	7 (13.0) (12.3)
	50～59	102 (84.3) (16.7)	19 (15.7) (21.8)	58 (79.5) (19.6)	15 (20.5) (26.3)
	60～	148 (84.1) (24.3)	28 (15.9) (32.2)	74 (77.9) (25.0)	21 (22.1) (36.8)
	合　計 *1	610 (87.5) (100.0)	87 (12.5) (100.0)	296 (83.9) (100.0)	57 (16.1) (100.0)
職業	自営・家族	7 (87.5) (1.1)	1 (12.5) (1.2)	10 (90.9) (3.4)	1 (9.1) (1.8)
	勤務者	218 (90.1) (35.8)	24 (9.9) (27.9)	97 (90.7) (33.3)	10 (9.3) (17.9)
	主婦	198 (82.8) (32.5)	41 (17.2) (47.7)	90 (76.3) (30.9)	28 (23.7) (50.0)
	学生	95 (93.1) (15.6)	7 (6.9) (8.1)	51 (92.7) (17.5)	4 (7.3) (7.1)
	無職	91 (87.5) (14.9)	13 (12.5) (15.1)	43 (76.8) (14.8)	13 (23.2) (23.2)
	合　計 *2	609 (87.6) (100.0)	86 (12.4) (100.0)	291 (83.9) (100.0)	56 (16.1) (100.0)

＊１　石狩市民図書館においては10歳未満の者11名を除外した。
＊２　各類型における職業不明者及び、その他の職業と回答した者を除く。
＊３　類B1は最近隣の分館（室）を利用していない者（北広島6名、石狩3名）を除く。
＊４　上段数値：人数(人)、　中段数値：横計割合（%）、　下段数値：縦計割合（%）

＜表7－5　本館利用者の年齢と職業構成＞

単位：人（%）

職業	北広島市図書館						石狩市民図書館					
年齢	自営	勤務	主婦	学生	無職	全体	自営	勤務	主婦	学生	無職	全体
10～19		1 (0.2)		67 (11.0)		68 (11.2)				43 (14.8)		43 (14.8)
20～29		46 (7.6)	9 (1.5)	28 (4.6)	6 (1.0)	89 (14.6)		18 (6.2)	2 (0.7)	8 (2.7)	2 (0.7)	30 (10.3)
30～39	1 (0.2)	36 (5.9)	45 (7.4)		1 (0.2)	83 (13.6)		19 (6.5)	23 (7.9)		1 (0.3)	43 (14.8)
40～49	1 (0.2)	59 (9.7)	55 (9.0)		4 (0.7)	119 (19.5)	4 (1.4)	25 (8.6)	16 (5.5)			45 (15.5)
50～59	3 (0.5)	53 (8.7)	42 (6.9)		4 (0.7)	102 (16.7)	5 (1.7)	24 (8.2)	26 (8.9)		2 (0.7)	57 (19.6)
60以上	2 (0.3)	23 (3.8)	47 (7.7)		76 (12.5)	148 (24.3)	1 (0.3)	11 (3.8)	23 (7.9)		38 (13.1)	73 (25.1)
合　計 *1	7 (1.1)	218 (35.8)	198 (32.5)	95 (15.6)	91 (14.9)	609 (100.0)	10 (3.4)	97 (33.3)	90 (30.9)	51 (17.5)	43 (14.8)	291 (100.0)

＊１　類A1、類A2を合算した本館利用者のみを対象としている。
＊２　上段数値：人数(人)、下段数値：総和の割合（%）

7.4　本館来館者調査から

7.4.1　平日・休日別構成

登録者の約 8 割が本館利用者（北広島 80.5%，石狩 74.4%＜市外在住者も含む＞）であったことから，本館で行った来館者調査をもとに両館を対比する形で利用行動を分析する。

両図書館の平日・休日別来館者を年齢階層別，性別，職業種別に示したものが表 7-6 である。

北広島市図書館は火・水・木曜日が 10：00～20：00，金・土・日及び開館する祝日が 10：00～18：00 と開館時間が異なっており，休日の開館時間は平日よりも 2 時間短いが，平日 463 人，休日 504 人と来館者は休日の方が多くなっている。また，石狩市民図書館の場合も水・木曜日は 10:00～20:00，土・日曜日は 10:00～17:00 と開館時間が異なり，休日の開館時間は平日よりも 3 時間短いにもかかわらず，平日が 496 人，休日が 709 人と来館者は休日の方が約 1.7 倍多くなっており，両館とも利用者は平日より休日の方が多い傾向にあることを現わしている。しかし，両館の平日と休日とでの来館者の割合には有意な差があり（χ^2＝9.819,df＝1,p<.01），石狩市民図書館は北広島市図書館よりも平日の利用が少なく，休日の利用が多い傾向にある。これは，石狩市民図書館は市外在住の利用者が多く，平日（市内 56.0%，市外 44.0%）に比べて，休日（市内 41.7%，市外 58.3%）に市外からの来館者が多かったことに起因しているものと考えられる。

来館者の男女比率をみると，平日では女性の方が多く（北広島：男性 40.4%，女性 59.6%，石狩：男性 49.2%，女性 50.8%），休日ではほぼ同率に近づく（北広島：男性 49.6%，女

性 50.4%，石狩：男性 48.5%，女性 51.5%）。両館とも平日・休日にかかわらず女性が多い傾向にあるが，年齢階層と合わせてみると，60 歳以上の年齢層においては男性（北広島：平日 80.4%，休日 70.9%，石狩：平日 82.4%，休日 78.8%）の方が断然多くなっている。従来から 60 歳以上の図書館利用者にはそもそも男性の方が多く，かつ本館を志向する傾向が強いと言われており，その傾向は本調査結果にも顕著に現れている。

職業種別構成をみると，両館とも平日・休日の来館者の割合が勤務者と学生は有意な差がなく（北広島：χ^2＝3.197,df＝1,p>.05，石狩：χ^2＝2.436,df＝1,p>.05），主婦と無職者は有意な差がない（北広島：χ^2＝0.861,df＝1,p>.05，石狩：χ^2＝2.055,df＝1,p>.05）。勤務者（北広島：平日 24.2%，休日 37.3%，石狩：平日 37.7%，休日 44.1%）と学生（北広島：平日 24.4%，休日 27.6%，石狩：平日 14.7%，休日 22.4%）は平日より休日の利用比率が高く，主婦（北広島：平日 26.3%，休日 19.4%，石狩：平日 23.0%，休日 19.0%）と無職者（北広島：平日 22.5%，休日 13.7%，石狩：平日 18.8%，休日 11.7%）は逆に平日よりも休日の利用比率が低くなっている。これは，平日に仕事や学校で利用できない勤務者と学生の利用が休日に増えるのに対して，比較的時間に余裕のある主婦や無職高齢者は休日の混雑を避けて平日に利用していることによるものと思われる。

すなわち，本館利用者の中でも平日と休日とで利用者層の棲み分けがなされているといえる。

＜表7－6　来館者の平日･休日別構成＞

単位：人(%)

属性 調査館･日		年齢	性別 男性	性別 女性	職業種別 自営･家族	職業種別 勤務	職業種別 主婦	職業種別 学生	職業種別 無職	合計
北広島市図書館	2002年11月12日(火曜)	0～12	6 (3.2)	19 (6.9)				20 (17.7)	5 (4.8)	25 (5.4)
		13～15	4 (2.1)	5 (1.8)				9 (8.0)		9 (1.9)
		16～19	16 (8.6)	46 (16.7)		1 (0.9)		61 (54.0)		62 (13.4)
		20～29	24 (12.8)	50 (18.1)	2 (16.7)	32 (28.6)	8 (6.6)	22 (19.5)	10 (9.6)	74 (16.0)
		30～39	15 (8.0)	43 (15.6)	1 (8.3)	21 (18.8)	33 (27.0)	1 (0.9)	2 (1.9)	58 (12.5)
		40～49	12 (6.4)	49 (17.8)		22 (19.6)	36 (29.5)		3 (2.9)	61 (13.2)
		50～59	24 (12.8)	43 (15.6)	6 (50.0)	19 (17.0)	31 (25.4)		11 (10.6)	67 (14.5)
		60～	86 (45.9)	21 (7.6)	3 (25.0)	17 (15.2)	14 (11.5)		73 (70.2)	107 (23.1)
		合計	187(100.0) (40.4)	276(100.0) (59.6)	12(100.0) (2.6)	112(100.0) (24.2)	122(100.0) (26.3)	113(100.0) (24.4)	104(100.0) (22.5)	463(100.0) (100.0)
	2002年11月23日(祝日)	0～12	13 (5.2)	25 (9.8)				35 (25.2)	3 (4.3)	38 (7.5)
		13～15	13 (5.2)	14 (5.5)				27 (19.4)		27 (5.4)
		16～19	25 (10.0)	31 (12.2)		1 (0.5)		54 (38.8)	1 (1.4)	56 (11.1)
		20～29	34 (13.6)	37 (14.6)	1 (10.0)	35 (18.6)	5 (5.1)	22 (15.8)	8 (11.6)	71 (14.1)
		30～39	29 (11.6)	57 (22.4)	2 (20.0)	49 (26.1)	32 (32.7)		3 (4.3)	86 (17.1)
		40～49	45 (18.0)	31 (12.2)	2 (20.0)	51 (27.1)	20 (20.4)	1 (0.7)	2 (2.9)	76 (15.1)
		50～59	35 (14.0)	36 (14.2)	4 (40.0)	37 (19.7)	25 (25.5)		5 (7.2)	71 (14.1)
		60～	56 (22.4)	23 (9.1)	1 (10.0)	15 (8.0)	16 (16.3)		47 (68.1)	79 (15.7)
		合計	250(100.0) (49.6)	254(100.0) (50.4)	10(100.0) (2.0)	188(100.0) (37.3)	98(100.0) (19.4)	139(100.0) (27.6)	69(100.0) (13.7)	504(100.0) (100.0)
石狩市民図書館	2005年6月16日(木曜)	0～12	11 (4.5)	21 (8.3)				18 (24.7)	14 (15.1)	32 (6.5)
		13～15	8 (3.3)	11 (4.4)				19 (26.0)		19 (3.8)
		16～19	8 (3.3)	11 (4.4)				17 (23.3)	2 (2.2)	19 (3.8)
		20～29	41 (16.8)	46 (18.3)	3 (10.3)	43 (23.0)	8 (7.0)	19 (26.0)	14 (15.1)	87 (17.5)
		30～39	32 (13.1)	51 (20.2)	6 (20.7)	49 (26.2)	25 (21.9)		3 (3.2)	83 (16.7)
		40～49	32 (13.1)	48 (19.0)	7 (24.1)	37 (19.8)	36 (31.6)			80 (16.1)
		50～59	42 (17.2)	49 (19.4)	8 (27.6)	37 (19.8)	35 (30.7)		11 (11.8)	91 (18.3)
		60～	70 (28.7)	15 (6.0)	5 (17.2)	21 (11.2)	10 (8.7)		49 (52.7)	85 (17.1)
		合計	244(100.0) (49.2)	252(100.0) (50.8)	29(100.0) (5.8)	187(100.0) (37.7)	114(100.0) (23.0)	73(100.0) (14.7)	93(100.0) (18.8)	496(100.0) (100.0)
	2005年6月19日(日曜)	0～12	44 (12.8)	60 (16.4)				73 (45.9)	31 (37.3)	104 (14.7)
		13～15	13 (3.8)	23 (6.3)				36 (22.6)		36 (5.1)
		16～19	11 (3.2)	21 (5.8)		2 (0.6)	1 (0.7)	28 (17.6)	1 (1.2)	32 (4.5)
		20～29	34 (9.9)	56 (15.3)		60 (19.2)	4 (3.0)	19 (11.9)	7 (8.4)	90 (12.7)
		30～39	58 (16.9)	80 (21.9)	6 (31.6)	81 (25.9)	45 (33.3)	2 (1.3)	4 (4.8)	138 (19.5)
		40～49	68 (19.8)	80 (21.9)	8 (42.1)	84 (26.8)	52 (38.5)	1 (0.6)	3 (3.6)	148 (20.9)
		50～59	64 (18.6)	31 (8.4)	4 (21.1)	66 (21.1)	20 (14.8)		5 (6.0)	95 (13.4)
		60～	52 (15.1)	14 (3.8)	1 (5.3)	20 (6.3)	13 (9.6)		32 (38.6)	66 (9.3)
		合計	344(100.0) (48.5)	365(100.0) (51.5)	19(100.0) (2.7)	313(100.0) (44.1)	135(100.0) (19.0)	159(100.0) (22.4)	83(100.0) (11.7)	709(100.0) (100.0)

7.4.2　利用目的・頻度

表 7-7 は利用目的を，表 7-8 は利用頻度をまとめたものである。

7.4.2.1　利用目的

両館とも約半数の利用者（北広島 45.2%，石狩 51.8%）が「館外借出・返却」を目的として来館しており，本館利用においても資料の借出・返却が中心であるが[7]，両館の間で利用目的には有意な差がある（$\chi^2=32.367, df=7, p<.01$）。両館における相違点は，北広島市図書館は石狩市民図書館に比べて「借出・返却」目的の来館者が少なく，「館内利用」目

的，及び「立ち寄り」利用の来館者が多い傾向が現れていることである。このことは，駅前商業地周辺のような立地条件の良い場所に図書館を設置すると，特に目的なしに立ち寄る利用者層を新たに獲得する可能性があることを示唆しているといえる。

7.4.2.2　利用頻度

両館とも「月に 2～3 回」（北広島 40.6%，石狩 47.4%）が最も多く，次いで「週に 1 回程度」（北広島 33.3%，石狩 28.2%）の順であるが，両館の間には利用頻度に有意な差がある（χ^2＝19.348,df＝5,p<.01）。両館における相違点は，北広島市図書館では高頻度利用者が多く，石狩市民図書館では「月に 2～3 回」程度の来館者が多い傾向にあることである。これは両館とも平日より休日の利用が多いが，市域の核とは言いがたい場所に設置された石狩市民図書館では休日利用が特に顕著であったこと，また北広島市図書館では「館内利用」や「立ち寄り利用」が比較的多く存在したのに対して，石狩市民図書館では資料の「借出・返却」を目的としている来館者の割合が多かったことなどと関連しており，立地位置と利用目的により利用頻度にも差が現れている結果であると考えられる。

＜表7－7　利用目的＞

単位：人（%）

調査館・調査日	北広島市図書館			石狩市民図書館		
利用目的	平　日	休　日	全　体	平　日	休　日	全　体
本や雑誌などを返却するだけのため	20	23	43（　4.9）	21	35	56（　5.4）
本や雑誌などの借出し・返却のため	175	221	396（45.2）	205	334	539（51.8）
図書館内の資料を館内で利用するため	85	72	157（17.9）	46	61	107（10.3）
調べものや情報を得るため	79	71	150（17.1）	89	99	188（18.1）
持参してきたものを使って自習するため	27	36	63（　7.2）	44	36	80（　7.7）
特別な目的なしに立ち寄った	7	14	21（　2.4）	7	3	10（　1.0）
子供や友人に付き添って	7	14	21（　2.4）	6	16	22（　2.1）
その他	19	6	25（　2.9）	27	12	39（　3.7）
合　計　*1	419	457	876（100.0）	445	596	1,041（100.0）

＊1　利用目的が不明の者（北広島：平日19名、休日9名、石狩：平日19名、休日9名）を除く。

＜表7－8　利用頻度＞

単位：人（%）

調査館・調査日 利用頻度	北広島市図書館			石狩市民図書館		
	平　日	休　日	全　体	平　日	休　日	全　体
ほとんど毎日	47	33	80（　9.6）	29	20	49（　5.5）
週に1回程度	152	125	277（33.3）	105	145	250（28.2）
1ヶ月に2～3回	153	185	338（40.6）	171	249	420（47.4）
1ヶ月に1回位	28	50	78（　9.4）	43	53	96（10.8）
年に数回	19	30	49（　5.9）	22	40	62（　7.0）
それ以下	4	6	10（　1.2）	5	5	10（　1.1）
合　計　*1	403	429	832（100.0）	375	512	887（100.0）

＊1　主利用館が本館以外の利用者（北広島：平日25名、休日18名、石狩：平日54名、休日56名）、及び利用頻度不明者（北広島：平日10名、休日19名、石狩：平日35名、休日37名）を除く。

7.4.3　本館利用理由

主利用館が本館である利用者に対し，本館を利用する理由を 2 つまでの複数回答を認めて回答してもらった結果をまとめたものが表 7-9 である。両日を合算した値で考察する。

両館とも「本・雑誌の量や種類が多い」を理由として挙げている来館者（北広島 40.4%，石狩 40.8%）が最も多く，資料の豊富さに惹かれて本館を利用している点では共通しているが，両館の間には利用理由に有意な差がある（χ^2＝163.264,df＝9,p<.01）。

次いで両館とも「家や学校，職場などから近い」が続いているが，北広島市図書館では石狩市民図書館に比べて高い割合（北広島 36.3%，石狩 28.6%）となっている。これと関連して，北広島市図書館では「立ち寄りやすい」と回答している者の割合が石狩市民図書館よりも多い（北広島 18.6%，石狩 1.9%）。一方，石狩市民図書館では「立ち寄りやすさ」は最も低い割合となっており，「内部の雰囲気が好き」と回答している者の割合が北広島市図書館よりも多くなっている（北広島 13.7%，石狩 20.4%）。これらの相違点は，北広島市図書館が市域の核といえる JR 駅前に立地していることや，石狩市民図書館が低年齢層向け・若年層向け・大人向けのそれぞれの特徴を持たせた 3 つの読書スペース，読書テラス，軽食喫茶スペースなどを設けた滞在型利用を意識した郊外施設であることなどといった両館の立地位置・施設設備の違いによる差であるといえる。

従来から本館の主たる利用理由とされてきた「蔵書量の多さ」，「距離の近さ」や「慣れ」などに加え，「外観や内部の雰囲気が好き」（北広島 13.7%，石狩 20.4%）や，「駐車場がある」（北広島 12.8%，石狩 12.2%）などといった施設設備・環境面での項目を利用理由

に挙げる利用者が増えてきているところに近年の図書館選択基準動向の変化を垣間みることができるといえよう。

＜表7－9　本館利用理由＞

単位：人（%）

調査館・調査日 理　由	北広島市図書館 *2 平　日	休　日	全　体	石狩市民図書館 *3 平　日	休　日	全　体
本や雑誌の量や種類が多い	154	180	334 (40.4)	169	257	426 (40.8)
新しい本や雑誌が多い	41	53	94 (11.0)	42	100	142 (13.6)
家・学校・職場などから近い	156	153	309 (36.3)	147	152	299 (28.6)
駅・市役所・商店街などに近く立寄りやすい	78	80	158 (18.6)	13	7	20 (　1.9)
駐車場がある	47	62	109 (12.8)	47	80	127 (12.2)
読書室（読書空間）がある	42	46	88 (10.3)	34	43	77 (　7.4)
職員に相談にのってもらいやすい	15	11	26 (　3.1)	8	15	23 (　2.2)
この図書館に使い慣れている	80	83	163 (19.2)	94	93	187 (17.9)
外観や内部の雰囲気が好き	55	62	117 (13.7)	93	120	213 (20.4)
その他	23	18	41 (　4.1)	34	42	76 (　7.3)

＊１　理由2つまでの選択を認めているので合計は100%を越える。
＊２　主利用館が本館の者851人（平日409人，祝日442人）の数値である。
＊３　主利用館が本館の者1,044人（平日447人，休日597人）の数値である。

7.4.4　来館過程

どこから図書館に来たかの直前の場所を尋ね，平日・休日別，並びに市内在住者と市外在住者とに分けて来館経路を示したものが表 7-10 である。

両館とも「自宅から」の来館が最も多く，平日（北広島 62.6%，石狩 66.8%）よりも休日（北広島 75.6%，石狩 85.1%）の方が高い割合を示している。平日では，次いで「学校や職場から」が（北広島 24.4%，石狩 21.8%）続いているが，休日での次位は「買物などの出先から」（北広島 15.5%，石狩 12.3%）である。

両館を比較すると，来館経路は平日には有意な差はない(χ^2＝2.638, df=3, p>.05）が，休日には有意な差があり(χ^2＝24.237, df=3, p<.01），北広島市図書館は「学校や職場から」や「買い物などの出先から」等の利用が比較的多く，石狩市民図書館は「自宅から」の利用が多い傾向にある。これも立地位置の違いによるものであり，7.4.2.1 節の利用目的で述べたことと関連し，図書館は本来何らかの目的をもって自宅から直接来館する「目的的施設」であるが，駅前のような商業地に建設することにより「立ち寄り施設」的利用も増える可能性があることを示唆しているといえる。

＜表7－10 来館過程＞

単位：人（%）

調査館	北広島市図書館						石狩市民図書館					
調査日	平日			休日			平日			休日		
来館経路	市内	市外	全体	市内	市外	全体	市内	市外	全体	市内	市外	全体
自宅から	235	16	251	279	62	341	173	127	300	208	290	498
	(58.6)	(4.0)	(62.6)	(61.9)	(13.8)	(75.6)	(38.5)	(28.3)	(66.8)	(35.6)	(49.6)	(85.1)
学校や職場から	59	39	98	16	12	28	50	48	98	4	5	9
	(14.7)	(9.7)	(24.4)	(3.6)	(2.7)	(6.2)	(11.1)	(10.7)	(21.8)	(0.7)	(0.8)	(1.5)
買物などの出先から	37	5	42	58	12	70	22	15	37	28	44	72
	(9.2)	(1.3)	(10.5)	(12.7)	(2.7)	(15.5)	(4.9)	(3.3)	(8.2)	(4.8)	(7.5)	(12.3)
その他	6	4	10	8	4	12	6	8	14	2	4	6
	(1.5)	(1.0)	(2.5)	(1.8)	(0.9)	(2.7)	(1.3)	(1.8)	(3.1)	(0.3)	(0.7)	(1.0)
合計 *1	337	64	401	361	90	451	251	198	449	242	343	585
	(84.0)	(16.0)	(100.0)	(80.0)	(20.0)	(100.0)	(55.9)	(44.1)	(100.0)	(41.4)	(58.6)	(100.0)

＊1 住所、来館過程のいずれかが不明の者を除く。

7.4.5 自宅からの距離

自宅からの直接来館者が大多数を占めていることから，来館者の自宅からの距離を距離区分別に示し，利用圏域の広がりをみたものが表 7-11 である。

来館者の距離区分別累積百分率をみると，来館者の約半数（北広島：平日 47.6%，休日 42.5%，石狩：平日 49.4%，休日 39.3%）が北広島市図書館では 1.5km 内に包含されているが，石狩市民図書館では 3km まで拡大しており，石狩市の方が利用圏域は広いことがわかる。これは立地位置の違いに加え，来館者のうち市外在住者の占める割合（北広島：平日 14.6%，休日 19.3%，石狩：平日 43.9%，休日 58.3%）が北広島市図書館の方が少ないのに対して，石狩市民図書館では札幌市民を中心とする市外在住者が来館者全体の約半数（52.1%）を占めていることによる。

また，一般的な本館の利用圏域とされる 3～5km の距離区分で比較すると，来館者の累積百分率は北広島市図書館で平日 76.1%，休日 75.9%，石狩市民図書館で平日 63.9%，休日 59.7%となっており，両館とも平日よりも休日の方が利用圏域は広いことがわかる。

＜表7－11　自宅からの距離＞

単位：人（%）

調査館	北広島市図書館								石狩市民図書館							
調査日	平日				休日				平日				休日			
距離区分	市内	市外	全体	累積百分率	市内	市外	全体	累積百分率	市内	市外	全体	累積百分率	市内	市外	全体	累積百分率
200m未満	17		18 (4.5)	4.5%	7		7 (1.6)	1.6%	4		4 (0.9)	0.9%	3		3 (0.5)	0.5%
200～400m未満	10		11 (2.8)	7.3%	18		18 (4.1)	5.7%	11		11 (2.4)	3.2%	6		6 (1.0)	1.5%
400～600m未満	34		35 (8.8)	16.1%	22	3	25 (5.7)	11.4%	12		12 (2.6)	5.8%	13		13 (2.1)	3.6%
600～800m未満	27		27 (6.8)	22.9%	25	1	26 (5.9)	17.3%	9		9 (1.9)	7.8%	15		15 (2.5)	6.1%
800～1Km未満	48		50 (12.6)	35.5%	35		35 (8.0)	25.2%	30	3	33 (7.1)	14.8%	33	7	40 (6.6)	12.7%
1～1.5Km未満	45		48 (12.1)	47.6%	73	3	76 (17.3)	42.5%	57	7	64 (13.9)	28.8%	40	8	48 (7.9)	20.7%
1.5～2Km未満	42		44 (11.1)	58.7%	62	4	66 (15.0)	57.5%	27	6	33 (7.1)	35.9%	29	21	50 (8.3)	28.9%
2～3Km未満	37	2	40 (10.1)	68.8%	41	2	43 (9.8)	67.3%	53	9	62 (13.4)	49.4%	25	38	63 (10.4)	39.3%
3～5Km未満	27		29 (7.3)	76.1%	29	9	38 (8.6)	75.9%	32	35	67 (14.5)	63.9%	60	63	123 (20.3)	59.7%
5～10Km未満	28	10	39 (9.8)	85.9%	35	21	56 (12.7)	88.6%	22	76	98 (21.2)	85.1%	26	114	140 (23.1)	82.8%
10Km以上	9	46	56 (14.1)	100.0%	8	42	50 (11.4)	100.0%	2	67	69 (14.9)	100.0%	2	102	104 (17.2)	100.0%
合　計　　*1	324	58	397(100.0)		355	85	440(100.0)		259	203	462(100.0)		252	353	605(100.0)	

＊1　自宅からの距離が不明の者を除く。

7.4.6　利用交通手段と所要時間

図書館までの利用交通手段と手段別の平均所要時間をまとめたものが表 7-12 である。来館者全体の平均所要時間は両館とも平日の方が長い（北広島：平日 14.2 分，休日 9.7 分，石狩：平日 13.6 分，休日 12.6 分）。この結果は前節の自宅からの距離と合わせると，休日は遠くから来館している利用者が多い分，自家用車を主要な交通手段として来館している利用者が多いことによる。

石狩市民図書館はほとんどが自家用車利用（平日 71.8%，休日 86.8%）であり，次いで自転車（平日 16.7%，休日 11.0%）となっている。徒歩での来館が極端に少ない（平日 6.2%，休日 1.0%）のが特徴である。

一方，北広島市図書館も自家用車利用（平日 36.0%，休日 55.0%）が中心であり，次いで徒歩（平日 38.6%，休日 33.2%），電車（平日 12.4%，休日 3.6%）の順である。近くに大規模な北広島団地があるため徒歩での来館も比較的多いが，駅前のような立地条件の良い場所でも広い駐車場が必要であることを現しているといえよう。

このように図書館の立地位置により交通手段の違いは生じているが，いずれの交通手段利用でも所要時間にはほとんど差がない。距離に応じて移動手段が選択されており，9 割強の来館者が図書館から平均移動時間距離 15 分以内（北広島：平日 14.2 分，休日 9.7 分，石狩：平日 13.6 分，休日 12.6 分）に分布している。このことから，本館の利用圏域は移動時間距離 15 分程度（自家用車でおよそ 10km 圏）までが許容距離として拡大していると判断できる。

＜表7－12　利用交通手段と所要時間＞

単位：人（%）

調査日	北広島市図書館						石狩市民図書館					
	平　日			休　日			平　日			休　日		
交通手段	市　内	市　外	全　体	市　内	市　外	全　体	市　内	市　外	全　体	市　内	市　外	全　体
徒　歩	137 (40.4) 11.0	25 (30.9) 15.2	162 (38.6) 11.7	134 (37.3) 9.6	15 (16.7) 13.0	149 (33.2) 10.0	24 (9.5) 10.1	4 (2.0) 16.3	28 (6.2) 11.0	6 (2.5) 20.0		6 (1.0) 20.0
自転車	24 (7.1) 6.0	2 (2.5) 5.0	26 (6.2) 5.9	12 (3.3) 11.5	1 (1.1) —	13 (2.9) 10.6	60 (23.8) 12.8	15 (7.6) 17.7	75 (16.7) 13.8	50 (20.6) 8.7	14 (4.1) 22.1	64 (11.0) 11.6
バイク	1 (0.3) —		1 (0.2) —				3 (1.2) 3.3	2 (1.0) 22.5	5 (1.1) 11.0	1 (0.4) —		1 (0.2) —
自家用車	123 (36.3) 9.6	28 (34.6) 21.7	151 (36.0) 11.9	185 (51.5) 8.0	62 (68.9) 14.5	247 (55.0) 9.6	154 (61.1) 8.9	169 (85.4) 16.0	323 (71.8) 12.6	182 (74.9) 6.8	323 (95.3) 15.9	505 (86.8) 12.6
路線バス	21 (6.2) 14.9	7 (8.6) 17.1	28 (6.7) 15.5	19 (5.3) 11.8	5 (5.6) 25.0	24 (5.3) 14.6	11 (4.4) 31.4	8 (4.0) 37.5	19 (4.2) 33.9	4 (1.6) 21.3	2 (0.6) 15.0	6 (1.0) 19.2
電　車	33 (9.7) 32.2	19 (23.5) 33.7	52 (12.4) 32.7	9 (2.5) 18.3	7 (7.8) 28.9	16 (3.6) 22.9						
合　計 *1 全平均	339 (100.0) 12.4	81 (100.0) 21.7	420 (100.0) 14.2	359 (100.0) 9.2	90 (100.0) 15.8	449 (100.0) 9.7	252 (100.0) 10.9	198 (100.0) 17.1	450 (100.0) 13.6	243 (100.0) 7.7	339 (100.0) 16.1	582 (100.0) 12.6

＊１　利用交通手段、所要時間のいずれかが不明の者を除く。
＊２　上段数値：来館者の人数（人）、中段数値：来館者の割合（%）、下段数値：平均所要時間（分）

7.4.7　滞在時間

両館とも自家用車利用が多かったことから，自家用車利用者と非自家用車利用者別に 30 分単位での在館者数をみたものが表 7-13 である。

来館者全体での平均在館時間は，両館とも平日（北広島 74 分，石狩 77 分）より休日（北広島 67 分，石狩 65 分）の方が短い。また，自家用車利用者と非自家用車利用者との平均在館時間を比較すると，平日・休日とも自家用車利用者（北広島 : 平日 65 分，休日 60 分，石狩 : 平日 69 分，休日 62 分）よりも非自家用車利用者（北広島 : 平日 81 分，休日 76 分，石狩 : 平日 97 分，休日 91 分）の方が長い。自家用車による来館者の平均在館時間は，60～70 分程度である。駐車場の利用率が高く，もし時間制限を設ける必要があるのであれば，2 時間まで無料にすることで十分と考える。

自家用車利用者の最大在館者数についてみると，北広島市図書館では休日の 13:30 分～14:30 分の 30 分間に 57 人が在館しており，石狩市民図書館では休日の 11:00～11:30 分の 30 分間に 119 人が在館している。石狩市のような市街地から離れた郊外型立地の図書館の場合には，少なくとも自家用車利用者の時間帯別在館者数の最大値に見合った広い駐車場を整備する必要があるといえる。

＜表7－13　時間帯別在館者数＞

単位：人（%）

時間帯（30分ごと）	北広島市図書館				石狩市民図書館			
	平　日		休　日		平　日		休　日	
	自家用車	非自家用車	自家用車	非自家用車	自家用車	非自家用車	自家用車	非自家用車
10:00～ 10:30	24 (15.9)	28 (10.4)	30 (12.1)	30 (14.9)	40 (12.5)	12 (9.4)	73 (14.5)	9 (11.7)
10:30～ 11:00	26 (17.2)	35 (13.1)	46 (18.6)	41 (20.3)	59 (18.4)	14 (10.9)	114 (22.6)	13 (16.9)
11:00～ 11:30	28 (18.5)	51 (19.0)	56 (22.7)	49 (24.3)	67 (20.9)	17 (13.3)	119 (23.6)	11 (14.3)
11:30～ 12:00	27 (17.9)	52 (19.4)	54 (21.9)	47 (23.3)	60 (18.8)	20 (15.6)	117 (23.2)	13 (16.9)
12:00～ 12:30	29 (19.2)	44 (16.4)	53 (21.5)	37 (18.3)	50 (15.6)	19 (14.8)	112 (22.2)	16 (20.8)
12:30～ 13:00	25 (16.6)	49 (18.3)	44 (17.8)	44 (21.8)	50 (15.6)	22 (17.2)	104 (20.6)	15 (19.5)
13:00～ 13:30	29 (19.2)	42 (15.7)	42 (17.0)	40 (19.8)	43 (13.4)	26 (20.3)	109 (21.6)	20 (26.0)
13:30～ 14:00	28 (18.5)	48 (17.9)	57 (23.1)	50 (24.8)	49 (15.3)	29 (22.7)	104 (20.6)	24 (31.2)
14:00～ 14:30	26 (17.2)	61 (22.8)	53 (21.5)	68 (33.7)	48 (15.0)	32 (25.0)	108 (21.4)	40 (51.9)
14:30～ 15:00	28 (18.5)	54 (20.1)	54 (21.9)	62 (30.7)	54 (16.9)	36 (28.1)	111 (22.0)	38 (49.4)
15:00～ 15:30	26 (17.2)	53 (19.8)	49 (19.8)	51 (25.2)	66 (20.6)	43 (33.6)	112 (22.2)	34 (44.2)
15:30～ 16:00	29 (19.2)	65 (24.3)	48 (19.4)	44 (21.8)	61 (19.1)	43 (33.6)	108 (21.4)	25 (32.5)
16:00～ 16:30	25 (16.6)	60 (22.4)	34 (13.8)	40 (19.8)	49 (15.3)	43 (33.6)	114 (22.6)	23 (29.9)
16:30～ 17:00	16 (10.6)	58 (21.6)	34 (13.8)	37 (18.3)	37 (11.6)	36 (28.1)	84 (16.6)	20 (26.0)
17:00～ 17:30	17 (11.3)	54 (20.1)	29 (11.7)	28 (13.9)	52 (16.3)	29 (22.7)	夜間開館なし（17:00閉館）	
17:30～ 18:00	17 (11.3)	57 (21.3)	18 (7.3)	21 (10.4)	49 (15.3)	30 (23.4)		
18:00～ 18:30	16 (10.6)	48 (17.9)	夜間開館なし（18:00閉館）		55 (17.2)	29 (22.7)		
18:30～ 19:00	16 (10.6)	37 (13.8)			52 (16.3)	22 (17.2)		
19:00～ 19:30	11 (7.3)	32 (11.9)			49 (15.3)	20 (15.6)		
19:30～ 20:00	10 (6.6)	23 (8.6)			33 (10.3)	12 (9.4)		
平均在館時間	65分	81分	60分	76分	69分	97分	62分	91分
入館者（ｻﾝﾌﾟﾙ数）*1	151	268	247	202	320	128	505	77

＊１　中学生（13歳以上）のみを集計した。
＊２　入退館時間、及び利用交通手段のいずれかが不明の者を除く。

7.5　まとめ

北広島市・石狩市の両図書館においては，近隣市町村の枠を越えての利用登録を認めており，利用者の多様な要求に合わせた広域的な施設選択の可能性を示唆している。

本章では，大都市に隣接し，本館の立地位置の異なる 2 市における登録者調査及び来館者調査をもとに図書館利用行動の特性を分析し，駅前という市域の核とも言うべき場所に設置された北広島市図書館と市街地から離れ市域の核とは言いがたい場所に設置された石狩市民図書館での利用行動の共通点と相違点，また平日と休日における利用行動の差異について明らかにした。

要点をまとめると以下のようである。

1）両市とも分館（室）を利用している者はほぼ例外なく最近隣の分館（室）を利用しているものの，自家用車利用の増加に伴い，約 8 割の利用者が本館の資料の豊富さ，非日常的な施設・設備の魅力に惹かれての本館志向を強めており，従来距離により影響を受けやすく分館利用の中心であった主婦・高齢者層においても本館利用者が増えている。

2）最近隣館が本館である利用者と分館（室）である利用者の割合は立地位置の違いにより両市で差があるが，最近隣館が分館（室）である利用者が分館（室）を主に利用するか，本館を主に利用するかの選択に本館の立地位置は影響していない。

3）主利用館が本館または分館（室）である利用者ごとの間に関しては両市で年齢及び職業構成に有意な差は認められず，両市とも従来から本館利用の中心とされていた勤務者層に加え，10 歳代の小・中・高校生といった学生層，30 歳代～40 歳代の主婦層，及び 60 歳以上の無職高齢者層などが幅広く本館利用へ移行してきている。

4）両館とも来館者は平日より休日の方が多いが，休日利用は市域の中心にない石狩市民図書館の方が多い。また，両館とも平日では女性の割合が多いが，休日では男女ほぼ同じ割合になる。これは，主婦と無職者は平日の利用比率が高く，勤務者と学生は休日の利用比率が高いことに関連しており，平日と休日とで利用者層の棲み分けがなされている。

5）両館とも約半数の利用者が資料の館外借出・返却を目的として，「月に 2～3 回」の頻度で利用しており，本館においても分館利用と変わらず日常習慣的に返却期限ごとに来館している利用者が多い。一方で，北広島市図書館のような駅前商業地周辺の立地条件の良い場所では「館内利用」，「立ち寄り」利用の来館者も石狩市民図書館に比べてやや多く，利用頻度も高くなる傾向にある。

6）両館の利用圏域には差があり，市域の中心にない石狩市民図書館の方が利用圏域は広い。しかし，両館とも自宅からの自家用車来館が中心であり，9 割強の来館者が図書館から平均移動時間距離 15 分以内（自家用車でおよそ約 10km 圏）に分布している。また，平日よりも休日の方が利用圏域は広い。

7）両館とも平均在館時間は平日より休日の方が短く，自家用車利用者の方が非自家用車利用者よりも短い。自家用車による来館者の平均在館時間は 60～70 分程度である。

註・参考文献

1）goo「地図の表示：goo 地図」（オンライン），
入手先＜http://map.goo.ne.jp/map.php?MAP=E141.21.1.96N43.3.43.45&ZM=4＞
（最終アクセス 2007 年 12 月 2 日）をもとに作成。

2）本調査研究は，利用の比較的安定した開設 5 年目を迎えた時期に両図書館の協力のもと順次実施したものであり，北広島市は 2002 年 11 月に来館者調査，2003 年 6 月に登録者調査を，石狩市は 2005 年 6 月に来館者調査，2006 年 6 月に登録者調査を行った。

3）表 7-1 中の数値は，両館とも来館者調査時点でのデータである。北広島市図書館は本館竣工後，団地住民センター図書室・大曲会館図書室・西の里図書室・農民研修センター図書室・11 の BM ステーションで運営してきたが，2006 年からは大曲図書室を分館（ふれあい学習センターの 2 階に約 220 ㎡，蔵書約 25,000 冊）に規模拡大するとともに，農民研修センター図書室を廃止し，北広島市立西部小学校に分室（小学校の中にある約 340 ㎡の公共スペース，蔵書約 15,000 冊）を設け，本館＋1 分館＋3 分室＋11BM で運営している。また，石狩市民図書館は 2005 年 10 月 1 日に厚田村・浜益村と市町村合併して以来，旧厚田分館・旧浜益分館を加え，本館＋5 分館で運営している。

4）石狩市民図書館登録者調査（2006 年実施）は，第 4 章で分析に用いたデータと同一である。

5）質問票は内容の理解度を考慮して大人（中学生以上）用と子供（小学生以下）用の 2 種類を用意し，手渡す都度確認して配布するとともに，自分で記入するのが困難な幼児については同伴の父母に子供の分も記入してくれるように依頼した。

6）ここで言う最近隣館とは，第 4 章での定義と同様に，回答者が自宅から最も近い図書館と感じている主観的距離，すなわち回答者の申告に基づく心理的時間距離によるものである。また，主利用館とは，回答者が最もよく利用していると申告した図書館を指している。

7）谷村秀彦，植松貞夫，河村芳行，緒方みどり「図書館利用登録者の読書量と本館・分館の使い分け行動：公共図書館の配置計画に関する基礎的研究・２」『日本建築学会大会学術講演梗概集（東海）』5261, 1985.10, p.521-522.

1985 年 2 月に千葉県柏市で実施した図書館登録者調査において，本館利用者は分館利用者に比べて「調べ物」など何か目的が生じたときに出かけていく目的的利用者が多い（本館 28.7%，分館 13.6%）としたが，その際にも「貸出・返却」は 5 割強（本館 57.4%，分館 75.6%）を占めていた。

第 8 章　結論

8.1　研究成果の要約
8.2　札幌市の図書館地域計画試論
8.3　今後の課題

謝辞

第 8 章　結論

8.1　研究成果の要約

本研究は，図書館施設網がある程度の水準で整備されていること，日常生活における自家用車利用が高頻度であることをもとに選定した，大都市の郊外部および大都市に隣接するベッドタウンを研究対象地域とし，このような密住地において，（1）非利用者をも含めた図書館利用行動の実態を把握する（3章），（2）利用館選択状況から階層的な図書館施設整備手法の崩壊が認められるかを検証する（4章），（3）家族のライフステージの進行に伴う同伴利用パターンの推移を分析する（5章），（4）利用館選択における大規模館選択要因を分析する（6章），（5）大規模館志向の利用行動実態を受けて，本館の立地位置と市民の図書館利用行動の様態についての事実関係を明らかにする（7章），ことなどにより従来の単独利用のみならず自家用車を利用しての家族同伴利用を背景とした新たな計画論の基礎となる計画指針を見出すことを目的とした。すなわち，札幌市郊外，並びに隣接する石狩市，北広島市を対象に，目的に即した各種調査から自家用車の利用や家族同伴利用，複数館からの利用館選択などについての利用行動を分析したものである。既往研究にみられるように，人々の図書館利用行動はどのような内容（サービス・施設）の図書館がどのくらいの距離に存在するかに左右される。都市部，特に徒歩圏内に利用できる図書館がある状況の地域で，自家用車の利用可能性と利用館の選択状況，ライフステージの進行と図書館利用形態の推移，家族を単位とした利用行動の実態などを明らかにすることは，従来の計画論を見直すための出発点として意義があるものと考える。

第 3 章では，北広島市民に図書館接触度を尋ねた市政モニターアンケート調査をもとに図書館の利用者および非利用者の分析を行い，性，年齢，職業などの要因が個々人の図書館利用，非利用にどのように関係しているか，また「図書館を未だ利用していない人々」や「以前には利用していたが現在は利用しなくなってしまった人々」がどのような属性の集団であるのか,「図書館を利用できない・しない」理由は何かなどについて分析することにより利用者および非利用者の一般的な傾向を捉えた。

非利用理由の上位を占めた「図書館が近くにない」,「開館時間中に利用できない」などの項目は，従前から指摘されていながらも改善が進んでいない内容であることが確認できた。また，図書館側の施設整備とサービス内容の改善により，再びあるいは新たに図書館利用者層に転換し得る可能性の高い潜在的利用者層が多く存在することも分かった。しかし，既往調査においても「図書館が近くにない」,「開館時間中に利用できない」は同様に高い数値を示しており，長い間なかなか改善が進んでいない課題である。

図書館を使わない理由の第 1 位である「本は自分で買って読む」を別とすると，図書館を未だ利用していない者では「図書館が近くにない（23.6%）」，以前には利用していたが

現在は利用しなくなってしまった者では「読みたいような本が図書館にない（23.9%）」がそれぞれ第 2 位を占めている。これは，図書館までの距離と図書館の蔵書規模のバランスにほかならず，利用者の利用行動の変化に合った適正な規模と施設数による図書館配置が必要であることを確認した。

3 章の分析で明らかになった要点をまとめると，以下のようである。

1）図書館利用者は女性の方が男性よりも多い。

2）年齢が高くなるに連れて「非利用」の割合が高くなる。

3）「非利用（前利用＋未利用）」における理由は，「本は自分で買って読む」が 40.0%で最も多く，次いで「図書館が近くにない」22.0%，「開館時間中に利用できない」20.8%となっており，この 3 つの理由が上位を占めている。

4）「前利用」グループでは蔵書構成や資料の量を不満とする市民が多い。一方，「未利用」グループでは，「図書館が近くにない」，「開館時間中に利用できない」，「図書館を利用する必要がない」，「図書館の場所を知らない」の順で非利用理由は幅広い。

5）「非利用」グループでは，男女とも「本は自分で買って読む」が最も多く約 40%を占めている。次位は，男性では「開館時間中に利用できない」が 27.7%，女性では「図書館が近くにない」が 26.1%と，次位の利用しない理由に性差がみられる。

6）高年齢者の場合は，他の世代よりも図書館を比較的活発に利用する者と，まったく利用しない者に分極化している。

第 4 章では，石狩市民図書館における登録者調査をもとに，大・中・小の規模の異なる複数の図書館が存在する地域において，図書館利用者がどのような理由で利用館を選択し，利用行動をしているかについて，自宅からの最近隣館と主利用館とを軸とした類型をもとに分析し，類型ごとの特性を明らかにした。また，近隣に中小規模館がある札幌市北区・手稲区の住民がどのような条件下で大規模館を選択利用しているかについて，遠方の大規模館あるいは最寄りの中小規模館のどちらを選択するかを選択肢に，7 種の説明変数を用いた二項ロジットモデルにより検証した。

従来から利用圏に用いられてきた重力モデル（利用率は距離の 2 乗に反比例する）では，本館ですら 5km ほどで利用がほとんどなくなるとされてきたが，疎住地に限らず密住地の大都市圏においても移動距離 10km を超える札幌市北区・手稲区民の利用（類 B2，類 B3）が多数みられ，利用圏域は拡大していることがわかった。また，日常生活の移動手段として自家用車が定着したのに伴い，（1）来館に要する平均時間は 17 分以内に過ぎないこと，（2）近隣の分館利用者とみられていた主婦や高齢者層においても自ら運転して，あるいは同乗という来館形態をとって遠くても大規模館を利用する傾向にあり，車での行きやすさ，広い駐車場の存在というものが図書館施設計画に必須の要素となってきていること，（3）利用者は目的による使い分けではなく貸出図書館というレベルで遠方の大規模館を利用しており，「日常的な借出し利用には近くの分館，調べものには遠くても本館」

という伝統的な階層的図書館整備手法の前提としている考え方はあてはまらないこと，などが明らかになった。

すなわち，図書館利用が個人行動から「家族と一緒に自家用車で行く」行動に変化したことが，距離に対する抵抗を大幅に減じさせ，施設までの距離と規模，サービス内容の階層的な施設構成手法の基本が通用しない状況を生み出していることが検証できた。

4 章の分析で明らかになった要点をまとめると，以下のようである。

1）最近隣の中小規模館，遠方の大規模館のどちらを利用するかの利用館選択には，性，年齢，職業による影響はない。

2）どの類型でも主利用館を利用する主目的は「資料の借出し」であり，利用目的は大・中・小の規模の異なる図書館から主利用館を選択する要因ではない。

3）図書館までの距離，および図書館の規模は利用頻度に影響しているとはいえない。

4）5 分や 7 分程度しか要しない距離からも車で来館するというのが自家用車普及率の高い地域における一般的な利用行動となっている。

5）大規模館の利用圏域は都市部の密住地においても道路距離でおよそ12kmまで拡大している。

6）遠方の大規模館利用者は自家用車の利用可能性が高く，自家用車の利用可能性と主利用館の選択には関連がある。

7）高齢者や幼児・児童などいわゆる交通弱者であっても，家族の車に同乗することにより遠くの大規模館を利用できる状況を生み出している。

8）最近隣の中小規模館利用者は平日に一人で自家用車，自転車，徒歩など様々な交通手段により図書館に行っているが，休日には家族同伴での自家用車利用が増える。一方，遠くの大規模館利用者はほとんど全員（96.7%）が自家用車利用であり，そのうち約半数（43.9%）が休日に家族と一緒に自家用車を使って図書館へ行っている。

9）二項ロジットモデルによる推定結果からは，①遠方の大規模館利用と家族一緒に図書館へ行くという行動とは関連がある，②図書館が自宅から近いことを高く評価する人ほど最近隣館を選択する傾向がある，③最近隣館の規模や登録者の特性などとは無関係に，全般的に遠方でも大規模館を選択する傾向があることがわかった。

第 5 章では，前章の二項ロジットモデルの推定結果から遠方の大規模館利用と家族一緒に図書館へ行くという行動とは有意な関連が認められたことから，札幌市北区新琴似地区において，ある住区ブロックに居住する全世帯の全構成員を対象とする住民調査を行い，世帯を最年少児の年齢で分類することにより，ライフステージの進行と図書館利用形態の推移，自家用車の利用可能性と利用館の選択など，家族を単位とした利用行動の実態について分析した。

この調査は中規模館や小規模館が近隣にあり，徒歩や自転車移動によって利用可能な地域を限定しての調査であることから，68.4%（462世帯）の世帯で図書館利用者がおり，

そのうちの76.3%の世帯が「距離に代表される利便性」と「蔵書規模に代表される多様性」とを兼ね備えた中規模館を選択利用している状況であった。この結果だけからは札幌市における階層的施設整備は機能していると評価されようが，そもそも階層的構成論の基本である大規模館と中小規模館との利用目的による使い分けは認められず，いずれも貸出図書館として返却期限ごとの頻度で利用されていること，また，利用圏の考え方の基となる利用交通手段では近隣の中小規模館へすら自家用車で訪れる世帯が多く，新たな考え方に立脚した施設配置論の必要性が認められたといえる。

5 章の分析で明らかになった要点をまとめると，以下のようである。

1）図書館の利用は個人レベルの要因だけではなく，家族がいるか，子どもが何歳程度かなどの家族構成が影響している。

2）幼児期・学齢期における図書館利用の発生は，家族の図書館利用の有無と強く関連している。

3）実際の利用も親との同伴で行われ，遠方の大規模館の利用時はすべて，近隣の中小規模館の利用時でも 58.9%は自家用車で移動している。

4）親子の同伴利用は主として近隣の中規模館に対して行われるが，子どもが中学生になった段階で解消され，子どもは同じ中規模館を単独で，または友人と利用するようになる。これに対して，大規模館を同伴利用している親子の数は，子どもが中学生になっても減らない。

5）母親が親子同伴利用のキーパーソンである。そのうち，13%程度は「付き添い」利用者層である。

6）すべての利用者セグメントで中規模館が最も多く選択され全体の 81.5%を占め，小規模館選択は大規模館よりも少ない。

7）中小規模館を徒歩・自転車で利用している者でさえも，前期高齢者においては自家用車利用可能率（77.5%）が高く，必ずしも交通弱者とはいえない。

8）中小規模館と大規模館の利用目的には有意差が見られず，利用目的において階層構成論が期待する「使い分け」は認められない。

第6章では，4章で類型化した7類型のうち大規模館利用者の4類型（類A0，類B1，類B2，類B3）をもとに，二項ロジットモデルで大規模館選択の説明変数として設定できなかった項目も含めて，大規模館のどのようなサービスを重視し，満足（あるいは不満）を感じながら選択利用しているのかを，登録者の図書館サービスに対する満足度と重視度の観点から比較分析した。

最近隣館が中小規模館である市民は，大規模館選択の重要度として第一に「本の冊数」，そして「館内の雰囲気」といった施設設備を重視しており，「貸出冊数の制限がない」ことに満足して，「図書館までの距離」をさほど重視せずに，遠方でも大規模館を利用していることがわかった。しかし，「本の冊数」に関しては重視度が高いにもかかわらず 4 類型で

共通して満足度が低くなっており，蔵書収蔵能力が 18 万冊規模の図書館では利用者を満足させるには十分ではないこともわかった。

6 章の分析で明らかになった要点をまとめると，以下のようである。

1）重視度指数は，どの類型も「本の冊数」や「図書館内の雰囲気」が上位にきている。近隣に中小規模館がありながらも遠方の大規模館を利用している類 B1，類 B2，類 B3 においては，「図書館までの距離」よりも「駐車場の広さ」を重視しているのが特徴である。

2）石狩市民図書館において満足度と重視度の差（満足度－重視度）が大きい項目は，「本の冊数」(-0.36)，「図書館までの距離」(-0.28)，「本の新しさ」(-0.27)，「開館日」(-0.24) である。「図書館までの距離」に関して重視度が 3.12 点と高かった割には，図書館までの距離を補う手段としての項目である「公共交通の便」の重視度は 2.42 点と低く，「駐車場の広さ」の重視度が 3.04 点と高い。

3）遠方の大規模館利用者は，大規模館選択の重要度として第一に「本の冊数」，そして「館内の雰囲気」といった施設設備を重視しており，「貸出冊数の制限がない」ことに満足して，「図書館までの距離」をさほど気にせずに利用している。

4）遠方の大規模館利用者に共通して「貸出冊数の制限がない」という項目で満足度指数が重視度指数を上回っており，図書館サービスとして重要とされた項目の中で最も満足度を強く感じている選択要因となっている。

前章までに，モータリゼーションの発達と家族同伴利用形態の変化により市民の図書館利用行動が本館志向にシフトしていることを明らかにした。第 7 章においては，市民に高い割合で自家用車が普及している都市においては，本館の設置位置は市街中心部の拠点的な場所にこだわらず広い駐車場が確保できる郊外地に設置することも選択肢になり得るであろうことを検討するために，北広島市および石狩市における図書館登録者調査と来館者調査をもとに，図書館の本館が住民の日常生活動線の結節点といえる場所に設置されているか，市街地中心部とは言いがたい郊外に設置されているかという本館の立地位置の違いが住民の図書館利用行動にどのような影響を与えているかを分析した。

登録者調査からは，登録者がいずれのサービスポイントを選択して利用しているかを主軸に，自宅からの最近隣館と主利用館の関係により分類・類型化し，類型ごとに両館の利用者の属性を比較することにより本館の立地位置による違いがみられるかを考察した。また，来館者調査からは，両館における来館者の平日・休日別構成，利用状況，本館利用理由，来館経路，利用圏域，交通手段と所要時間，滞在時間等について比較分析し，考察を行った。

両館の利用実態からは，(1）利用目的，利用頻度，利用理由，来館経路，利用圏域，交通手段に有意な差が見られたが，両館とも自家用車による来館が中心で交通の便や距離に対する抵抗感が低くなっていることから本館の立地位置の優劣を競う内容の違いとまでは

いえないこと，(2) また本館立地位置の違いにかかわらず従来距離に影響を受けやすく分館利用の中心であるとされてきた主婦や無職高齢者層においても本館志向が見られ，この新たな利用者集団の出現により平日には主婦と無職者が，休日には勤務者と学生が多く利用しているという平日と休日とでの棲み分け現象が本館内で起こっていることが明らかになった。

7 章の分析で明らかになった要点をまとめると，以下のようである。

1) 自家用車利用の増加に伴い，約 8 割の利用者が本館の資料の豊富さ，非日常的な施設・設備の魅力に惹かれての本館志向を強めており，従来距離により影響を受けやすく分館利用の中心であった主婦・高齢者層においても本館利用者が増えている。

2) 最近隣館が分館である利用者が最近隣の分館を主に利用するか，本館を主に利用するかの選択に本館の立地位置は影響していない。

3) 両市とも従来から本館利用の中心とされていた勤務者層に加え，10 歳代の小・中・高校生といった学生層，30 歳代～40 歳代の主婦層，及び 60 歳以上の無職高齢者層などが幅広く本館利用へ移行してきている。

4) 両館とも来館者は平日より休日の方が多い。また，両館とも平日では女性の割合が多いが，休日では男女ほぼ同じ割合になる。これは，主婦と無職者は平日の利用比率が高く，勤務者と学生は休日の利用比率が高いことに関連しており，平日と休日とで利用者層の棲み分けがなされている。

5) 両館の本館とも，分館利用と変わらず日常習慣的に返却期限「月に 2～3 回」ごとに来館している利用者が多い。一方で，北広島市図書館のような駅前商業地周辺の立地条件の良い場所では「館内利用」，「立ち寄り」利用の来館者も石狩市民図書館に比べてやや多く，利用頻度も高くなる傾向にある。

6) 両館とも自宅からの自家用車来館が中心であり，9 割強の来館者が図書館から平均移動時間距離 15 分以内（約 10km 圏）に分布している。また，平日よりも休日の方が利用圏域は広い。

7) 両館とも平均在館時間は平日より休日の方が短く，自家用車利用者の方が非自家用車利用者よりも短い。自家用車による来館者の平均在館時間は 60～70 分程度である。

以上を総括すると，モータリゼーションが発達し，一家に 1 台以上の自家用車がある状況になった現代社会においては，従来，交通弱者と言われてきた主婦や子ども，高齢者層も自家用車を自ら運転して，あるいは同乗という形態をとって，大規模館の蔵書規模，建築空間・環境の快適性，自家用車によるアクセスの利便性などを優先して，近隣中小規模館よりも遠方でも大規模館を選択利用している状況が明らかになった。

疎住地に限らず都市部の密住地においても，広域分散・自家用車依存社会を形成している地域においては，図書館が自治体の枠を超えての利用を許容したことにより市域を超えてのセミラティス的な図書館利用構造が存在しており，利用者の大規模館志向による利用

圏域の拡大により伝統的な階層的整備手法があてはまらない状況を生み出していた。

1970 年代以降支持されてきている，およそ徒歩圏ごとに小規模な分館を複数設置して，貸出しを中心とする市民の日常的な利用に供し，それらを蔵書量や職員数の大きな本館が補完するという，施設までの距離と規模，サービス内容を階層的に構成する計画手法は，市民に図書館の存在を認知させ，利用を喚起させ根付かせる上で，今日のようなモータリゼーションの発達以前には有効なものであったといえる。日本図書館協会は 2006 年 10 月の『豊かな文字・活字文化の享受と環境整備：図書館からの政策提言』において，「5 万冊以上の蔵書と専任職員 3 人以上の分館をほぼ 2km 圏ごとに設置する」ことを提唱しているが，現代のような厳しい財政状況下では実現できる自治体は少ないといわざるを得えないとともに，本論文で明らかにした市民の利用行動が小規模館には満足していない状況から判断して，施設までの距離を基本とする従来の階層的な図書館施設整備の考え方は，モータリゼーションの発達や利用者のニーズの多様化に伴う大規模館志向への変化に合わせて見直す必要がある。

本研究の結果から，仮に図書館の設置密度を下げて配置する，すなわち利用者と図書館との距離を広げても，自家用車利用を前提とすると，（1）同伴利用世帯では，大規模館選択世帯にみられるように中学・高校生も親の自家用車に同乗の形態をとることにより，その 6 割以上は図書館利用を継続できる可能性が高いこと，（2）前期高齢者の 70%以上が自家用車を使える状況にあり，現に遠方の大規模館選択者も存在すること，また，近隣の中小規模館にも自家用車で訪れている世帯が 24.7%あることから前期高齢者は交通弱者とはいえず，従来，交通弱者と言われてきた子どもや高齢者の利用率の落ち込みは防げるであろうと考える。

すなわち，自家用車利用が主流となり家族同伴利用が行われるようになった現在，(1) 段階構成論的設置計画の前提としている考え方を見直し，受持ち範囲をある程度広くしても規模の大きなものを設置すること，(2) 自家用車を利用した家族単位での図書館利用行動に対応した適正な施設配置計画手法を検討していく必要があること，（3）立地位置としては，距離に対する抵抗が少なく広い駐車場が確保できる郊外地に魅力ある大規模館を設置することも選択肢になり得ること，などが整理できた。これらの知見は自家用車を主体とした郊外型・地方型の生活スタイルが定着した多くの地域にも適用可能であることが期待される。

8.2　札幌市の図書館地域計画試論

表 8-1 は札幌市の図書館施設一覧を示し，蔵書冊数の合計を同一にして大規模館と中規模館による試論（A案）と，大規模館のみによる試論（B案）を示したものである。

札幌市では現在，1 大規模中央館（約 70 万冊）＋9 中規模地区図書館（約 8 万冊）＋27 小規模分館（約 3 万冊）による 3 段階の階層的図書館施設配置が実現している（図 8-1)。図中の円で示した利用圏域は, 来館率がおよそ 50%となる利用圏域として小規模館は半径 1km，中規模館は半径 2km，大規模館は半径 5km で示し，大規模館に関しては自家用車による利用許容距離である半径 12km も二重構造の圏域として示した。図書館までの距離を重視する利用者は少なくなく，理想的なネットワーク網を完成させているといえる。

しかし，本研究の分析結果からは，従来，交通弱者と言われてきた主婦や子ども，高齢者層も自家用車を自ら運転して, あるいは同乗という形態をとって, 大規模館の蔵書規模, 建築空間・環境の快適性，自家用車によるアクセスの利便性などを優先して，近隣の中小規模館よりも遠方でも大規模館を選択利用する傾向がみられ，全体的に大規模館志向が強まっていたことから，自家用車を利用した家族同伴利用行動に対応した適正な規模の図書館施設配置を検討していく必要があることを主張した。現実の図書館運営においても，政令指定都市の札幌市ですら近年の図書館運営費の削減から 27 の小規模分館の直営は厳しく，2006 年より小規模分館である地区センター図書室 20 室（区民センター図書室 7 室を除く）に指定管理者制度を導入している状況である。

そこで，本研究の利用行動分析から得られた結果をもとに，全体の蔵書冊数を維持した上で，受持ち範囲を広くした規模の大きな図書館による計画案として，1 大規模中央館＋4 大規模地区館＋9 中規模分館によるA案と，1 大規模中央館＋8 大規模地区館による B 案を示した。

A案は各区の小規模館を統合し大規模館とし，JR 線や広い幹線道路で分断される周囲の生活中心部に 4 つの大規模館（⑪～⑭）を配置し，現在ある中規模地区分館はそのまま存続させることにより，大規模中央館を中心とする衛星的構成で地域を網羅するという計画であり，最も実現可能な計画と考える（図 8-2)。

B案は各区の人口がほぼ 20 万人前後とそれぞれ生活中心として並列状態にあることから，各区の小規模館を現在ある中規模館に統合し，大規模中央館のほかに最低でも 15 万冊以上の大規模地区館を配置する多心的構成を示したものである。規模を大きくすることにより，利用圏の広がりがより複雑な重なりになることがわかる。(図 8-3)。

蔵書規模の拡大は，同時に施設の拡大，設備の拡充をも意味する。利用者にとっては図書館が近傍にあることに越したことはないであろうが，大規模館による配置は利用圏域の重なりあった部分に居住する市民にとっては利用館選択の幅が広がることを意味しており, 図書館の近傍，あるいは遠方の市民双方にとって魅力ある図書館運営が可能となるものと考える。

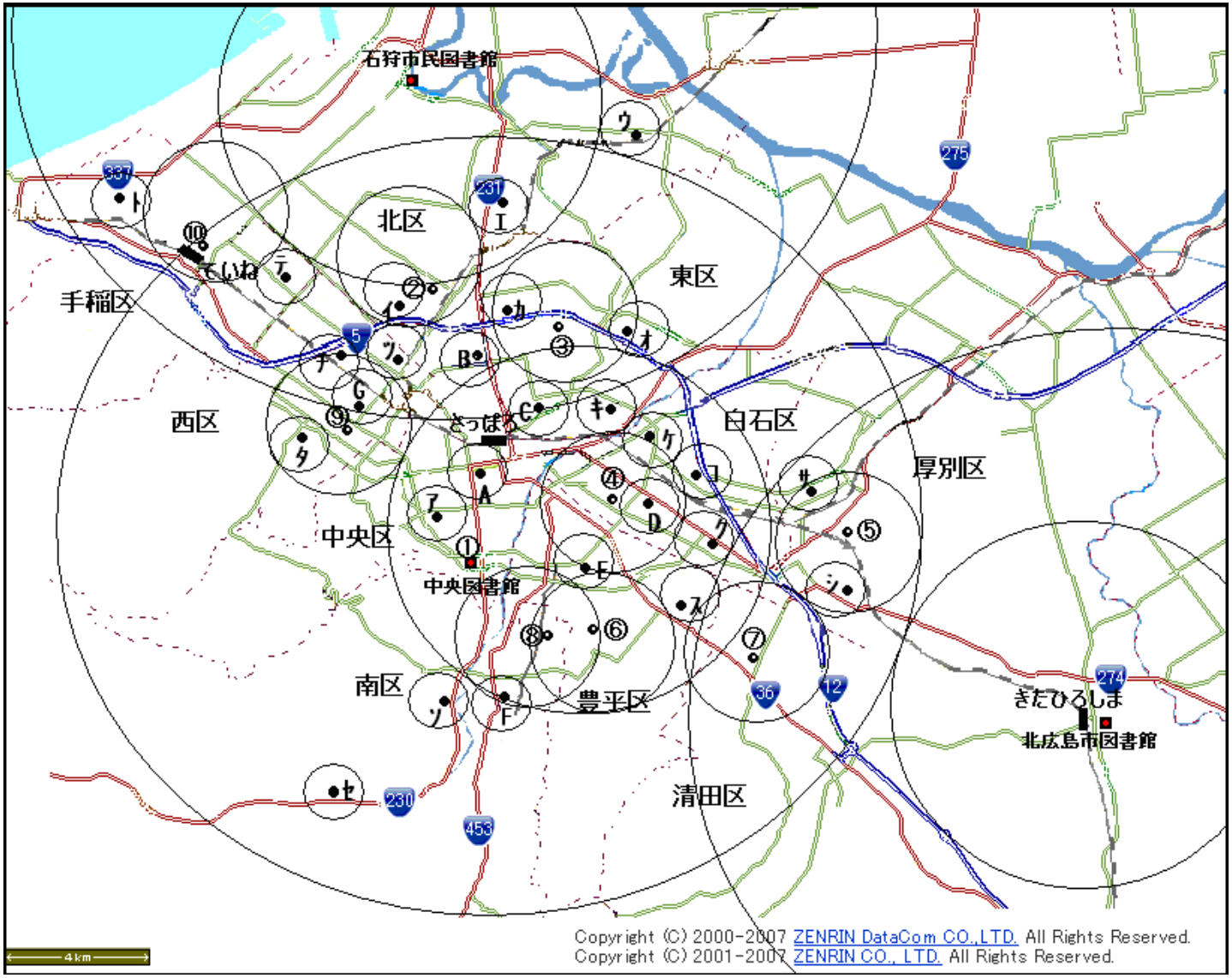
一方で，自家用車を使えない者も存在し，近隣の小規模分館利用者も少なからず存在していたことからもそれらの者に対する何らかの対策が必要となる。北広島市では平成 18 年 2 月から，北広島市立西部小学校内に公共スペースとして図書館の分室を設置して運営しており，成功をみている。昨今では，インターネットの普及により Web･OPAC 検索，ならびに貸出予約サービスが自宅のパソコンや携帯電話などから利用可能であり，図書の受取場所を指定できるようになってきていることから，北広島市の事例にみるように徒歩圏といえる小学校に「図書の貸出・返却の場」としての機能をもたせることにより対処することも一案と考える。

＜表８－１　札幌市図書館施設一覧および試論＞

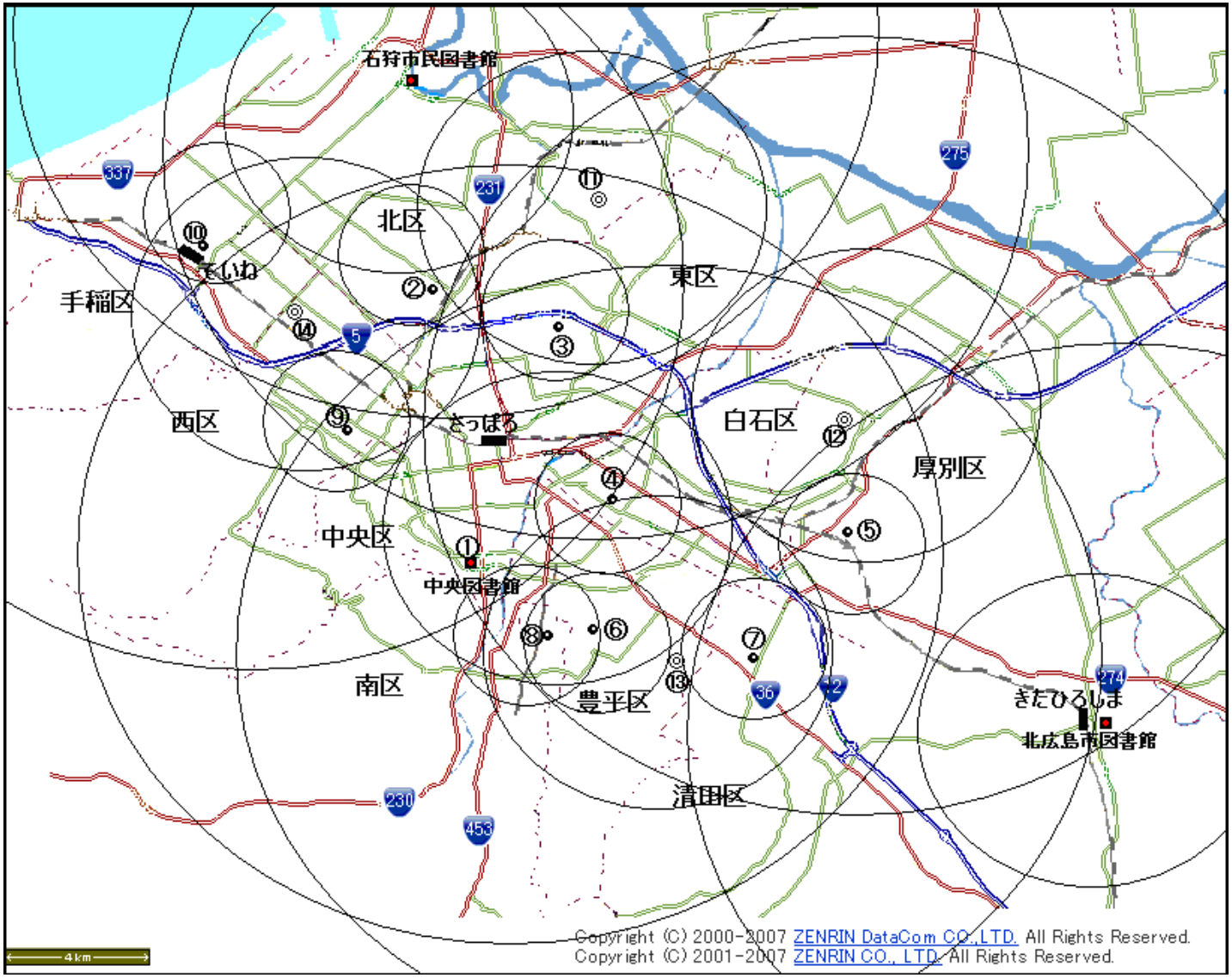
区	札幌市図書館施設一覧（2006年度） 大規模館 ■（本館）	中規模館 ◎(地区図書館)	小規模館 ●（区民・地区センター図書室）	蔵書冊数 （冊）	A案 1大規模中央館＋4大規模地区館＋9中規模分館による試論 大規模中央館 ■（本館）	大規模地区館 ◎(地区図書館)	中規模地区館 〇(地区図書館)	地区別蔵書 冊数　（冊）	B案 1大規模中央館＋8大規模地区館による試論 大規模中央館 ■（本館）	大規模地区館 ◎(地区図書館)	地区別蔵書 冊数　（冊）
中央区	①中央図書館			709,364	①中央図書館				①中央図書館		
			A.中央区民センター	28,855							中央区
			ｱ.旭山公園通地区センター	28,227	766,446冊			766,446	766,446冊		766,446
北区		②新琴似図書館		74,135			②新琴似図書館 74,135冊			②新琴似図書館 195,791冊	
			B.北区民センター	29,231		小規模分館を廃止して大規模地区館を建設する。 121,656 ＋ 139,794					北区
			ｲ.新琴似・新川地区センター	33,678							
			ｳ.拓北・あいの里地区センター	34,225							
			ｴ.太平百合が原地区センター	24,522				北区 ＋ 東区			195,791
東区		③元町図書館		77,297			③元町図書館 77,297冊			③元町図書館 217,091	
			C.東区民センター	30,755							
			ｵ.ふしこ地区センター	43,479							東区
			ｶ. 栄地区センター	34,501							
			ｷ.苗穂・本町地区センター	31,059		⑪　261,450冊		412,882			217,091
白石区		④東札幌図書館		83,704			④東札幌図書館 83,704冊			④東札幌図書館 203,710	
			D.白石区民センター	29,503		小規模分館を廃止して大規模地区館を建設する。 120,006 ＋ 67,399					
			ｸ.白石東地区センター	31,937							
			ｹ. 菊水元町地区センター	30,176				白石区 ＋ 厚別区			白石区
			ｺ .北白石地区センター	28,390							203,710
厚別区		⑤厚別図書館		79,701			⑤厚別図書館 79,701冊			⑤厚別図書館 147,100	
			ｻ.厚別西地区センター	33,706							厚別区
			ｼ.厚別南地区センター	33,693		⑫　187,405冊		350,810			147,100
豊平区		⑥西岡図書館		78,111			⑥西岡図書館 78,111冊			⑥西岡図書館と ⑧澄川図書館とを合併する。 201,118	
			E.豊平区民センター	29,660		小規模分館を廃止して大規模地区館を建設する。 57,980 ＋ 101,967					豊平区 ＋ 南区
			ｽ.東月寒地区センター	28,320				豊平区 ＋ 清田区			201,118
清田区		⑦清田図書館		84,249			⑦清田図書館 84,249冊				
南区		⑧澄川図書館		79,928			⑧澄川図書館 79,928冊			⑦清田図書館	
			F.南区民センター	32,864							清田区
			ｾ.藤野地区センター	37,029							
			ｿ.もいわ地区センター	32,074		⑬　159,947冊		402,235			201,117
西区		⑨山の手図書館		88,997			⑨山の手図書館 88,997冊			⑨山の手図書館	
			G.西区民センター	27,684		小規模分館を廃止して大規模地区館を建設する。 112,406 ＋ 64,957					
			ﾀ.西野地区センター	35,234							西区
			ﾁ.はっさむ地区センター	30,724				西区 ＋ 手稲区			
			ﾂ.はちけん地区センター	18,764							201,403
手稲区		⑩曙図書館		81,187			⑩曙図書館 81,187冊			⑩曙図書館	
			ﾃ.新発寒地区センター	32,858							手稲区
			ﾄ.星置地区センター	32,099		⑭　177,363冊		347,547		146,144	146,144
合計冊数				2,279,920	766,446	786,165	727,309	2,279,920	766,446	1,513,474	2,279,920

＊1　札幌の図書館2007（札幌市中央図書館平成19年10月1日発行）による。但し、施設付属の図書コーナーは除く。
＊2　「はちけん地区センター図書室」の蔵書冊数が少ないのは、2006年4月1日に新たに開設されたためである。

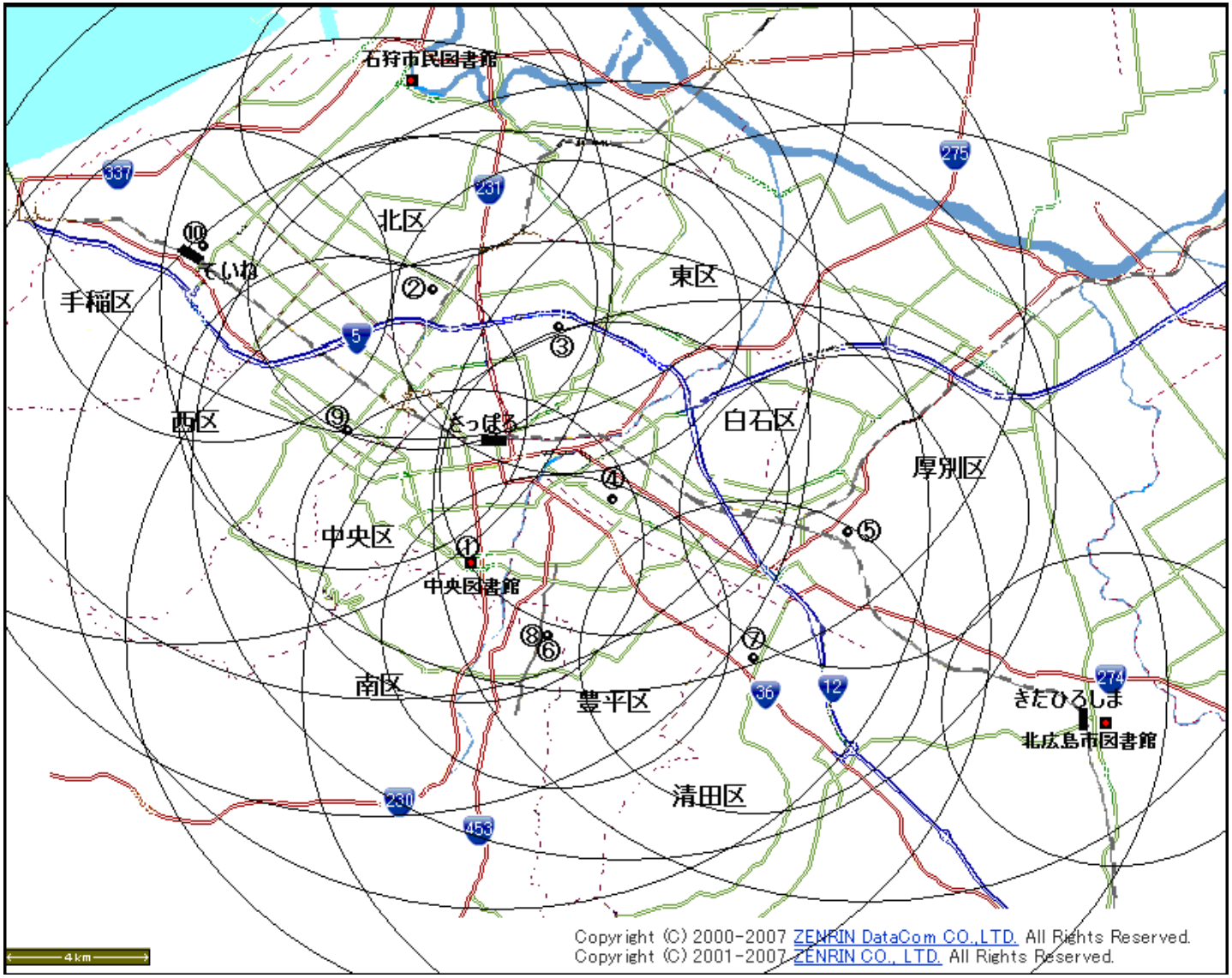
＜図８－１　札幌市図書館配置図（1 大規模中央館＋9 中規模地区分館＋27 小規模分室）＞



＜図８－２　Ａ案：大規模館と中規模館による試論（1 大規模中央館＋4 大規模地区館＋9 中規模分館）＞



＜図８－３　Ｂ案：大規模館による試論（1 大規模中央館＋9 大規模地区館）＞



8.3　今後の課題

本論文では，図書館が伝統的な図書館施設整備手法に基づき設置されている地域での複数回に亘る調査を通じて，（1）徒歩圏の図書館へも自家用車による家族同伴利用が多いこと，（2）中小規模館と大規模館の使い分けがみられないこと，などから新たな考え方に立脚した施設配置論の必要性を示した。また，当該地域における子どもと前期高齢者の利用実態から，図書館への距離が遠くなってもこれらの層の利用可能性が大きく減じることはないであろうことを主張した。

受持ち範囲を広げて大規模館にした場合，（1）「館近傍の距離の影響を受けて図書館に引き寄せられる利用者層」が「距離の影響をあまり受けない基礎的な図書館に対する需要からくる利用者層」に転ずるかどうかを明らかにすること，（2）高齢者を除く「成人の単独利用」と「後期高齢者の利用」セグメントで「自家用車は使えない」という比率が高いことからこれらの者に対する措置を検討すること，（3）世帯単位での移動を考慮した利用行動モデルを追求し，利用実態に即した図書館計画手法を確立すること，などが今後の課題である。

今日，人口の減少などに伴い日常生活を自家用車に依存する地域は拡大しており，市町村合併による旧町村図書館の統廃合の動きがみられることからも，本研究で得られた知見をさらに発展させる必要性は大きいと考える。

謝辞

この研究は，筑波大学大学院博士後期課程図書館情報メディア研究科に在学し，筑波大学大学院図書館情報メディア研究科・植松貞夫教授のご指導のもとに進めたものであります。植松貞夫教授には，筆者が図書館情報大学図書館情報学部図書館情報学科を卒業後，筑波大学大学院修士課程環境科学研究科に進学して依頼，公私に亘って終始変わらぬご指導とご鞭撻を賜りました。あらためて心より感謝いたします。

また，本研究をまとめるにあたり，筑波大学大学院図書館情報メディア研究科・歳森敦准教授には貴重なご指導と，ご助言を賜りました。ここに深く感謝いたします。

北広島市図書館調査では，北海道武蔵女子短期大学・谷口一弘教授，北広島市図書館・坂本龍三館長，普及担当・新谷良文主査に貴重なご助言と調査の便宜をお計りいただきました。

石狩市民図書館調査では，石狩市民図書館・池田幸夫副館長，丹羽秀人主査，清水千晴主査に調査にご協力をいただきました。特に，石狩市民図書館登録者調査の実施にあたり池田副館長には，個人情報保護法（平成十五年五月三十日法律第五十八号）の施行後で登録者の氏名と住所を調査に利用することが制限されている状況の中で,「石狩市情報公開・個人情報保護審査会」を開催し，許可をいただくのにご尽力を賜りましたとともに，職員の皆さまには調査対象者の抽出，宛名ラベルの作成・発送に至るまでご協力いただきました。本論文は調査対象図書館関係者の皆様のご協力のもとにまとめることができました。心から感謝申し上げます。

資　料

アンケート調査票

資料１　北広島市図書館来館者調査票（本館一般用）
資料２　石狩市民図書館来館者調査票（本館一般用）
資料３　北広島市図書館登録者調査票（本館一般用）
資料４　石狩市民図書館登録者調査票（札幌市北区・手稲区用）
資料５　北広島市図書館利用登録者・非利用者調査票
資料６　札幌市北区新琴似地区住民調査票

資料1：北広島市図書館来館者調査票（本館一般用）

図書館利用についての調査　　入館　　：　　－退館　　：

Ⅰ．調査の趣旨
　この調査は、市民の皆様が日頃、図書館を使っておられる状況や評価をお伺いすることによって、これからの図書館のサービス計画に有益な資料を得ることを目的としたものです。
　なおこの調査は、純粋に研究を目的としたもので、この結果をただちにこの図書館のために使うというものではないことを申し添えます。

Ⅱ．記入上の注意
＊１　本日図書館をご利用のすべての方にお願いしております。ご面倒でもご入館のたびにご記入下さい。
＊２　この用紙はお帰りになるときに係員にお渡し下さい。
＊３　調査結果は統計的に処理致しますので、皆様にご迷惑のかかるようなことは一切ございません。
＊４　もし、ご不明・ご不審な点がございましたら、調査係員までお知らせ下さい。
平成 14 年 11 月 12 日

北海道武蔵女子短期大学　河村専門ゼミナール
お問い合せ先：北海道武蔵女子短期大学助教授　河村　芳行
〒 001-0022　札幌市北区北 22 条西 13 丁目
TEL　011-726-3141（代表）

Ⅰ．あなたご自身についてお伺い致します。（該当するもの一つに○印をつけてください）

１）あなたは、　　１．男　性　　２．女　性

２）お年は、
１．13 歳～ 15 歳　２．16 歳～ 19 歳　３．20 歳～ 29 歳
４．30 歳～ 39 歳　５．40 歳～ 49 歳　６．50 歳～ 59 歳　７．60 歳以上

３）あなたのご職業は、（枠内にも○印をお願いします）

１．自営・家族従業者 ⇒

1	商工サービス業	2　農業

２．勤務者 ⇒

1	専門職・技術職	2　管理職
3	事務関係	4　販売関係
5	サービス関係	6　保安職業関係
7	農林漁業	8　運輸・通信関係
9	技能工･建設作業者及び労務作業者	
10	その他	

３．主婦
４．学生
５．無職

４）あなたのご自宅は、　１．北広島市内･･･（できるだけ詳しく住所をご記入下さい）

〒□□□－□□□□

北広島市＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

２．北広島市以外

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

５）自宅から図書館までの距離はおよそ何メートルぐらいですか？

１．　200 m未満　　２．　200 ～ 400 m未満　　３．　400 ～ 600 m未満

４．　600 ～ 800 m未満　　５．　800 ～ 1 ㎞未満

６．　１㎞～ 1.5 ㎞未満　　７．　1.5 ㎞～２㎞未満　　８．　２㎞～３㎞未満

９．　３㎞～５㎞未満　　10.　５㎞～ 10 ㎞未満　　11.　10 ㎞以上

６）学校や職場の場所は、１．北広島市内（学校名または職場の所在地を町名まで）

・・・　学校名：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

職場の所在地（町名まで）：北広島市＿＿＿＿＿

２．北広島市以外（市町村名）：＿＿＿＿＿＿＿＿

７）どこから来られましたか？

１．自宅から直接図書館に来た

２．学校や職場から図書館に来た

３．買物などの出先から図書館に来た

４．その他の場所から（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

８）その場所から図書館までの交通手段とかかった時間をお答え下さい。

（複数の乗り物を利用して来られた方は、最も長い時間のかかったものを一つお答え下さい）

＜交通手段＞　　＜所要時間＞

１．徒歩　　２．自転車

３．バイク　　４．自家用車　　・・・・・・・・・⇨　合計で＿＿＿＿分位

５．路線バス　６．電車

Ⅱ．本日の利用についてお尋ねします。

１）図書館に来られたのは、どういうことのためですか？

主な目的一つに○印をつけてください。

１．本・雑誌・ＡＶ資料などを返すだけのため　・・・・　次はⅣに進んでください

２．本・雑誌・ＡＶ資料などを返したり借りる（借りるだけを含む）ため

３．図書館の中で新聞・雑誌・本を読んだりＡＶ資料を見たり聴いたりするため

４．調べものや情報を得るため

何に関連した調べものや情報ですか（一つに○印を）

1　学校での授業や宿題・課題

2　仕事上での問題

3　通信教育や放送大学などでの自学自習

4　趣味や教養で個人的に研究している問題

5　その他（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

＊　２．３．４．を選択の方は次に p.3 の２）へ進んでください

５．自分で持ってきたものだけを使って自習するため

６．特別な目的なしに立ち寄った

７．お子さんや友人に付き添って

次はⅢに進んでください

８．その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

２）今日は借りたり、読もうと思う本・雑誌をあらかじめ決めていましたか？
（一つに○印を付けてください）

１．前もって著者と書名を決めてきた
２．読みたい著者だけを決めて、書名までは特定してこなかった
３．特定の分野（例えば推理小説、料理の本など）を見ようと決めてきた

＊１．２．３．を選択の方にお尋ねします。
その図書は新刊本（３ヶ月以内に出版）ですか？　１．はい　２．いいえ

４．特に決めては来なかった ―――――――― 次はⅢに進んでください

３）目的の本や情報は得られましたか？　（一つに○印を付けてください）

１．ほぼ全部得られた
２．一部得られた
＊１．２．を選択の方は次に４）に進んでください
３．全然得られなかった ―――――――― 次はⅢに進んでください

４）どのようにして目的の本・情報を発見しましたか？（一つに○印を付けてください）

１．置かれている場所を知っていたので自分でみつけた
２．自分でサインや案内表示をたよりに探した
３．自分でコンピュータ目録を使って探した
４．図書館の職員に場所を教えてもらった
５．図書館の職員にコンピュータ目録で探してもらった
６．図書館の職員に内容を話して相談にのってもらった

Ⅲ．図書館内での行動についてお尋ねします。

１）どの部屋（施設）を利用しましたか？
（椅子に座るとか、本や雑誌・レコードを棚から取り出したり、図書館の職員と話をしたりした場所すべてに○印をつけてください）

１．一般書コーナー（１階）　２．ブラウジングコーナー（１階）
３．レファレンスコーナー（１階）　４．児童書コーナー（１階）
５．おはなしコーナー（１階）

６．ＡＶサロン（２階）　７．オーディオコーナー（２階）
８．読書・自習室（２階）　９．調査室（２階）

10．その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

２）今日は図書館の本や雑誌・新聞・ＣＤ・ビデオ・ＤＶＤなどをどのくらい読んだり、聞いたりしましたか？　また、家に借りて帰るのはどれだけですか？
種類別に数をお答えください。

	本（冊）	雑誌（冊）	新聞（紙）	CD（枚）	ビデオ（巻）	DVD（枚）	その他
図書館の中で読んだり聴いたり見たもの（コピーも含みます）							
家に借りていくことに決めた物							

Ⅳ．日頃の図書館利用状況についてお尋ねします。

北広島市にはこの本館の他に４つの分館（図書室）と 11 の移動図書館（BM）ステーションがあります。

１）あなたがよく利用している図書館はどこですか？

１．この本館
２．北広島市団地住民センター図書室　（泉町 1-1）
３．北広島市大曲会館図書室　（大曲中央 2 丁目 4-5）
４．西の里公民館図書室　（西の里 501-10）
５．北広島市農民研修センター図書室　（輪厚中央 4 丁目 12-17）
６．最寄りの移動図書館
７．北広島市外の図書館

＊　１．以外を選択の方は次に **p.6 のⅤ**に進んでください

２）あなたはなぜこの本館をよく利用するのですか？　あてはまる理由（２つまで）に○印をつけてください。

１．本や雑誌などの量や種類が多い
２．新しい本や雑誌などが多い
３．家や学校、あるいは職場から近い
４．駅や商店街に近くて立ち寄りやすい
５．駐車場がある
６．読書室（自習室）がある
７．図書館の職員に相談にのってもらいやすい
８．この図書館に使い慣れている
９．図書館の外観や内部の雰囲気が好き
10．その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

３）この図書館をどのくらいの回数で利用していますか？　○印を１つ付けてください。

１．　ほとんど毎日　　２．　週に１回程度　　３．　１ヶ月に２～３回
４．　１ヶ月に１回位　　５．　年に数回　　６．　それ以下

4）この図書館をこの１ヶ月の間に何回利用しましたか？　回数をお答えください。
10 月 13 日（日曜日）の週から数えてください。

回

5）前回この図書館を利用したのはいつですか？
できるだけ具体的な日付でお願いします。

年　　月　　日ごろ

6）この図書館を利用されていてどのような評価をお持ちですか？
以下の項目についてこの程度だと思われる番号に〇印を付けてください。

	満 足	どちらかと言えば満足	どちらかと言えば不満足	不満足	わからない
1 本や雑誌の**量や種類**	1	2	3	4	5
2 本や雑誌の**新しさ**	1	2	3	4	5
3 本や雑誌の**内容**	1	2	3	4	5
4 本や雑誌の**並べ方**	1	2	3	4	5
5 コンピュータ**閲覧目録**	1	2	3	4	5
6 館内案内表示（**サイン**）	1	2	3	4	5
7 **情報化（IT）**への対応	1	2	3	4	5
8 **イベント**（お話会等）	1	2	3	4	5
9 図書館までの**距離**	1	2	3	4	5
10 図書館までの**交通の便**	1	2	3	4	5
11 **駐車場**のスペース	1	2	3	4	5
12 図書館の**施設設備**	1	2	3	4	5
13 図書館内の**雰囲気**	1	2	3	4	5
14 **図書館員**の応対	1	2	3	4	5
15 図書館が**開く時間**	1	2	3	4	5
16 図書館が**閉る時間**	1	2	3	4	5
17 **開館日**（曜日も含む）	1	2	3	4	5
18 以上を総合しての図書館**サービス全体**	1	2	3	4	5

7）この図書館で本や雑誌の量や種類をもっと充実した方が良いと思われるものはどんな内容のものですか？　２つまでを選んで○印をつけてください。

1．小説・エッセイなどの読みもの
2．趣味・実用書
3．専門書（内容にも一つ○印をつけてください）
4．絵本・紙芝居
5．マンガ
6．中学生から高校生向きの本

1　人文科学分野
2　社会科学分野
3　自然科学・工学分野
4　医学分野
5　体育や芸術分野
6　百科事典・年鑑など

7．本や雑誌以外の資料（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）
8．その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

Ｖ．いつも分館（分室）ないし移動図書館を主に利用している方だけに伺います。

1）今日、本館を利用されたのはなぜですか？　あてはまる理由１つに○印をつけてください。

1．分館の職員から紹介された
2．調べものや情報収集の必要が生じたので、本や雑誌の多い本館の方が適していると判断して
3．分館に行ってみたが読みたい本や雑誌がなかったので、本館に来れば見つかると思ったから
4．たまには本館の資料や施設を利用したいから、わざわざ出向いてきた
5．近くまで用事で来たので、ついでに寄ってみた
6．読書室を使って、自習や読書がしたいから
7．その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

2）本館はどの位の頻度で利用していますか？　あてはまるもの１つに○印をつけてください。以前から利用していた方はそのおおよその回数も記入してください。

1．今日がはじめて
2．平均して月に＿＿＿＿＿回ぐらい
3．平均して年に＿＿＿＿＿回程度

Ⅵ. 最後に、あなたご自身にとって、北広島市図書館がもっと便利で魅力的な図書館になるためにはどうあったら良いと思われますか。あえて一つだけ選ぶとしたら以下のどれが最も効果的でしょうか。あてはまるもの一つに○印をつけてください。

１．自宅の近くに分館（図書室）を建設する
２．もっと早い時間から開館する　（通常、10 時開館）
３．もっと遅い時間まで開館する　（通常、火･水･木 20 時、金･土･日 18 時閉館）
４．本や雑誌の種類をもっと多く備える
５．新しい本をもっと数多く購入する
６．借りられる冊数を多くしたり、貸出期間を延長する（現在 20 冊 2 週間まで）
７．本を読むための座席を多くする
８．視聴覚資料（ＣＤ／ＤＶＤなど）をもっと多く備える
９．ＡＶ資料の館外貸し出しを行う
10. 図書館司書（専門職員）を多くする
11. インターネットの開放やコンピュータ講習会を開く
12. その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

＊＊＊
＊＊　細かい内容でごめんどうをおかけ致しました。この図書館で改良すべき点　＊＊
＊＊　などお気づきのことがございましたら以下にご自由にお書き下さい。　＊＊
＊＊＊

ご協力どうもありがとうございました

資料2：石狩市民図書館来館者調査票（本館一般用）

図書館利用についての調査　　入館　　：　　－退館　　：

Ⅰ．調査の趣旨

この調査は、市民の皆様が日頃、図書館を使っておられる状況や評価をお伺いすることによって、これからの図書館サービスの計画に有益な資料を得ることを目的としたものです。

Ⅱ．記入上の注意

＊１　本日図書館をご利用のすべての方にお願いしております。ご協力をお願い致します。
＊２　この用紙はご記入後、お帰りになるときに係員にお渡し下さい。
＊３　調査結果は統計的に処理しますので、ご迷惑のかかるようなことは一切ございません。
＊４　もし、ご不明・ご不審な点がございましたら、調査係員までお知らせ下さい。

平成 17 年 6 月 16 日／ 19 日

研究代表：北海道武蔵女子短期大学助教授　河村　芳行
〒 001-0022　札幌市北区北 22 条西 13 丁目　TEL 011-726-3141（代表）
協賛・協力：石狩市民図書館
〒 061-3217　石狩市花川北 7 条 1 丁目 26 番地　TEL 0133-72-2000

Ⅰ．あなたご自身についてお伺い致します。（該当するもの１つに○印をつけてください）

１）あなたは、　　１．男　性　　２．女　性

２）お年は、

１．13 歳～ 15 歳　２．16 歳～ 19 歳　３．20 歳～ 29 歳
４．30 歳～ 39 歳　５．40 歳～ 49 歳　６．50 歳～ 59 歳　７．60 歳以上

３）あなたのご職業は、（枠内にも○印をお願いします）

１．自営・家族従業者 → 11 商工サービス業　12 農業　13 漁業
２．勤務者 → 21　専門職・技術職　22　管理職　23　事務関係　24　販売関係　25　サービス関係　26　保安職業関係　27　農林漁業　28　運輸・通信関係　29　技能工･建設作業者及び労務作業者　210　その他
３．主婦
４．学生
５．無職

４）あなたのご自宅は、（枠内にも○印をお願いします）

１．石狩市内 →
11　生振　12　新港　13　樽川　14　八幡
15　緑ヶ原　16　花川　17　花川東　18　花川北
19　花川南　110　花畔　111　緑苑台　112　本町
113　志美　114　北生振　115　美登位

２．札幌市内 →
21　中央区　22　北区　23　東区　24　白石区
25　厚別区　26　豊平区　27　清田区　28　南区
29　西区　210　手稲区

３．その他　（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

５）自宅からこの図書館までの距離はおよそ何メートルぐらいですか？

１．　200 m未満　　２．　200 ～ 400 m未満　　３．　400 ～ 600 m未満
４．　600 ～ 800 m未満　　５．　800 ～ 1 ㎞未満
６．　１㎞～ 1.5 ㎞未満　　７．　1.5 ㎞～２㎞未満　　８．　２㎞～３㎞未満
９．　３㎞～５㎞未満　　10.　５㎞～ 10 ㎞未満　　11.　10 ㎞以上

６）学校や職場の場所はどちらですか？　　１．石狩市内　　２．札幌市内
３．その他（市町村名）：＿＿＿＿＿＿

７）どこから来られましたか？
１．自宅から直接図書館に来た
２．学校や職場から図書館に来た
３．買物などの出先から図書館に来た
４．その他の場所から（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

８）その場所から図書館までの交通手段とかかった時間をお答え下さい。
（複数の乗り物を利用して来られた方は、最も長い時間のかかったものを１つお答え下さい）

＜交通手段＞　　＜所要時間＞
１．徒歩　　２．自転車
３．バイク　　４．自家用車　　・・・・・・・・・⇨　合計で＿＿＿＿分位
５．路線バス　　６．電車

９）あなたには、自分の好きなときに利用できる自家用車がありますか？

１．自分専用の自家用車がある
２．自分専用ではない ⇨
21	平日には自由に使える
22	休日には自由に使える
23	平日も休日も自由には使えない

３．自家用車はない
４．車の運転はできない

10）あなたがこの図書館に来るときの、最も多い来館の仕方は以下のどれですか？

１．平日に一人で来る　　２．土曜・日曜・祝日などに一人で来る
３．平日に家族と来る　　４．土曜・日曜・祝日などに家族と来る
５．平日に友人と来る　　６．土曜・日曜・祝日などに友人と来る

11）この図書館では図書の貸出冊数を無制限にしています。あなたは過去に最高何冊借りていったことがありますか？
・・・・・・・・・⇨　最高で＿＿＿＿冊

12) あなたの性格についてお伺い致します。該当するものすべてに○印を付けて下さい。

１．積極性がある（自ら進んで課題に取り組む意欲と行動力がある方である）
２．責任感がある（責任をもって最後までやりとげる方である）
３．協調性がある（自説に固執せず他人の意見もとり入れ協同してやれる方である）
４．勤勉である　（仕事、勉学などにたゆまず努力をする方である）
５．明朗である　（明るく健康で、接する人に好感を与える方である）
６．礼儀正しい　（礼儀正しく尊敬の態度で人に接する方である）

Ⅱ．本日の利用についてお尋ねします。

１）図書館に来られたのは、どういうことのためですか？
主な目的１つに○印をつけてください。

１．本・雑誌・視聴覚資料などを返すだけのため ‥‥ 次は **p.5 のⅣ**へ進んでください

２．本・雑誌・視聴覚資料などを返したり借りる（借りるだけを含む）ため
３．図書館の中で新聞･雑誌･本を読んだり視聴覚資料を見たり聴いたりするため
４．調べものや情報を得るため

何に関連した調べものや情報ですか（１つに○印を）
- 41　学校での授業や宿題・課題
- 42　仕事上での問題
- 43　通信教育や放送大学などでの自学自習
- 44　趣味や教養で個人的に研究している問題
- 45　その他（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

＊　２．３．４．を選択の方は次に２）へ進んでください

５．自分で持ってきたものだけを使って自習するため
６．特別な目的なしに立ち寄った
７．お子さんや友人に付き添って
→ 次は **p.4 のⅢ**へ進んでください

８．その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

２）今日は借りたり、読もうと思う本・雑誌をあらかじめ決めていましたか？
（１つに○印を付けてください）

１．前もって著者と書名を決めてきた
２．読みたい著者だけを決めて、書名までは特定してこなかった
３．特定の分野（例えば推理小説、料理の本など）を見ようと決めてきた

＊１．２．３．を選択の方にお尋ねします。
その図書は新刊本（３ヶ月以内に出版）ですか？　　１．はい　２．いいえ

４．特に決めては来なかった ―――― 次は **p.4 のⅢ**へ進んでください

３）目的の本や情報は得られましたか？　（１つに○印を付けてください）

１．ほぼ全部得られた
２．一部得られた
　　リクエスト申込みをしましたか？　　21．はい　　22．いいえ

＊１．２．を選択の方は次に４）へ進んでください

３．全然得られなかった
　　リクエスト申込みをしましたか？　　31．はい　　32．いいえ
　　―――――――― 次はⅢへ進んでください

４）どのようにして目的の本・情報を発見しましたか？（１つに○印を付けてください）

１．置かれている場所を知っていたので自分でみつけた
２．自分でサインや案内表示をたよりに探した
３．自分で利用者検索機（コンピュータ目録）を使って探した
４．図書館の職員に場所を教えてもらった
５．図書館の職員にコンピュータ目録で探してもらった
６．図書館の職員に内容を話して相談にのってもらった

Ⅲ．図書館内での行動についてお尋ねします。

１）どの部屋（施設）を利用しましたか？
（椅子に座るとか、本や雑誌・CD やビデオなどを棚から取り出したり、図書館の職員と話をしたりした場所すべてに○印をつけてください）

＜１階＞

０．一般図書コーナー
１．新着本コーナー
２．特集本コーナー
３．新聞・雑誌開架コーナー
４．ヤングコレクションコーナー
５．グループ学習室
６．児童書コーナー
７．お話のたまご室
８．子どもカウンター
９．視聴覚（ＡＶ）コーナー
10．畳コーナー
11．朗読サービス室
12．ビジネスブース（室）
13．調べもの相談カウンター
14．資料情報コーナー（インターネット）
15．読書テラス
16．視聴覚ホール
17．研修室
18．エントランスホール
19．喫茶コーナー
20．ロッカーコーナー

＜２階＞

21．地域行政コーナー
22．開架書庫コーナー

23．その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

２)今日は図書館の本や雑誌・新聞・ＣＤ・ビデオ・ＤＶＤなどをどのくらい読んだり、聞いたりしましたか？　また、家に借りて帰るのはどれだけですか？
種類別に数をお答えください。

	本（冊）	雑誌（冊）	新聞（紙）	CD（枚）	ビデオ（巻）	DVD（枚）	絵画（点）
図書館の中で読んだり聴いたり見たもの（コピーも含みます）							
家に借りていくことに決めた物							

（注：　ＣＤ．ビデオ．ＤＶＤ．絵画の貸出は１回につき、１点までです）

３）この図書館には日本の公共図書館で初めて、３台の**自動貸出機**がカウンターに組み込まれています。貸出の際には、自動貸出機を使っていますか？

１．はい
２．いいえ
　└ 利用しない理由は何ですか？（１つに○印を）
　　21　機械があるのを知らなかったため
　　22　ＣＤやビデオの貸出手続ができないため
　　23　機械操作が苦手なため
　　24　図書館員に応対してもらいたいため
　　25　その他（＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

Ⅳ．日頃の図書館利用状況についてお尋ねします。

石狩市にはこの本館の他に３つの分館があります。

１）あなたがよく利用している図書館はどこですか？（１つに○印を付けてください）

１．この本館
２．花川北分館　（石狩市花川北３条２丁目 198 番地１，花川北コミセン内）
３．花川南分館　（石狩市花川南６条５丁目 27 番地２，花川南コミセン内）
４．八幡分館　　（石狩市八幡２丁目 332 番地 12，八幡コミセン内）

５．石狩市外の図書館（枠内にも○印をお願いします）

51　札幌市の図書館	52　小樽市の図書館
53　当別町の図書館	54　厚田村の図書館
55　浜益村の図書館	56　その他

＊　１．以外を選択の方は次に **p.7 のⅤ**へ進んでください

２）あなたはなぜこの本館をよく利用するのですか？　あてはまる理由（２つまで）に○印をつけてください。

１．本や雑誌などの量や種類が多い
２．新しい本や雑誌などが多い
３．家や学校、あるいは職場から近い
４．市役所や商店街に近くて立ち寄りやすい
５．駐車場がある
６．読書室（読書空間）がある
７．図書館の職員に相談にのってもらいやすい
８．この図書館に使い慣れている
９．図書館の外観や内部の雰囲気が好き
10．その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

３）この図書館をどのくらいの回数で利用していますか？　○印を１つ付けてください。

１．　ほとんど毎日　　２．　週に１回程度　　３．　１ヶ月に２～３回
４．　１ヶ月に１回位　　５．　年に数回　　６．　それ以下

４）この図書館を利用されていてどのような評価をお持ちですか？
以下の項目についてこの程度だと思われる番号に○印を１つ付けてください。

	満　足	どちらかと言えば満足	どちらかと言えば不満足	不満足	わからない
1　本や雑誌の**量や種類**	1	2	3	4	5
2　本や雑誌の**新しさ**	1	2	3	4	5
3　本や雑誌の**内容**	1	2	3	4	5
4　本や雑誌の**並べ方**	1	2	3	4	5
5　利用者検索機（コンピュータ**閲覧目録**）	1	2	3	4	5
6　館内案内表示（**サイン**）	1	2	3	4	5
7　**情報化（IT）**への対応	1	2	3	4	5
8　**イベント**（お話会、図書館講座等）	1	2	3	4	5
9　図書館までの**距離**	1	2	3	4	5
10 図書館までの**交通の便**	1	2	3	4	5
11 **駐車場**のスペース	1	2	3	4	5
12 図書館の**施設設備**	1	2	3	4	5
13 図書館内の**雰囲気**	1	2	3	4	5
14 **図書館員**の応対	1	2	3	4	5
15 図書館が**開く時間**	1	2	3	4	5
16 図書館が**閉る時間**	1	2	3	4	5
17 **開館日**（曜日も含む）	1	2	3	4	5
18 以上を総合しての図書館**サービス全体**	1	2	3	4	5

5）この図書館で本や雑誌の量や種類をもっと充実した方が良いと思われるものはどんな内容のものですか？　２つまでを選んで○印をつけてください。

1．小説・エッセイなどの読みもの
2．趣味・実用書
3．専門書（内容にも１つ○印をつけてください）
4．絵本・紙芝居
5．マンガ
6．中学生から高校生向きの本

31 人文科学分野
32 社会科学分野
33 自然科学・工学分野
34 医学分野
35 体育や芸術分野
36 百科事典・年鑑など

7．本や雑誌以外の資料（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

8．その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

Ｖ．いつも、分館（この本館以外の図書館）を主に利用している方だけに伺います。

1）今日、本館を利用されたのはなぜですか？　あてはまる理由１つに○印をつけてください。

1．分館の職員から紹介された
2．調べものや情報収集の必要が生じたので、本や雑誌の多い本館の方が適していると判断して
3．分館に行ってみたが読みたい本や雑誌がなかったので、本館に来れば見つかると思ったから
4．たまには本館の資料や施設を利用したいから、わざわざ出向いてきた
5．近くまで用事で来たので、ついでに寄ってみた
6．読書スペースを使って、自習や読書がしたいから

7．その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

2）本館はどの位の頻度で利用していますか？　あてはまるもの１つに○印をつけてください。

1．　今日がはじめて　　2．　週に１回程度
3．　１ヶ月に２～３回　　4．　１ヶ月に１回位
5．　年に数回　　6．　それ以下

Ⅵ. 最後に、あなたご自身にとって、石狩市民図書館がもっと便利で魅力的な図書館になるためにはどうあったら良いと思われますか。あえて１つだけ選ぶとしたら以下のどれが最も効果的でしょうか。あてはまるもの１つに○印をつけてください。

１．自宅の近くに分館（図書室）を建設する
２．もっと早い時間から開館する　（通常、10 時開館）
３．もっと遅い時間まで開館する
（通常、水･木 20 時、火･金 18 時、土･日･祝 17 時閉館）
４．本や雑誌の種類をもっと多く備える
５．新しい本をもっと数多く購入する
６．貸出期間を延長する（現在 2 週間まで）
７．本を読むための座席を多くする
８．視聴覚資料（ＣＤ／ＤＶＤなど）をもっと多く備える
９．視聴覚資料の館外貸出し可能点数を増やす（現在 1 点まで）
10. 複製絵画の館外貸出し可能点数を増やす（現在 1 点まで）
11. 図書館司書（専門職員）を多くする
12. インターネットの使用料金を下げる（現在 15 分 100 円で外部委託）
13. コンピュータ利用講習会を開く
14. 図書館事業（イベント）をもっと増やす
15. その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

＊＊＊
＊＊　細かい内容でごめんどうをおかけ致しました。この図書館で改良すべき点　＊＊
＊＊　などお気づきのことがございましたら以下にご自由にお書き下さい。　＊＊
＊＊＊

ご協力どうもありがとうございました

資料3：北広島市図書館登録者調査票（本館一般用）

Ⅰ．調査の趣旨

この調査は、市民の皆様が日頃、図書館を使っておられる状況や評価をお伺いすることによって、これからの図書館のサービス計画に有益な資料を得ることを目的とし、北海道武蔵女子短期大学と北広島市図書館が共同で実施するものです。

Ⅱ．記入上の注意

＊１　本調査票は北広島市図書館に登録されている 13 歳以上の方の中から無作為に 10 ％抽出してお送りしております。ご面倒でも調査の趣旨をご理解頂きご協力をお願い致します。

＊２　調査結果は統計的に処理致しますので皆様にご迷惑のかかるようなことは一切ございません。**返信用封筒にて６月１５日までに北広島市図書館へ郵送願います。**

＊３　もし、ご不明・ご不審な点がございましたら、下記までお問い合せ下さい。

平成 15 年 6 月 1 日

北海道武蔵女子短期大学＋北広島市図書館
図書館サービス研究グループ
お問い合せ先：北海道武蔵女子短期大学助教授　河村　芳行
北海道武蔵女子短期大学助教授　谷口　一弘
〒 001-0022　札幌市北区北 22 条西 13 丁目
TEL　011-726-3141（代表）
北広島市図書館普及担当主査　　新谷　良文
〒 061-1121　北広島市中央６－２－１
TEL　011-373-7667（代表）

Ⅰ．あなたご自身についてお伺い致します。（該当するもの１つに○印を付けて下さい）

１）あなたは、　　１．男　性　　２．女　性

２）お年は、

１．13 歳～ 15 歳　　２．16 歳～ 19 歳　　３．20 歳～ 29 歳

４．30 歳～ 39 歳　　５．40 歳～ 49 歳　　６．50 歳～ 59 歳　　７．60 歳以上

３）あなたのご職業は、（枠内にも○印をお願いします）

１．自営・家族従業者 ⇒
２．勤務者 ⇒
３．主婦
４．学生
５．無職

11	商工サービス業	12	農業
21	専門職・技術職	22	管理職
23	事務関係	24	販売関係
25	サービス関係	26	保安職業関係
27	農林漁業	28	運輸・通信関係
29	技能工･建設作業者及び労務作業者		
210	その他		

４）現在在学中または最後に出られた学校は、

１．中学校　　２．高等学校（含：旧制中学）　　３．短大・高専

４．大学　　５．大学院　　６．その他

５）あなたのお住まいの地区は、

１．東部地区　　２．広島団地地区　　３．西の里地区　　４．大曲地区

５．西部地区　　６．その他（北広島市外）

Ⅱ．あなたの読書量についてお尋ねします。

この１ヶ月（５月１日から５月 31 日まで）に、どのくらいの読書をしましたか？（製本した雑誌も含む）本、雑誌、マンガ別に読んだ数を、それの入手方法別にお答え下さい。ただし、本のうち教科書・参考書と辞書は除いて下さい。

種　類 入手方法	本 （冊）	雑　誌　（種）		マンガ （冊）
		週刊誌	月刊誌	
１．自分で買ったもの				
２．自宅にあったもの				
３．北広島市図書館のもの（館内＋借り出し）				
４．他の図書館のもの（札幌市など）				
５．学校図書館のもの				
６．書店での立ち読み				
７．その他の方法で				

Ⅲ．北広島市図書館についてお尋ねします。

１）それぞれの図書館を知っていますか？　あてはまる番号１つに○印を付けて下さい。

認知度 図書館名	名前も場所も知っている	名前は知っているが場所は知らない	名前も場所も知らない
１．本　館	1	2	3
２．北広島市団地住民センター図書室	1	2	3
３．北広島市大曲会館図書室	1	2	3
４．西の里公民館図書室	1	2	3
５．北広島市農民研修センター図書室	1	2	3
６．最寄りの移動図書館	1	2	3

２）あなたの自宅から最も近い図書館はどこですか？　１つに○印を付けて下さい。

１．本　館　　２．北広島市団地住民センター図書室
３．北広島市大曲会館図書室　　４．西の里公民館図書室
５．北広島市農民研修センター図書室　　６．最寄りの移動図書館
７．北広島市外の図書館

３）自宅からその最寄りの図書館までの距離はおよそ何メートルぐらいですか？

１．200ｍ未満　２．200～400ｍ未満　３．400～600ｍ未満
４．600～800ｍ未満　５．800～1㎞未満
６．１㎞～1.5㎞未満　７．1.5㎞～２㎞未満　８．２㎞～３㎞未満
９．３㎞～５㎞未満　10．５㎞～10㎞未満　11．10㎞以上

４）あなたが主に利用している図書館はどこですか？　１つに○印を付けて下さい。

１．本　館　　２．北広島市団地住民センター図書室
３．北広島市大曲会館図書室　　４．西の里公民館図書室
５．北広島市農民研修センター図書室　　６．最寄りの移動図書館
７．北広島市外の図書館

５）あなたが主に利用している図書館までの距離はおよそ何メートルぐらいですか？

１．200ｍ未満　２．200～400ｍ未満　３．400～600ｍ未満
４．600～800ｍ未満　５．800～1㎞未満
６．１㎞～1.5㎞未満　７．1.5㎞～２㎞未満　８．２㎞～３㎞未満
９．３㎞～５㎞未満　10．５㎞～10㎞未満　11．10㎞以上

６）あなたはなぜその図書館をよく利用するのですか？　あてはまる理由（２つまで）を選んで○印を付けて下さい。

１．本や雑誌などの量や種類が多い
２．新しい本や雑誌などが多い
３．家や学校、あるいは職場から近い
４．駅や商店街に近くて立ち寄りやすい
５．バスや電車の便がよいなど行きやすい
６．駐車場がある
７．読書室（自習室）がある
８．図書館の職員に相談にのってもらいやすい
９．その図書館を使い慣れている
10．図書館の外観や内部の雰囲気が好き

11．その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

7）その図書館へはどこから行くことが最も多いですか？　１つに○印を付けて下さい。

１．自宅から
２．学校や職場から
３．買物などの出先から
４．その他の所から（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

8）その図書館へ行くときの主な交通手段と所要時間をお答え下さい。
（複数の乗り物を利用して来られた方は、最も長い時間のかかったものを１つお答え下さい）

＜交通手段＞　　＜所要時間＞

１．徒歩　　２．自転車
３．バイク　　４．自家用車　　・・・・・・・・・⇨　合計で＿＿＿＿分位
５．路線バス　６．電車

9）その図書館の本・雑誌・CD・ビデオ・DVD などをどのくらい利用していますか？
平均して１回に読んだり聴いたり、借りてくる本と雑誌などの数を種類別にお答え下さい。

	本（冊）	雑誌（冊）	新聞（紙）	CD（枚）	ビデオ（巻）	DVD（枚）	その他
図書館の中で読んだり聴いたり見たりする							
家に借りてくる							

10）その図書館をどのくらいの回数で利用していますか？　１つに○印を付けて下さい。

１．　ほとんど毎日　　２．　週に１回程度　　３．　１ヶ月に２～３回
４．　１ヶ月に１回位　　５．　年に数回　　６．　それ以下

11）前回その図書館を利用したときの目的は何でしたか？　最もあてはまる目的１つに○印を付けて下さい。

１．本・雑誌などを借りたり、返す
２．図書館の中で本・雑誌・新聞・ＣＤ・ビデオ・ＤＶＤなどを利用する
３．調べ物や情報を得る
４．自習する
５．図書館の行事や催し物に参加する
６．その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

12）主に利用している図書館について、どのような評価をお持ちですか？
以下の項目についてこの程度だと思われる番号１つに○印を付けて下さい。

	満 足	どちらかと言えば満足	どちらかと言えば不満足	不満足	わからない
1 本や雑誌の**量や種類**	1	2	3	4	5
2 本や雑誌の**新しさ**	1	2	3	4	5
3 本や雑誌の**内容**	1	2	3	4	5
4 本や雑誌の**並べ方**	1	2	3	4	5
5 コンピュータ**閲覧目録**	1	2	3	4	5
6 館内案内表示（**サイン**）	1	2	3	4	5
7 **情報化（IT）**への対応	1	2	3	4	5
8 **イベント**（お話会等）	1	2	3	4	5
9 図書館までの**距離**	1	2	3	4	5
10 図書館までの**交通の便**	1	2	3	4	5
11 **駐車場**のスペース	1	2	3	4	5
12 図書館の**施設設備**	1	2	3	4	5
13 図書館内の**雰囲気**	1	2	3	4	5
14 **図書館員**の応対	1	2	3	4	5
15 図書館が**開く時間**	1	2	3	4	5
16 図書館が**閉る時間**	1	2	3	4	5
17 **開館日**（曜日も含む）	1	2	3	4	5
18 以上を総合しての図書館**サービス全体**	1	2	3	4	5

13）その図書館で本や雑誌の量や種類をもっと充実した方が良いと思われるものはどんな内容のものですか？　２つまでを選んで○印を付けて下さい。

１．小説・エッセイなどの読みもの
２．趣味・実用書
３．専門書（内容にも１つ○印をつけてください）
　　31 人文科学分野
　　32 社会科学分野
　　33 自然科学・工学分野
　　34 医学分野
　　35 体育や芸術分野
　　36 百科事典・年鑑など
４．絵本・紙芝居
５．マンガ
６．中学生から高校生向きの本

７．本や雑誌以外の資料（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

８．その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

Ⅳ．北広島市図書館としてただちに実現可能とは限りませんが、将来的に次のような機器・施設設備やサービスはある方がよい、ないしは充実させるのが望ましいでしょうか？　次の各項目それぞれについて、あなたの考えに最も近い意見の番号１つに○印を付けて下さい。

施設・設備 サービス	**有料でも**あった方がよい、または有料でも充実させた方がよい	**無料なら**あった方がよい、または無料なら充実させた方がよい	無くてもよい
１．セルフサービスの複写機（コイン式）	1	2	3
２．パーソナルコンピュータ（レンタル）	1	2	3
３．各種データベース（ＣＤ－ＲＯＭ）	1	2	3
４．喫煙コーナー	1	2	3
５．軽食・喫茶コーナー	1	2	3
６．駐車場スペース	1	2	3
７．自習室（研究個室）	1	2	3
８．BDS（自動貸出機能付き資料盗難防止装置）	1	2	3
９．パソコンを利用した講習会など （ＩＴ講習会や e-mail などを使った通信講座）	1	2	3
10．インターネットの開放（自由閲覧）	1	2	3
11．各種有料データベースとの接続 （新聞記事、雑誌記事、経済・企業情報など）	1	2	3
12．ＳＤＩサービス （あらかじめ申し込んでおいたテーマについての資料や文献、記事情報などを e-mail などを使って定期的に配信する登録制のサービス）	1	2	3
13．ブックスタート事業 （０歳児と、その母親に本などをプレゼントする事業）	1	2	3
14．学校教育との連携 （市内の小・中学校の全学級に 30 冊の本を配置し、巡回させる事業）	1	2	3
15．図書選定ツアー （書店に出向き図書館に置くべき本を購入）	1	2	3
16．各種催し物・イベントの開催 （紙芝居、映画上映会、コンサートなど）	1	2	3
17．ＡＶ資料（CD・DVD など）の館外貸出	1	2	3
18．移動図書館車（バス）による巡回	1	2	3

Ⅴ．本館以外の図書館（分室ないし移動図書館）を主に利用している方だけに伺います。
本館を主に利用している方はⅥへお進み下さい。

1）あなたは本館をどの位の頻度で利用していますか？　あてはまるもの１つに○印を付けて下さい。

１．　ほとんど毎日　　２．　週に１回程度　　３．　１ヶ月に２～３回
４．　１ヶ月に１回位　　５．　年に数回　　６．　それ以下

2）あなたが本館を利用するのはどういうときですか？　あてはまるもの１つに○印を付けて下さい。

１．本・雑誌などを借りたり、返す
２．本館の施設内で本・雑誌・新聞・ＣＤ・ビデオ・ＤＶＤなどを利用する
３．分館（分室）では読みたい本がみつからなかった
４．調べ物や情報を得る
５．読書室を使って読書や自習をする
６．図書館の行事や催し物に参加する
７．近くまで用事で行ったときに寄ってみる
８．その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

Ⅵ．あなたにとって、北広島市図書館がもっと便利で魅力的な図書館になるためにはどうあったら良いと思いますか。　あえて１つだけ選ぶとしたら以下のどれが最も効果的でしょうか。あてはまるもの１つに○印を付けて下さい。

１．自宅の近くに分館（図書室）を建設する
２．もっと早い時間から開館する　（通常、10 時開館）
３．もっと遅い時間まで開館する　（通常、火･水･木 20 時、金･土･日 18 時閉館）
４．本や雑誌の種類をもっと多く備える
５．新しい本をもっと多く購入する
６．借りられる冊数を多くしたり、貸出期間を延長する（現在 20 冊 2 週間まで）
７．本を読むための座席を多くする
８．ＡＶ資料（ビデオ／ＣＤ／ＤＶＤなど）をもっと多く備える
９．ＡＶ資料（ビデオ／ＣＤ／ＤＶＤなど）の館外貸出を行う
10．図書館司書（専門職員）を多くする
11．インターネットの開放やコンピュータ講習会を開く
12．その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

Ⅶ．あなたは北広島市図書館のどのサービス分野を最優先に充実させるべきだと思いますか？　あてはまるもの１つに○印を付けて下さい。

１．こどもの読書・学習活動への対応の充実
２．ビジネス支援など調査学習支援機能の充実
３．ベストセラー・新刊書などの貸出閲覧機能の充実
４．ＡＶ資料（ビデオ／ＣＤ／ＤＶＤなど）などの充実と館外貸出機能の充実
５．地区図書室などの地域ネットワーク機能の充実
６．障害などで来館できない人のためのサービスの充実
７．開館日・開館時間の拡大
８．駐車場・喫茶コーナーなど利便性の充実

９．その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

Ⅷ．平成 14 年度の北広島市図書館（本館、全分室・移動図書館）での人口１人あたりの運営経費は、3,346 円（総経費 196,224,000 円÷総人口 58,646 人＝ 3,346 円）になっています。これについて、あなたの考えに最も近い意見１つに○印を付けて下さい。

１．もっと費用をかけてもサービスの水準を向上させるべきである。
２．現状のままでよい。
３．費用がかかりすぎなのでサービスの水準をおとすのもやむをえない。

＊＊＊
＊＊　ご協力まことにありがとうございました。なお、図書館活動全般について、＊＊
＊＊　ご意見・ご要望等がございましたら以下にご自由にお書き下さい。　＊＊
＊＊＊

資料４（1）：石狩市民図書館登録者調査依頼文

平成18年6月25日

各　位

石狩市民図書館

「図書館の広域利用に関する調査」ご協力のお願い

日頃は、石狩市民図書館をご利用いただき真にありがとうございます。

このたび、石狩市民図書館では、図書館サービス向上の基礎的資料とするため、皆さまの図書館選択行動などを調査させていただくこととしました。

石狩市とその周辺は、本市民図書館、札幌市に中央図書館のほか、北区新琴似図書館、手稲区曙図書館や区民センター図書室という、規模や内容の異なる図書館が存在する恵まれた地域です。このような地域で、利用者の皆さまがどのような理由でどの図書館を利用しているのか、また図書館へのご要望はどのようなものなのかを知ることは、今後の石狩市民図書館の運営を考える上でとても重要なことです。

本調査は石狩市民図書館が主体となり、データ分析に筑波大学と北海道武蔵女子短期大学のご協力をいただく事業です。石狩市民図書館利用登録者の中から無作為抽出により調査票を郵送させていただいています。調査票は無記名で、返信用封筒にもお名前をご記入いただく必要はありません。返送していただいた調査票は厳重に保管し、上記の目的にだけ使用します。

調査の趣旨をご理解の上、なにとぞご回答くださいますようお願い致します。

◆ご注意

１）記入済みの調査票は同封の返信用封筒を使って、７月５日（水）までにご投函願います。（切手は不要です）

２）ご不明・ご不審な点は、下記までお問い合わせ下さい。

本調査に関するお問い合せ先 石狩市民図書館　　副館長　池田幸夫、　主査　清水千晴 ℡　0133-72-2000

◆　利用者登録の際収集した個人データの利用について

市民図書館では、「図書館における貸出者の登録管理」に限り、利用登録の際収集した皆様の個人情報を利用してきました。しかし、昨今の図書館へのニーズが多様化するに伴い、皆様へのサービス向上と利用者ニーズの的確な把握を図っていきたいと考え、平成18年5月26日に開催された「石狩市情報公開・個人情報保護審査会」の答申を受け、個人情報を「アンケートによる意向調査」に利用させていただくことになりました。今後もご理解とご協力をお願い申し上げます。

資料４（2）：石狩市民図書館登録者調査票（札幌市北区・手稲区用）

図書館の広域利用に関する調査

- 石狩市民図書館に利用登録されている札幌市在住の方から無作為に回答をお願いしています。
- お子さまなど回答が難しい方に届いた場合は、恐れ入りますがご家族の方が代わってお答えください。
- ７月５日（水）までに同封の返信用封筒を使ってご返送ください。（切手は不要です）

Ⅰ．最初に、あなたご自身について伺います。　該当するもの１つに○印をつけてください。

問１　あなたの性別をお答えください。

１　男性　　２　女性

問２　あなたの職業をお答えください。

１　自営業　　２　勤務者　　３　専業主婦（夫）　　４　中学生
５　高校生　　６　大学・短大・専門学校生　　７　無職
８　その他（具体的に：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿）

問３　あなたの年齢をお答えください。

１　10 歳未満　　２　10～19 歳　　３　20～29 歳　　４　30～39 歳　　５　40～49 歳
６　50～59 歳　　７　60～69 歳　　８　70～79 歳　　９　80 歳以上

問４　あなたの住所を、町丁目までお答えください。

〒＿＿＿＿－＿＿＿＿

札幌市＿＿＿＿区＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿丁目

問５　あなたは自分の好きなときに利用できる自家用車を持っていますか？　該当する番号１つに○印をつけてください。（２を選択の方は内訳にも○印をお願いします）

１　自分専用の自家用車がある
２　自分専用ではなく家族と共用している　→　21　平日には自由に使える／22　休日には自由に使える／23　平日も休日も自由には使えない
３　自家用車はない
４　車の運転はできない

Ⅱ．石狩・札幌北部地域には、以下のように複数の図書館があります。それらの図書館のご利用状況について伺います。

問６　1～15 の図書館・図書室のうち、この一年以内に行ったことがある図書館（室）すべての番号に○印をつけてください。これら以外の図書館に行ったことがある方は 16 に、一年以内には図書館に行っていない方は 17 に○印をつけてください。

ａ石狩市（本館）	ｂ石狩市（分館）	ｃ札幌市（本館）	ｄ札幌市（地区図書館）	ｅ札幌市（区民・地区）ｾﾝﾀｰ図書室
1　石狩市民図書館	2　花川南分館 3　花川北分館 4　八幡分館 5　厚田分館 6　浜益分館	7　札幌市中央図書館	8　新琴似図書館 9　曙図書館	10　北区民センター図書室 11　新琴似・新川地区ｾﾝﾀｰ図書室 12　拓北・愛の里地区ｾﾝﾀｰ図書室 13　太平・百合が原地区ｾﾝﾀｰ図書室 14　新発寒地区センター図書室 15　星置地区センター図書室
16　上記以外の図書館を使った 17　一年以内には図書館を使っていない				

問７　問６の 1～15 の図書館のうち、自宅から最も近い図書館の番号をお答えください。
（16 の場合は館名をお書きください）

最近隣館（　　）番　　16（館名：　　）

問８　問６の 1～15 の図書館のうち、最もよく行く図書館の番号をお答えください。
（16 の場合は館名をお書きください）

主利用館（　　）番　　16（館名：　　）

問９　あなたが図書館を利用する目的は何ですか？　以下の選択肢から、主な目的２つの番号を順にお答えください。

1　本・雑誌・視聴覚資料を借りるため
2　館内での読書や視聴覚資料を利用するため
3　図書館の資料で調べものをするため
4　勉強や仕事の作業場所として使うため
5　図書館のイベント（行事）に参加するため
6　家族や友人に付き添って
7　その他

１位（　　）番、　　２位（　　）番

Ⅲ. あなたが行ったことがある図書館（図書室）について、a 石狩市（本館）、b 石狩市（分館）、 c 札幌市（本館）、d 札幌市（地区図書館）、 e 札幌市（区民・地区センター図書室）の５種類に分け、それぞれについて利用状況を伺います。質問に対して、列ごとにお答えください。

問10　以下の図書館を、どれくらいの頻度で利用しますか？　図書館（列）ごとに該当する番号１つに〇印をつけてください。

館種 利用頻度	a 石狩市（本館）	b 石狩市（分館）	c 札幌市（本館）	d 地区図書館	e 区民（地区）ｾﾝﾀｰ
1　ほとんど毎日	1	1	1	1	1
2　週に１回程度	2	2	2	2	2
3　１ヶ月に２～３回	3	3	3	3	3
4　１ヶ月に１回程度	4	4	4	4	4
5　年に数回	5	5	5	5	5
6　それ以下	6	6	6	6	6
7　一度も行ったことがない	7	7	7	7	7

問 11　自宅から図書館までの主な交通手段とおよその所要時間を図書館ごとにお答えください。（複数の交通機関を乗り継いで行く方は、最も長い時間がかかる交通機関の番号１つに〇印をつけてください）

注意：行ったことのない図書館の列（例えば、札幌市中央図書館に行ったことがない方なら札幌市中央図書館の列）では答えないでください。複数の分館や区民センター図書室を使っている方は、よく使っている図書館（室）についてお答えください。

館種 交通手段と所要時間	a 石狩市（本館）	b 石狩市（分館）	c 札幌市（本館）	d 地区図書館	e 区民（地区）ｾﾝﾀｰ
1　徒歩	1	1	1	1	1
2　自転車	2	2	2	2	2
3　バイク（原動機付自転車を含む）	3	3	3	3	3
4　自家用車	4	4	4	4	4
5　路線バス	5	5	5	5	5
6　電車（JR）	6	6	6	6	6
7　その他	7	7	7	7	7
およその所要時間	（　　）分	（　　）分	（　　）分	（　　）分	（　　）分

問 12　図書館へ行く曜日や、誰と行くかをお答えください。

図書館ごとに、最も回数が多い組み合わせ１つに〇印をつけてください。

注意：行ったことのない図書館の列（例えば、札幌市中央図書館に行ったことがない方なら札幌市中央図書館の列）では答えないでください。複数の分館や区民センター図書室を使っている方は、よく使っている図書館(室)についてお答えください。

館種 / 図書館へ行くパターン	a 石狩市（本館）	b 石狩市（分館）	c 札幌市（本館）	d 地区図書館	e 区民（地区）ｾﾝﾀｰ
1　平日に一人で行く	1	1	1	1	1
2　平日に家族と行く	2	2	2	2	2
3　平日に友人と行く	3	3	3	3	3
4　休日（土・日・祝日など）に一人で行く	4	4	4	4	4
5　休日（土・日・祝日など）に家族と行く	5	5	5	5	5
6　休日（土・日・祝日など）に友人と行く	6	6	6	6	6

Ⅳ．以下では、あなたが図書館を利用する上で、どのような点を重視しているかを伺います。

問13　あなたは主に利用する図書館を選ぶときに以下のそれぞれをどのくらい重視しますか？

以下のそれぞれについて５段階で評価し、これくらいと思う番号に〇印をつけてください。

重要度合 / 利用館選択理由	全く重要ではない	ほとんど重要ではない	やや重要である	重要である	非常に重要である
1　本の数が多い	1	2	3	4	5
2　新しい本が多い	1	2	3	4	5
3　雑誌の種類が多い	1	2	3	4	5
4　ビデオやＣＤが充実している	1	2	3	4	5
5　自宅から近い	1	2	3	4	5
6　公共交通の便が良い	1	2	3	4	5
7　駐車場が広い	1	2	3	4	5
8　建物が新しい	1	2	3	4	5
9　図書館内の雰囲気が良い	1	2	3	4	5

利用館選択理由 ＼ 重要度合	全く重要ではない	ほとんど重要ではない	やや重要である	重要である	非常に重要である
10　子供や老人でも安心して利用できる建物である	1	2	3	4	5
11　様々な種類や雰囲気の閲覧座席がある	1	2	3	4	5
12　子供用のコーナーが充実している	1	2	3	4	5
13　グループ活動室がある	1	2	3	4	5
14　軽食・喫茶コーナーがある	1	2	3	4	5
15　館内で図書検索（OPAC）ができる	1	2	3	4	5
16　館内でインターネットが利用できる	1	2	3	4	5
17　自宅のパソコンや携帯電話からインターネットで図書予約できる	1	2	3	4	5
18　図書自動貸出機を使って自分で借出せる	1	2	3	4	5
19　貸出冊数の制限がない	1	2	3	4	5
20　開館日が多い	1	2	3	4	5
21　開館する時間が早い	1	2	3	4	5
22　閉館する時間が遅い	1	2	3	4	5
23　イベント（各種講座やお話会等）が多い	1	2	3	4	5
24　図書館員の応対が良い	1	2	3	4	5
25　図書館員にいろいろ相談しやすい	1	2	3	4	5

Ⅴ．最後に、石狩市民図書館（本館）に対する、あなたの評価やご希望について伺います。

問 14　石狩市民図書館を利用されてどのような評価をお持ちですか？　以下の項目についてこの程度だと思われる番号に〇印をつけてください。

評価 / 項目	満足	どちらかと言えば満足	どちらかと言えば不満足	不満足	わからない
1　本の冊数	1	2	3	4	5
2　本の新しさ	1	2	3	4	5
3　本の並べ方	1	2	3	4	5
4　雑誌の種類	1	2	3	4	5
5　雑誌の並べ方	1	2	3	4	5
6　視聴覚資料の種類	1	2	3	4	5
7　視聴覚資料の並べ方	1	2	3	4	5
8　図書館までの距離	1	2	3	4	5
9　図書館までの交通の便	1	2	3	4	5
10　駐車場の広さ	1	2	3	4	5
11　図書館内の雰囲気	1	2	3	4	5
12　様々な種類や雰囲気の閲覧座席	1	2	3	4	5
13　子供用コーナー	1	2	3	4	5
14　グループ活動室	1	2	3	4	5
15　軽食・喫茶コーナー	1	2	3	4	5
16　館内案内サイン	1	2	3	4	5
17　利用者検索機（コンピュータ目録）の使い勝手	1	2	3	4	5
18　館内でのインターネット利用	1	2	3	4	5
19　自宅パソコンや携帯電話からの図書予約	1	2	3	4	5
20　図書自動貸出機	1	2	3	4	5
21　貸出冊数の制限がない	1	2	3	4	5
22　イベント（各種講座やお話会等）	1	2	3	4	5
23　図書館員の応対	1	2	3	4	5
24　図書館が開く時間	1	2	3	4	5
25　図書館が閉まる時間	1	2	3	4	5
26　開館日（曜日も含む）	1	2	3	4	5
27　以上を総合しての本図書館全体	1	2	3	4	5

＊　ご協力ありがとうございました。　図書館の利用に関するご意見、あるいは本調査へのご意見等がございましたら、前ページの余白にご自由にご記入ください。

資料５：北広島市住民調査票

北広島市図書館利用登録者･非利用者調査

Ⅰ．調査の趣旨

この調査は、市民の皆様が日頃、図書館を利用しておられる（または利用しておられない）状況や評価をお伺いすることによって、これからの図書館のサービス計画に有益な資料を得ることを目的としたものです。お手数をおかけしますが、ご協力をお願いいたします。

なお、誠に申し訳ございませんが、同居されているご家族全員の回答をお願いいたします。

Ⅱ．記入上の注意

１　別紙の回答用紙に、同居する親族の方も合わせてご記入の上、返送して下さい。

２　本調査結果は統計的に処理致しますので、皆様にご迷惑のかかるようなことは一切ございません。

３　もし、ご不明・ご不審な点がございましたら、下記までお知らせ下さい。

平成１５年　６月

北広島市図書館長　坂 本　龍 三

お問い合せ先：北広島市図書館　業務スタッフ まで

〒061-0021　北広島市中央６－２－１

TEL　011-373-7667(代表)

≪回答については、ご家族皆様の考えにあてはまる番号又は該当する**番号を別紙解答用紙に**１人ごとにご記入願います。≫

問1　皆様の性別を教えてください。

１　男性　　２　女性

問2　皆様の年齢を教えてください。

１　０～５歳　　２　６～１２歳　　３　１３～１５歳　　４　１６～１９歳
５　２０～２９歳　　６　３０～３９歳　　７　４０～４９歳　　８　５０～５９歳
９　６０歳以上

問3　皆様のご職業を教えてください。

１　農業　　２　商工サービス自営業　　３　勤務者（専門・技術職）
４　勤務者（管理職）　　５　勤務者（事務関係）　　６　勤務者（販売関係）
７　勤務者（サービス関係）　　８　勤務者（保安職業関係）　　９　勤務者（農林漁業）
10　勤務者（運輸・通信関係）　　11 勤務者（技能工・建設及び労務作業者）
12　勤務者（3～11 以外の方）　　13　主婦（パートを含む）
14　学生（予備校生を含む）　　15　無職

問4　皆様の通勤・通学先を教えてください。

1　北広島市内　　2　北広島市外　　3　なし

問5　皆様の学歴（在学中又は最後に卒業した学校）を教えてください。

1　小・中学校　　2　高等学校（旧制中学を含む）　　3　短大・高等専門学校
4　大学　　5　大学院　　6　その他

問6　皆様は、図書館利用カードを持っているか教えてください。

1　持っている　　2　持っていない

問7　皆様は、過去1年以内で、北広島市図書館（各地区の図書室を含む）を利用したことがあるか教えてください。

1　利用している
2　以前は利用していたが、現在は利用していない
3　利用したことがない

問8　問7で『1　利用している』と答えた方にお聞きします。どちらの図書館を主に利用されているか教えてください。

1　本館（北広島市図書館）　　2　北広島団地住民センター図書室
3　大曲会館図書室　　4　西の里公民館図書室
5　輪厚農民研修センター図書室　　6　最寄りの移動図書館
7　北広島市外の図書館

問9　問7で『1　利用している』と答えた方にお聞きします。皆様の図書館等の利用頻度を教えてください。

1　ほとんど毎日　　2　週に１回程度　　3　１ヶ月に２～３回程度
4　１ヶ月に１回程度　　5　年に数回程度　　6　その他

問 10　問7で「1　利用している」以外を選んだ方にお聞きします。北広島市図書館等を利用していない又は利用していない理由は何でしょうか。該当するものを 2 つまで選んで教えてください。

1　図書館が近くにない　　2　図書館の場所を知らない
3　開館時間中に利用できない　　4　読みたいような本が図書館にない
5　図書館に入りにくい　　6　利用手続きが面倒だと思う
7　図書館は学生の勉強の場だと思う　　8　学校や職場、市外の図書館を利用している
9　本は自分で買って読む　　10　本を読もうとは思わない
11　図書館を利用する必要がない　　12　その他

質問は以上で終わりです。回答は該当する番号を回答用紙にご記入願います。
ご協力いただき、誠にありがとうございました。

図書館利用登録・非利用登録者調査回答用紙

※　同居しているご家族全員の設問に対する回答をこの用紙にご記入願います。

続　柄 項　目	ご本人	（　　）	（　　）	（　　）	（　　）
問１ 性　別					
問2 年　齢					
問3 職　業					
問4 通勤・通学先					
問5 学　歴					
問6 図書カード					
問7 図書館の利用					
問8 利用図書館					
問9 図書館の利用 頻度					
問 10 図書館の 未利用理由					

ご協力いただき、誠にありがとうございました。大変お手数ですが、返信用封筒にこの回答用紙を入れて６月２９日（日）までに投函してくださいますようお願いいたします。

資料６（1）：札幌市北区・新琴似地区住民調査挨拶文

市民の図書館利用・選択に関する調査のお願い

本調査は，日本郵便の「配達地域指定郵便」というサービスを利用して，札幌市北区の一部の地区にお住まいの全世帯（約 3000 世帯）にお届けしています.

札幌市は市内全域に図書館のサービス網が整備されていますが，中でも北区は隣接する石狩市民図書館の影響もあって，市民による多様な図書館選択が行われている特徴ある地域です．私どもは，その点に着目して，従来からこの地域を対象とする研究を行って参りました．市民がどのように図書館を利用・選択するか，あるいはなぜ図書館を利用しないかを明らかにし，地域の図書館サービスの改善につなげるような成果をめざしています.

ついては，大変ご迷惑とは存じますが，是非，調査にご回答くださいますようお願いします．些少ですが謝礼（図書カード 500 円）も用意いたしました．何とぞ，ご協力のほどお願いいたします.

・ご家族を代表して 15 歳以上の方お一人が回答してください．回答者以外のご家族についての質問がありますが，わからない場合は，そのご家族に確認してご回答くださるようお願いします.

・全ての質問に回答が終わりましたら，同封の返信用封筒に調査票のみを入れ，郵便ポストに投函してください．切手は不要です.

・回答の締め切りは３月１０日（月）です.

3 月 10 日（月）までに回答を郵便ポストに投函いただいた方には，先に述べました謝礼を 3 月半ばに発送させていただきます．予想以上に回答が多い場合，一部の謝礼発送が 4 月にずれ込む可能性がありますので，予めご承知ください．発送しても住所の不備等で返送されてくる場合がございます．4 月 21 日（月）を過ぎてもお手元に到着しない場合は，大変恐縮ですが，下記宛にご連絡賜りますようお願いいたします.

なお，回答は氏名や住所を除いて匿名とした上で，我々の研究グループ内での教育研究に使用します．研究成果は学術論文として学会に発表する他，調査報告書は下記の Web サイトでも公表します．氏名や住所は謝礼発送後，会計上必要な期間厳重に保管した後，漏洩が起きない方法で廃棄します.

本調査に関するお問い合せ先

・北海道武蔵女子短期大学教養学科准教授　河村　芳行

〒001-0022　札幌市北区北 22 条西 13 丁目　　℡　011-726-3141

・筑波大学図書館情報メディア研究科准教授　歳森　敦

〒305-8550　つくば市春日 1-2　　℡　029-859-1350

資料６（2）：札幌市北区・新琴似地区住民調査票

ご家族を代表して 15 歳以上の方お一人が回答してください．回答者以外のご家族についての質問がありますが，わからない場合は，そのご家族に確認してご回答くださるようお願いします．

問1　ご家族の人数をお答えください．ご家族とは，この調査票をお届けした住宅に，常時一緒に暮らしている人のことです．単身赴任等でもほとんどの週末に戻ってくる方はご家族に含めてください．

＿＿＿＿＿＿＿＿人

問2　お宅には通勤通学や買い物などのお出かけに使う自家用車は何台ありますか．1 台も無い場合は「無い」に○をつけてください．

＿＿＿＿＿＿＿＿台　　無い（→**問５へ**）

問3　お宅では週日（月～金）昼間のちょっとした用事のための外出時に使える自家用車がありますか．

1. 有る　　2. 無い

問4　お宅では週末（土・日）昼間のちょっとした用事のための外出時に使える自家用車がありますか．

1. 有る　　2. 無い

問5　お宅にはパーソナルコンピュータが何台ありますか．1 台も無い場合は「無い」に○をつけてください．

＿＿＿＿＿＿＿＿台　　無い（→**問７へ**）

問6　パーソナルコンピュータのうち 1 台以上がインターネットに接続している場合は「有る」に，全てインターネットに接続していない場合は「無い」に○をつけてください．

1. 有る　　2. 無い

問7　あなたは札幌市民でも石狩市民図書館を利用できることを知っていましたか？

1. 知っていた　　2. 知らなかった

問8　あなたがおおまかにでも所在地を知っている図書館<u>すべてに</u>○をつけてください．

1. 札幌市中央図書館（中央区）　　2. 北区民センター図書室
3. 新琴似図書館　　4. 新琴似・新川地区センター図書室
5. 花川南分館（石狩市）　　6. 石狩市民図書館（石狩市）

問9　A 列にあなた自身，B〜E 列に世帯の最年長者から（あなた自身を除いて）4 人目までの人について，以下の設問にお答えください．世帯人数が 5 名未満の場合，余った欄には記入しないでください．

	問	A（あなたご自身）	B
1	**性別と年齢** 性別に〇をつけ, 満年齢を記入してください	1. 男性　2. 女性 ＿＿＿＿＿歳	1. 男性　2. 女性 ＿＿＿＿＿歳
2	**あなたとの続柄** あなたから見た, ご家族の続柄として, もっともあてはまるもの一つに〇をつけてください		1. あなたの配偶者 2. 子 3. 子の配偶者 4. あなたの父母 5. あなたの配偶者の父母 6. 孫 7. 祖父母 8. 兄弟姉妹 9. その他
3	**就業状態** ご家族の就業形態について, もっともあてはまるもの一つに〇をつけてください	1. 毎日働いている（週 30 時間以上） 2. 働いている（週 30 時間未満） 3. 主婦・家事手伝い 4. 児童・学生 5. 年金生活（無職） 6. その他の無職	1. 毎日働いている（週 30 時間以上） 2. 働いている（週 30 時間未満） 3. 主婦・家事手伝い 4. 児童・学生 5. 年金生活（無職） 6. その他の無職
4	**通勤通学の交通手段** 通勤通学時の主な交通手段に〇をつけてください	1. 自家用車 2. 公共交通（地下鉄・バス等） 3. 自転車 4. 徒歩 5. 通勤通学はしない	1. 自家用車 2. 公共交通（地下鉄・バス等） 3. 自転車 4. 徒歩 5. 通勤通学はしない
5	**週休日（勤務の休日）** 週休が土曜または日曜か, 土日以外の曜日かについて, あてはまるもの一つを選んでください	1. 原則として（土）日が休み 2. 交替制で土曜または日曜の休日は 2 週間に 1 日以上 3. 交替制で土曜または日曜の休日は 2 週間に 1 日未満 4. 原則として月〜金の何れかが休み 5. 勤めていない	1. 原則として（土）日が休み 2. 交替制で土曜または日曜の休日は 2 週間に 1 日以上 3. 交替制で土曜または日曜の休日は 2 週間に 1 日未満 4. 原則として月〜金の何れかが休み 5. 勤めていない
6	**自家用車の運転** 普段, 自家用車を運転するかをお答えください	1. 運転する 2. 運転しない・できない	1. 運転する 2. 運転しない・できない
7	**インターネット利用** インターネットへの接続手段として, あてはまるもの全てに〇をつけてください	1. 勤務先や学校の PC から利用 2. 自宅の PC から利用 3. 携帯電話から利用 4. インターネットは使わない	1. 勤務先や学校の PC から利用 2. 自宅の PC から利用 3. 携帯電話から利用 4. インターネットは使わない
8	**図書館利用** 過去 1 年間に図書館を使ったことがありますか. 使ったことがある人は, その頻度に〇をつけてください	1. 週に 1 回程度以上 2. 月に 2〜3 回程度 3. 月に 1 回程度 4. 年に数回程度 5. それ以下 6. 図書館は使わなかった	1. 週に 1 回程度以上 2. 月に 2〜3 回程度 3. 月に 1 回程度 4. 年に数回程度 5. それ以下 6. 図書館は使わなかった

C	D	E
1. 男性　2. 女性 _____歳	1. 男性　2. 女性 _____歳	1. 男性　2. 女性 _____歳
1. あなたの配偶者 2. 子 3. 子の配偶者 4. あなたの父母 5. あなたの配偶者の父母 6. 孫 7. 祖父母 8. 兄弟姉妹 9. その他	1. あなたの配偶者 2. 子 3. 子の配偶者 4. あなたの父母 5. あなたの配偶者の父母 6. 孫 7. 祖父母 8. 兄弟姉妹 9. その他	1. あなたの配偶者 2. 子 3. 子の配偶者 4. あなたの父母 5. あなたの配偶者の父母 6. 孫 7. 祖父母 8. 兄弟姉妹 9. その他
1. 毎日働いている（週 30 時間以上） 2. 働いている（週 30 時間未満） 3. 主婦・家事手伝い 4. 児童・学生 5. 年金生活（無職） 6. その他の無職	1. 毎日働いている（週 30 時間以上） 2. 働いている（週 30 時間未満） 3. 主婦・家事手伝い 4. 児童・学生 5. 年金生活（無職） 6. その他の無職	1. 毎日働いている（週 30 時間以上） 2. 働いている（週 30 時間未満） 3. 主婦・家事手伝い 4. 児童・学生 5. 年金生活（無職） 6. その他の無職
1. 自家用車 2. 公共交通（地下鉄・バス等） 3. 自転車 4. 徒歩 5. 通勤通学はしない	1. 自家用車 2. 公共交通（地下鉄・バス等） 3. 自転車 4. 徒歩 5. 通勤通学はしない	1. 自家用車 2. 公共交通（地下鉄・バス等） 3. 自転車 4. 徒歩 5. 通勤通学はしない
1. 原則として（土）日が休み 2. 交替制で土曜または日曜の休日は 2 週間に 1 日以上 3. 交替制で土曜または日曜の休日は 2 週間に 1 日未満 4. 原則として月～金の何れかが休み 5. 勤めていない	1. 原則として（土）日が休み 2. 交替制で土曜または日曜の休日は 2 週間に 1 日以上 3. 交替制で土曜または日曜の休日は 2 週間に 1 日未満 4. 原則として月～金の何れかが休み 5. 勤めていない	1. 原則として（土）日が休み 2. 交替制で土曜または日曜の休日は 2 週間に 1 日以上 3. 交替制で土曜または日曜の休日は 2 週間に 1 日未満 4. 原則として月～金の何れかが休み 5. 勤めていない
1. 運転する 2. 運転しない・できない	1. 運転する 2. 運転しない・できない	1. 運転する 2. 運転しない・できない
1. 勤務先や学校の PC から利用 2. 自宅の PC から利用 3. 携帯電話から利用 4. インターネットは使わない	1. 勤務先や学校の PC から利用 2. 自宅の PC から利用 3. 携帯電話から利用 4. インターネットは使わない	1. 勤務先や学校の PC から利用 2. 自宅の PC から利用 3. 携帯電話から利用 4. インターネットは使わない
1. 週に 1 回程度以上 2. 月に 2～3 回程度 3. 月に 1 回程度 4. 年に数回程度 5. それ以下 6. 図書館は使わなかった	1. 週に 1 回程度以上 2. 月に 2～3 回程度 3. 月に 1 回程度 4. 年に数回程度 5. それ以下 6. 図書館は使わなかった	1. 週に 1 回程度以上 2. 月に 2～3 回程度 3. 月に 1 回程度 4. 年に数回程度 5. それ以下 6. 図書館は使わなかった

8 の「図書館利用」に関する質問で 6（図書館は使わなかった）に○がついた列については以下の回答は不要です．1〜5 に○がついた列のみご回答ください

	設問	A（あなたご自身）	B
9	**最もよく使う図書館** 過去 1 年間で最も多く利用した図書館に○をつけてください （以下, ○をつけた図書館を主利用館と呼びます）	1. 札幌市中央図書館（中央区） 2. 北区民センター図書室 3. 新琴似図書館 4. 新琴似・新川地区センター図書室 5. 花川南分館（石狩市） 6. 石狩市民図書館（石狩市） 7. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）	1. 札幌市中央図書館（中央区） 2. 北区民センター図書室 3. 新琴似図書館 4. 新琴似・新川地区センター図書室 5. 花川南分館（石狩市） 6. 石狩市民図書館（石狩市） 7. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）
10	**図書館利用の主目的** 主利用館を使う目的として, 最もあてはまる選択肢一つに○をつけてください	1. 本・雑誌・視聴覚資料等を借りる 2. 館内で読書や視聴 3. 図書館の資料で調べ物をする 4. 勉強や仕事の作業場所 5. 家族に付き添って 6. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）	1. 本・雑誌・視聴覚資料等を借りる 2. 館内で読書や視聴 3. 図書館の資料で調べ物をする 4. 勉強や仕事の作業場所 5. 家族に付き添って 6. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）
11	**図書館利用の副次目的** 主利用館を使う目的として, 二番目にあてはまる選択肢一つに○をつけてください	1. 本・雑誌・視聴覚資料等を借りる 2. 館内で読書や視聴 3. 図書館の資料で調べ物をする 4. 勉強や仕事の作業場所 5. 家族に付き添って 6. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）	1. 本・雑誌・視聴覚資料等を借りる 2. 館内で読書や視聴 3. 図書館の資料で調べ物をする 4. 勉強や仕事の作業場所 5. 家族に付き添って 6. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）
12	**図書館に行く曜日** 主利用館を使う曜日として, 多い方を選んでください	1. 月〜金 2. 土・日・祝日	1. 月〜金 2. 土・日・祝日
13	**交通手段** 主利用館に行くときの主な交通手段を選んでください	1. 自分で運転する自家用車 2. 家族が運転する自家用車 3. 公共交通（地下鉄・バス等） 4. 自転車 5. 徒歩	1. 自分で運転する自家用車 2. 家族が運転する自家用車 3. 公共交通（地下鉄・バス等） 4. 自転車 5. 徒歩
14	**一緒に行く人** 主利用館には誰と行くことが多いかをお答えください	1. 一人で 2. 家族と 3. 友人と 4. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）	1. 一人で 2. 家族と 3. 友人と 4. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）
15	**その他の図書館利用** 過去 1 年間で, 主利用館の次に使った回数の多い図書館に○をつけてください （この館を副利用館と呼びます）	1. 札幌市中央図書館（中央区） 2. 北区民センター図書室 3. 新琴似図書館 4. 新琴似・新川地区センター図書室 5. 花川南分館（石狩市） 6. 石狩市民図書館（石狩市） 7. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿） 8. 他の図書館は使わなかった	1. 札幌市中央図書館（中央区） 2. 北区民センター図書室 3. 新琴似図書館 4. 新琴似・新川地区センター図書室 5. 花川南分館（石狩市） 6. 石狩市民図書館（石狩市） 7. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿） 8. 他の図書館は使わなかった
16	**その他利用の主目的** 副利用館を使う目的として, 最もあてはまる選択肢一つに○をつけてください	1. 本・雑誌・視聴覚資料等を借りる 2. 館内で読書や視聴 3. 図書館の資料で調べ物をする 4. 勉強や仕事の作業場所 5. 家族に付き添って 6. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）	1. 本・雑誌・視聴覚資料等を借りる 2. 館内で読書や視聴 3. 図書館の資料で調べ物をする 4. 勉強や仕事の作業場所 5. 家族に付き添って 6. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）

C	D	E
1. 札幌市中央図書館（中央区） 2. 北区民センター図書室 3. 新琴似図書館 4. 新琴似・新川地区センター図書室 5. 花川南分館（石狩市） 6. 石狩市民図書館（石狩市） 7. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）	1. 札幌市中央図書館（中央区） 2. 北区民センター図書室 3. 新琴似図書館 4. 新琴似・新川地区センター図書室 5. 花川南分館（石狩市） 6. 石狩市民図書館（石狩市） 7. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）	1. 札幌市中央図書館（中央区） 2. 北区民センター図書室 3. 新琴似図書館 4. 新琴似・新川地区センター図書室 5. 花川南分館（石狩市） 6. 石狩市民図書館（石狩市） 7. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）
1. 本・雑誌・視聴覚資料等を借りる 2. 館内で読書や視聴 3. 図書館の資料で調べ物をする 4. 勉強や仕事の作業場所 5. 家族に付き添って 6. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）	1. 本・雑誌・視聴覚資料等を借りる 2. 館内で読書や視聴 3. 図書館の資料で調べ物をする 4. 勉強や仕事の作業場所 5. 家族に付き添って 6. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）	1. 本・雑誌・視聴覚資料等を借りる 2. 館内で読書や視聴 3. 図書館の資料で調べ物をする 4. 勉強や仕事の作業場所 5. 家族に付き添って 6. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）
1. 本・雑誌・視聴覚資料等を借りる 2. 館内で読書や視聴 3. 図書館の資料で調べ物をする 4. 勉強や仕事の作業場所 5. 家族に付き添って 6. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）	1. 本・雑誌・視聴覚資料等を借りる 2. 館内で読書や視聴 3. 図書館の資料で調べ物をする 4. 勉強や仕事の作業場所 5. 家族に付き添って 6. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）	1. 本・雑誌・視聴覚資料等を借りる 2. 館内で読書や視聴 3. 図書館の資料で調べ物をする 4. 勉強や仕事の作業場所 5. 家族に付き添って 6. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）
1. 月～金 2. 土・日・祝日	1. 月～金 2. 土・日・祝日	1. 月～金 2. 土・日・祝日
1. 自分で運転する自家用車 2. 家族が運転する自家用車 3. 公共交通（地下鉄・バス等） 4. 自転車 5. 徒歩	1. 自分で運転する自家用車 2. 家族が運転する自家用車 3. 公共交通（地下鉄・バス等） 4. 自転車 5. 徒歩	1. 自分で運転する自家用車 2. 家族が運転する自家用車 3. 公共交通（地下鉄・バス等） 4. 自転車 5. 徒歩
1. 一人で 2. 家族と 3. 友人と 4. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）	1. 一人で 2. 家族と 3. 友人と 4. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）	1. 一人で 2. 家族と 3. 友人と 4. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）
1. 札幌市中央図書館（中央区） 2. 北区民センター図書室 3. 新琴似図書館 4. 新琴似・新川地区センター図書室 5. 花川南分館（石狩市） 6. 石狩市民図書館（石狩市） 7. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿） 8. 他の図書館は使わなかった	1. 札幌市中央図書館（中央区） 2. 北区民センター図書室 3. 新琴似図書館 4. 新琴似・新川地区センター図書室 5. 花川南分館（石狩市） 6. 石狩市民図書館（石狩市） 7. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿） 8. 他の図書館は使わなかった	1. 札幌市中央図書館（中央区） 2. 北区民センター図書室 3. 新琴似図書館 4. 新琴似・新川地区センター図書室 5. 花川南分館（石狩市） 6. 石狩市民図書館（石狩市） 7. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿） 8. 他の図書館は使わなかった
1. 本・雑誌・視聴覚資料等を借りる 2. 館内で読書や視聴 3. 図書館の資料で調べ物をする 4. 勉強や仕事の作業場所 5. 家族に付き添って 6. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）	1. 本・雑誌・視聴覚資料等を借りる 2. 館内で読書や視聴 3. 図書館の資料で調べ物をする 4. 勉強や仕事の作業場所 5. 家族に付き添って 6. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）	1. 本・雑誌・視聴覚資料等を借りる 2. 館内で読書や視聴 3. 図書館の資料で調べ物をする 4. 勉強や仕事の作業場所 5. 家族に付き添って 6. その他（＿＿＿＿＿＿＿＿）

質問は以上です．ご回答，まことにありがとうございました．

本調査に関して，あるいは図書館の整備やサービスに関して，ご意見がありましたら以下にご記入ください．

最後に謝礼の送付のため以下をご記入ください
（調査票とは別個に管理するために別葉としています）

ご住所：札幌市北区＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

お名前：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

お願い

調査票が対象世帯から回収されたことを保証するため，調査票配布地域以外の住所からの回答は無効とさせていただき，謝礼は送付できません．上記の住所は，調査票が投函された住宅の住所でご回答くださるようお願いします．

研究業績一覧

1　学術論文

2　学会発表・講演等

3　その他

4　著書

研究業績一覧

1　学術論文

1　河村芳行「公共図書館の配置計画に関する基礎的研究」『修士論文（筑波大学)』1985, 12

2　谷村秀彦，植松貞夫，河村芳行，緒方みどり「図書館利用登録者の構成：公共図書館の配置計画に関する基礎的研究・１」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E(建築計画)』1985.10, p.519-520

3　谷村秀彦，植松貞夫，河村芳行，緒方みどり「図書館利用登録者の読書量と本館・分館の使い分け行動：公共図書館の配置計画に関する基礎的研究・２」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E（建築計画)』1985.10, p.521-522

4　谷村秀彦，植松貞夫，河村芳行，緒方みどり「図書館利用登録者の利用館選択：公共図書館の配置計画に関する基礎的研究・３」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E（建築計画)』1986.8, p.439-440

5　谷村秀彦，植松貞夫，河村芳行，緒方みどり「図書館利用者の構成と在館時間：公共図書館の配置計画に関する基礎的研究・４」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E（建築計画)』1986.8, p.441-442

6　谷村秀彦，植松貞夫，河村芳行，緒方みどり「本館利用者の利用状況と評価：公共図書館の配置計画に関する基礎的研究・５」『日本建築学会大会学術講演梗概集 E（建築計画)』1986.8, p.443-444

7　植松貞夫，谷村秀彦，河村芳行「複数図書館設置都市における図書館利用登録者の利用行動」『日本建築学会計画系論文報告集』1989.1, p.40-47

8　河村芳行「図書館情報学とのかかわり：特集新しい世代の研究動向・３」『図書館情報学会年報』1989.3, Vol.35, No.1, p.7-9

9　河村芳行「洋書分類の補助的トゥールについての一考察：工学分野を対象として」『整理技術研究』1990,1, No.27, p.31-38

10　河村芳行「司書課程科目情報検索演習に利用可能な資源とその実際」『北海道武蔵女子短期大学紀要』1999.3, 第 31 号, p.99-132

11　河村芳行「電子図書館時代における市町村立公共図書館の位置づけ」『北海道武蔵女子短期大学紀要』2000.3, 第 32 号, p.53-69

12　河村芳行「コンピュータを用いた資料組織演習の授業展開とその評価：Biblas for Windows CD-ROM 版を利用して」『北海道武蔵女子短期大学紀要』2001.3, 第 32 号, p.35-76

13　河村芳行「都市型公共図書館における来館者の図書館利用行動：北広島市図書館来館者調査を事例として」『北海道武蔵女子短期大学紀要』2003.3, 第 35 号, p.19-56

14　河村芳行「都市型公共図書館における登録者の類型別図書館利用行動：北広島市図書館登録者調査を事例として」『第 51 回日本図書館情報学会研究大会発表要綱』2003.10, p.41-44
15　河村芳行，谷口一弘，新谷良文「中小都市における図書館登録者の利用行動分析：北広島市図書館登録者調査を事例として（その 1)」『北海道武蔵女子短期大学研究紀要』2004.3, 第 36 号, p.1-22
16　谷口一弘，河村芳行，新谷良文「中小都市における図書館登録者の読書量分析：北広島市図書館登録者調査を事例として（その 2)」『北海道武蔵女子短期大学研究紀要』2004.3, 第 36 号, p.23-45
17　新谷良文，河村芳行，谷口一弘「中小都市における図書館登録者の満足度調査分析：北広島市図書館登録者調査を事例として（その 3)」『北海道武蔵女子短期大学研究紀要』2004.3, 第 36 号, p.47-61
18　河村芳行「中小都市における住民の図書館利用行動分析：北広島市図書館登録・非登録者調査を事例として」『北海道武蔵女子短期大学紀要』2005.3, 第 37 号, p.21-43
19　河村芳行「中小都市における公共図書館の本館利用者と分室利用者の特性」『北の文庫』2005.3, 第 40 号, p.1-14
20　河村芳行「札幌市近郊中小都市における図書館来館者の利用行動：市制施行後に本館を新設した 2 市図書館を事例として」『第 53 回日本図書館情報学会・三田図書館情報学会合同研究大会発表要綱』2005.10, p.109-112
21　河村芳行「公共図書館における図書自動貸出機利用者と非利用者の特性」『北海道武蔵女子短期大学紀要』2006.3, 第 38 号, p.61-81
22　河村芳行，歳森敦，植松貞夫「広域利用可能地域における図書館利用登録者の類型別利用館選択行動：石狩市民図書館登録者調査をもとに」『日本図書館情報学会誌』2008.3, Vol.54, No.1, p.16-38
23　河村芳行「本館の立地状況の異なる 2 都市における図書館利用行動分析：市制施行後に本館を新設した 2 市図書館調査をもとに」『北海道武蔵女子短期大学紀要』2008.3, 第 40 号, p.157-187
24　河村芳行，歳森敦，植松貞夫「広域利用可能地域における世帯レベルの図書館利用行動：札幌市住民調査をもとに」『日本図書館情報学会誌』2010.6, Vol.56, No.2, p.65-82

2　学会発表・講演等

1　「図書館利用登録者の構成：公共図書館の配置計画に関する基礎的研究・１」『日本建築学会大会学術講演（東海)』1985.10
2　「図書館利用者の構成と在館時間：公共図書館の配置計画に関する基礎的研究・４」『日本建築学会大会学術講演（北海道)』1986.8
3　「情報化社会と 21 世紀の図書館のゆくえ」『平成 11 年度（第 9 回）北海道武蔵女子短期大学公開講座』1999.5
4　「学校図書館メディアをどう活用するか : 情報検索から情報発信まで」『石狩管内高等学校図書館司書業務担当者研究会第 13 回定例研修会』2000.10
5　「分類・目録の仕組みを知り図書館をもっと上手に利用しよう（目録編)」『第 23 回全道高等学校図書館研究大会第 7 分科会 B』2001.10
6　「情報社会と公共図書館：電子図書館時代における市町村立公共図書館の位置づけ」『平成 14 年度全道図書館中堅職員研究集会』2002.7
7　「都市型公共図書館における登録者の類型別図書館利用行動：北広島市図書館登録者調査を事例として」『第 51 回日本図書館情報学会研究大会』2003.10
8　「中小都市における図書館登録者の利用行動分析：北広島市図書館登録者調査を事例として」『平成 16 年度北広島市教育委員会委員交流会（図書館フィールドネット・ステップアップ学習会)』2004.6
9　「資料組織とコンピュータ：NACSIS-CAT の活用」『図書館職員のリカレントプログラム（北海道武蔵女子短期大学生涯学習センター)』2004.8
10　「北海道の中小都市における図書館登録者の類型別利用行動分析」『第 47 回北海道地区大学図書館職員研究集会』2004.8
11　「中小都市型公共図書館における来館者の図書館利用行動：北広島市図書館を事例として」『平成 16 年度短期大学図書館全国研修会』2004.8
12　「札幌市近郊中小都市における図書館来館者の利用行動：市制施行後に本館を新設した 2 市図書館を事例として」『第 53 回日本図書館情報学会・三田図書館情報学会合同研究大会』2005.10
13　「文字・活字文化と図書館の役割：市民の利用しやすい図書館とは」『文字・活字文化の日記念講演会（札幌市教育委員会）基調講演』2005.11
14　「北海道におけるこれからの図書館像：市民が求めている図書館とは」『平成 21 年度後志管内図書館協議会研修会基調講演』2009.10

3　その他

1　緑川信之，河村芳行「研究者の文献検索の習慣と態度（その１）[翻訳]」『情報の科学と技術』1988.8, Vol.38, No.8, p.397-411
（Literature searching habits and attitudes of research scientists.
by John Martyn）

2　緑川信之，河村芳行「研究者の文献検索の習慣と態度（その２）[翻訳]」『情報の科学と技術』1988.9, Vol.38, No.9, p.505-511
（Literature searching habits and attitudes of research scientists.
by John Martyn）

3　河村芳行「情報社会と 21 世紀の図書館のゆくえ」『平成 11 年度（第 9 回）北海道武蔵女子短期大学公開講座講義集』1999.12, 第 9 号, p.31-55

4　河村芳行「学校図書館メディアをどう活用するか : 情報検索から情報発信まで」『石狩管内高等学校図書館司書業務担当者研究会第 13 回定例研究会記録集』2000.10

5　河村芳行「分類・目録の仕組みを知り図書館をもっと上手に利用しよう：目録について」『北海道高等学校文化連盟第 23 回全道高等学校図書館研究大会記録集』2001.12, p.71-91

4　著書

1　河村芳行「資料組織演習 I（目録法）: コンピュータ目録と書誌ユーティリティの活用」『北海道武蔵女子短期大学』2000.9

2　河村芳行「情報検索演習ワークブック：CD-ROM 検索・オンライン検索・インターネット検索」『北海道武蔵女子短期大学』2002.4